京都府遺跡調査概報

第81冊

1．余部遺跡第２次

2．中海道遺跡第46次

3．椋ノ木遺跡

4．一般地方道富野荘八幡線関係遺跡

（西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡）

1998

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版１　余部遺跡第２次

(1)竪穴式住居跡216出土碧玉製玉未製品及び施溝痕のある碧玉・緑色凝灰岩製玉材(1.5倍拡大)

(2)竪穴式住居跡216出土玉髄製石針及び安山岩、玉髄製石器(1.5倍拡大)

巻頭図版２　宮ノ背遺跡・備前遺跡

(1)宮ノ背遺跡全景（垂直方向　右が北）

(2)出土弥生土器集合写真

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当調査研究センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常の発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成７～９年度に実施した発掘調査のうち、京都府亀岡土木事務所、京都府乙訓土木事務所、京都府土木建築部、京都府田辺土木事務所の依頼を受けて行った余部遺跡第２次、中海道遺跡第46次、椋ノ木遺跡、一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、亀岡市教育委員会・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・精華町教育委員会・八幡市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長　樋口隆康

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

　1．余部遺跡第２次　　2．中海道遺跡第46次　　3．椋ノ木遺跡

　4．一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)

2．　遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．余部遺跡第２次	亀岡市余部町新堂	平9.6.9～ 平10.2.13	京都府亀岡土木事務所	野々口陽子
2．中海道遺跡第46次	向日市物集女町中海道地内	平9.5.12～ 7.10	京都府乙訓土木事務所	竹下　士郎
3．椋ノ木遺跡	相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木他	平7.11.21～ 平8.2.27 平8.5.28～ 平9.2.27	京都府土木建築部	森島　康雄 伊賀　高弘
4．一般地方道富野荘八幡線関係遺跡			京都府田辺土木事務所	辻本　和美 河野　一隆 奈良　康正
西ノ口遺跡	八幡市美濃山西ノ口	平8.10.15～ 平9.10.9		
宮ノ背遺跡	八幡市美濃山宮ノ背	平8.11.14～ 平9.10.9		
備前遺跡	八幡市美濃山備前	平9.8.6～ 10.9		

3．　本書で使用している座標は、国土座標第６座標系による。

4．　本書の編集は、調査第１課資料係が当った。

本　文　目　次

1．余部遺跡第２次発掘調査概要----------1
2．中海道遺跡第46次発掘調査概要----------13
3．椋ノ木遺跡平成７・８年度発掘調査概要----------21
4．一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)発掘調査概要----71

挿　図　目　次

1．余部遺跡第２次

第１図　調査地周辺遺跡分布図----------2
第２図　調査地位置図----------3
第３図　トレンチ配置図----------4
第４図　基本土層柱状模式図----------4
第５図　主要遺構平面図----------5
第６図　第１・第２トレンチ遺構平面図----------6
第７図　主体部105実測図----------7
第８図　第３トレンチ遺構平面図----------8
第９図　第４・第５トレンチ遺構平面図----------9
第10図　第６・第７トレンチ遺構平面図----------10
第11図　出土遺物実測図----------11

2．中海道遺跡第46次

第12図　調査地位置図及び周辺遺跡分布図----------13
第13図　第17次・第34次・第42次発掘調査地及びトレンチ配置図----------14
第14図　トレンチ配置図----------15
第15図　第１トレンチ平面図及び土層断面図----------16
第16図　第２トレンチ平面図及び土層断面図----------17
第17図　ＳＨ213平面図----------18

第18図　出土遺物実測図(1)----------19
第19図　出土遺物実測図(2)----------20

3．椋ノ木遺跡

第20図　調査地位置図(周辺遺跡配置図)----------22
第21図　トレンチ配置図----------23
第22図　1トレンチ遺構平面図----------25
第23図　1トレンチＳＤ9501平面図(1/200)・断面図(1/75)----------26
第24図　1トレンチＳＫ9502平面図・断面図----------27
第25図　2トレンチ遺構平面図----------28
第26図　2トレンチＳＥ174平面図・断面図----------29
第27図　2トレンチＳＥ174上層遺物出土状況図----------30
第28図　2トレンチＳＫ171平面図・断面図----------30
第29図　2トレンチＳＤ173平面図(1/150)・断面図(1/50)----------31
第30図　4－1トレンチ遺構平面図----------32
第31図　4－2トレンチ・4－4トレンチ遺構平面図----------33
第32図　4－3トレンチ遺構平面図----------33
第33図　4－3トレンチＳＥ104平面図・断面図----------34
第34図　4－3トレンチＳＥ142平面図・断面図----------35
第35図　4－3トレンチＳＥ301平面図・断面図----------36
第36図　4－3トレンチＳＤ50遺物出土状況図(1/20)・横断面図(1/40)----------38
第37図　4－5トレンチ遺構平面図----------40
第38図　5トレンチ遺構平面図----------41
第39図　5トレンチＳＥ285平面図・断面図----------44
第40図　5トレンチＳＫ118・ＳＥ118平面図・断面図----------44
第41図　5トレンチＳＫ137平面図・断面図----------45
第42図　5トレンチＳＫ158平面図・断面図----------45
第43図　5トレンチＳＫ139平面図・断面図----------46
第44図　5トレンチＳＫ143平面図・断面図----------46
第45図　5トレンチＳＫ61平面図・断面図----------47
第46図　5トレンチＳＫ70平面図・断面図----------47
第47図　5トレンチＳＢ1平面図・断面図----------48
第48図　5トレンチＳＢ2平面図・断面図----------48
第49図　5トレンチＳＴ226平面図・断面図----------48
第50図　5トレンチＳＫ108断面図----------49
第51図　5トレンチ土層断面図----------49

第52図　1トレンチ遺物実測図----------50
第53図　2トレンチ遺物実測図----------52
第54図　4－3トレンチ遺物実測図(1)----------53
第55図　4－3トレンチ遺物実測図(2)----------54
第56図　4－3トレンチ遺物実測図(3)----------55
第57図　4－3トレンチ遺物実測図(4)----------57
第58図　4－3トレンチ遺物実測図(5)----------58
第59図　5トレンチ遺物実測図(1)----------60
第60図　5トレンチ遺物実測図(2)----------61
第61図　5トレンチ遺物実測図(3)----------62
第62図　5トレンチ遺物実測図(4)----------63
第63図　5トレンチ遺物実測図(5)----------64
第64図　5トレンチ遺物実測図(6)----------66
第65図　5トレンチ遺物実測図(7)----------67
第66図　5トレンチ遺物実測図(8)----------67
第67図　5トレンチ遺物実測図(9)----------67
第68図　木製品実測図----------68

4．一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)

第69図　調査地及び周辺遺跡分布図----------72
第70図　西ノ口遺跡(左)・宮ノ背遺跡(右)調査トレンチ配置図----------73
第71図　西ノ口遺跡遺構配置図----------74
第72図　竪穴式住居跡1実測図----------75
第73図　宮ノ背遺跡遺構配置図----------76
第74図　竪穴式住居跡1・2、溝1実測図----------77
第75図　出土土器実測図----------78
第76図　石器実測図----------79
第77図　宮ノ背遺跡調査区設定図----------80
第78図　宮ノ背遺跡(平成9年度)遺構配置図----------81
第79図　宮ノ背遺跡竪穴式住居跡4実測図----------82
第80図　竪穴式住居跡4内土器出土状況----------83
第81図　宮ノ背遺跡竪穴式住居跡5・6実測図----------83
第82図　竪穴式住居跡4下層木棺墓実測図----------83
第83図　管玉実測図----------84
第84図　鉄鏃実測図----------84
第85図　宮ノ背遺跡竪穴式住居跡4出土土器実測図----------84

第86図　西ノ口遺跡遺構配置図----------85
第87図　南山７号墳遺構全体図及び周溝内土層堆積図----------86
第88図　南山７号墳周辺埋葬１実測図----------87
第89図　鉄釘実測図----------87
第90図　南山７号墳出土土器実測図----------87
第91図　石器実測図----------88
第92図　備前遺跡調査区設定図----------89
第93図　備前遺跡遺構配置図----------90
第94図　竪穴式住居跡１・２実測図----------91
第95図　竪穴式住居跡３・４実測図----------91
第96図　竪穴式住居跡５平面図・断面図----------92
第97図　備前遺跡環濠(土器溜まり１・２付近)検出状況図----------93
第98図　鉇実測図----------94
第99図　備前遺跡出土土器実測図(1)----------95
第100図　備前遺跡出土土器実測図(2)----------96
第101図　備前遺跡出土土器実測図(3)----------97
第102図　備前遺跡出土土器実測図(4)----------98
第103図　備前遺跡出土石製品実測図----------99
第104図　南山城地域における高地性集落の二者----------100

付　表　目　次

４．一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)

付表１　調査一覧表----------71
付表２　備前遺跡出土土器観察表----------101

図 版 目 次

1．余部遺跡第２次

図版第１　(1)調査地遠景(南西から)　(2)調査前全景(北西から)
(3)第１トレンチ全景(真上から)
図版第２　(1)第１トレンチ主体部105全景(西から)
(2)第１トレンチ主体部105遺物出土状況(南から)
(3)第１トレンチ掘立柱建物跡114検出状況(南西から)
図版第３　(1)第２トレンチ全景(真上から)　(2)第２トレンチ東壁土層断面(西から)
(3)第２トレンチ竪穴式住居跡216完掘状況(西から)
図版第４　(1)第２トレンチ竪穴式住居跡216東側床面検出状況(西から)
(2)第２トレンチ掘立柱建物跡204検出状況(北東から)
(3)第２トレンチ溝217完掘状況(西から)
図版第５　(1)第３トレンチ全景(真上から)　(2)第３トレンチ西側遺構完掘状況(東から)
(3)第３トレンチ方形周溝墓310全景(北東から)
図版第６　(1)第３トレンチ掘立柱建物跡305～308完掘状況(西から)
(2)第４トレンチ全景(真上から)
(3)第４トレンチ竪穴式住居跡403～405完掘状況(西から)
図版第７　(1)第５トレンチ全景(真上から)
(2)第５トレンチ方形周溝墓504完掘状況(北西から)
(3)第５トレンチ竪穴式住居跡501全景(南東から)
図版第８　(1)第６トレンチ全景(北から)　(2)第６トレンチ南壁土層断面(北東から)
(3)第６トレンチ竪穴式住居跡601全景(南西から)
図版第９　(1)出土遺物　土器　(2)出土遺物　鉄器(1)
図版第10　出土遺物　鉄器(2)

2．中海道遺跡第46次

図版第11　(1)第１トレンチ調査前(東から)　(2)第１トレンチ完掘状況
図版第12　(1)第１トレンチ重機掘削状況　(2)第１トレンチ西壁土層断面
(3)ＳＤ101完掘状況
図版第13　(1)第２トレンチ調査前(西から)　(2)第２トレンチ完掘状況
図版第14　(1)第２トレンチ調査風景　(2)ＳＫ210検出状況
(3)ＳＨ213完掘状況

3．椋ノ木遺跡

図版第15　(1)調査地遠景１(北から)　(2)調査地遠景２(北西から)
(3)調査地遠景３(南から)　(4)調査地遠景４(西から)

図版第16　(1)１トレンチ全景１(拡張前、南から)　(2)１トレンチ全景２(拡張前、北から)
(3)１トレンチ南拡張区全景(東から)　(4)１トレンチ東拡張区全景(南から)

図版第17　(1)１トレンチＳＤ9501・ＳＫ9504・ＳＫ9515検出状況(南から)
(2)１トレンチＳＤ9501検出状況(ＳＫ9504と重複する部分、南から)
(3)１トレンチＳＫ9504全景(ＳＤ9501掘削前、南から)
(4)１トレンチＳＫ9501遺物・石出土状況(北から)

図版第18　(1)１トレンチＳＫ9502全景(東から)
(2)１トレンチＳＫ9502遺物出土状況(南から)
(3)１トレンチＳＫ9502・ＳＢ9503周辺遺構検出状況(東から)
(4)１トレンチ最下層遺構検出状況(北から)

図版第19　(1)２トレンチ全景(西から)　(2)２トレンチ全景(東から)

図版第20　(1)２トレンチＳＥ174全景(南から)　(2)２トレンチＳＫ171全景(南から)
(3)２トレンチＳＤ173断面(北から)

図版第21　(1)４－３トレンチ全景１(東から)
(2)４－３トレンチ全景２(垂直写真、上が北)
(3)４－３トレンチＳＥ142周辺遺構検出状況(北から)
(4)４－３トレンチＳＥ142井戸側検出状況(手前側を断ち割った状態、西から)

図版第22　(1)４－３トレンチＳＤ50遺物出土状況１(南から)
(2)４－３トレンチＳＤ50遺物出土状況２(最下層と横断面、南から)
(3)４－３トレンチＳＤ50遺物出土状況３(東から)
(4)４－３トレンチＳＤ50遺物出土状況４(西から)

図版第23　(1)４－３トレンチ北西部遺構検出状況(東から)
(2)４－３トレンチＳＥ104検出状況(北から)
(3)４－３トレンチＳＫ194検出状況(西から)
(4)４－３トレンチＳＫ213検出状況(西から)

図版第24　(1)４－３トレンチ北東部遺構検出状況(西から)
(2)４－３トレンチＳＤ148遺物・石出土状況(北から)
(3)４－３トレンチ南西部遺構検出状況(北から)
(4)４－４トレンチ全景(北から)

図版第25　(1)４－１トレンチ上層検出面全景(東から)
(2)４－１トレンチ下層検出面全景(東から)
(3)４－２トレンチ全景(西から)

(4) 4－5トレンチ全景(東から)
図版第26　(1) 5トレンチ全景(上が北)　(2) 5トレンチ全景(北から)
(3) 5トレンチ南東部(上が北)
図版第27　(1) 5トレンチＳＥ285断面(南から)　(2) 5トレンチＳＫ118全景(北から)
(3) 5トレンチＳＥ118断面(南から)
図版第28　(1) 5トレンチＳＫ137全景(西から)　(2) 5トレンチＳＫ158全景(東から)
(3) 5トレンチＳＫ139全景(南から)
図版第29　(1) 5トレンチＳＫ143全景(北から)　(2) 5トレンチＳＫ70南西部(東から)
(3) 5トレンチＳＴ226全景(南から)
図版第30　(1) 5トレンチＳＢ１ピット断面(南から)
(2) 5トレンチＳＢ２ピット断面(南から)
(3) 5トレンチＳＤ108断面(北から)
(4) 5トレンチＳＤ108遺物出土状況(南から)
図版第31　出土遺物１　１トレンチ・２トレンチ出土土器
図版第32　出土遺物２　４－３トレンチ出土土器１
図版第33　出土遺物３　４－３トレンチ出土土器２
図版第34　出土遺物４　４－３トレンチ出土土器３
図版第35　出土遺物５　５トレンチ出土土器１
図版第36　出土遺物６　５トレンチ出土土器２
図版第37　(1) １トレンチ出土遺物　(2) ２トレンチＳＥ174出土遺物
図版第38　(1) ４－３トレンチＳＤ50出土遺物(土師器皿)
(2) ４－３トレンチＳＤ50出土遺物(瓦器椀)
図版第39　(1) ４－３トレンチＳＥ142出土遺物
(2) ４－３トレンチＳＤ148出土遺物
図版第40　(1) ４－３トレンチＳＫ194・ＳＫ195・ＳＫ153・ＳＥ301出土遺物
(2) ５トレンチＳＫ118出土遺物
図版第41　(1) ５トレンチＳＫ137・ＳＫ158・ＳＫ139出土遺物
(2) ５トレンチＳＫ139・ＳＫ143出土遺物
図版第42　(1) ５トレンチＳＫ61・ＳＫ70出土遺物
(2) ５トレンチＳＢ１・ＳＢ２・ＳＤ108・ＳＴ226出土遺物
図版第43　木製品(1)
図版第44　木製品(2)

４．西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡

図版第45　(1)平成８年度調査地全景(西から)
(2)平成８年度西ノ口遺跡全景(東から)

図版第46　(1)第1トレンチ全景(南から)　(2)竪穴式住居跡(南西から)
図版第47　(1)竪穴式住居跡(南東から)　(2)竪穴式住居跡(西から)
図版第48　(1)平成8年度調査地全景(東から)　(2)第1トレンチ全景(南西から)
図版第49　(1)第1トレンチ(南西から)　(2)竪穴式住居跡1(南西から)
図版第50　(1)竪穴式住居跡2(北東から)　(2)竪穴式住居跡2(南西から)
図版第51　(1)第2トレンチ(北西から)　(2)竪穴式住居跡3(北東から)
図版第52　(1)宮ノ背遺跡全景(1)(垂直方向、下が北)
(2)宮ノ背遺跡全景(2)(北から)　(3)宮ノ背遺跡全景(3)(南から)
図版第53　(1)竪穴式住居跡4検出状況(南東から)
(2)竪穴式住居跡4炭化材検出状況(南東から)
(3)竪穴式住居跡4完掘状況(北西から)
図版第54　(1)竪穴式住居跡4内土器出土状況(南東から)
(2)竪穴式住居跡4内炭化材検出状況(北東から)
(3)竪穴式住居跡4内管玉検出状況(東から)
(4)竪穴式住居跡6内鉄鏃検出状況(西から)
(5)竪穴式住居跡4排水溝取り付き状況(東から)
(6)竪穴式住居跡4主柱材検出状況(南西から)
(7)竪穴式住居跡6検出状況(南東から)
(8)竪穴式住居跡6内土器出土状況(南西から)
図版第55　(1)竪穴式住居跡4下層木棺墓完掘状況(南から)
(2)木棺墓完掘状況(北から)　(3)木棺検出状況(1)(北から)
(4)木棺検出状況(2)(西から)　(5)木棺検出状況(3)(東から)
図版第56　(1)西ノ口遺跡全景(1)(南東から)　(2)西ノ口遺跡全景(2)(垂直方向、左上が北)
(3)西ノ口遺跡全景(3)(北西から)
図版第57　(1)南山7号墳全景(南西から)　(2)南山7号墳周辺埋葬1検出状況(北西から)
(3)周辺埋葬1棺内釘出土状況(東から)
(4)周溝内須恵器出土状況(西から)　(5)周溝内高杯出土状況(西から)
図版第58　(1)西ノ口遺跡竪穴式住居跡2検出状況(北から)
(2)西ノ口遺跡竪穴式住居跡2検出状況(南から)
(3)竪穴式住居跡2内土器出土状況(南東から)
(4)竪穴式住居跡2内炉跡検出状況(北から)
(5)西ノ口遺跡竪穴式住居跡2完掘状況(西から)
(6)西ノ口遺跡調査風景(南西から)
(7)西ノ口遺跡完掘状況(1)(西半分)
(8)西ノ口遺跡完掘状況(2)(東半分)

図版第59　(1)備前遺跡全景(1)(上が南西)　(2)備前遺跡全景(2)(上が南西)
(3)備前遺跡全景(3)(上が北)
図版第60　(1)備前遺跡竪穴式住居跡１・２全景(西から)
(2)備前遺跡竪穴式住居跡１・２全景(北から)
(3)備前遺跡竪穴式住居跡３・４全景(西から)
(4)竪穴式住居跡１床面土器据え付けピット(北から)
(5)竪穴式住居跡４内石戈出土状況(北から)
(6)備前遺跡環濠内土層堆積状況(南東から)
(7)環濠内土器出土状況(南東から)　(8)備前遺跡調査風景(西から)
図版第61　(1)環濠内土器溜まり２検出状況(北から)
(2)土器溜まり２検出状況(北東から)
(3)環濠内土器溜まり１検出状況(北東から)
(4)土器溜まり１内土器出土状況(1)(北西から)
(5)土器溜まり１内土器出土状況(2)(北西から)
(6)土器溜まり１内土器出土状況(3)(北から)
(7)土器溜まり１内土器出土状況(4)(北西から)
(8)現地説明会風景(北から)
図版第62　備前遺跡出土土器(1)
図版第63　備前遺跡出土土器(2)
図版第64　宮ノ背・西ノ口・備前遺跡出土土器
図版第65　(1)宮ノ背・備前遺跡出土石製品　(2)備前遺跡土器溜まり２出土桃核
(3)宮ノ背・西ノ口・備前遺跡出土鉄製品
図版第66　(1)出土石器(ナイフ形石器ほか)
(2)宮ノ背遺跡竪穴式住居跡４建築材の樹種

1．余部遺跡第２次発掘調査概要

1．はじめに

余部遺跡は、亀岡盆地のほぼ中央部に位置する弥生時代～江戸時代に至る大規模な複合集落遺跡である。この遺跡は、亀岡盆地の中央部を貫流する大堰川西岸の河岸段丘上に広がり、東西約900m・南北約1,000mにわたる広大な規模を持つ。今回の発掘調査は、広域幹線アクセス街路整備事業に先立ち、京都府亀岡土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、余部遺跡の北部にあたる京都府亀岡市余部町新堂に所在する。

余部遺跡は、昭和40年に隣接する工場用地内で立会調査が行われ、弥生時代中期の遺物が確認されているが、本格的な調査は今回の第２次調査が初めてのものである。

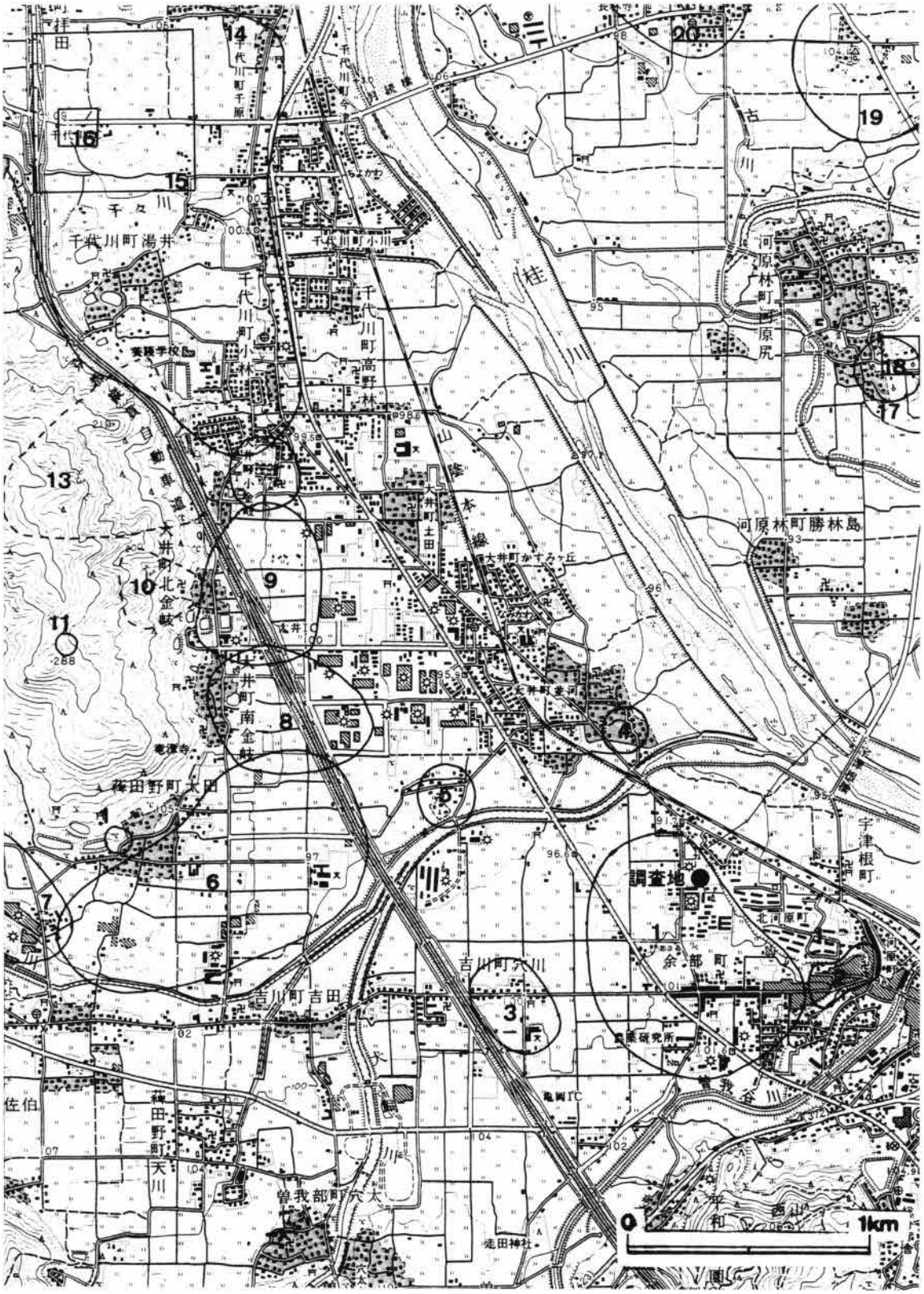
発掘調査は、第１トレンチから順に重機掘削を開始して、第１～５トレンチ及び第７トレンチの調査後、プレハブを移転し第６トレンチの調査を行った。調査では、当初の予想を超えて多くの遺構を検出し、第１トレンチ東側と北側には古墳関係の遺構などが広がる可能性があったため、一部農道下に及び拡張調査を実施した。また、第２トレンチでも弥生時代の玉作り工房を検出したために、同様に当初の調査区を拡張して調査を進めた。現地調査の期間は、平成９年６月２日から平成10年２月13日までとし、玉作り遺構検出に伴う土砂洗浄作業を、平成９年12月16日～平成10年２月26日まで行った。調査面積は、当初約2,000㎡を対象としたが、拡張調査を実施したため、最終的にのべ約2,240㎡となった。本調査に関わる経費は、京都府亀岡土木事務所が負担した。

現地調査は、調査第２課調査第２係長辻本和美、同主査調査員竹下士郎・岡崎研一、調査員野々口陽子が担当した。本書の執筆は、野々口陽子が行い、写真撮影は、遺物写真を調査第１課資料係主任調査員田中　彰が撮影し、その他を野々口が撮影した。

調査の実施にあたり、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会などの関係諸機関の協力を得た。また、地元有志の方がた及び学生諸氏には現地調査及び整理報告作業に参加協力していただいた。(注1)感謝の意を表したい。

2．調査の概要

亀岡盆地では、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の分布は、主に盆地周辺の丘陵裾部に集中しており、盆地西辺の行者山山麓には、弥生時代前期の太田遺跡、後期の北金岐遺跡、古墳時代中期から後期の鹿谷遺跡などの大規模な集落遺跡が位置する。一方、盆地の中央部は、大堰川の氾濫源が広がるが、余部遺跡は低湿地帯より一段高い段丘上にあるため、洪水の被害が及びにくく、早くから土地利用がなされたとみられる。戦国時代には、遺跡の南東に余部城が築かれる



第1図　調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

1.余部遺跡	2.余部城跡	3.吉川遺跡	4.並河城跡	5.野寺廃寺
6.太田遺跡	7.鹿谷遺跡	8.南金岐遺跡	9.北金岐遺跡	10.北金岐古墳群
11.小金岐古墳群	12.馬場ヶ崎遺跡	13.北ノ庄古墳群	14.千代川遺跡	15.丹波国府推定地

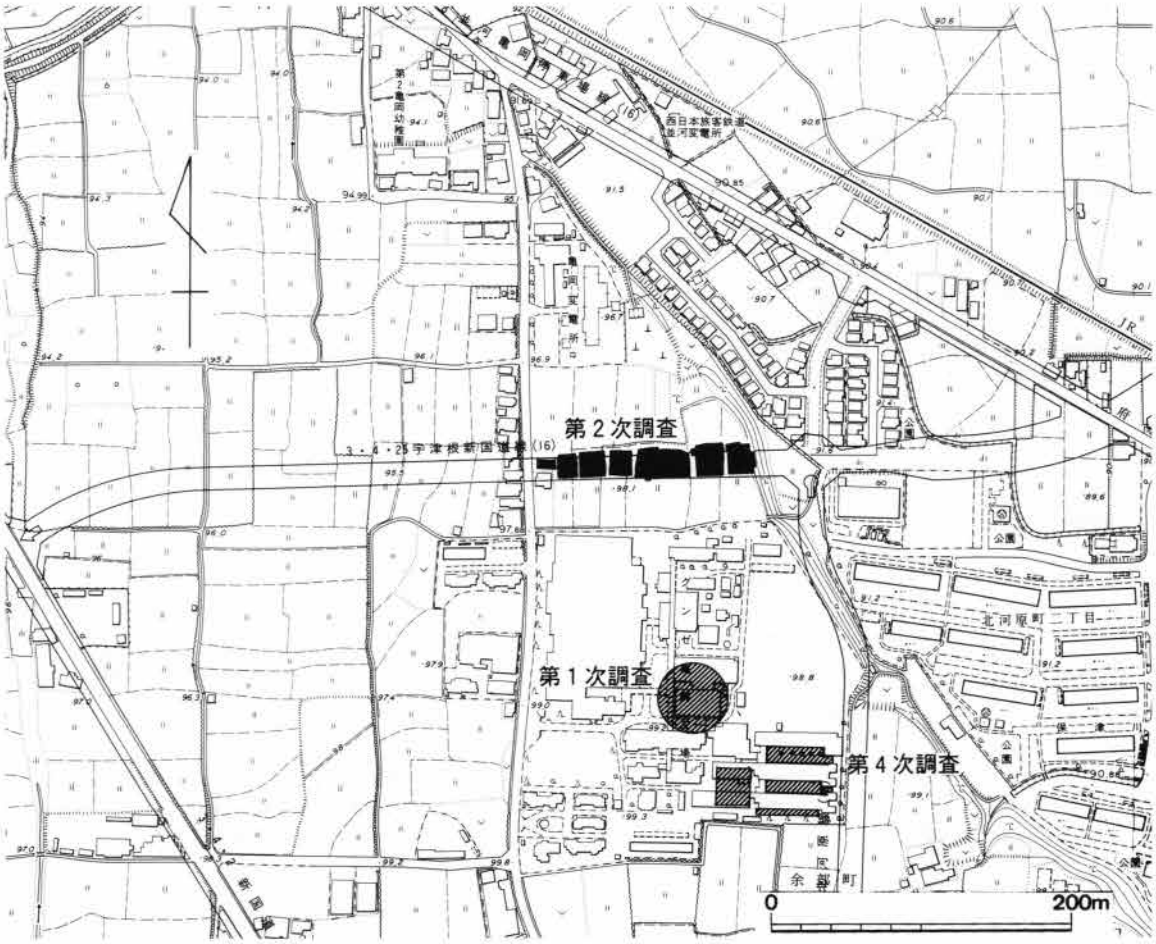
が、これも眺望の良い高台となっている好立地をうまく生かしたものといえる。

今年度の余部遺跡は、２～４次の調査が相次いで行われた。今回の調査地点から南に約500m離れた京都府総合農業研究所内では、当調査研究センターによる、施設建て替えに伴う第３次調査で、弥生時代中期前半頃の方形周溝墓が見つかっており、遺跡の南に弥生時代の墓域の存在することが確認された。また、遺跡中央部では、亀岡市教育委員会による、民間工場の建て替えに伴う第４次調査で、弥生時代中期後半の竪穴式住居跡11棟と、環濠とみられる溝状遺構の一部が検出され、拠点集落の一画が明らかになった。

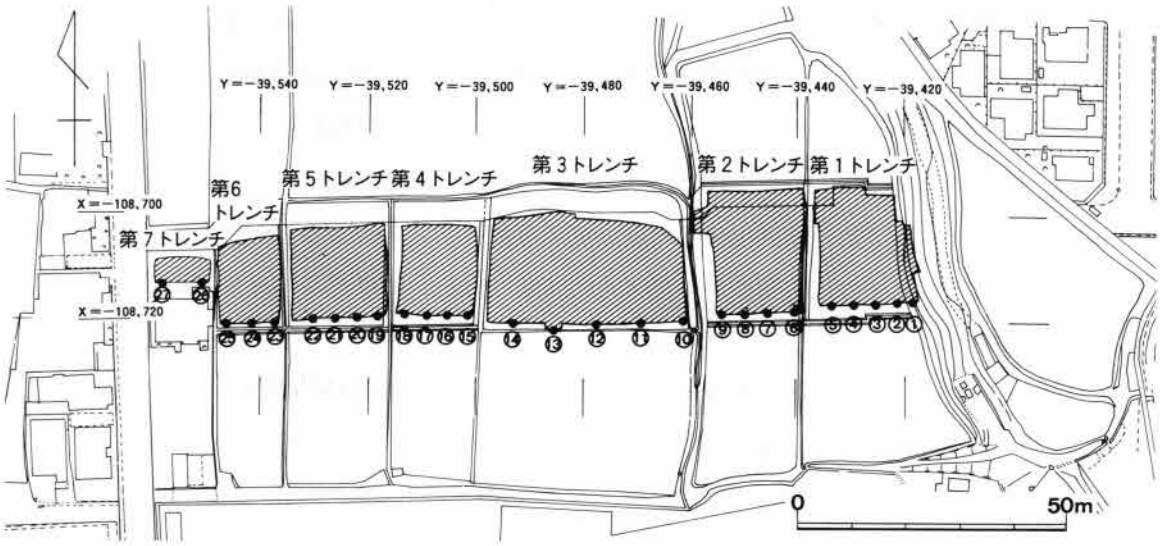
今回の調査地点は、余部遺跡の北域にあたり、主に弥生時代中期と古墳時代中期から後期にかけての多くの遺構を検出した。弥生時代の遺構は、竪穴式住居跡１、方形周溝墓17基があり、古墳時代の遺構は埋葬施設２、竪穴式住居跡10、掘立柱建物跡22以上を検出した。さらに、鎌倉時代以降の溝状遺構を検出した。

調査地の基本層位は、上層から順に、淡灰褐色シルト(旧耕作土)、灰褐色礫混じり粘質土(古代～近世遺物包含層)、暗茶褐色粘質土(古墳時代遺物包含層)、黒褐色粘質土(弥生時代遺物包含層)からなる(第４図)。

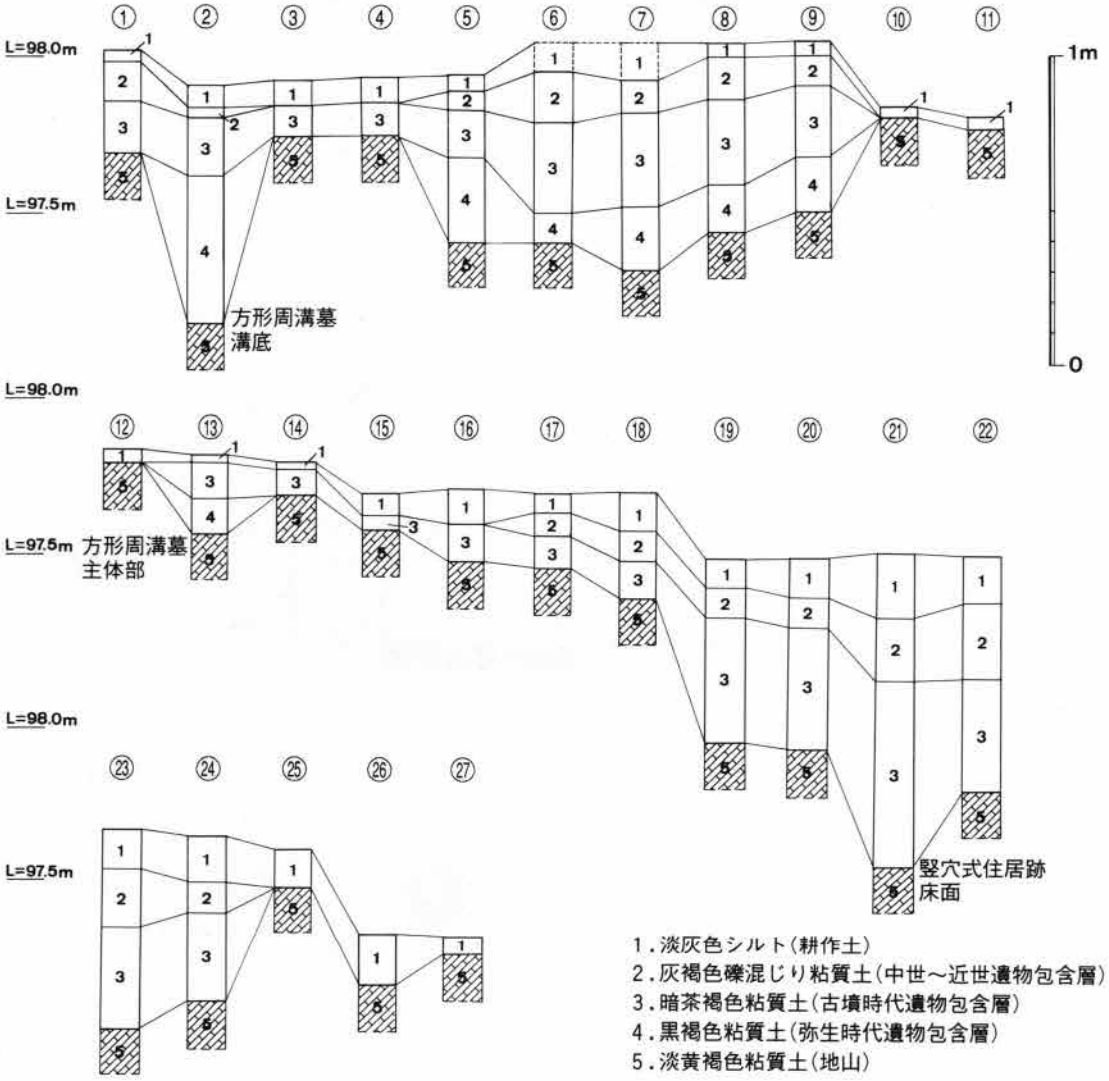
調査対象地は東西に細長く、農業排水路で分断されているため、東側から７つのトレンチを設定して調査した。以下、各調査地区ごとに検出した遺構の概略を述べる。



第２図　調査地位置図(1/5,000)



第３図　トレンチ配置図



第４図　基本土層柱状模式図

３．　検　出　遺　構

(1)第１トレンチ

弥生時代中期後半の方形周溝墓４基、中期古墳の埋葬施設２基、古墳時代後期の竪穴式住居跡１棟、掘立柱建物跡２棟を検出した。

方形周溝墓101　トレンチ中央部で検出した東西約9.7m・南北約13.5mの方形周溝墓で、深さ0.4～0.7mを測る。周溝内から、弥生土器、石庖丁などが出土した。削平のため、明確な主体部は確認できなかった。

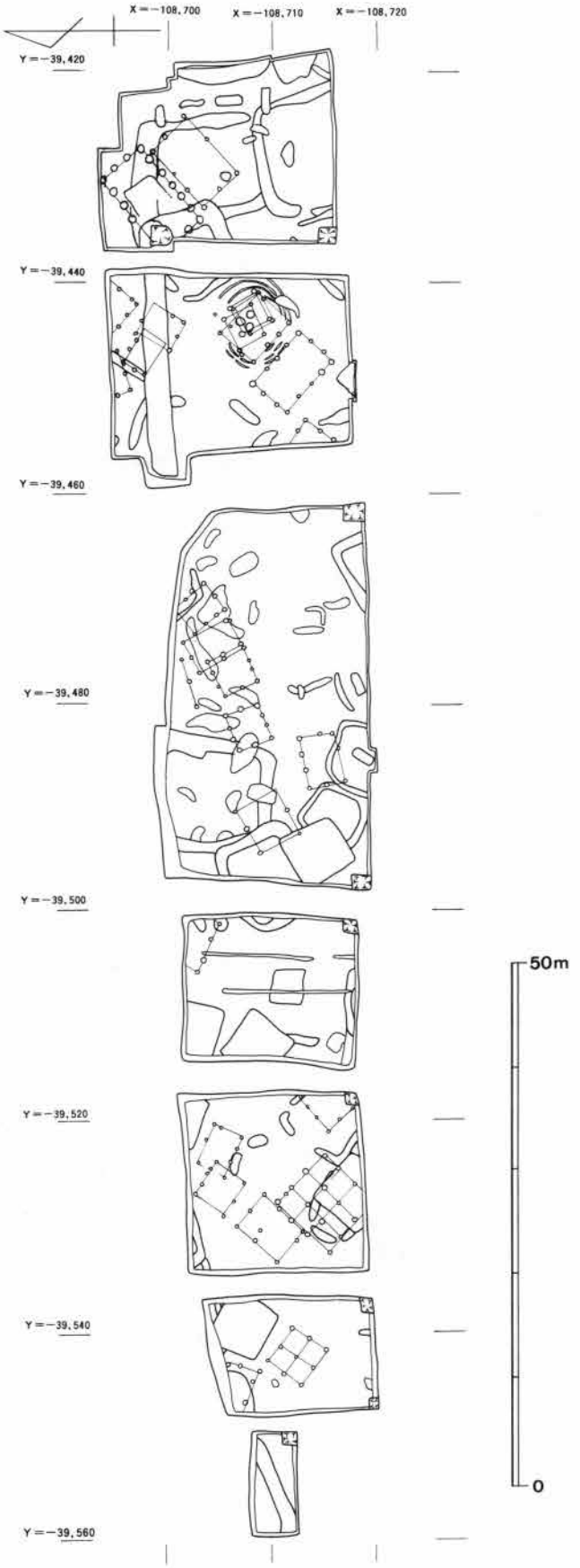
溝120　トレンチ東端で検出した長さ約9.5m・深さ約1.2mの溝である。溝内から刀子などの鉄器片及び須恵器片が出土しており、古墳の周溝の一部である可能性が高い。

主体部105　約2.4m×約0.7m・深さ約0.2mを測る。底面は、ゆるやかに「U」字形に落ち込むことから、舟形木棺を直葬したものと推定される。東側の小口部に、縄掛け突起状の落ち込みを確認した。北側肩部から、鉄鋌２、鉄斧２、鉄鎌１、鉄剣１が出土した。また、棺内から鉄刀子１、滑石製勾玉１、臼玉10が出土した。

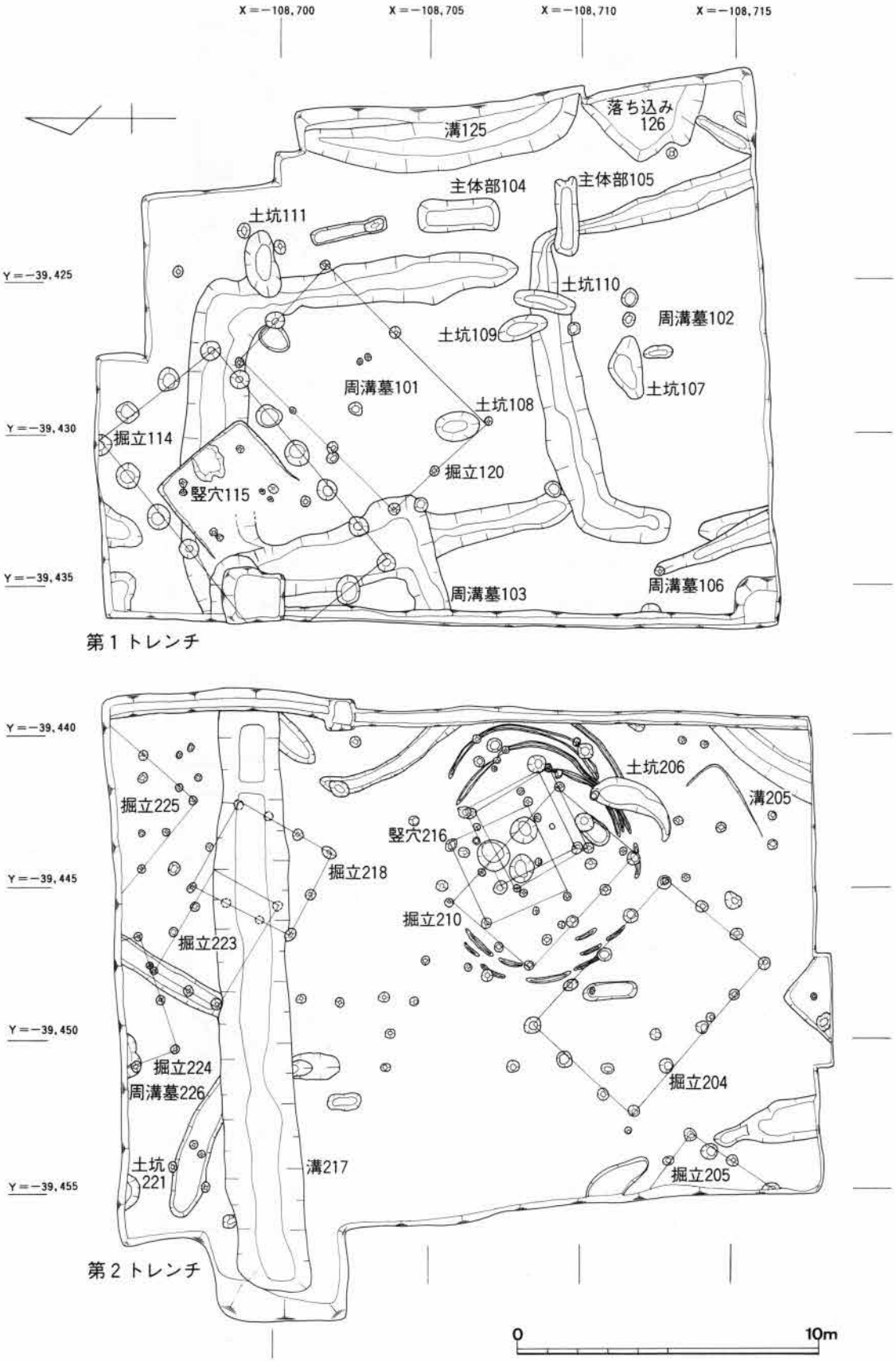
掘立柱建物跡114　３間×６間の建物跡で、柱間は、1.8～2.0mを測る。建物跡の主軸は、北から東に約52°振る。

(2)第２トレンチ

弥生時代中期前半の竪穴式住居跡１、弥生時代中期後半の方形周溝墓



第５図　主要遺構平面図

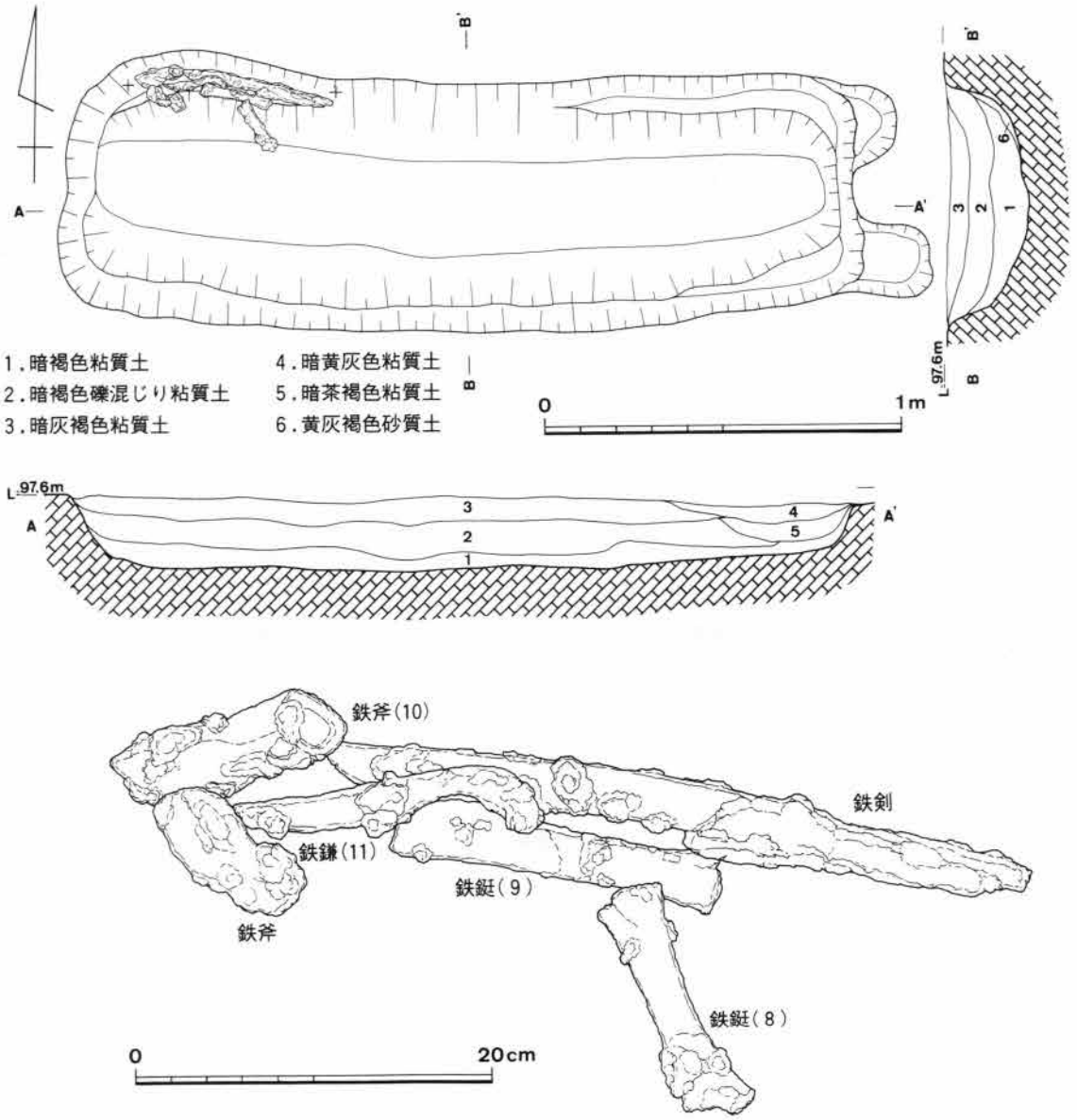


第6図　第1・第2トレンチ遺構平面図(周溝墓:方形周溝墓、竪穴:竪穴式住居跡、掘立:掘立柱建物跡)

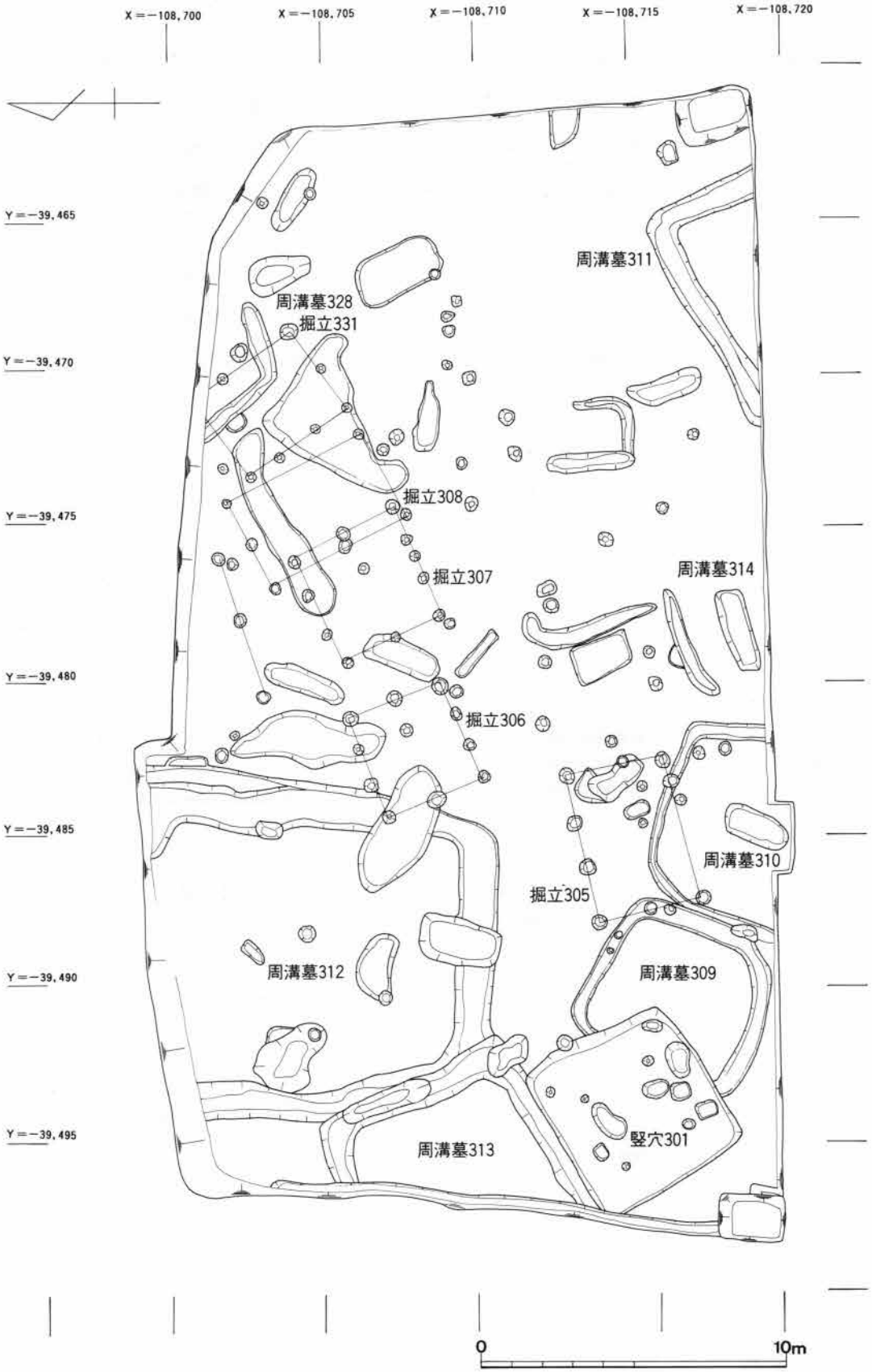
１、古墳時代後期の竪穴式住居跡１、古墳時代後期以降と推定される掘立柱建物跡７、鎌倉時代～室町時代の溝１を検出した。

竪穴式住居跡216　調査区東側で検出した長径約8.0m・短径約6.0mの平面形が楕円形の住居跡である。３回以上の建て替えが行われたと推定される。床面から筋砥石、碧玉剥片、安山岩製石鏃未製品、磨製石斧、石庖丁などが出土した。この住居跡上層及び土坑内の埋土を土納袋約500袋に採集し、洗浄を行った結果、碧玉製管玉未製品などとともに、玉髄製の打製石針(錐状をなすもので玉類の穿孔具と推定される)が約40本以上出土した。

溝217　調査区北側で検出した長さ約24.3m・幅約2.4mの東西にのびる溝である。一部、第１トレンチに及ぶ。深さ約0.7m、断面はゆるやかな「U」字形を呈する。埋土は、地山ブロックを多量に含み、短期間のうちに埋め戻されたとみられる。溝内から瓦器片が出土した。



第７図　主体部105実測図(カッコ内番号は第11図番号に対応)



第８図　第３トレンチ遺構平面図(周溝墓:方形周溝墓、竪穴:竪穴式住居跡、掘立:掘立柱建物跡)

(3)第３トレンチ

弥生時代中期と推定される方形周溝墓７、古墳時代の竪穴式住居跡２、古墳時代後期と推定される掘立柱建物跡５を検出した。トレンチ東半は、著しく削平されている。

方形周溝墓310　一辺約６ｍの方形周溝墓で、中心部から長さ約２ｍ・幅約1.2ｍの埋葬施設とみられる方形土壙を検出した。土壙内から遺物は出土していない。

方形周溝墓312　東西長約11ｍ・南北現存長約11ｍを測る。南側の周溝内から、石庖丁が出土している。

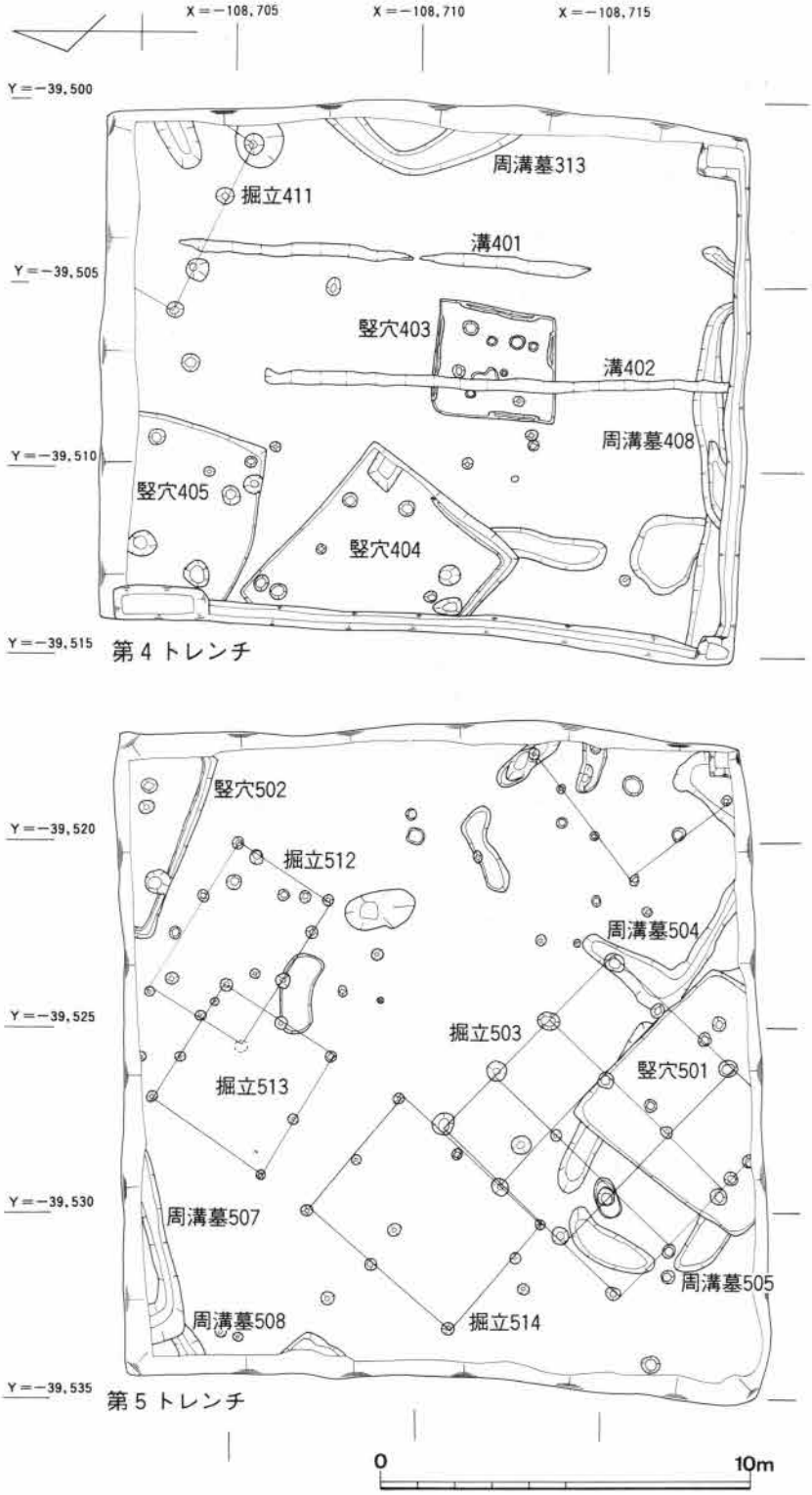
(4)第４トレンチ

弥生時代と推定される方形周溝墓１、古墳時代中期後半～後期の竪穴式住居跡３、掘立柱建物跡１、鎌倉時代以降の素掘り溝２を検出した。

竪穴式住居跡404　一辺約５ｍの平面形が方形の住居跡である。南東寄りの床面の一部に焼土塊があり、炉跡と推定される。埋土から布留式甕の破片や須恵器片が出土した。

(5)第５トレンチ

弥生時代の方形周溝墓４、古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡２、古墳時代後期と推定される掘



第９図　第４・第５トレンチ遺構平面図
（周溝墓:方形周溝墓、竪穴:竪穴式住居跡、掘立:掘立柱建物跡）

立柱建物跡５を検出した。

方形周溝墓504　約５ｍ×約４ｍの長方形をなす。周溝は深さ約0.5mを測り、溝内から石庖丁や弥生土器が出土した。

掘立柱建物跡503　３間×３間の総柱建物跡である。柱間は約2.0mで、柱穴内から土師器高杯脚部が出土している。

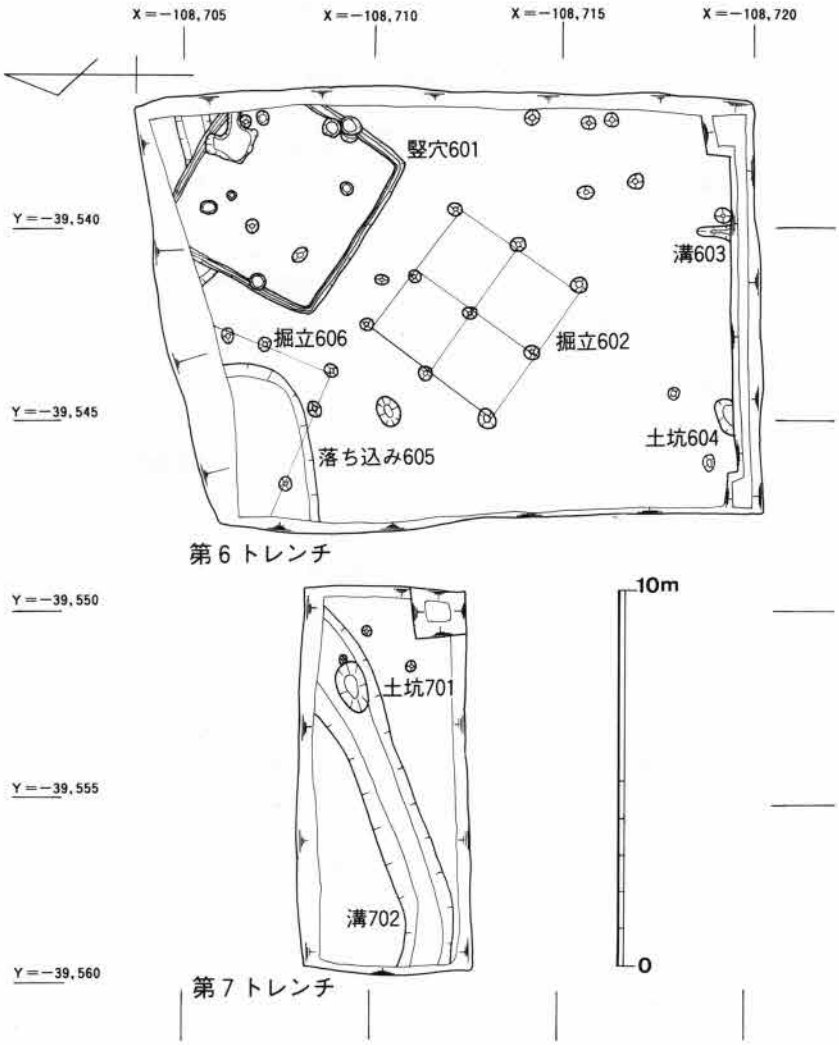
(6)第６トレンチ

古墳時代中期後半の竪穴式住居跡１、掘立柱建物跡２を検出した。

竪穴式住居跡601　一辺約5.4mで、平面形が方形の住居跡である。竈は、北東壁で検出した。住居跡中央部の埋土上層から、口縁部を打ち欠いた須恵器提瓶１、瑪瑙製勾玉１が出土している。

(7)第７トレンチ

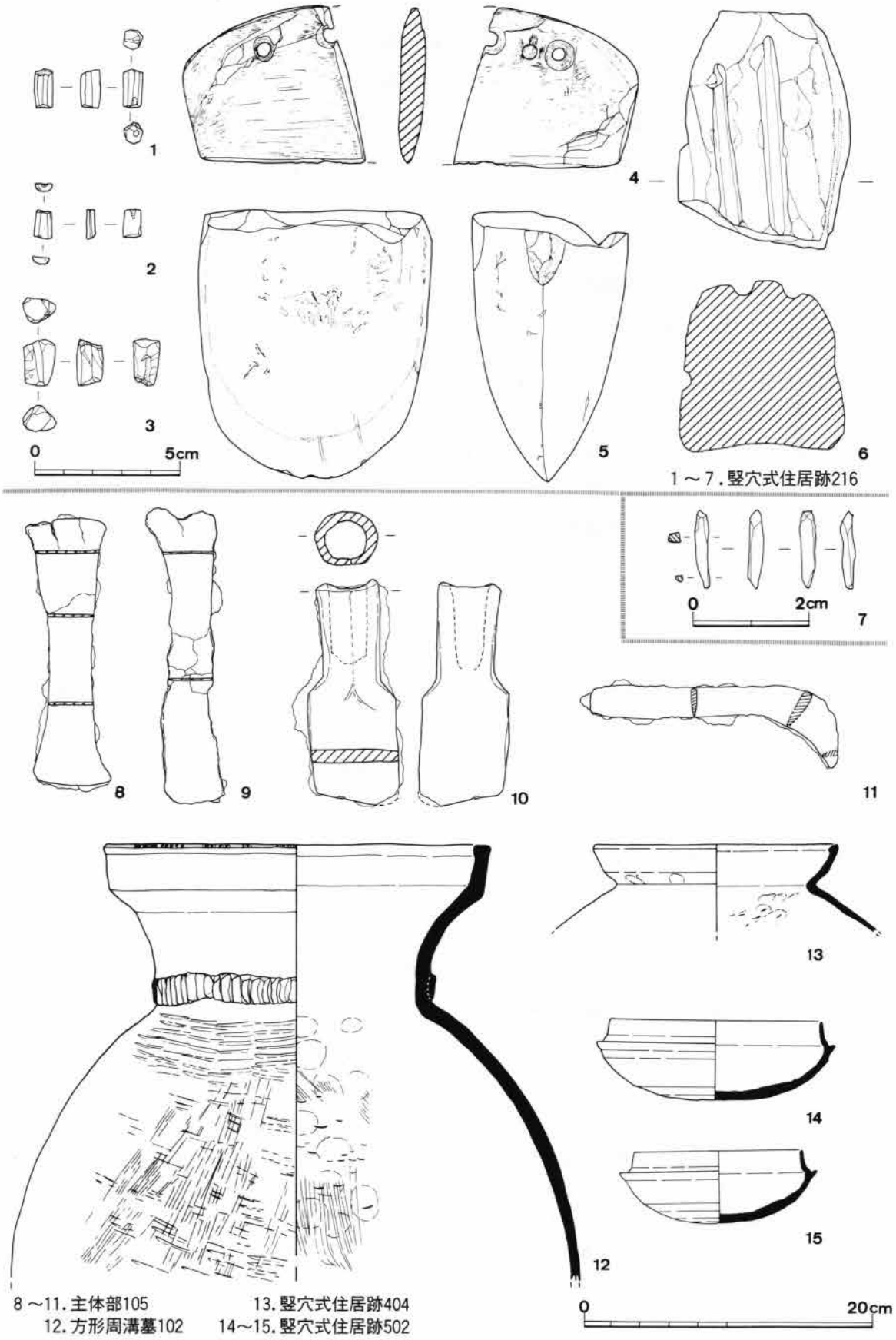
トレンチ中央部で方形周溝墓の一辺とみられる東西にのびる溝１を検出した。



第10図　第６・第７トレンチ遺構平面図
（周溝墓:方形周溝墓、竪穴:竪穴式住居跡、掘立:掘立柱建物跡）

４．出土遺物

１～７は、竪穴式住居跡216及びその周辺から出土した。１は、長さ1.2cm・径約0.6cmの多角柱状をなす。片面に、先端部「U」字状の穿孔痕がある。２は、長さ約１cmで片面に穿孔痕を残す。３は、縦方向の粗い研磨痕が著しい。長さは、約1.6cmを測る。４は、粘板岩製石庖丁である。折損しているが、刃縁に使用痕が認められる。５は、砂岩製磨製石斧である。６は、砂岩製筋砥石で、小口以外の各面を使用している。７は、中央土坑から出土した玉髄製石針である。長さ約1.3cmで、四角柱状をなす。８～11は、主体部



第11図　出土遺物実測図

105から出土した鉄製品である。８・９は鉄鋌である。８は、長さ18.2cm・最大幅5.5cm・最小幅3.0cm・厚さ約0.2cmを測る。９は、長さ20.3cm・最大幅4.7cm・最小幅2.7cmを測る。８の形状は、バチ形を呈し、９よりも型式的に古い形状を示す。片側の端部は、鍛接によるものとみられる剝離痕がみられる。10の有肩鉄斧は、長さ15.2cm・刃部幅6.1cm・刃部厚さ1.0cm・袋部幅4.1cm・袋部厚さ0.6cmを測る。11の曲刃鎌は、長さ17.0cmを測る。12は、方形周溝墓102から出土した。口縁部は、受け口状を呈し、体部にはタタキ後ハケ調整がみとめられる。口径26.7cm・器高残存高約30cmで、淡褐色を呈する。13の布留式甕口縁部は、竪穴式住居跡404から出土したもので、口径17.0cmを測る。14・15の須恵器杯身は、いずれも竪穴式住居跡502から出土した。14は口径14.6cm、15は口径11.6cmを測る。

５．　ま　と　め

今回の調査では、弥生時代中期前半頃の玉作り工房跡を検出し、碧玉製の管玉の生産が行われていたことが判明した。この調査では、土砂洗浄作業を平行して行った結果、多くの玉髄製打製石針が出土し、府内では奈具岡遺跡につぐ２例目の出土資料を得た。工房内では、石鏃などの石器製作が同時に行われており、玉作りの生産形態としては、中期後半の奈具岡遺跡にみられる専業的な生産形態に移行する前段階の状況を示すものとして注目される。

調査地は、弥生時代中期後半には、方形周溝墓が相次いで築造されるようになる。遺跡の中央部にあたる調査地南方の微高地では、今年度の亀岡市教育委員会による第４次調査で、中期後半頃の竪穴式住居跡や環濠とみられる溝の一部が検出され、拠点集落の一画が明らかになっている。こうした周辺部の調査から、調査地一帯は、拠点集落の外縁部に形成された大規模な墓域であることが判明した。

古墳時代の調査では、従来知られていなかった中期古墳の存在が明らかになった。周辺埋葬とみられる主体部の一つからは、鉄鋌が出土しており、被葬者像を考える上で興味深い。一帯は、古墳時代中期後半から後期にかけて再び集落が営まれるようになるが、４次調査では古墳時代の遺構がほとんど検出されていないことから、この時期の集落は、古墳の築造を契機に、段丘の縁辺部にあたる調査地周辺部に形成されたと推定される。

（野々口陽子）

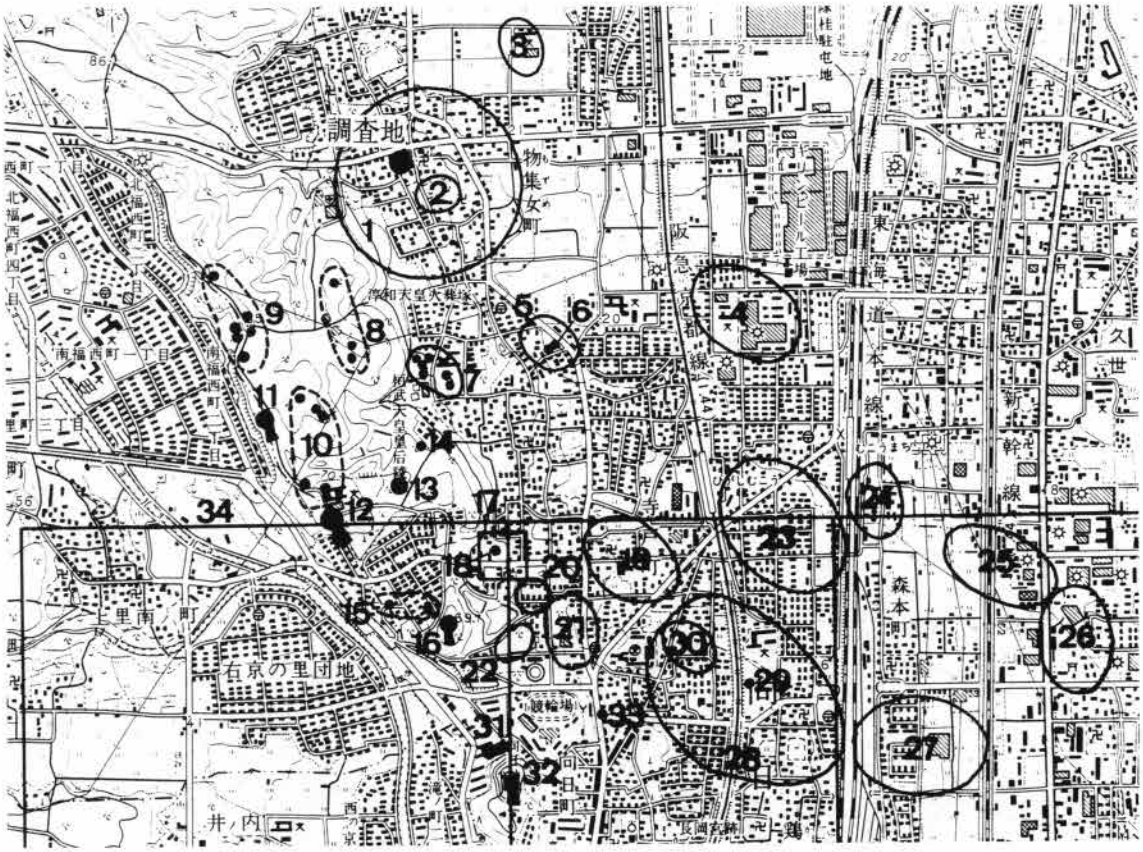
注１　現地調査及び整理作業に参加していただいた方々は、以下のとおりである（敬称略）。
高橋あかね・大田正孝・有澤明子・大西稔子・東古昌樹・庄司友明・望月賢司・福井智子・殿井恵・宇家　希・坂口卓也・日下部賢司・藤井淳也・篠塚智宏・四方国彦・松本芳雄・湯浅髟郎・原田浩年・野々村礼子・松山晃子・村島みよ子・人見幸代・広瀬伝治・黒田直弘・堤　和子・石田初美・大西幸江・岡本志げ乃・森川久子・中西貞子・広瀬三好・広瀬伊佐夫・永田和男・松本スエノ・山田キン子・石橋愛子・人羅幸子・中西セツ・片山八重子・平野すまえ・中川君代・栃下　緑・後藤マリッサ・柿谷悦子・松下道子・高田真由美・井内美智子・松元順代・関口睦美・藤井矢壽子・柿谷幸子・竹岡喜代子・山脇キミエ・竹岡美恵子・斎藤初美・竹岡和子・竹岡弘子・西田貞代・吉岡春子

2．中海道遺跡第46次発掘調査概要

1．はじめに

今回の調査は、広域幹線アクセス街路整備工事(久世北茶屋線)に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、向日市物集女町中海道地内に所在する。

現地調査は、調査第2課調査第2係長辻本和美、同主査調査員竹下士郎が担当し、平成9年5月12日から7月10日の間に行った。道路拡幅予定地内に2か所のトレンチを設定し、調査面積は計約300m²である。調査に係る費用は、京都府乙訓土木事務所が負担した。また、現地調査、及び整理作業を進めるにあたり、各関係機関を始め、多くの方がたに協力いただいた。感謝したい。(注1)



第12図　調査地位置図及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

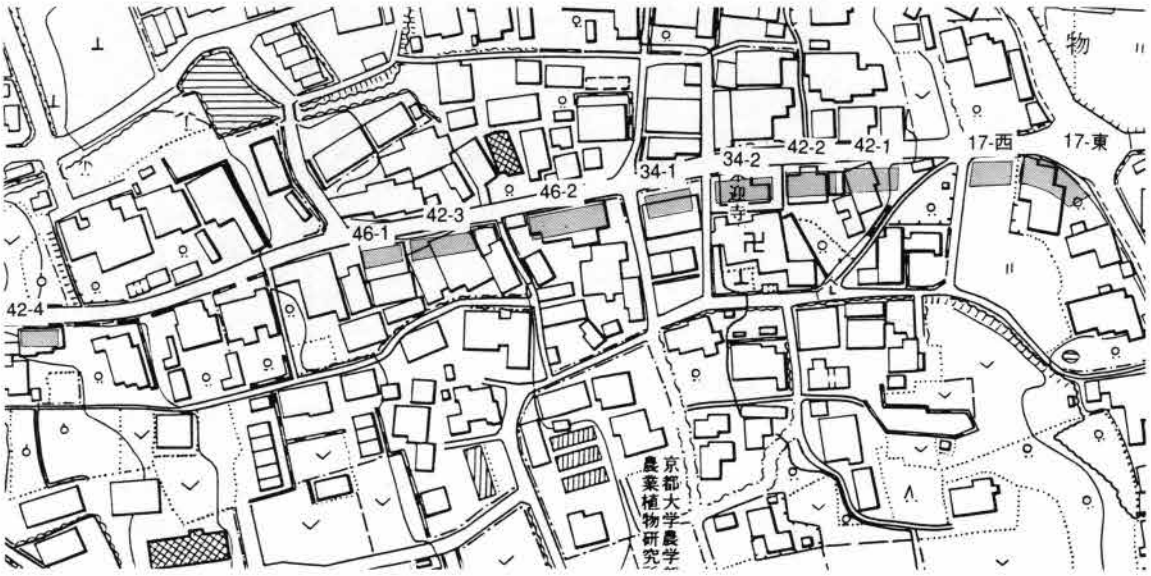
1.中海道遺跡　2.物集女城跡　3.西ノ岡遺跡　4.修理式遺跡　5.物集女車塚周辺遺跡
6.物集女車塚古墳　7.南条古墳群　8.長野丙古墳群　9.東山古墳群　10.芝山古墳群
11.寺戸大塚古墳　12.妙見山古墳　13.伝高畠陵古墳　14.乾垣内遺跡　15.大牧遺跡
16.芝山ノ内古墳　17.宝菩提院廃寺跡　18.西垣内古墳　19.殿長遺跡　20.寺戸城跡
21.南垣内遺跡　22.中野遺跡　23.渋川遺跡　24.野田遺跡　25.戌亥遺跡
26.東土川西遺跡　27.石田遺跡　28.森本遺跡　29.山開遺跡　30.岸ノ下遺跡
31.北山古墳　32.元稲荷古墳　33.中ノ段古墳　34.長岡京跡

2．位置と環境

中海道遺跡は、標高90m前後の向日丘陵の東側斜面裾部に、縄文時代から江戸時代に至るまで、断続的に形成された複合的な集落遺跡である。遺跡の広がりは、東西約600m・南北約500mと推定されており、これまでに向日市・京都府・当調査研究センターなどにより発掘調査が実施されてきた。この街路整備工事に伴う調査としては、当調査研究センターによって、これまでに第17次[注2]・第34次[注3]・第42次[注4]の調査が実施されてきている。今回の調査は、第46次調査となる。

これまでのこの遺跡の調査では、各時代にわたっての遺物や遺構が検出されているが、とりわけ弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が数多く検出されている。第1次調査[注5]では、弥生時代後期末頃の一括資料が出土しており、これは乙訓地域の後期の弥生土器編年を補強するものとして注目されている。また、第3次調査[注6]では、竪穴式住居跡から、韓式土器が2点出土しており、当地と大陸との何らかの関連を推察させられる。さらに、平成7年度に(財)向日市埋蔵文化財センターによって実施された第32次調査[注7](今回の調査地点の北東約200m)では、多くの竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などのほか、方形の区画溝を持つ大型掘立柱建物跡が検出された。これは、周辺に所在する前期古墳とも関わって、調査地周辺の集落を束ねる首長の政治的拠点ではないかと推定されており、中海道遺跡は、この時期に、桂川流域、乙訓地域の中で、相当の位置を占める中心的な遺跡であったと考えられる。

この遺跡の周辺には、丘陵斜面の裾部から東側に広がる沖積低地にかけて、西ノ岡遺跡や修理式遺跡などの集落跡が所在している。また、丘陵上には、前期古墳である寺戸大塚古墳、妙見山古墳、五塚原古墳、元稲荷古墳、後期古墳である物集女車塚古墳などが所在しているほか、東山古墳群や南条古墳群など、古墳時代中期から後期の群集墳も見られる。さらに、調査地から北西750mには樫原廃寺跡が所在し、また1kmほど南は長岡京跡となる。なお、中海道遺跡の中央部には、中世の城館であった物集女城跡も所在している。



第13図　第17次・第34次・第42次発掘調査地及びトレンチ配置図(1/2,500)
(数字は、次数及びトレンチ番号を示す。)

3. 調 査 の 概 要

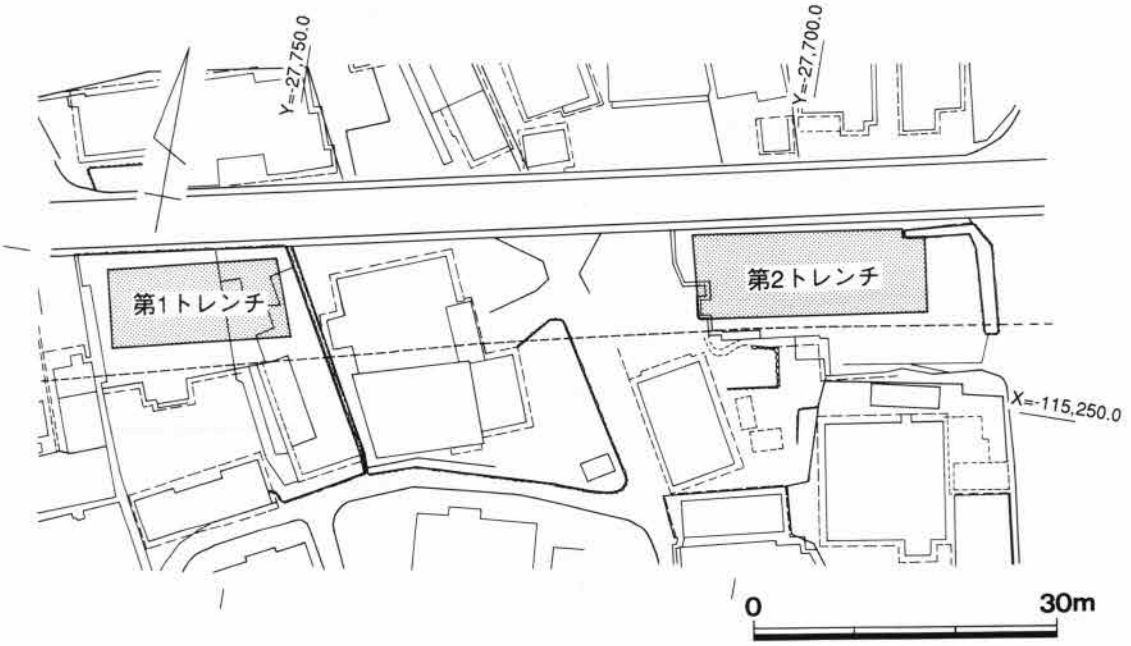
今回の調査では、道路に沿って２か所の地点で発掘調査を実施した。周辺の地形は、西から東にかけて下がる緩斜面となっており、調査地点の調査前の標高は、34.0～31.5mを測る。以下、西側の調査地を第１トレンチ、東側を第２トレンチとして、調査の成果を報告する。また、調査中に第２トレンチの東端で、竪穴式住居跡の一部と考えられる遺構を検出したため、トレンチを東側に1.5mほど拡張し、調査を行った。

(1)第１トレンチ

このトレンチは、平成８(1996)年度に実施された、第42次調査第３区の西側に隣接する地点に位置する。この第42次調査第３区では、後世に遺構面が削平されていたことから、遺構・遺物ともに検出していない。今回の調査でも、ほぼ同様の状況であった。トレンチの北壁下で、壁沿いに、灰黄色の粘質土層を掘り込む溝跡(ＳＤ101)を検出したが、北壁面で確認できる埋土の堆積状況から、この溝は近世のものと考えられる。埋土からは、近世陶器類とともに、須恵器片や、凸面に縄目タタキ、凹面に布目圧痕を残す平瓦片が出土した。

(2)第２トレンチ

トレンチの中央部やや西寄りでは、十数cmの現表土の直下に、暗茶褐色土、淡茶褐色土が確認され、この土層は弥生時代から平安時代にかけての遺物を包含していた。この土層は、壁面での観察によると、土色の濃淡が縞状に互層となっており、二次的な堆積と考えられる。このトレンチより西側の堆積土を用いて、整地、あるいは盛り土をしたものであろう。この下層は黄灰色の砂質土、黄褐色砂礫土となり、遺物を含まない。しかし、この黄灰色砂質土、黄褐色砂礫土の下層には、暗黒灰色の土層が約10～20cmの厚さで、トレンチの一面に広がっている。この土層の上面で、弥生時代の遺構を検出した。さらにこの下層は、小礫を多く含む淡茶褐色土となる。

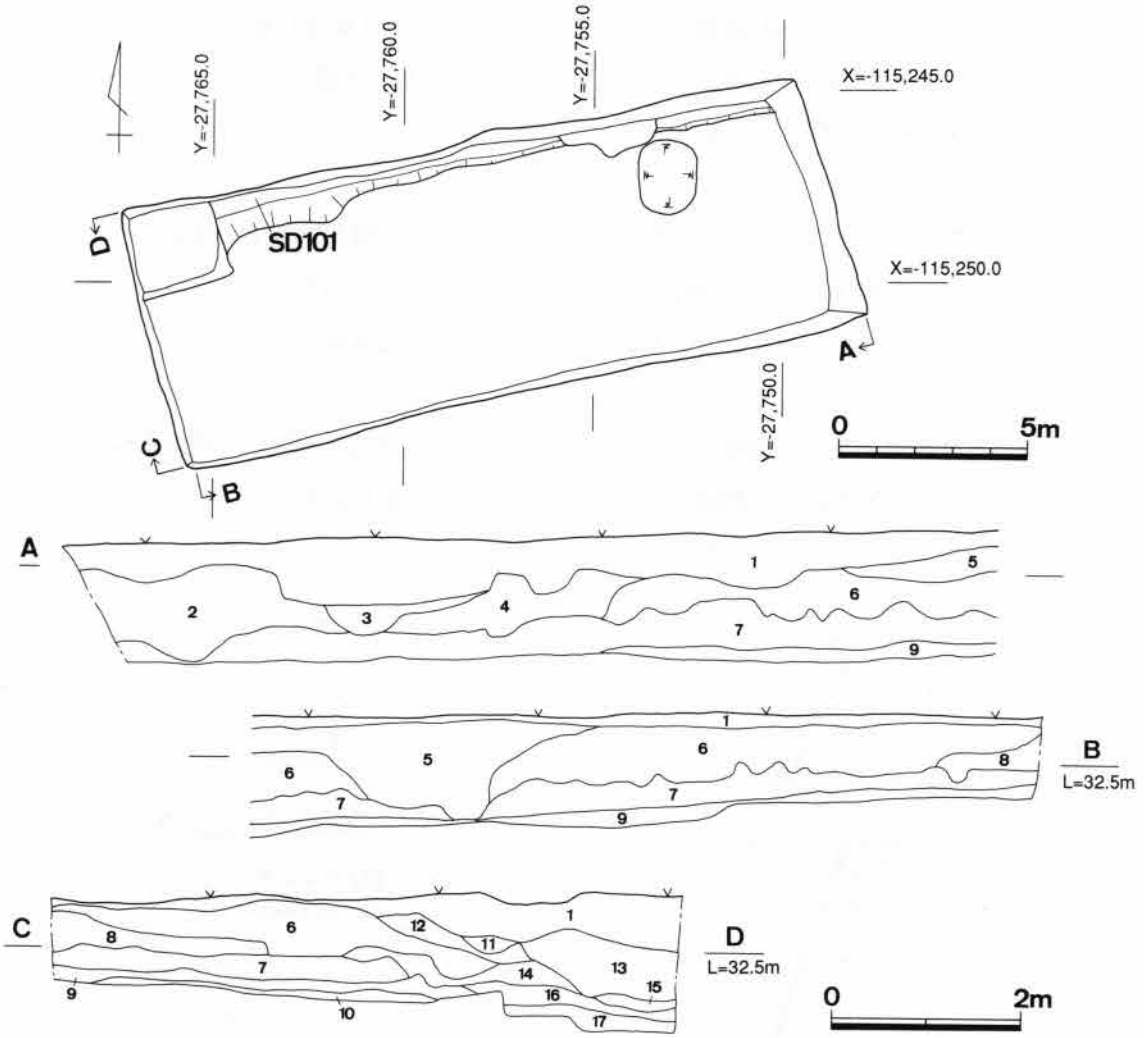


第14図　トレンチ配置図(破線は拡幅予定地境界を示す)　1/750

①検出遺構

P201～P209　いずれも直径30～50cm、検出面からの深さ15～25cmを測る、円形ないし楕円形の小土坑である。埋土からは弥生土器の小片が出土している。P204・P206の埋土には炭が混入していた。また、P209の黒灰色を呈する埋土の西側中央部は、やや粘性のある暗灰褐色土となっており、柱痕跡と推定される。これらは、トレンチの中央より西側で検出したが、これ以外にも西側部分では、いくつかの小土坑を確認した。遺物は出土しなかったが、埋土の状況などから、同様に弥生時代の遺構と考えられる。しかし、それぞれの小土坑に柵列、建物跡などの関連性を認めることができず、その性格は不明である。

SK210　トレンチ東側の南壁下で検出した、深さ5cmほどの浅い、不整形な土坑である。南



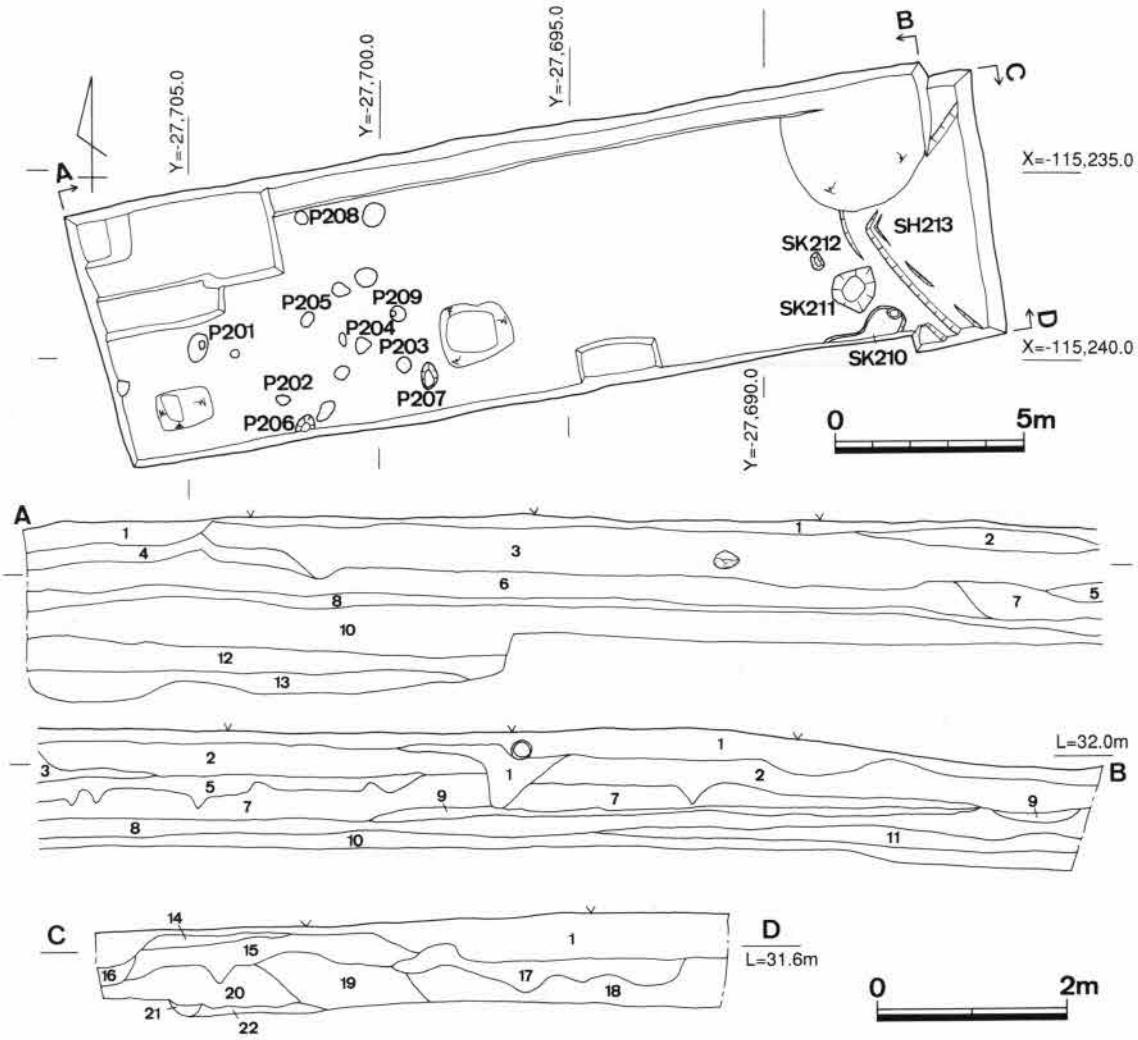
第15図　第1トレンチ平面図及び土層断面図

1.表土・攪乱　2.暗黄茶褐色土　3.淡茶灰褐色土
4.暗茶灰褐色土　5.暗茶褐色土(礫混じり)　6.淡茶褐色土(礫混じり)
7.明黄灰褐色砂質土　8.濁黄茶褐色砂質土　9.暗橙灰褐色土
10.暗灰褐色砂質土　11.明灰褐色土　12.明灰茶褐色土
13.明茶褐色土　14.濁茶褐色土　15.暗黒茶褐色土
16.暗黄灰褐色土　17.明灰黄褐色砂質土

側は調査地外となるため、本来の規模、形は不明である。検出部分は、南壁に沿って東西の長軸約２ｍ、南北の短軸約0.7ｍを測る。さらに、この土坑の東端部は、直径約60cm・深さ約20cmの円形に掘り込まれていた。遺物は出土していない。

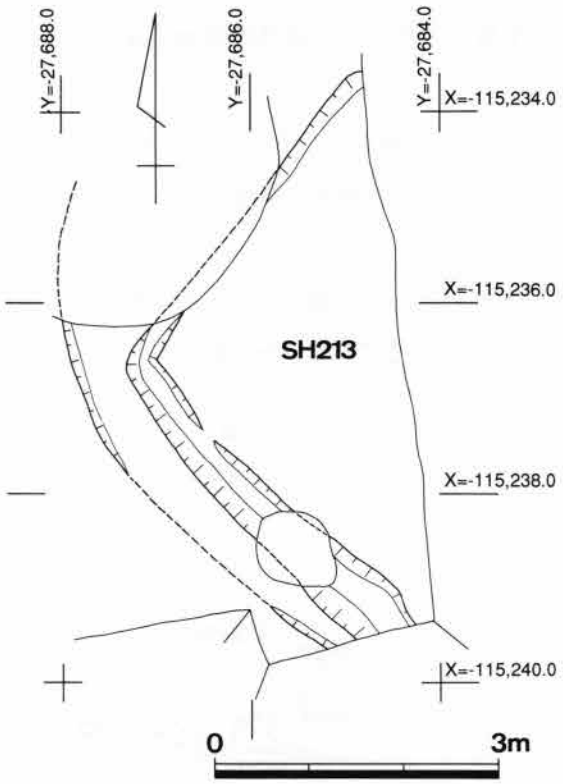
ＳＫ211　トレンチ東側、ＳＫ210の北側に隣接する部分で検出したもので、直径約1.5ｍ、検出面からの深さ約15cmの隅丸の多角形状を呈する土坑である。灰褐色の埋土から、鎌倉時代のものと思われる土師器皿が出土した。

ＳＫ212　ＳＫ211の北側で検出した土坑である。長軸約70cm・短軸約40cm・深さ約20cmを測る。検出時、この土坑の中央部で、長さ約25cm・最大幅約10cm・厚さ約2.5cmの板状で、片方の先端



第16図　第２トレンチ平面図及び土層断面図

1.表土・攪乱　2.淡茶褐色土　3.暗茶褐色土(礫混じり)
4.暗茶灰褐色土　5.暗灰黄褐色土(礫多混じり)　6.明灰黄褐色砂質土
7.淡黄褐色砂質土　8.暗黒灰褐色土　9.暗黄褐色砂土
10.淡茶褐色土(礫多混じり)　11.淡灰褐色砂土　12.暗灰黄褐色土
13.明灰黄褐色粘質土　14.淡灰褐色土　15.淡茶灰褐色土
16.淡茶褐色土(礫混じり)　17.淡茶褐色土　18.暗灰茶褐色土
19.暗灰褐色土　20.黒灰褐色土　21.暗茶褐色土
22.淡灰褐色砂質土



第17図　ＳＨ213平面図(1/80)

が尖っている粘板岩を検出したが、この粘板岩には何らかの人為的な使用の痕跡は見られなかった。また、土坑内の北寄りの最底部で、鉄滓が出土した。これ以外に出土遺物はなく、性格については不明であるが、ＳＫ211と同様の埋土であったことから、同様に中世の遺構と考えられる。

ＳＨ213　トレンチの東端で検出した。一辺４ｍ以上と推定される、方形の竪穴式住居跡である。南西辺で幅25～30cm・深さ約５cmの周壁溝と考えられる溝を一部検出した。暗灰褐色、暗灰茶褐色の埋土で、この埋土を除去すると、下層は灰褐色の砂質土、淡茶褐色礫質土となる。柱穴などは検出しなかった。埋土中から、弥生時代後期末頃のものと推定される土器が出土した。また、この遺構の外側で、大きく円形にめぐるようなわずかな落ち込みを確認しており、ＳＨ213以前に円形の竪穴式住居があった可能性がある。

②出土遺物

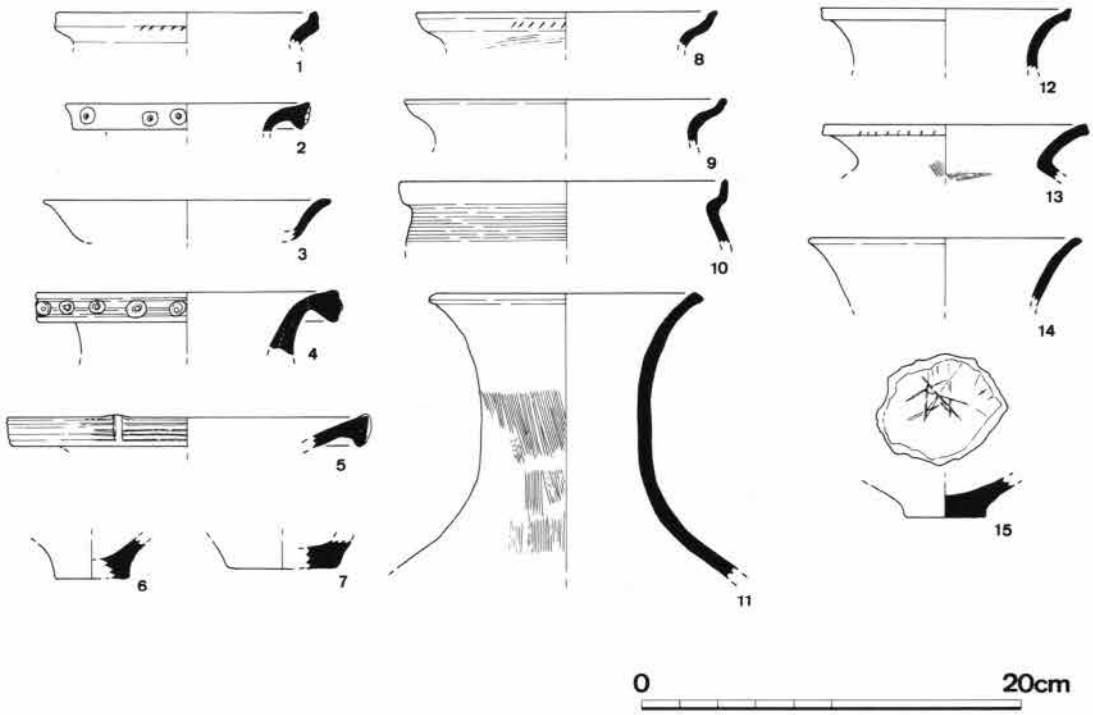
今回の調査では、整理箱２箱分の遺物が出土した。しかし、その多くは細片で、接合もむずかしく、図化しえたのはわずかであった。また、図化したものの、傾きや口径、器種など不確定なものも多い。以下、出土遺物の特徴について、簡単にまとめておきたい。

ＳＨ213出土遺物（１～15）　１・２・４・8～10・12～14は、甕の口縁部であろう。全周を確認できたものは一点もなく、すべて破片から反転復原したものである。１・８・９・10は、いわゆる受け口状口縁の形態を有するものである。このなかで、１・８の屈曲部の外面には、櫛描き列点文が施されている。10は、あるいは鉢かもしれない。きめの細かい淡赤褐色の胎土で、肩部には櫛描き直線文が施される。２・４は、拡張した口縁端部に、竹管文を押圧した円形浮文を貼り付けている。12は、湾曲して外反する口縁部で、端部をわずかにつまみ上げている。13は、端部に小さな面を作り出し、外面との境に刻み目をつけている。14は、ゆるやかに外反し、端部を丸く収めている。３は、ゆるやかに湾曲して外反する口縁部の破片であるが、その下方は内側に屈曲する痕跡が観察できることから、高杯ないし二重口縁を有する壺であろう。淡茶色の色調を呈し、内外面ともナデを施す。５は、器台口縁部である。粘土の貼り付けにより端部を垂下させており、端面には５条の凹線をめぐらした後、縦に１条の突帯を貼り付けている。内面はミガキ、外面にはナデが施されている。11は、円筒状を呈する口縁部である。推定される口径は、13.8cmである。「中海道遺跡出土土器器種構成表」の壺Ｆの分類[注8]の中に含まれるのであろうが、端部は

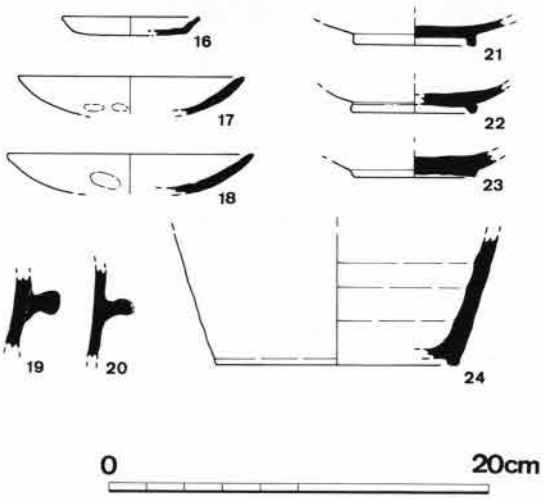
やや強く外反する。内面は磨滅、剥離により調整は不明瞭であるが、外面は縦方向のハケを施した後、口縁端部にはナデ調整を施している。黄褐色を呈する胎土には、長石粒・石英粒などが多く含まれる。6・7・15は、いずれも壺の底部と思われる。6は、淡赤褐色を呈する胎土で、体部から突出する形の底部である。内外面ともにナデの調整を施している。7は、やや大きめの砂粒を含む淡黄褐色の胎土である。平底であるが、体部から突出しない底部である。15は、きめの細かい淡褐色を呈する胎土である。平底で、やや突出する形の底部である。外面はナデてあるが、内面にはミガキの痕跡が観察できる。内底面中央部には、ヘラ状工具によると思われる、長さ5cmほどの線刻が数条刻まれている。

ＳＫ211出土遺物(16)　土師器小皿で、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。推定口径12.8cm・器高1.9cmで、約0.3cmの薄手の器壁である。口縁部は、内外面ともナデ調整である。底部は、指押さえの後にナデ調整を施す。鎌倉時代のものであろう。

その他の遺物(17～24)　いずれも遺構に伴わない遺物である。17・18は、土師器皿である。いずれもゆるやかに内湾しながら立ち上がる口縁で、内外面ともにナデ調整が施される。17は推定口径12.0cm、18は13.0cmである。18は、内底面外周に圏線が認められる。16世紀のものであろう。19・20は、瓦質羽釜の破片である。19の器壁内面にはハケメが見られる。21は、緑釉陶器椀底部で、調査前に調査地の表土上で採集したものである。断面四角形の輪高台を貼り付ける。淡灰褐色の胎土で、内外面全面に透明感のある淡緑色に発色する釉がかけられている。22は、灰釉陶器皿ないし椀の底部である。やや丸みのある輪高台が貼り付けられる。灰白色の胎土で、体部の内外面に釉がかけられている。23は、蛇の目高台を有する緑釉陶器の底部である。黄白色の胎土で、内外面ともに釉の痕跡がわずかに残る。24は須恵器で、壺であろう。推定底径12.8cmである。



第18図　出土遺物実測図(1)



第19図　出土遺物実測図(2)

4.　ま と め

最後に今回の調査よって得られた成果について、簡単に整理しておきたい。

まず、第42次調査の成果ともあわせると、道路に沿って第１トレンチの西方では、中世以前の遺構面は削平されていることが確認できる。しかし、この削平によって得られた土を利用して、第２トレンチ周辺を整地、盛り土した可能性が考えられる。

今回の調査では、両トレンチともに平安時代から中世にかけての遺構は検出されなかったが、瓦や施釉陶器などが出土している。このことは、第17次調査や第42次調査でも想定されている、近接地に瓦を持つ建物・施設が存在した可能性をあらためて裏付けるものといえよう。

また、ＳＨ213の検出により、これまでの周辺での調査で明らかにされてきた、弥生時代後期末の集落の存在をあらためて確認することができた。さらに、出土遺物の中には受け口状口縁を持つものが比較的多くあり、これまでの指摘にあるように、中海道遺跡では、近江・東海系と言われている土器の比率が高いという性格を補強することとなった。

（竹下士郎）

注１　山田恵子、中村美也、尾上　忍、西川真介、荻野冨紗子、西村美智子、安田裕貴子

注２　中川和哉「中海道遺跡第17次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第39冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1990

注３　奈良康正「中海道遺跡第34次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第70冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996

注４　田代　弘「中海道遺跡第42次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第77冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1997

注５　金村充人・高橋美久二・森　毅「中海道遺跡発掘調査報告書」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第３集　向日市教育委員会・長岡京発掘調査研究所）　1979

注６　國下多美樹・中塚　良「中海道遺跡(第２・３・４・６次)発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集　向日市教育委員会）　1984

注７　梅本康広「中海道遺跡第32次発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第44集　(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会）　1997

注８　前掲注６の付表－22

３．椋ノ木遺跡平成７・８年度発掘調査概要

１．はじめに

この調査は、木津川上流浄化センターの建設に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。浄化センターの敷地は約10万㎡に及び、椋ノ木遺跡の大半がこの敷地に含まれる。調査は、工事計画にしたがって各施設の建設予定地点に、順次トレンチを設定して行った。トレンチ名は、第１ポンプ場を１トレンチ、管理棟を２トレンチ、電気棟を３トレンチ、水処理施設を４トレンチ、汚泥脱水機棟を５トレンチとした。

調査は、平成７年度から平成９年度の３年次にわたるが、今回報告するのは平成７年度、平成８年度の調査の概要である。調査に要した経費は京都府が負担した。

平成７年度の調査地点は、敷地の南西部に計画された第１ポンプ場及び管理棟部分である。第１ポンプ場は、試掘調査の結果、顕著な遺構が検出されたため建屋部分の全面を調査し、管理棟部分は北辺に沿って幅５ｍの試掘調査を行った。調査期間は平成７年11月21日から平成８年２月27日まで、調査面積は約1,200㎡である。

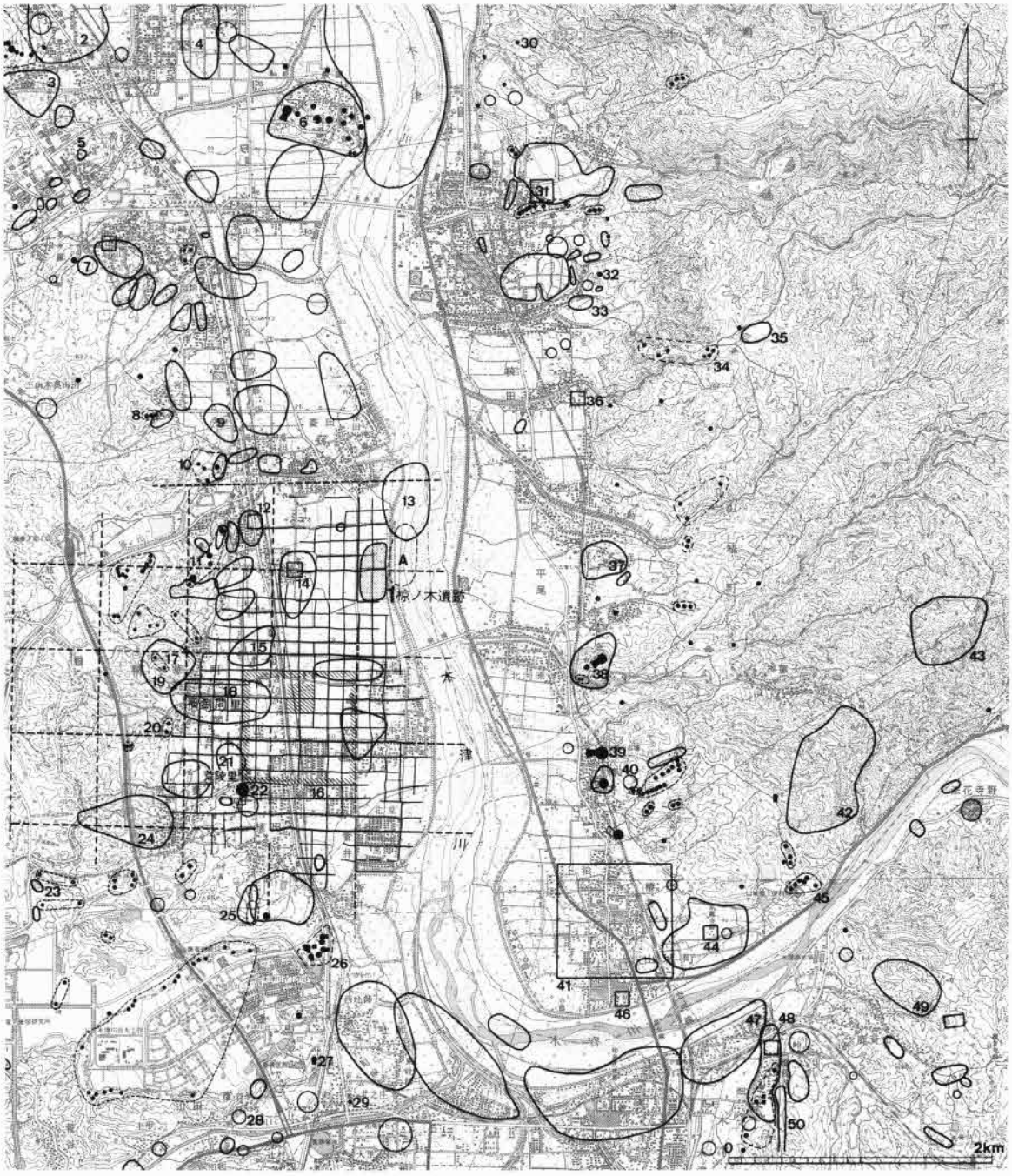
平成８年度の調査地点は、当初は、電気棟、水処理施設、第２ポンプ場であったが、７年度に調査を行った１トレンチ周辺に第１ポンプ場建設のための工事用道路が掘削されることが判明したため、急遽１トレンチの東と南に隣接する部分の調査を行った。電気棟部分は試掘調査を行った。水処理施設は、５か所の試掘調査の結果、遺構が顕著に検出された４－３トレンチを拡張して調査を行った。

また、第２ポンプ場の調査地点は汚泥脱水機棟の地点に振り替えることになり、試掘調査の結果、顕著な遺構の検出された部分を拡張して調査を行った。このほか、７年度に試掘調査を行った管理棟部分の発掘調査も行った。調査期間は平成８年５月28日から平成９年２月27日まで、調査面積は約4,700㎡である。

（森島康雄）

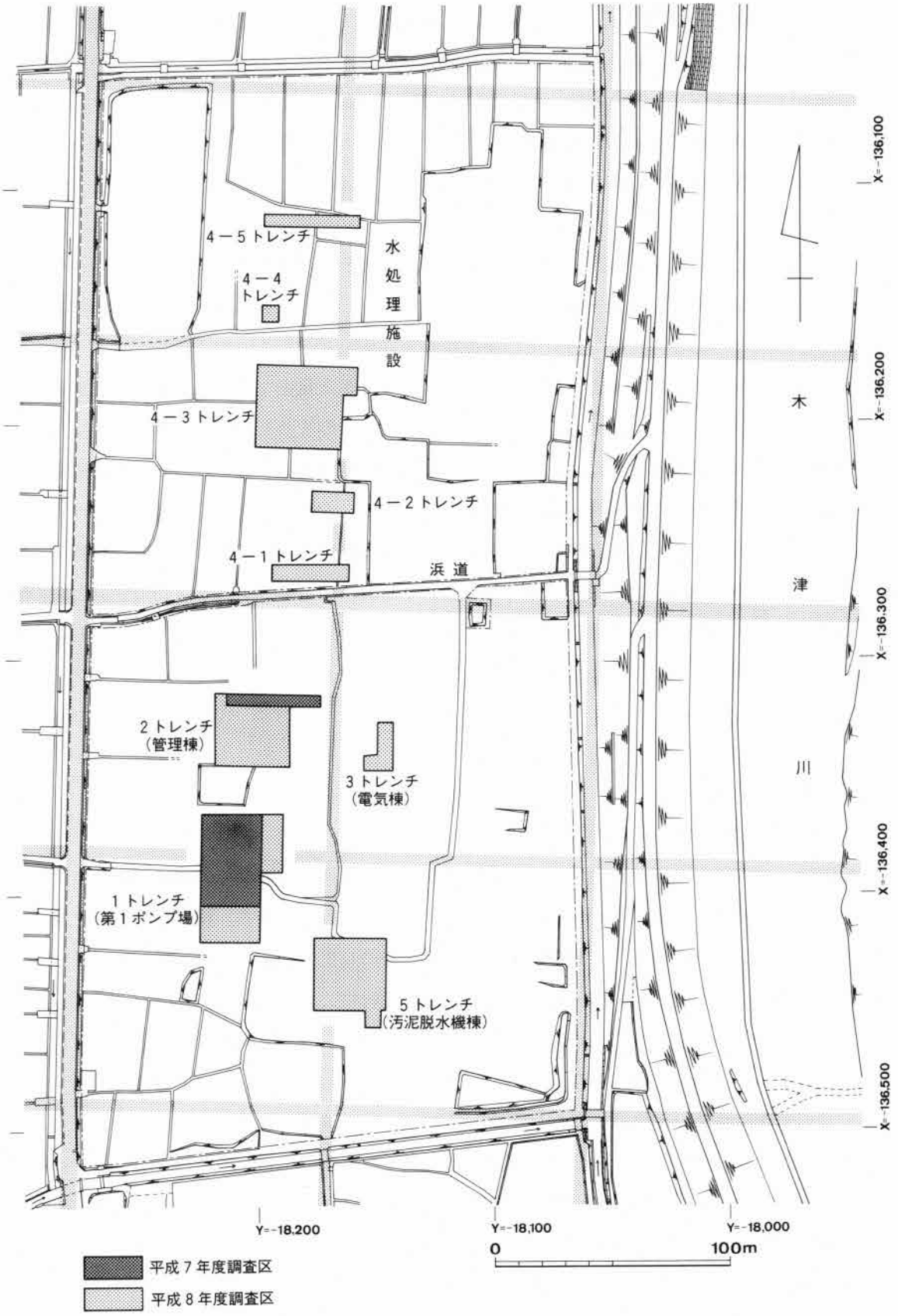
２．位置と環境

椋ノ木遺跡は、木津川左岸の堤防に隣接する微高地上に立地する。調査地は、調査着手直前は雑草の生い茂る荒れ地となっていた。しかし、浄化センター建設のための用地買収が行われるまでは、西半部は水田、東半部は畑であった。精華町域は、東端を北に流れる木津川左岸の沖積平野が低く、西の丘陵に向かって高くなる地勢を示すが、調査地は自然堤防上に立地しているため、木津川左岸堤防を除けば、調査地東半部の畑が調査地付近で最も標高が高く、調査地西半部の水田も、調査地西側の氾濫平野に展開する水田に比べれば標高が高い。



第20図　調査地位置図(周辺遺跡配置図)　1/50,000

1. 椋ノ木遺跡
2. 興戸遺跡(興戸廃寺)
3. 興戸宮ノ前遺跡
4. 草内城跡
5. 田辺天神山遺跡
6. 飯岡遺跡・飯岡古墳群
7. 口駒ヶ谷遺跡
8. 宮ノ口古墳群
9. 宮ノ口遺跡
10. 平谷古墳群
11. 鞍岡山古墳群
12. 下狛廃寺
13. 百久保地先遺跡
14. 里廃寺
15. 柿添遺跡
16. 山城国府推定地(奥田裕之案)
17. 城山古墳群
18. 北稲遺跡
19. 城山遺跡(北大城跡)
20. 国名平古墳群
21. 北尻遺跡
22. 丸山古墳
23. 煤谷川窯跡
24. 稲八妻城跡
25. 畑ノ前遺跡(畑ノ前古墳群)
26. 吐師七ツ塚古墳群
27. 白山古墳
28. 樋ノ口遺跡
29. 藤原百川墓伝承地
30. 平山古墳
31. 井手寺跡
32. 南大塚古墳
33. 鳥休遺跡
34. 車谷古墳群
35. 光明山寺跡
36. 蟹満寺
37. 涌出宮遺跡
38. 平尾城山古墳
39. 椿井大塚山古墳
40. 松尾神社(松尾廃寺)
41. 山城国府推定地(木下　良案)
42. 高之林城跡
43. 鳶城跡
44. 高麗寺跡
45. 千両岩古墳群
46. 泉橋寺
47. 上津遺跡
48. 燈籠寺廃寺
49. 鹿背山城跡
50. 釜ヶ谷遺跡



第21図　トレンチ配置図(1/2,500)

遺跡の周辺には一辺約109mの方格地割りが認められ、相楽郡条里の残存遺構と考えられている。遺跡は、相楽郡条里の北東端付近に位置し、遺跡の中央部を東西に横切る通称浜道を境に里が異なる。相楽郡五条は、椋ノ木遺跡付近では東側４町分が木津川の河川敷に入っているが、これは、現在よりも東側にあった木津川が、現在の流路に移動したためと考えられる。木津川の旧流路が現在の山城町域にあったことは木津川右岸の畦畔が大きく乱れていることから明らかである。木津川が現在の流路に固定されたのは寛永10(1633)年から11(1634)年ごろに完成した国役堤以降である。

周辺の遺跡としては、遺跡の西方には、里集落一帯に広がる里遺跡と、里集落内に所在する里廃寺がある。里遺跡では土師器・須恵器などが散布するが、発掘調査は行われておらず詳細は不明である。里廃寺(第20図14)は、1987年の発掘調査で寺域の北を限ると考えられる溝が発見され、方一町の寺域が推定された。出土した瓦には川原寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦からなる７世紀後半の組み合わせと、恭仁宮ＫＭ14型式の軒丸瓦と平城宮6721Ｃ型式の軒平瓦からなる８世紀中葉の組み合わせがある。遺跡の北方には、石ヶ町遺跡と百久保地先遺跡がある。石ヶ町遺跡は散布地で、詳細は不明である。百久保地先遺跡(第20図13)は、椋ノ木遺跡と同じく自然堤防上に立地する遺跡である。1980年に発掘調査が行われ、中世の惣墓が検出されたほか、弥生時代前期の土器が出土した。遺跡の南方には土師器・須恵器の散布する西垣内遺跡がある。このほか、遺跡の東側の木津川左岸河川敷には、中世の土器がまとまって採集されるところ(第20図Ａ)があり、中世前期の遺跡が存在するものと考えられる。

(森島康雄)

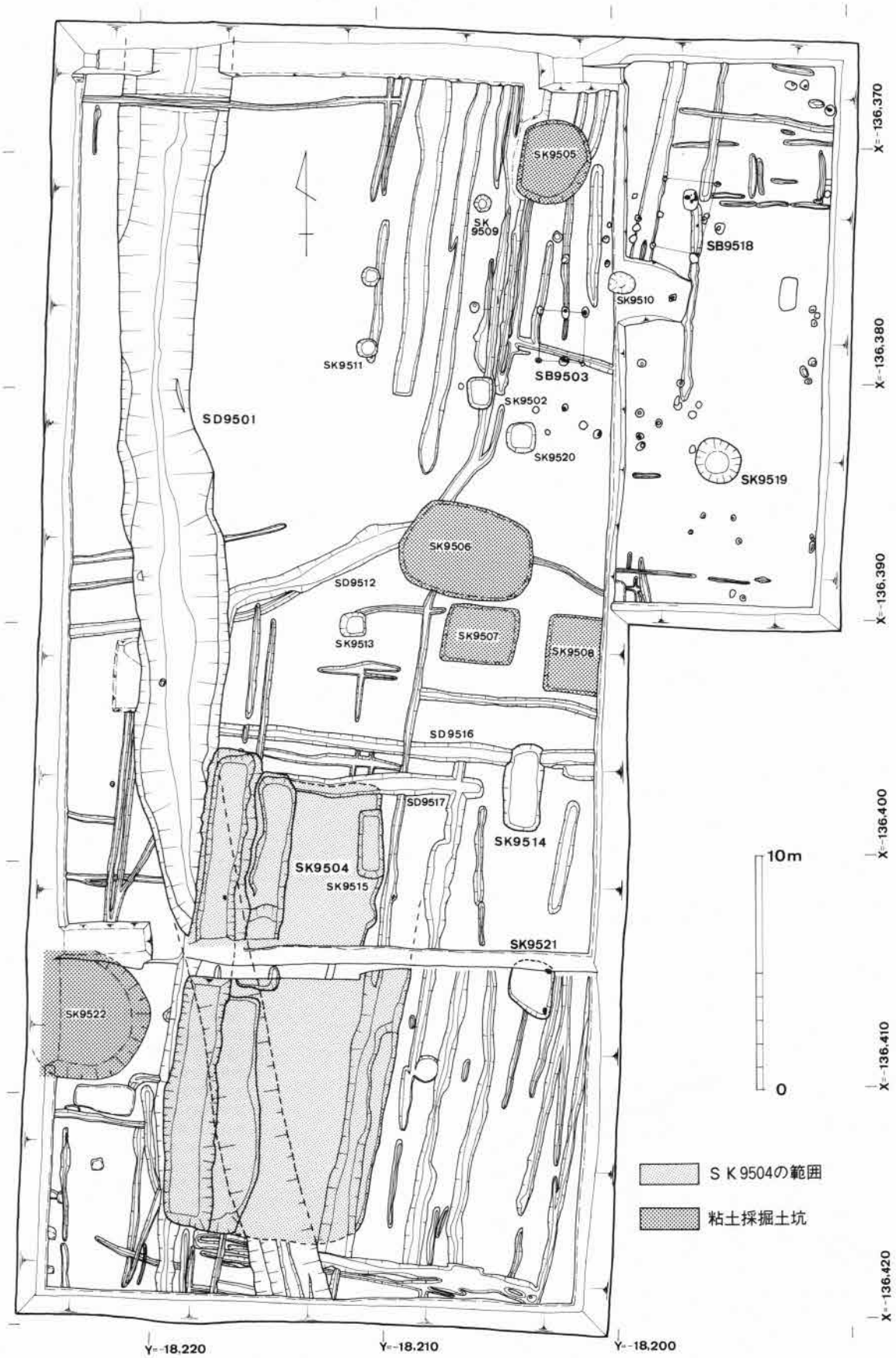
３．　検　出　遺　構

(1) １トレンチ(第22図)

ＳＤ9501　調査区の西寄りを南北に走るやや規模の大きな溝である。その軸線は、北半はほぼ正南北方位に載るが、南半はわずかに「く」字形に屈曲して東方に振る。検出長は54mを測るが、両端はさらに調査区外にのびる。調査区内ではほぼ一定の規模・形状を保ち、幅3.0～4.0m・深さ約0.8mを測る。横断面形は、基本的には底部の狭い逆台形、あるいは浅い「Ｖ」字形を呈し、後述する２トレンチのＳＤ173と同様に、中心寄りが一段深く掘り込まれて二段構造を呈するところもある。出土遺物は全体に少ないが、弥生土器の小片や石庖丁など古手の遺物が目立つ。ただ、中世の遺物も確実に溝内最下層から出土しており、前者は混入とみられる。

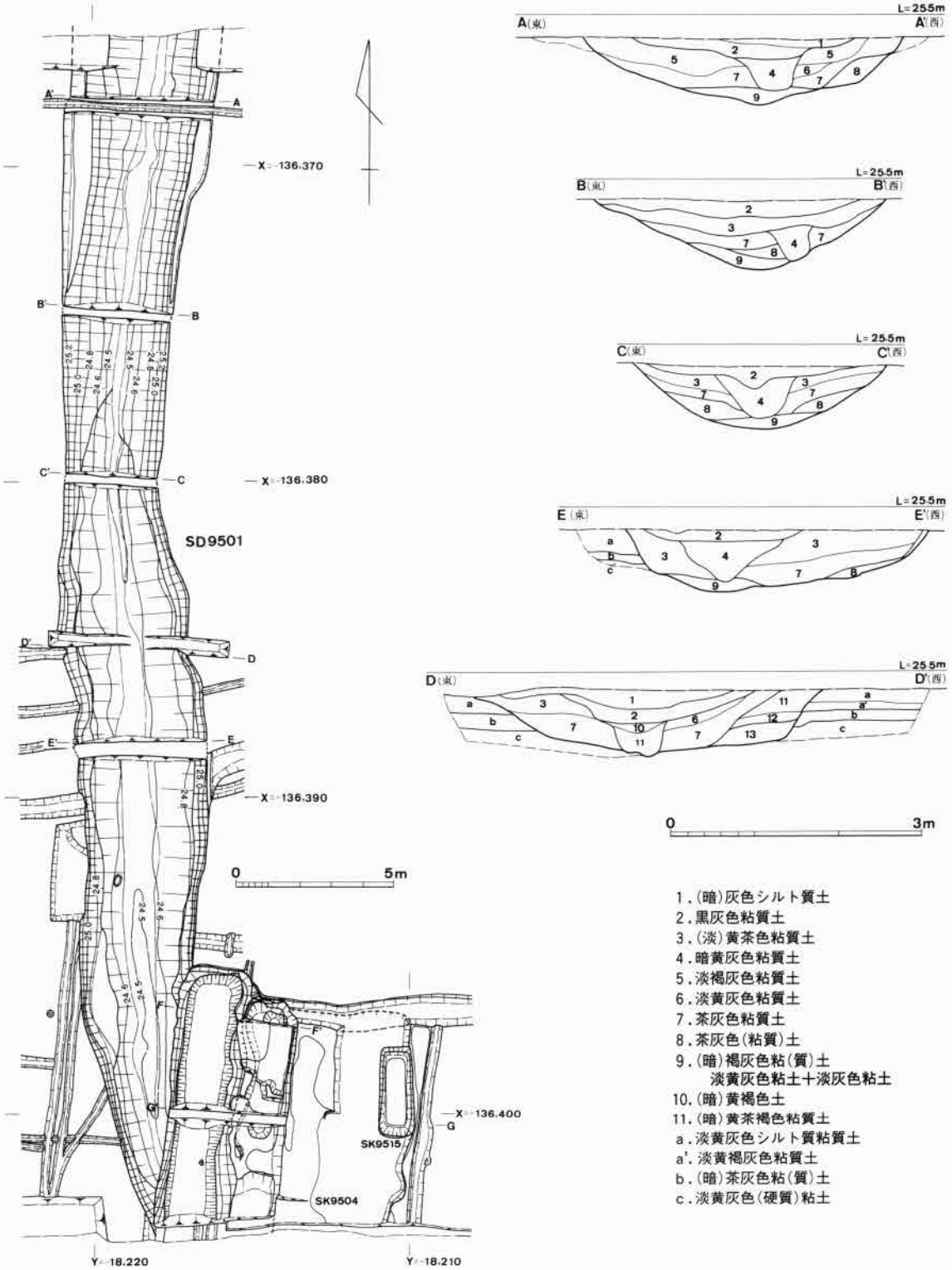
ＳＫ9502(第24図)　長辺約1.5m・短辺約1.1mを測る南北にやや長い隅丸長方形を呈する土坑である。横断面形は、平坦な底面をもち、四壁の立ち上がりが急な台形で、深さは検出面から0.7m残存する。底から５cmばかり浮いた位置で、底部を打ち欠いた須恵器片口鉢と大小の木製円盤、拳大の自然石が出土した。遺骸は遺存していなかったが、13世紀後半の墓の可能性がある。

ＳＢ9503・9518　調査区のほぼ全域にわたって小規模な掘立柱柱穴を確認したが、その分布域には偏りがあり、ＳＤ9501に接する東側の約10mを測る帯状部には柱穴は極端に少ない傾向があ



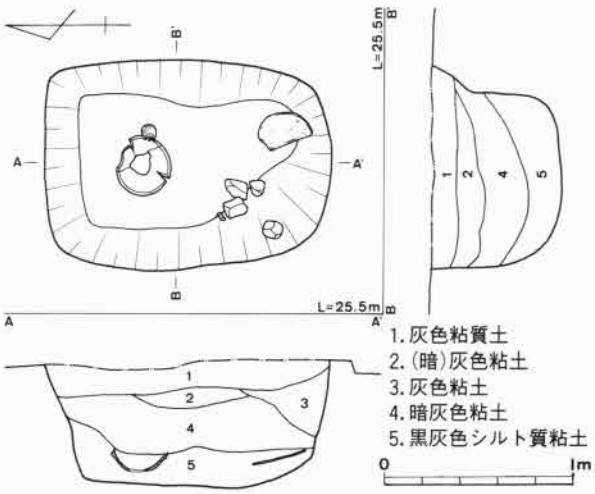
第22図　１トレンチ遺構平面図(1/250)

る。反面、ＳＫ9502の東側一帯には直径0.2～0.4ｍの円形掘形をもつ柱穴が密集する。柱当たりは径５cm前後で、偏平な川原石による礎盤を有するものもある。これらの柱穴群から２棟の小規模な建物を復原した。ＳＢ9503は、桁行２間(1.9ｍ)×梁間１間(2.1ｍ)の東西棟。ＳＢ9518は、桁行２間(2.9～3.1ｍ)×梁間１間(2.0～2.3ｍ)の南北棟である。柱穴内からの出土遺物はほとん



第23図　１トレンチＳＤ9501平面図(1/200)・断面図(1/75)

どないが、遺構面直上を覆う灰色粘土層に含まれる遺物から検討すると、中世前期を下らない時期のものであろう。



第24図　１トレンチＳＫ9502平面図・断面図(1/40)

ＳＫ9504　調査区の南寄りで検出した南北に長い長方形プラン(長辺約20m・短辺約9.5m)を呈する規模の大きな土坑である。ＳＤ9501を切ってより新しい。底部は起伏に富んでおり、西方に向かって段状に深くなる。とくに西辺に沿う東西幅約2.0mの部分は、南北に長い溝状に深く掘り込まれている(検出面からの深さ約1.5m)。その深掘り部の断面は、平坦な底部から壁が急角度で立ち上がる箱形を呈している。深掘り部分の底付近から完形の白磁皿・瓦器椀を始めとした土器類、一木平鋤・短冊形の木片・曲物などの木器、人頭大の自然石(川原石)がややまとまって出土した。13世紀後半の遺構と考えられるが、その性格はよくわからない。

ＳＫ9509　径約0.7m・深さ約0.3mを測る円形プラン、「U」字形断面の土坑である。

ＳＫ9510　径約1.3mの平面円形を呈する土坑である。断面形は下位ほど傾斜の急な漏斗状を示し、土坑底に径約0.5mの平坦面を設ける。検出面からの深さは約1.0mあり、素掘り井戸の可能性がある。

ＳＫ9513　一辺約1.0mを測る隅丸方形プランの土坑である。断面は逆台形を示し(深さ約0.5m)、坑底のほぼ中央で完形の瓦器椀１点(第52図21)が正立した状態で出土した。

ＳＫ9515　ＳＫ9504の東辺に接する位置で検出された南北方向に長軸をもつ長方形プランを呈する土坑である(長軸長約2.9m・短軸長約1.0m)。断面形は、平坦な底から四壁が直線的に立ち上がる逆台形を呈する(検出面からの深さは約0.5mを測る)。この土坑の埋土上面をＳＫ9504埋土が覆っているのでＳＫ9504より古い。13世紀中葉頃の土器が若干出土した(第52図23)。

ＳＫ9514　ＳＫ9515の東方約5.0mに位置し、ひとまわり規模が大きいが、平面・断面とも9515と類似した形状を示す土坑である(南北長約3.6m・東西長約1.6m・深さ約0.4m)。土坑内の埋土は、レンズ状堆積を示し自然に埋没したとみられる。遺物は、13世紀の瓦器片が少量埋土中から出土したのみである。

ＳＫ9519　直径2.0mを測る正円プランの土坑である。断面は、径約1.0mの平坦な底面から側壁が内湾気味に外上方に立ち上がる形状を示す(深さ約0.75m)。埋土中に13世紀後半の土師皿が数点混入する(第52図24・26～28・30)。素掘り構造の井戸の可能性がある。

ＳＫ9521　北側が拡張前のトレンチの排水溝で切られて全景をうかがうことはできないが、東辺が長い矩形プランを呈する土坑である(東西長約2.0m)。断面は、広い平坦な底部をもつ逆台形(深さ約0.5m)を呈する。土坑底に貼り付くように完形の瓦器椀(第52図19)が正立した状態で、

第25図　2トレンチ遺構平面図(1/200)

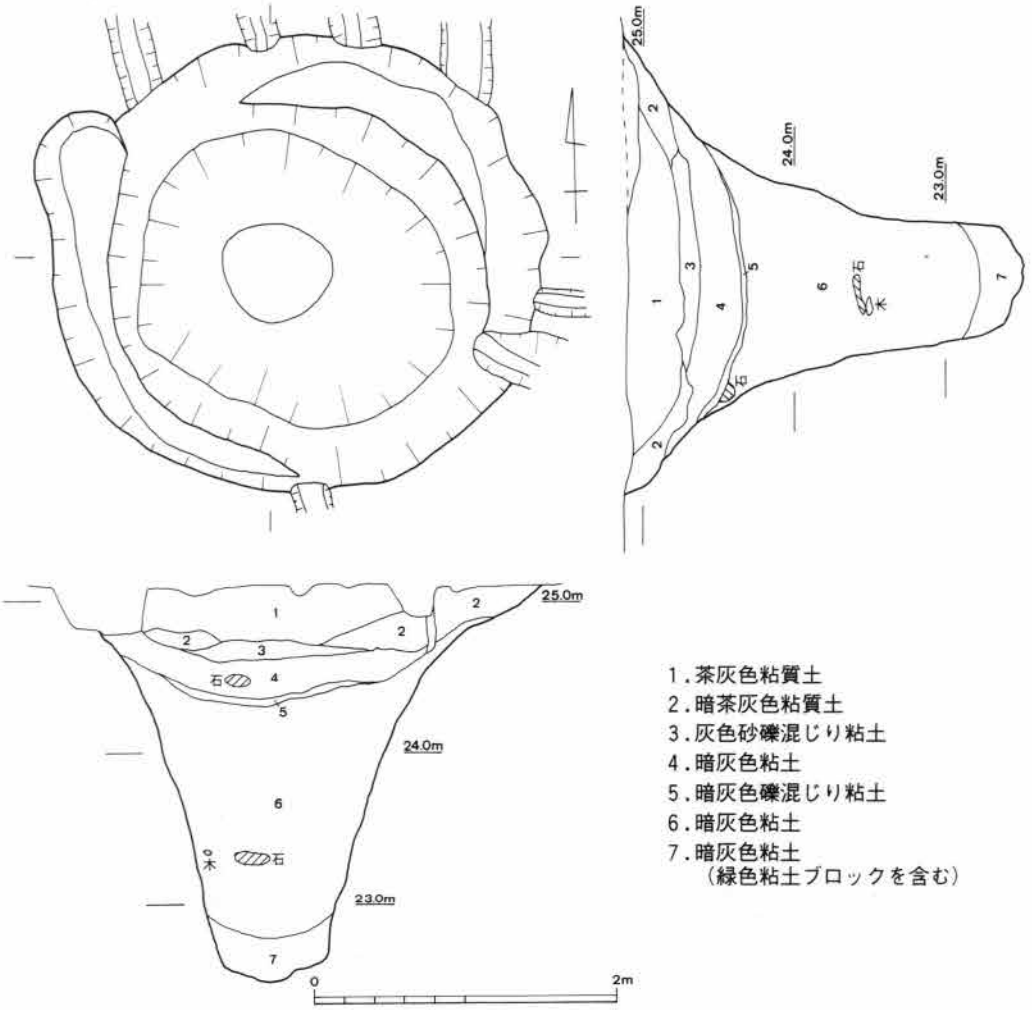
長径約20cmの自然石数個とともに出土した。

その他の遺構　調査区の全域で小規模な素掘り溝(小溝)多数と、円形もしくは方形を呈する規模の大きな土坑(粗いスクリーンで指示したもの)５基を検出した。いずれも上記の遺構に後出する。素掘り溝の多くは、平行多条に走り、当調査区内では南北方向が優勢である。いわゆる耕作溝(鋤溝)であるが、比較的規模の大きなもの(ＳＫ9512・9516・9517)は、土地の境界を示したものであろう。後者の土坑は、直径(一辺)2.5～6.0mを測り、その掘削面は現在の耕作土直下にある。底部は、中世の遺構面をさらに越えて黄色系の非常に硬い粘土層を深く掘り込んでいる(深さ2.5～3.0m以上)。粘土採取を目的とした近年の遺構とみられる。

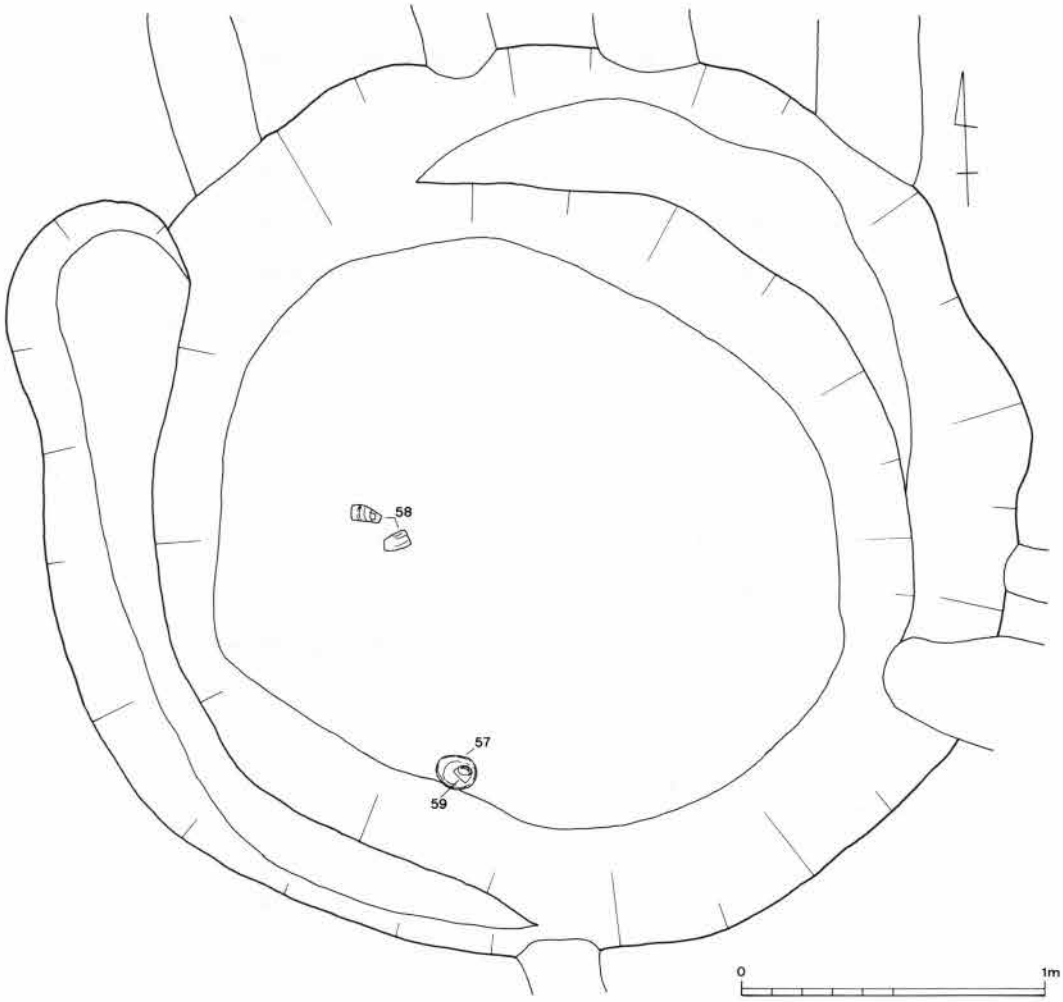
(伊賀高弘)

(2) ２トレンチ(第25図)

ＳＥ174(第26・27図)　直径約３mの円形の井戸である。深さは約2.65mを測る。灰黄色砂層に達している。埋土は、第５層暗灰色礫混じり粘土を境に上層と下層に分かれる。上層からは、瓦器椀・瓦器皿・白磁椀・土師器羽釜・亀山窯須恵器甕・十瓶山窯須恵器甕などが出土した。上層の出土遺物の大半は４層から出土した。下層からは、土師器皿・土師器台付皿・瓦器椀・白磁



第26図　２トレンチＳＥ174平面図・断面図(1/50)

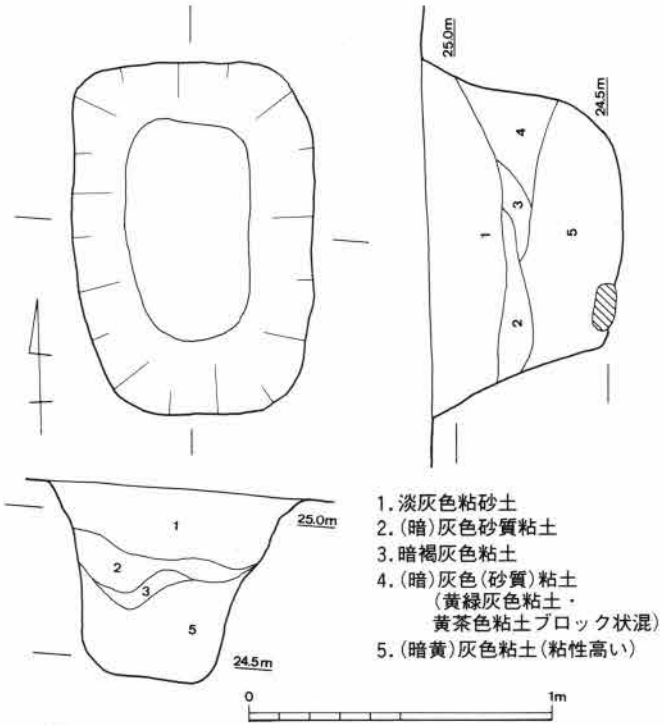


第27図　２トレンチＳＥ174上層遺物出土状況図(1/25)

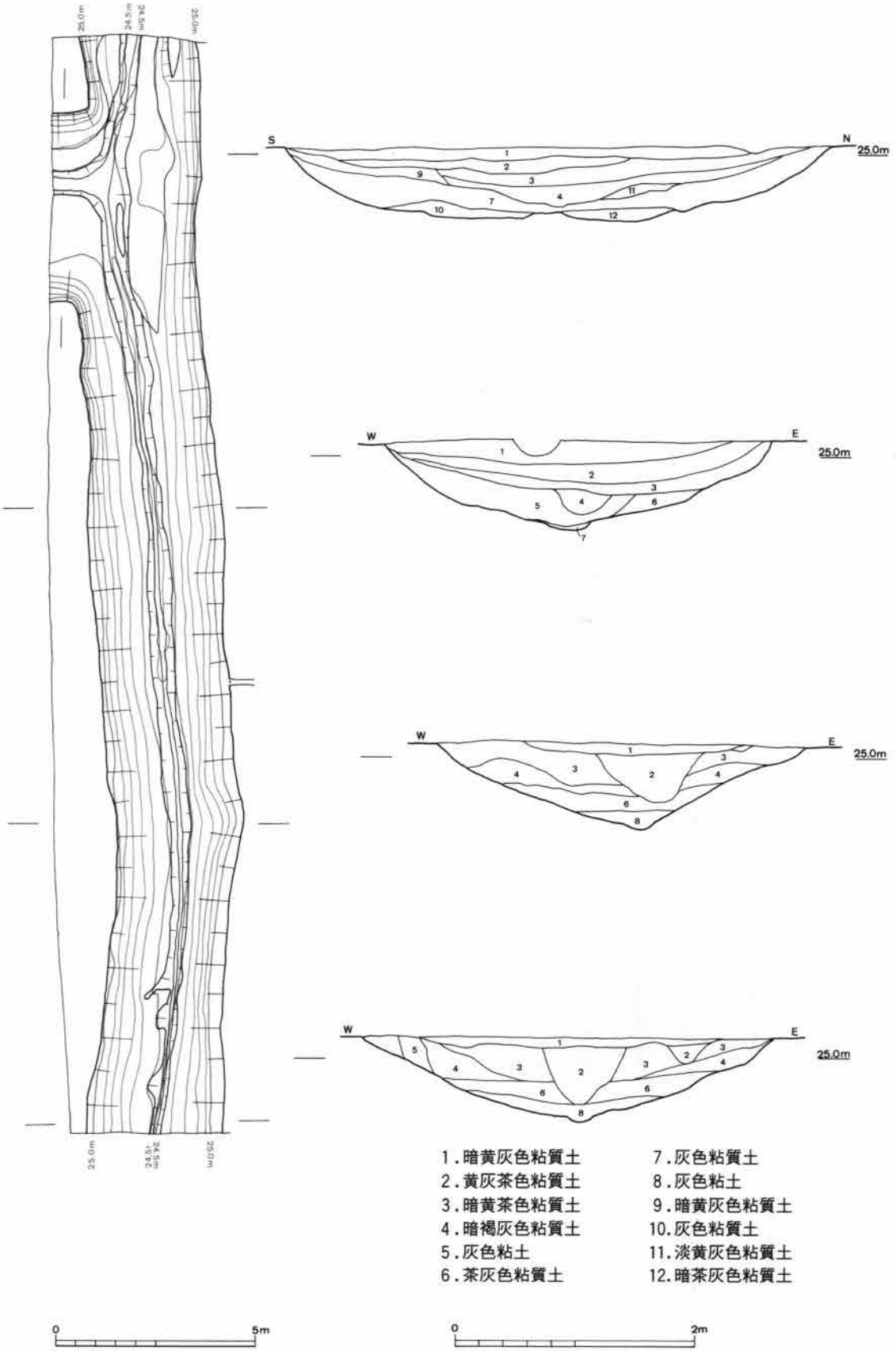
椀・白磁皿・鉄短刀などが出土した。

ＳＫ171(第28図)　長辺約1.15m・短辺約0.80mを測る長方形の土坑である。深さは約0.65mを測る。底面に接して石が１個置かれていた。出土遺物は瓦器椀や土師器皿などの小片のみであるが、12世紀の内におさまるものと見られる。遺構の性格は不明であるが、形状からみて、墓の可能性が考えられる。

ＳＤ173(第29図)　調査区西端を南北に貫く、幅３～3.5mの溝



第28図　２トレンチＳＫ171平面図・断面図(1/25)



第29図　２トレンチＳＤ173平面図(1/150)・断面図(1/50)

である。北端部付近で幅約4.6mの溝が西に直角に分岐する。1トレンチで検出した溝ＳＤ9501の延長上で検出されたこと、浅い「Ｖ」字形で中心部が一段深くなる断面形や、埋土が共通することから考えて、同一の溝であると判断される。

その他の遺構　2トレンチでは小溝が多数検出されたが、これらは大きく2つのグループに分けることができる。

まず、調査区中央部では、ゆるやかに湾曲しながら調査区を南北に貫く小溝が数条検出された。この小溝より東部では、東西方向もしくは南北方向の小溝が目立つが、調査区中央部を南北に貫く小溝に規制されているものが多く、耕作に関連するほぼ同時期の溝群としてまとめることができる。これらの小溝から出土する遺物は少なく、時期決定は困難であるが、13世紀頃と考えられる。

一方、調査区北西部では、約3.3～3.5mのほぼ等間隔で平行する南北小溝が4条と、これらの南端に接する東西小溝が1条検出された。これらは、前述の小溝群とは異なるまとまりとして把握できる。時期は13世紀以後と考えられるが、ＳＤ173などを切っていることから、前述の小溝群よりは新しいと考えられる。

これらのほか、一辺3.5～5m程度の方形の大きな土坑が4基検出された。これらは、現代の耕作土直下から掘り込まれており、1トレンチで検出されたのと同様の遺構と考えられる。

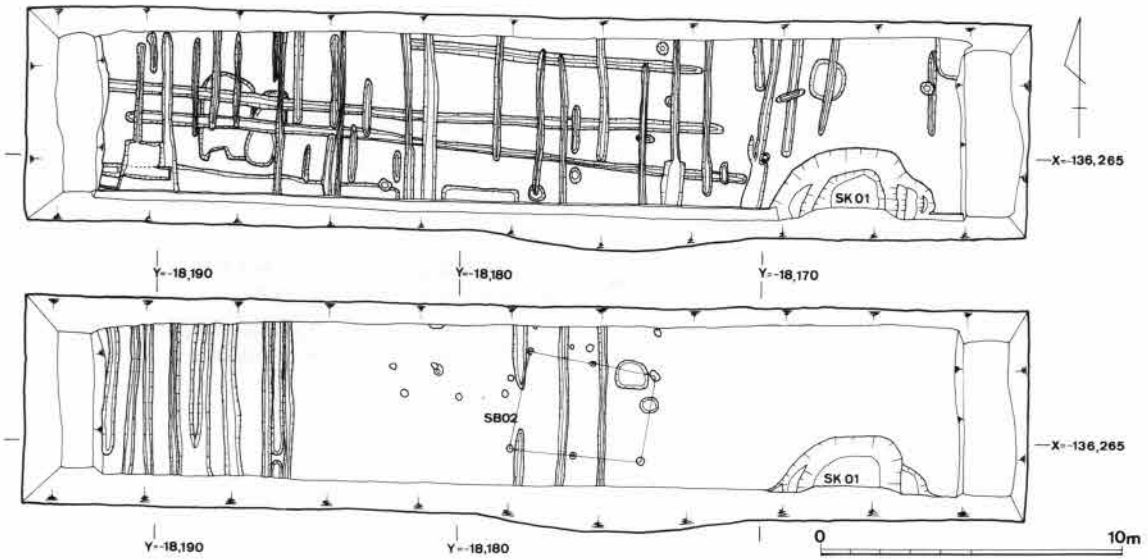
(3) 3トレンチ

「Ｌ」字形のトレンチを設定し、耕作に伴うと考えられる小溝群やピットなどを検出した。平成9年度に拡張して調査が行われることになっているので、詳細は来年度に報告する。

（森島康雄）

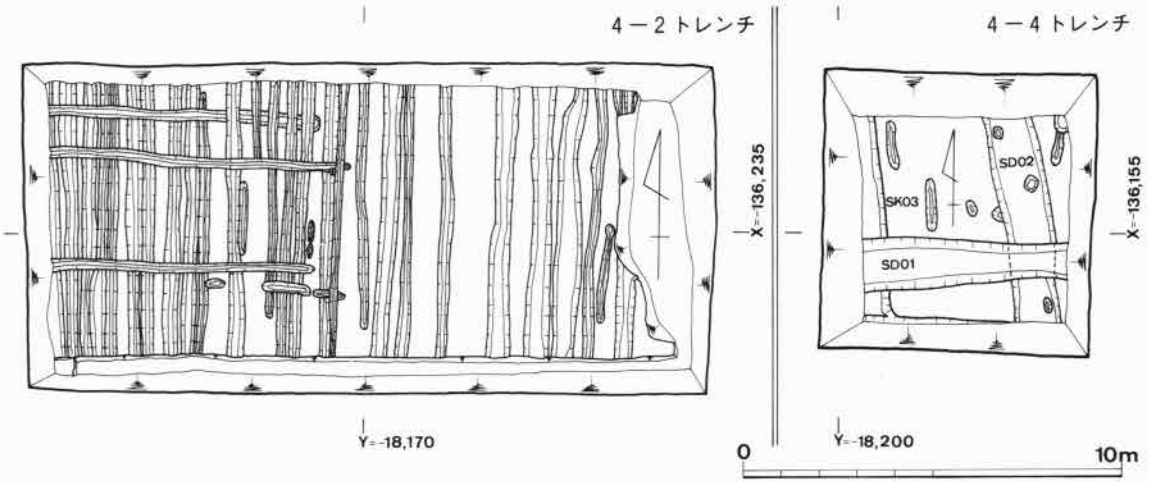
(4) 4－1トレンチ(第30図)

水処理施設については、敷地が広大なため、南北方向にほぼ等間隔に試掘トレンチを配して遺構の密度の確認に当たった。トレンチ名については、南から順に1→2と枝番号を付した。

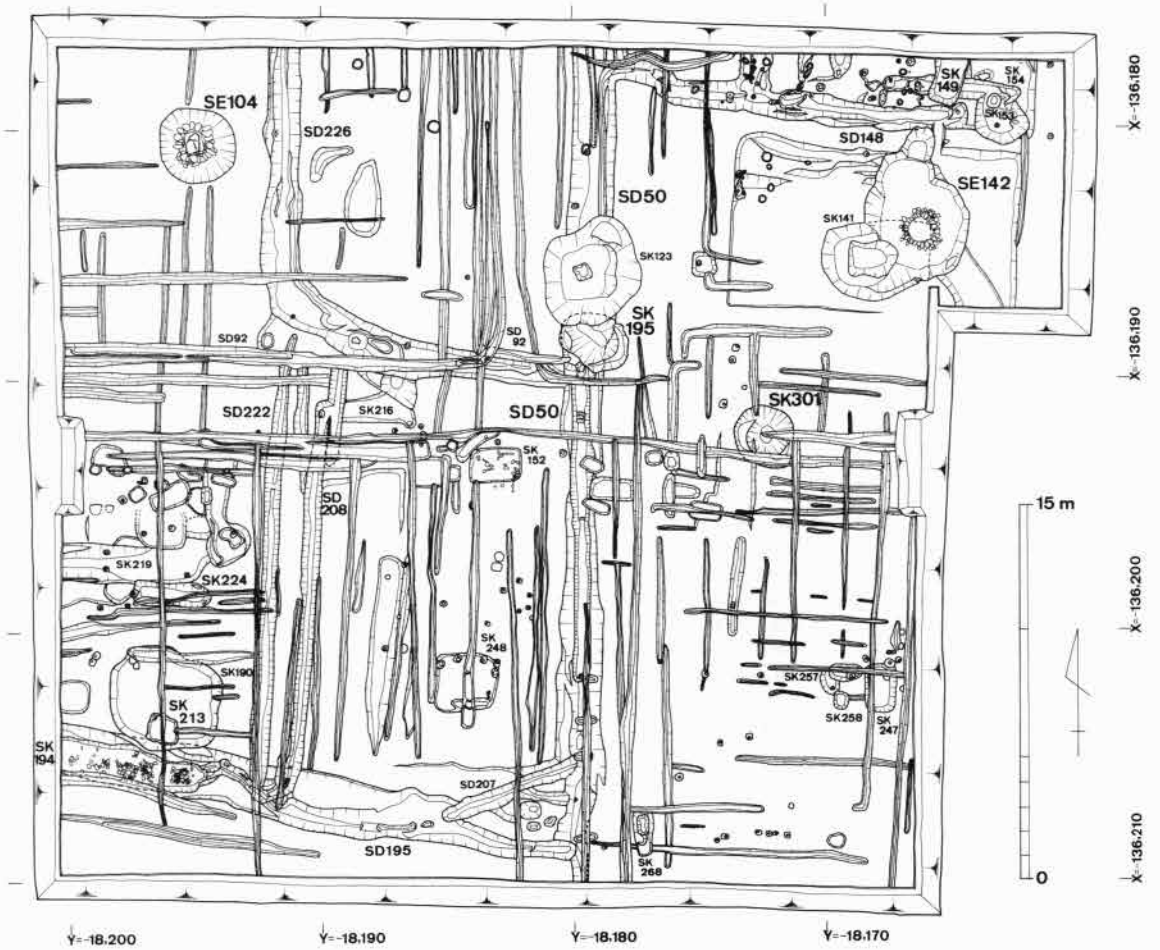


第30図　4－1トレンチ遺構平面図(1/250)

南端の４－１トレンチでは、標高約25.0mと約24.8mの２面で遺構検出を試みた。第１面では、南北方向に直交する小溝多数と、東寄りで近年の粘土採掘土坑（ＳＫ01）を検出した。小溝（鋤溝）は、南北方向のものが東西のそれを切っている。下位の第２面では、南北方向の鋤溝が調査区の西方に偏り、中央部では径0.15～0.4mの円形プランの掘立柱柱穴が点在するかたちで検出された。柱穴は、深いもので約0.5mを測り、径約10cmの柱当たり、もしくは腐朽していない柱根を



第31図　４－２トレンチ・４－４トレンチ遺構平面図(1/200)



第32図　４－３トレンチ遺構平面図(1/300)

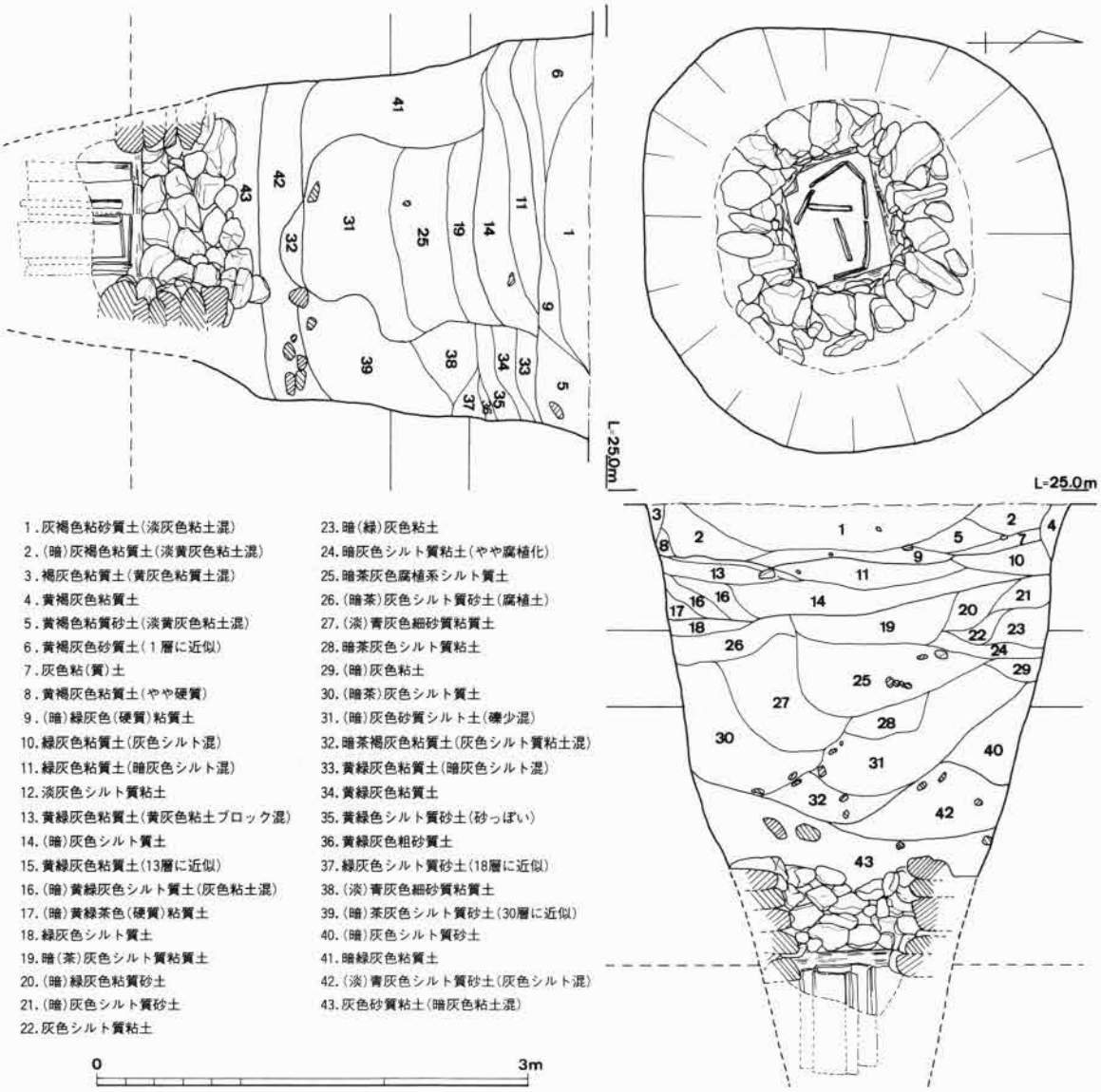
残すものも少なくない。ＳＢ02は、南北方向の柱間がやや広いが、２間(4.3m)×１間(2.9～3.4m)の建物として復原した。柱穴の一つから11世紀の土師皿が、第２面検出中に平城宮式軒瓦(6721Ｃ型式)が出土した。

(5) ４－２トレンチ(第31図)

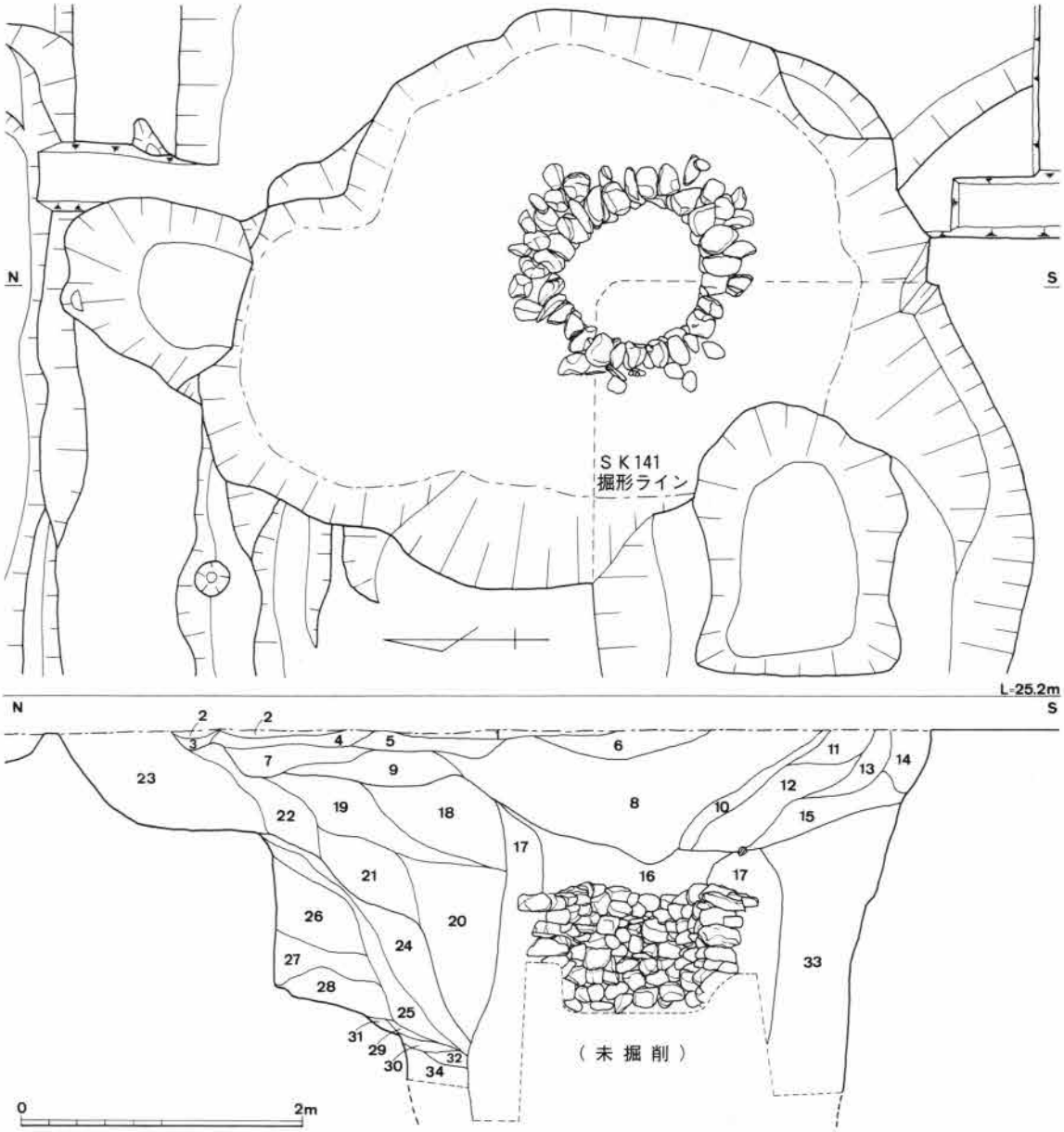
４－１トレンチと同じ２面の層位で遺構の検出をした。その結果、小規模な鋤溝を多数検出したが、それ以外の遺構は確認されなかった。鋤溝は南北方向が密に、東西は粗に入り、後者が南北鋤溝を切る。最も西側の南北溝から12世紀後半の瓦器(椀・皿)が出土した。

(6) ４－３トレンチ(第32図)

ＳＥ104(第33図)　調査区の北西で検出された井戸である。掘形の平面形は、基本的には円形を指向するが、検出面での形状は、四辺がわずかに正方位に平行する方向に直線状を呈し、正円に近い隅丸方形を呈する(主軸線長はともに3.0m)。掘形の縦断面形は、壁面の勾配が急な(80°)逆台形を基本とするが、中位(標高22.0～22.5m)でわずかにゆるやかな傾斜面を設ける。掘形の



第33図　４－３トレンチＳＥ104平面図・断面図(1/50)

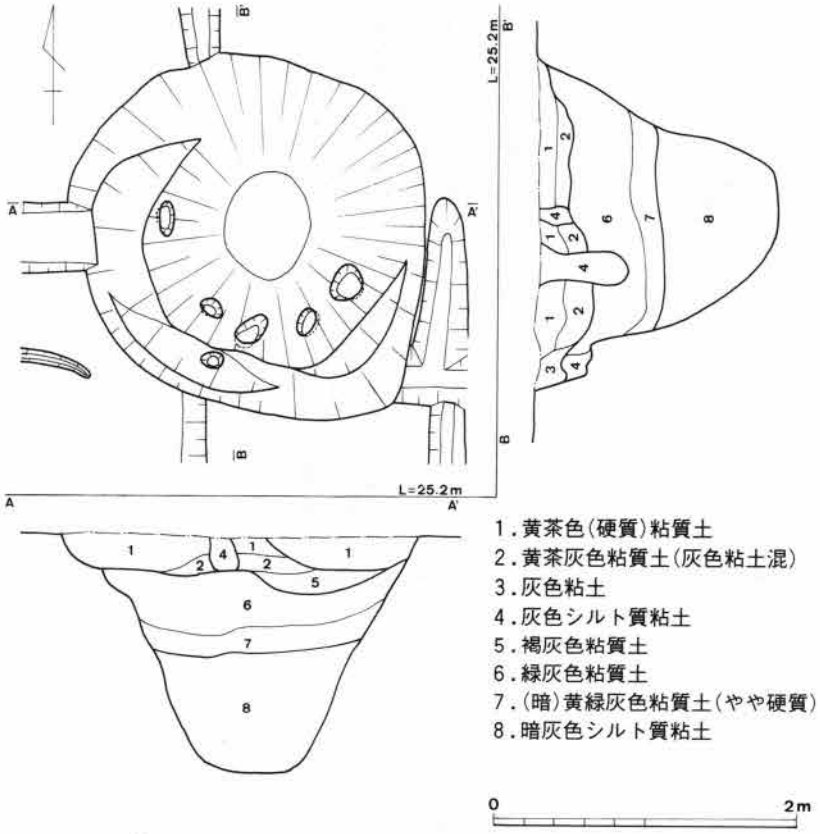


第34図　４－３トレンチＳＥ142平面図・断面図(1/50)

1. 暗褐灰色粘質土
2. 暗褐灰色粘質土(茶褐色土混)
3. 褐灰色粘質土
4. 暗褐灰色粘砂質土
5. 茶灰色(粘質)砂土
6. 暗褐灰色粘(質)土
7. (暗)灰色(硬質)砂土
8. (暗)灰色(シルト質)粘土(黄緑色粘土少混)
9. (暗)褐灰色(硬質)粘砂土
10. 灰色粘土
11. (暗)褐灰色粘砂質土(淡緑灰色粘質土少混)
12. 暗褐灰色粘質土
13. 暗緑灰色粘質土(暗灰色粘土混)
14. 暗灰色シルト質粘質土
15. 暗緑灰色粘砂質土(暗灰色粘土混)
16. (暗青)灰色シルト質粘土(軟質)
17. 暗灰色シルト質粘質土(緑灰色シルト質砂土混)
18. 暗緑灰色粘砂質土(暗灰色泥土混)
19. 緑灰色粘砂質土(暗灰色粘土・礫少混)
20. 緑灰色粘質土(淡黄緑灰色粘土混)
21. (青)灰(褐)色粘砂質土(茶色酸化斑混)
22. 黄褐灰色粘(砂)質土(灰色シルト混)
23. 暗褐灰色粘質土(緑灰色粘土ブロック混)
24. (青)灰色粘(質)土(灰色粘土混)
25. 淡灰褐色砂(青灰色シルト質砂混)
26. 灰色(シルト質)粘土(暗灰色シルト質粘土混)
27. 青灰色(シルト質)粘土(暗灰色シルト質粘土混)
28. 淡青灰色(硬質)粘土
29. 暗灰色シルト質粘土
30. 灰色砂
31. 暗灰色シルト質粘土
32. 淡(青)灰色シルト質粘土
33. 緑灰色粘砂質土(暗灰色粘土斑状混)
34. 淡青灰色シルト質砂

底は、深さ4.0mまで掘削した段階で湧水が激しく確認できていないが、井戸を構築する際の作業空間などを考慮すると、これを大きく越えることはないとみられる。井壁を保護する井戸側(井戸枠)は、加工を施さない自然石による石組みで構成されるが、掘形底部付近に5～6段の石積みが高さにして1.0mばかり残されているにすぎない。石組みの上面が水平に整えられていることから、石組みの上位には木組みなどの素材を異にする井戸側が組まれていた、いわゆる累積井筒の形態を採っていた可能性がある。井戸側の構築は、直径約10cmの樫材の丸太を井桁状に方形に組んで陣木(胴木)とし、これを基礎に20～50cm大の偏平な河原石を長軸方向が円の中心に向かうように乱石積みする。石組みの平面形は、陣木の形状に規制されて、上段でも正円形には修正されず、隅丸方形を呈する(内法は南北約1.0m・東西約0.9m)。最下部には、短辺約30cm・長辺約70cm・厚さ約5cm程度の短辺方向にゆるい円弧を呈する板材(板面に施された仕口から大形の桶側の可能性がある)を縦方向に立て並べて小判形になるように組んで(長径約0.8m・短径約0.6m)水溜めとしている(縦板組無支持水溜め)。出土遺物は、遺構の規模の割には極めて少ないが、石組みより上位の掘形内中央寄り(井戸側内？)堆積土内から、外面にわずかにミガキが残る瓦器椀などの13世紀前半～中葉の土器が少量出土している。なお、石組みに用いられた石材は、砂岩・フォルンフェルス・チャートを主体とし、このような大きな石はこの地では産出せず、6km離れた木津川上流の河川敷から運ばれてきたものとみられる。(注1)

ＳＥ142(第34図)　調査区の北東隅、ＳＥ104の東方約25mで検出された石組み井戸である。掘形は、南西の約1/4をＳＫ141に切られているが、直径約4.0mの円形プランを基本とする。ただ、北側は円周長約2.0mにわたって北方に約1.0m張り出している。深さも検出面から約2.0mで一端テラスを設け井戸掘形より浅く掘り残されている。井戸構築の際の作業空間を確保するための拡張であろうか。掘形内は、湧水による崩落のため完全に掘りきっていないが、検出面から3m以上の深さを測り、その側面形は、壁面がほとんど垂直に近い円筒形を呈する。掘形のほ



第35図　4－3トレンチＳＥ301平面図・断面図(1/50)

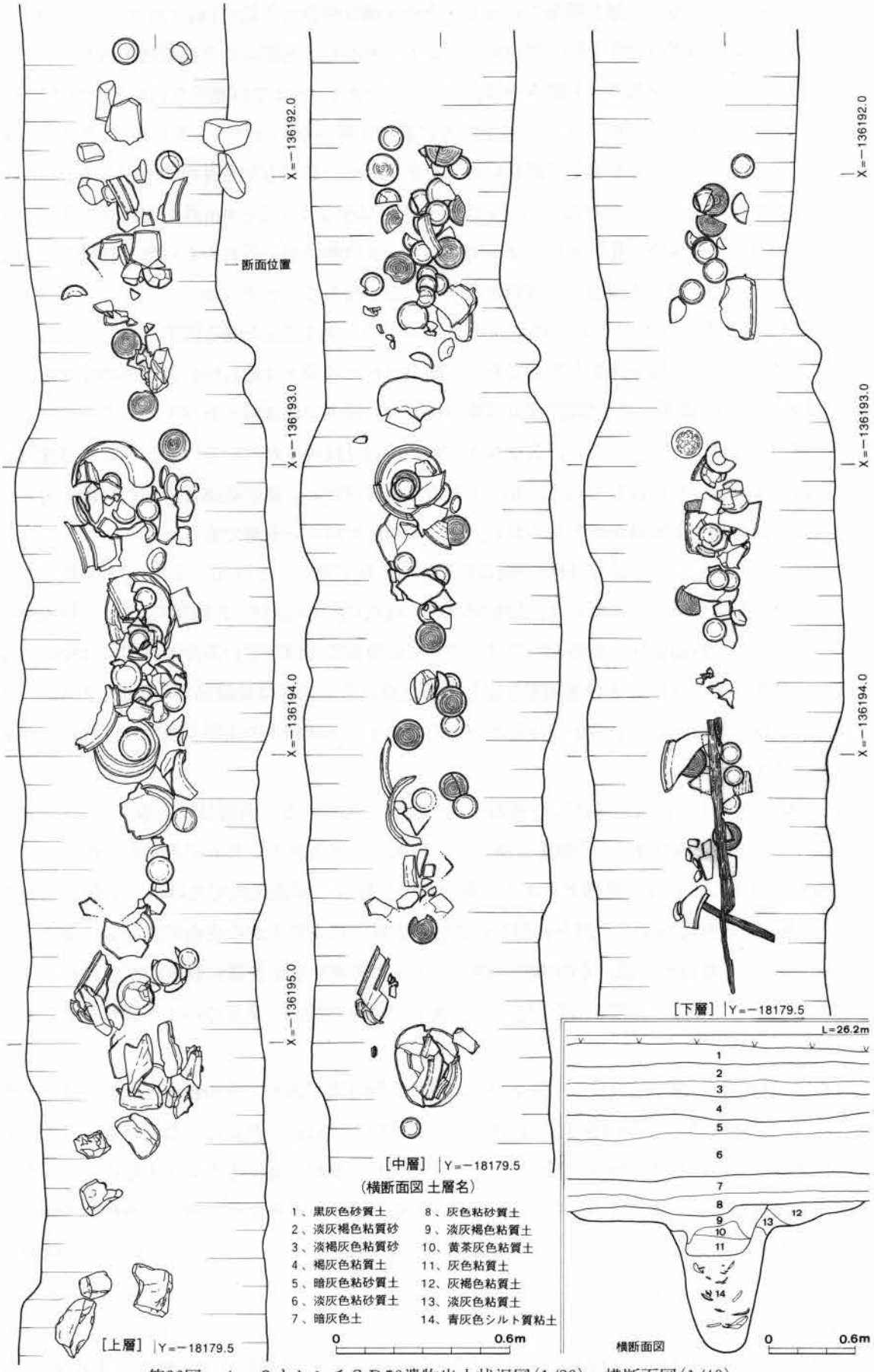
ぼ中央に石組みによる井戸側が構築されるが、その上面は検出面下約1.1mにあり、ＳＥ104と同様、異なった素材の井戸側を上位に想定すべきかもしれない。石組みの平面形は正円形で、その内法の径は0.9～1.0mを測る。石組みの側面形は、深さ約1.0mまでは整美な円筒形を呈するが、それより下位は石組みの側面ラインが若干側方に袋状に膨らむ。石材は、ＳＥ104のそれよりも小さく、加工していないやや偏平で細長い河原石を用いその長軸方向を井戸側の円の中心に向けるように放射状に並べる。図示していないが、石組みは少なくとも2.0m以上の深さをもつ。水溜めなどの井戸底の施設の存否や形状は不明である。井戸側に用いられた石材は、長軸５～30cmを測るチャート・砂岩・花崗岩で、近在の木津川河床で得ることができる。(注2)

ＳＫ301(第35図)　ＳＥ142の南西約13mに位置する直径約2.3mを測る円形プランの土坑である。断面は、底の丸い擂り鉢状を呈しており、検出面からの深さは約1.6m(最深部の標高約23.4m)を測る。掘形の側面には、横幅0.2m前後の長円形の窪みがほぼ同一レベルでめぐっているが、その性格や用途はよくわからない。石や木などの井戸側材は残されていないが、井壁を保護する設備を設けない素掘り構造も含めて、井戸である可能性が高い。掘形底部付近から11世紀後半～11世紀末の瓦器椀や土師皿が出土しており、この調査区では古い遺構である。

ＳＫ195　ＳＥ142とＳＥ104のほぼ中間に位置する土坑である。ＳＤ50・ＳＫ123と重複しており、先行する遺構である。平面形は、長軸が北西～南東に向く楕円形(長軸長約2.7m・短軸長約2.0m)を呈する。断面形は、長軸方向では、中位に緩傾斜面を設けているが基本的には壁の立ち上がりが急な「Ｖ」字形に近い逆椀形を示し、検出面からの深さは最深部で約2.0mを測る。埋土は、灰色粘土系の土で、その中位付近で13世紀の第１四半期相当の土器や曲物の部材がややまとまって出土した。

ＳＫ194　調査区の南西で検出した東西方向に長い土坑である。西端は、調査区外にのびる。東西溝であるＳＤ195の西側延長線上にあり、この溝の一部とみることもできるが、幅・深さともに規模を増すことから別遺構と考えた。検出面での幅は、調査区内ではほぼ一定値を保ち約2.0mを測る。横断面形は、平坦な底部から側壁が直線状に立ち上がる逆台形を呈し、深さは約1.0mを測る。土坑内からは、その中位に径10～30cm大の河原石が多量に敷き並べられるように出土した。主としてこの石敷き面を中心に13世紀後半から14世紀中葉までの土器資料がややまとまって出土した。

ＳＤ50(第36図)　調査区のほぼ中央を南北に貫く素掘り溝である。その軸線は直線でほぼ正南北方位(国土座標のＹ＝－18,180上)にほぼ載る。調査区内では途切れることなく続き、南北両端は調査区外へとのびる(検出長33.5m)。ただ、その延長に設けた４－１トレンチ及び４－５トレンチまでは続かない。溝幅は、0.6～1.9mと幾分規模に差がみられるが、溝上半の側壁の傾斜が極めてゆるやかなため、検出面のわずかな高低がその規模を左右しているとみられる。横断面は、基本的には二段掘り構造を呈し、上段は外上方に大きく開く「Ｕ」字形(検出面からの深さ約0.25m)、下段は側壁の傾斜がやや急な「Ｕ」字形を呈する(上段溝底からの深さ約0.15m)。特に、調査区の中央部付近の下段溝は、長さ約11.0mにわたって急角度で深く掘り込まれ(検出面



第36図　4－3トレンチＳＤ50遺物出土状況図(1/20)・横断面図(1/40)

からの深さ1.1m)、この部分に限り、完形品を多く含む土器類が木片や長径20cm前後の自然石とともに上下方向に累積するように多量に出土した。深掘り部出土の遺物の年代は、層位に関係なく13世紀の第３～４四半期に納まるもので、溝内に一気に投棄されたと考えられる。

ＳＤ195　ＳＫ194の軸線とそろえるようにその東側にのびる素掘りの溝である。その延長はＳＤ50に取り付いて終わることから、両者は密接な関連をもつ。溝の軸線は直線的で、その軸線の示す方位はＮ77°Ｗで、ＳＤ50のそれとは直角に交わらない。横断面は、ＳＤ50同様浅い「Ｕ」字形を上下に重ねたような二段構造を示すが(上段幅2.0～2.4m・下段幅約1.0m・下段溝底までの深さ約0.1m)、下段溝は直線的な上段溝内を幾分蛇行している。また、ＳＤ50と取り付く部分では２本の溝に分岐する。

ＳＤ226　調査区の北半で検出した素掘り溝で、その流路は「Ｌ」字形を示す。南北流部分は、ＳＤ50と軸線間で12.0mの距離を保って平行し、調査区北端から約10.0mの地点で東方に鈍角(約100°)に折れて、今度はＳＤ195と18.0mの間隔を保ちながら東流してＳＤ50に取り付く。ＳＤ50とは重複関係がなく、同時に掘削されて機能していたものとみられる。溝幅は、横断面が浅い「Ｕ」字形を呈するため、0.9～1.7mと広狭の差がみられる。なお、屈曲部分に限り、その内縁に沿って溝底がさらに掘り込まれる二段構造となる。出土遺物は少ない。

ＳＤ148　調査区の北端で、ＳＤ50から鋭角的に分岐して東方に向かって直線的にのびる素掘り溝である。その軸線はＮ77°Ｗを示し、ＳＤ195やＳＤ226の東西流部分と平行関係にある(ＳＤ226東西流部分との軸線間隔は12.0mを測る)。東側はＳＥ142の北側で途切れ、全長約14.0mを測る。ＳＤ50との接点から約5.0m東側でさらに北方向に溝が分岐しており、この分流点を中心に土器と自然石が集中するところがある。遺物の内容は、たとえば瓦器椀の外面にミガキが残るなど、ＳＤ50のそれよりわずかに古相を示し、13世紀第２～第３四半期に一括投棄されたとみられる。溝幅0.6～1.05mで、横断面は「Ｕ」字形を基本とする(深さ0.2～0.4m)。

ＳＫ153　ＳＤ148の東側末端の東に隣接するように掘られた土坑である。いびつな長円形プラン(東西径約2.15m・南北径約1.75m)を呈し、断面は逆椀形(深さ約0.5m)を示す。出土遺物から13世紀末～14世紀中葉頃の年代が与えられるが、中に褐釉四耳壺などの中国陶磁が混入しており注目される。

ＳＫ149　ＳＤ148の東端の位置から北へのびる東西幅1.0～1.3m・深さ約0.7mを測る遺構である。北側が調査区外にのびるため、溝か土坑か判断できない。13世紀の瓦器椀・羽釜・土師皿に混じって常滑系の大甕の破片がややまとまって出土した。

ＳＤ208・ＳＤ222　調査区の南西地区で検出した南北方向に直線的に走る素掘り溝で、両者は、軸線間で1.6mの間隔を保って平行するように掘られている。その主軸線の示す方位は、ＳＤ50やＳＤ226南北流部分のそれと同じで、特に西側のＳＤ222は、ＳＤ226と軸線を共有し、その南側延長ラインに一致する。両溝とも、北側ではＳＤ226には直接取り付かず、そのわずか手前で途切れる。一方、南端は、ＳＤ222はＳＤ195との接点で収束するが、東側のＳＤ208は、ＳＤ195と重複する部分で西側に屈曲し、やがてＳＫ194に取り付く。ＳＤ195との重複関係は、ＳＤ

208・222の方が後出し、ＳＤ195の埋土上面から掘り込んで、底はより深い位置まで達している。両溝とも、類似した規模(幅0.5～0.7m・深さ0.2～0.3m)と断面形態(側壁の立ち上がりがやや急な「U」字形)を示し、有機的な関係のもとに掘削されたと予想される。両溝内にピットなどは検出していないが、土塀(築地塀)の両側溝の可能性も指摘できようか。出土遺物は、瓦器や土師器の細片が少量出土したのみで、遺物の上から年代を決めることは困難である。

ＳＫ213　ＳＫ194の北に接して掘り込まれたやや歪んだ方形プラン(東西約1.2m・南北約1.1m)の土坑である。断面形は、底部に平坦面を設ける逆台形(検出面からの深さ約0.35m)を呈する。土坑の外縁に沿うかたちで、土器や拳大の自然石が少量出土した(13世紀末)。

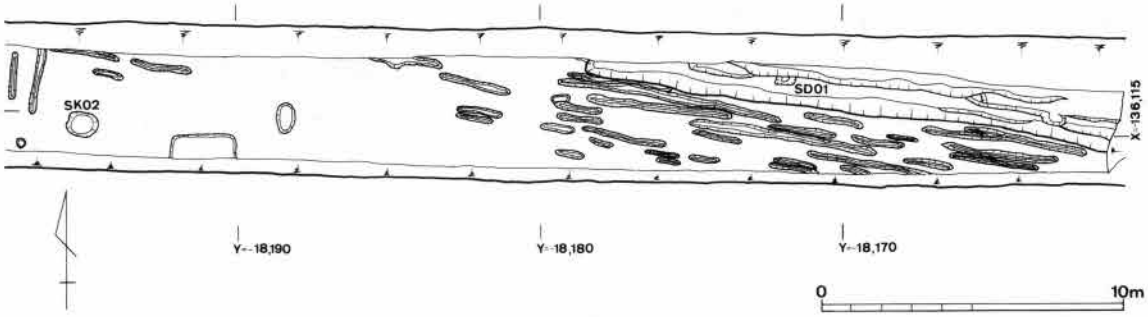
ＳＫ224　ＳＫ213の北方約4.0mに位置する東西に長い長楕円形プランの土坑である(主軸長約3.0m・短軸長＝幅0.85～1.0m)。断面は、平坦な底部をもち四壁の立ち上がりが急な箱形を呈する(深さ約0.45m)。出土遺物がほとんどなく、時期不明であるが、先のＳＫ213とともに墓の可能性がある。

その他の遺構　このほか、調査区の各所に、幅0.05～0.6mの浅く直線的な素掘り溝や、直径0.15～0.3mの円形掘形をもつ柱穴が多数検出された。

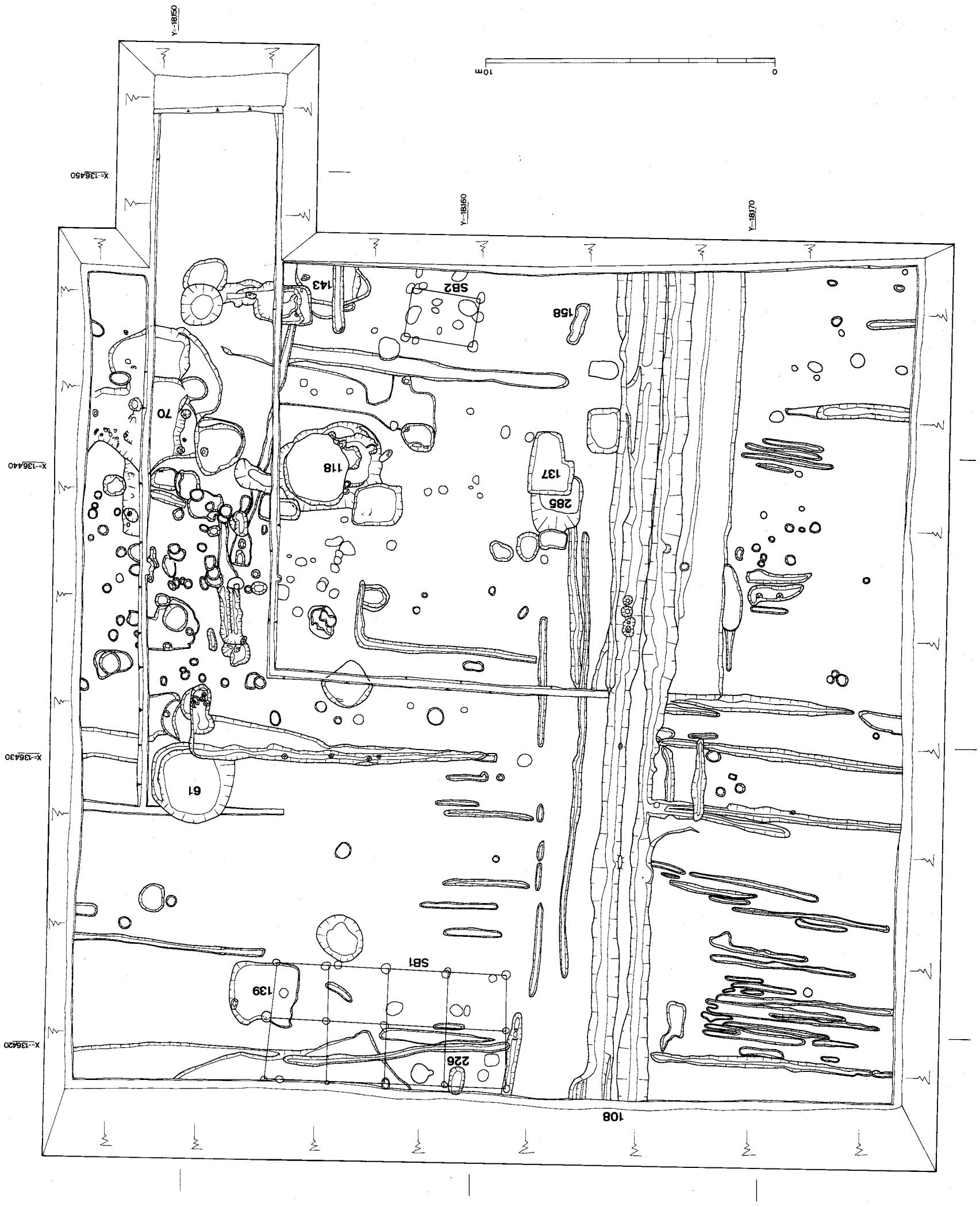
素掘り溝は、大半が耕作に伴う溝(鋤溝)とみられるが、規模の比較的大きなものは、土地の境界を示す配列をうかがわせるものがある。たとえば、ＳＤ92は、トレンチ中央付近で逆「L」字形に屈折するが、これと平行するやや規模の大きな素掘り溝を追跡すると、調査区内をX＝－136,193ラインを頂辺とする逆「T」字形に区画する耕地境が復原でき、これを大畦畔あるいは土地境とすることができるかもしれない。これらの耕作溝群は、重複関係から上記の中世の遺構より新しいが、これを覆う包含層資料からすると、近世まで下らない。ただ、こうした地割りが現代の土地割りに反映されていることは、第21図をみると明らかである。

つぎに、ピット群であるが、建物としては復原しなかったが、調査区内ではその分布に偏りがある。南半の３か所(ＳＫ224・ＳＫ248・ＳＫ268東方付近)と、北東端に集中する傾向が看取される。多くには偏平な石材による礎盤がみられるが、中には直径10cm前後の柱根が腐朽せずに遺存したものもある。時期を遺物の上で決められないが、中世前期を下ることはなさそうである。

なお、このトレンチでも規模の大きな擂り鉢状土坑が２基検出された(ＳＫ123・ＳＫ141)。これは、ほかの調査区でも普遍的にみられる同種の土坑と同じ性格をもち、近年になって掘られたものである。



第37図　４－５トレンチ遺構平面図(1/250)



第38図　5トレンチ遺構平面図(1/150)

(7) 4－4 トレンチ(第31図)

方７ｍの小グリッドである。標高約24.6ｍの面で遺構検出を試みた。結果、南北に交差する幅１ｍ前後の浅い溝状遺構を数条確認した。東西方向の溝ＳＤ01は、深さ約0.2ｍの「Ｕ」字形断面の素掘り溝で、南北主軸のＳＤ02・ＳＫ03を切っている。出土遺物は概して少ないが、ＳＤ01から瓦器椀小片が、ＳＤ02から古墳時代後期の須恵器杯身が出土した。

(8) 4－5 トレンチ(第37図)

水処理施設の北辺に沿って設けたトレンチである。標高約24.8ｍに硬質粘質土からなる安定した地盤があり、この面で遺構検出を実施した。

ＳＤ01　トレンチ東半部で検出した東西主軸の溝(段状地形)である。その上縁ラインは直線的で、正方位にＮ84°Ｗの方向で斜交する。検出したのは、北側に下る斜面のみで、対向する斜面は調査区外にあるとみられる(検出した最大幅は約3.5ｍ)。北傾斜面の断面形は、緩急を繰り返し段状を呈する(検出面からの深さ約2.0ｍ)。埋土は、基本的にはレンズ状に堆積しているが、部分的にブロック土を交える層が入り、ある時期には人為的に埋め戻された形跡がうかがわれる。内部から中世を中心とした土器類が出土したが、信楽(鉢底部)などの陶器類も含まれ、その下限は14世紀中葉以降にある。この溝の位置とほぼ同じラインに現在の土地境界が畦畔のかたちで残されており、中世以降、地境が受け継がれている。

ＳＫ02　トレンチの西端で検出した正円に近い隅丸方形プランの土坑である(東西約1.0ｍ・南北約0.9ｍ)。断面は、平坦な底部をもつ逆台形(深さ約0.2ｍ)を呈し、側壁に沿って細砂土が約0.1ｍの幅で帯状に堆積する。13世紀後半の瓦器椀、白磁皿の小片が少量出土した。

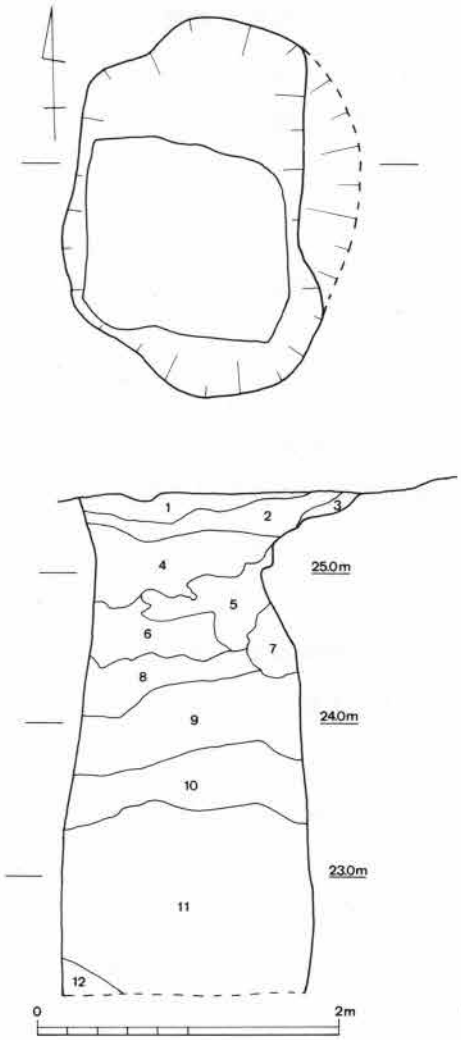
(伊賀高弘)

(9) 5 トレンチ(第38図)

ＳＥ285(第39図)　一辺約1.3ｍの方形プランの井戸であるが、上部約20cmは漏斗状に広がっている。それ以下の壁はオーバーハング気味にほぼ直立している。深さ約3.3ｍまで掘削したところで崩落の危険が生じたために掘削を中止し、底には到達しなかった。内外面ともに、ほとんど隙間なくヘラミガキが施された瓦器椀片や土師器羽釜の小破片などが出土し、11世紀中葉の埋没と考えられる。

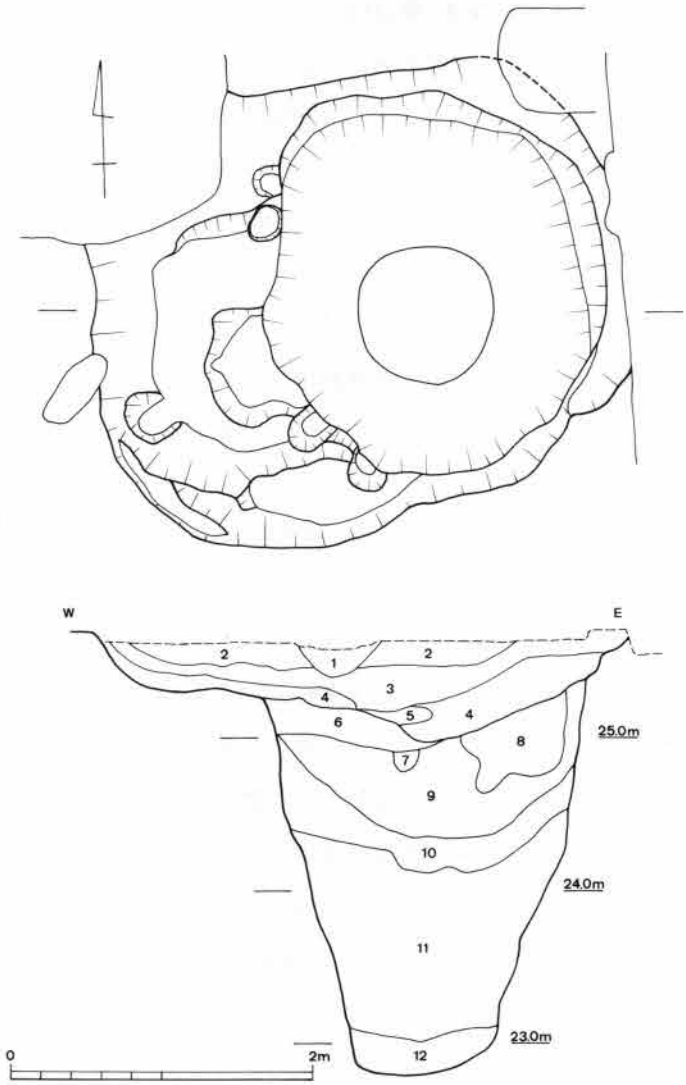
ＳＥ118(第40図)　後述する土坑ＳＫ118の底面で検出した。直径2.1～2.2ｍの円形の井戸である。遺構面からの深さは約2.9ｍを測る。井戸枠材などは残っていなかった。ブロック状の粘土を含む埋土の状況から見て、人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物には瓦器椀・土師器皿などがある。埋土に混入したと思われる破片がほとんどであるが、これらから見て11世紀末から12世紀初頭に埋没したものと考えられる。

ＳＫ118(第40図)　東西約3.5ｍ・南北約2.9ｍの楕円形の土坑である。深さは最大約0.7ｍを測る。ＳＥ118の埋没後に掘られている。埋土は４層に分かれ、第４層の暗灰色粘質土から瓦器椀・瓦器皿・土師器皿・土師器羽釜など、完形品を含む多量の遺物が出土した。埋土には、灰・炭・焼土塊なども含まれていた。出土した土師器羽釜には炭化物や煤が多量に付着しており、日



第39図　5トレンチＳＥ285平面図・断面図(1/50)

1. 明茶灰色粘質土(灰黄色粘土ブロック含)
2. 茶灰色粘質土
3. 暗茶灰色粘質土
4. 緑灰色粘質土
5. 緑灰色礫混粘質土(黄緑色礫混粘土を多含)
6. 淡黄緑色礫混粘質土
7. 暗茶褐色粘質土
8. 暗灰色粘土
9. 淡緑灰色粘土
10. 淡黄緑色礫混粘土
11. 暗灰色シルト
12. 茶灰色礫



第40図　5トレンチＳＫ118・ＳＥ118平面図・断面図(1/50)

1. 明茶褐色粘質土
2. 淡茶灰色粘質土
3. 暗茶灰色粘質土(焼土塊・黄茶灰色粘土ブロック多含)
4. 暗灰色粘質土(炭小片・黄茶灰色粘土ブロック含)
5. 炭層

ＳＫ118

6. 淡緑灰色粘質土
7. 暗灰茶色粘質土
8. 茶褐色粘質土
9. 暗緑灰色粘質土(淡黄緑色粘土ブロック含)
10. 緑灰色粘質土
11. 灰黄色粘土
12. 淡灰色シルト

ＳＥ118

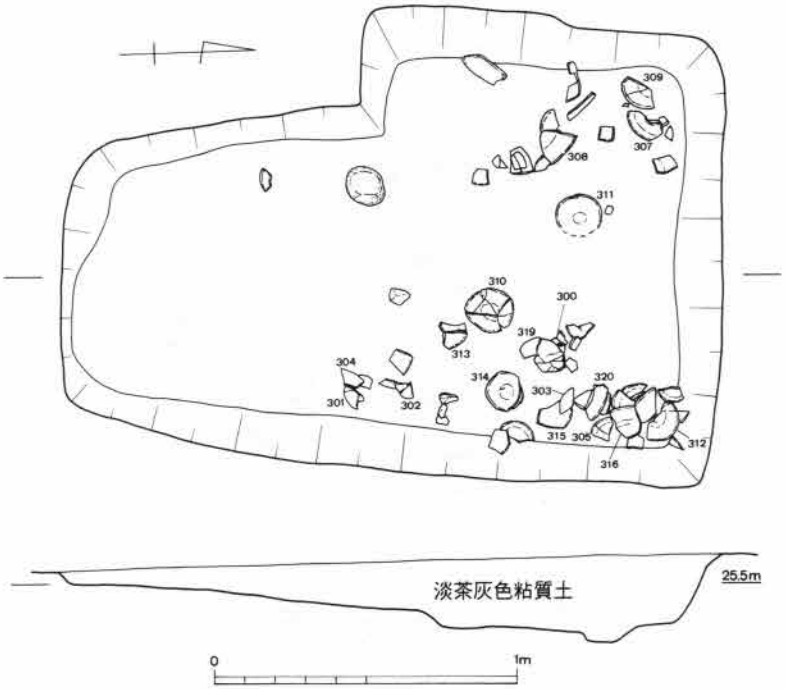
1～5. ＳＫ118　6～12. ＳＥ118

用の雑器を投棄した廃棄土坑と考えられる。出土遺物からみて、12世紀中葉から後半の時期と考えられる。

ＳＫ137(第41図)　長辺約2.2m・短辺約1.5mの「L」字形の平面形を呈する土坑である。深さは最大約0.3mを測るが、南側は浅く、北側に向かって深くなる。埋土は、淡茶灰色粘質土の

単一層である。埋土中から多量の土器が出土した。12世紀後半の廃棄土坑であると思われる。

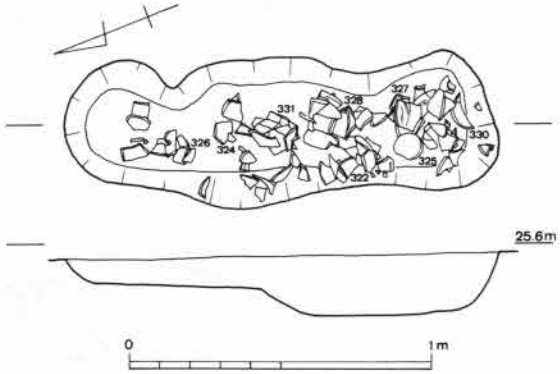
ＳＫ158（第42図）　長径約1.4m・短径約0.5mを測る長楕円形の土坑である。深さは南側が深く約0.2mを測る。埋土は茶灰色粘質土の単一層である。埋土中から多量の土器が出土した。12世紀中葉の廃棄土坑と考えられる。



第41図　５トレンチＳＫ137平面図・断面図（1/25）

ＳＫ139（第43図）　調査区北東部で検出した東西約2.3m・南北約2.2mの不定形の土坑である。深さは約0.1mを測る。掘立柱建物跡ＳＢ１の柱穴に切られている。埋土は、茶灰色粘質土である。12世紀末から13世紀前葉の廃棄土坑と思われる。

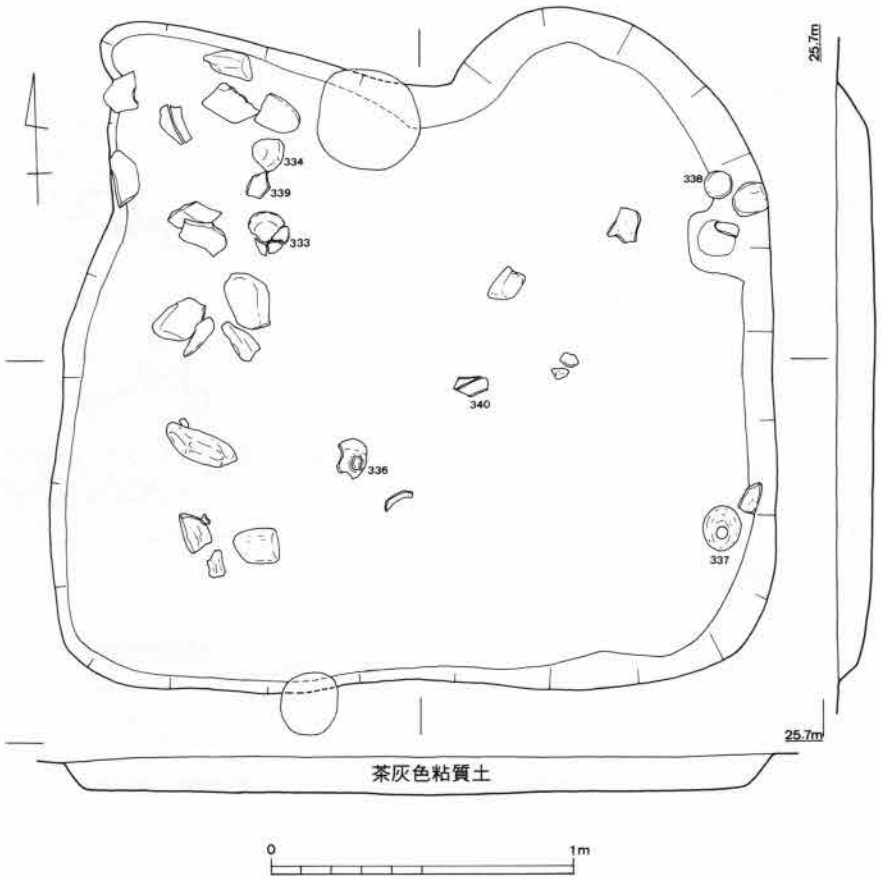
ＳＫ143（第44図）　調査区南端で検出した不定形の浅い土坑である。埋土は暗茶褐色粘質土である。北側と西側に深さ５cm程度のテラス状の面があるほかは、ほぼ平坦で、深さは10cm程度を測る。土坑の底から土師器羽釜などが出土した。13世紀前葉の廃棄土坑であると考えられる。



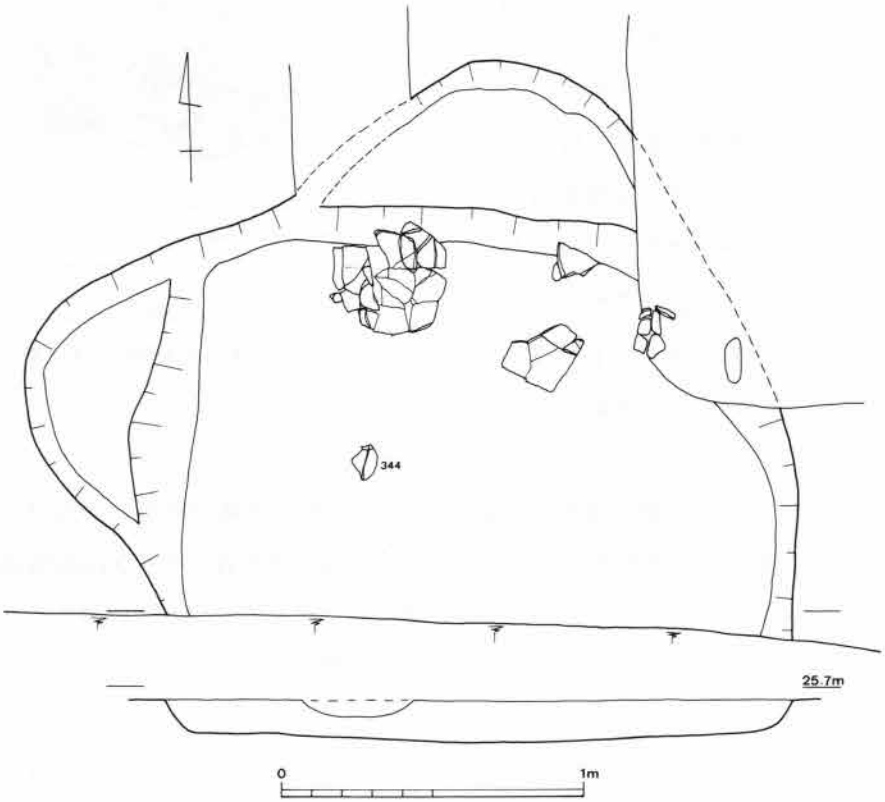
第42図　５トレンチＳＫ158平面図・断面図（1/25）

ＳＫ61（第45図）　調査区東部で検出した直径約2.8mの円形土坑である。調査中に土層観察用の畦が崩れたために断面図が作れなかったが、埋土は２層に分かれ、上層20cmが暗茶褐色砂混じり粘質土、以下が暗茶灰色粘質土である。廃棄土坑と考えられる土坑が、いずれも不定形であるのに対して、この土坑は形が整っていることや、出土遺物が少ないことなどから水溜めなどの用途が考えられる。

ＳＫ70（第46図）　調査区南東隅で検出した不定形の土坑である。埋土は、暗茶灰色砂質土の単一層である。埋土中から多量の土器類が出土した。13世紀後半～末頃の廃棄土坑と考えられる。



第43図　5トレンチＳＫ139平面図・断面図(1/25)

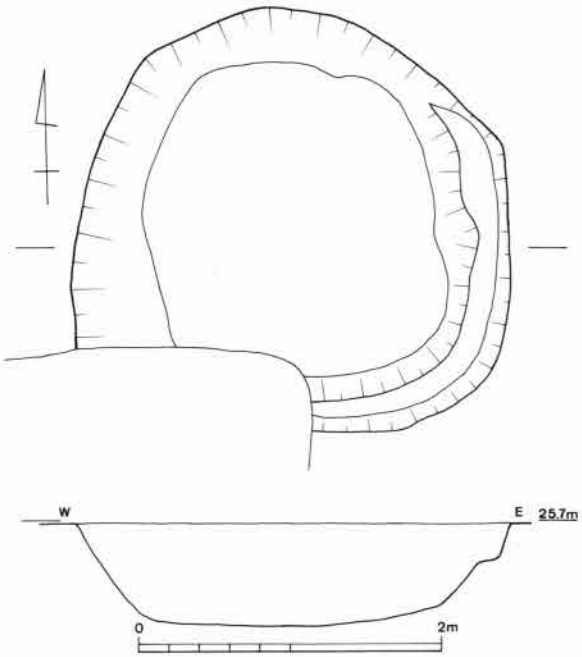


第44図　5トレンチＳＫ143平面図・断面図(1/25)

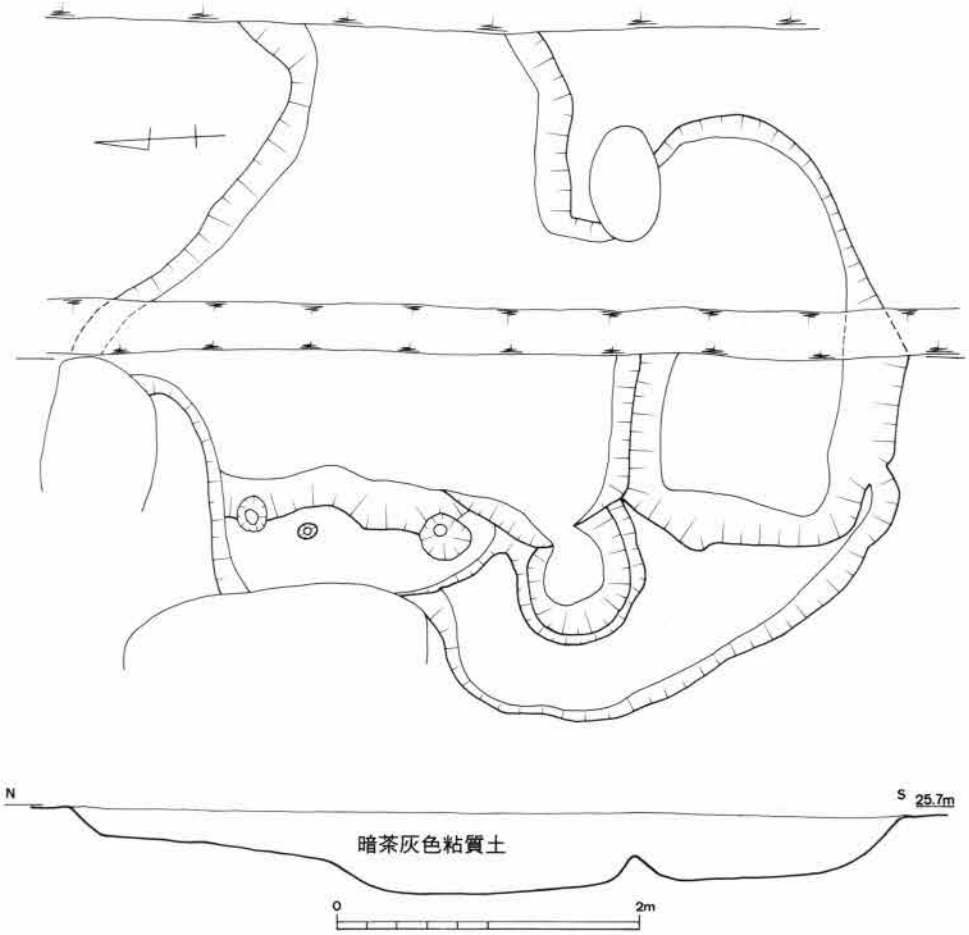
ＳＢ１（第47図）　トレンチ北部で検出した東西４間・南北２間以上の総柱建物跡である。柱穴は直径30cm程度の円形である。埋土は茶灰色系の粘質土である。13世紀前葉頃の建物跡と考えられる。

ＳＢ２（第48図）　トレンチ南部で検出した。東西１間・南北１間以上の建物跡である。柱穴は直径30cm程度の円形である。13世紀前葉頃の建物跡と考えられる。

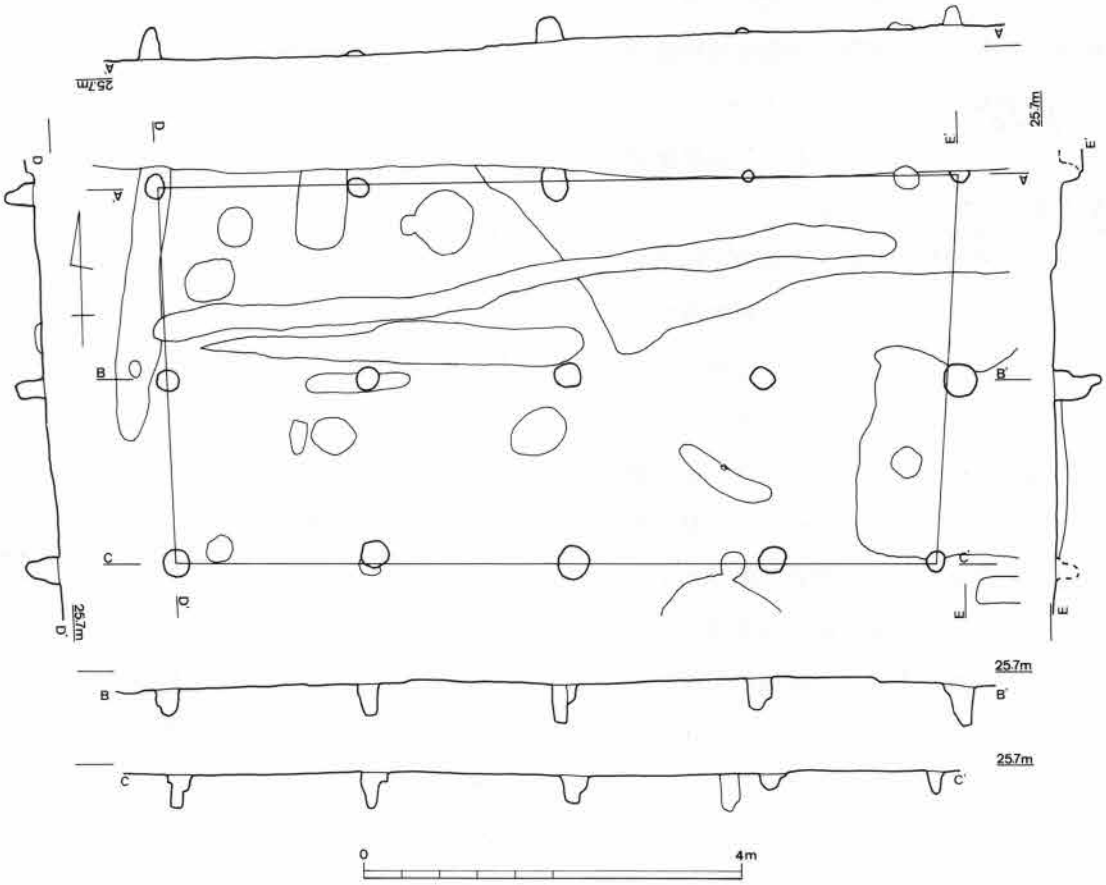
ＳＴ226（第49図）　トレンチの北部で検出した長径約1.0m・短径約0.5mの墓である。墓壙の北端部には下顎骨と歯がわずかに遺存していた。墓壙中央部の東寄りで青磁椀が出土した。また、青磁椀の下部には青磁椀に沿うように漆皮膜が点々と残存し



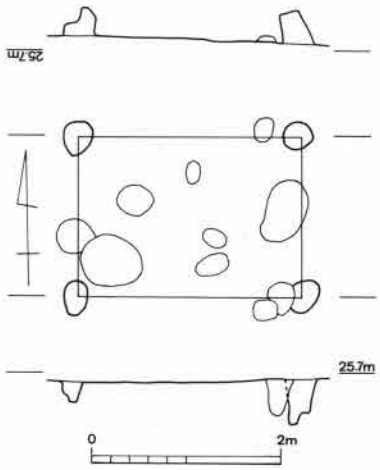
第45図　５トレンチＳＫ61平面図・断面図（1/50）

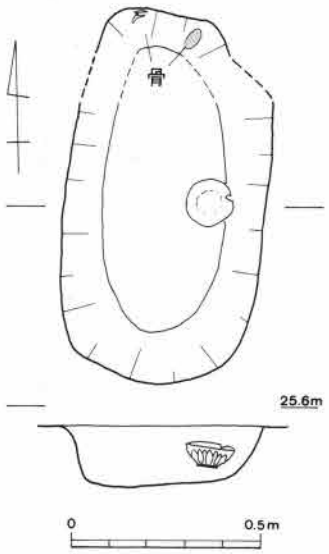


第46図　５トレンチＳＫ70平面図・断面図（1/50）



第47図　５トレンチＳＢ１平面図・断面図(1/80)



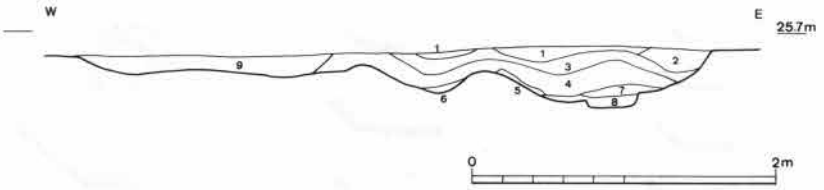


第48図　５トレンチＳＢ２平面図・断面図(1/80)　　第49図　５トレンチＳＴ226平面図・断面図(1/20)

ており、漆器椀と青磁椀が重ねて副葬されていたと考えられる。

ＳＤ108(第50図)　トレンチ中央部を南北に貫く溝である。２条の溝が平行しているように見えるが、埋土は一連で、幅２ｍ程度の溝と判断される。深さは東側が深く、約20cmを測る。溝の底から出土した瓦器椀(377)と土師器皿(379)などから、12世紀後半に掘削されたと見られるが、

上層では16世紀後半の遺物も出土しており、このころまでは存続したと考えられる。



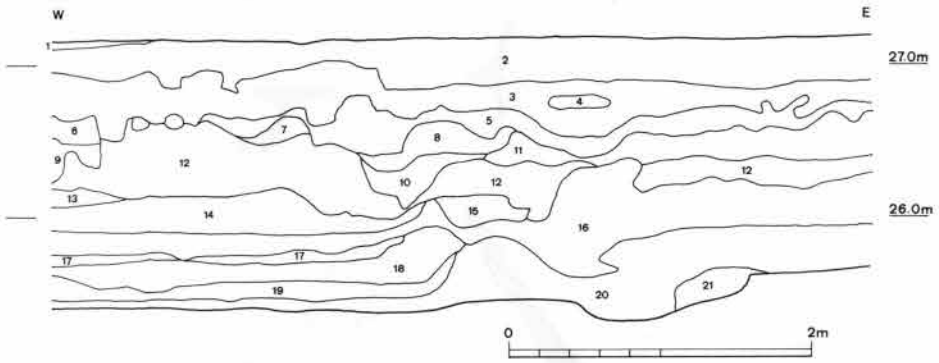
第50図　５トレンチＳＤ108断面図(X=-136,438.5ライン)　1/50

1.淡褐灰色砂質土
2.黄茶色砂質土
3.淡灰色砂混粘質土
4.灰色粘質土
5.灰色粘土
6.黄灰色シルト質粘土
7.淡灰色砂混シルト
8.灰色シルト
9.茶灰色砂質土(ＳＤ160の埋土)

この溝を境に東側には遺構が多く、西側には遺構が少ないので、地境いの溝と考えられる。また、この溝は調査地周辺に見られる方格地割りにほぼ一致しており、トレンチの壁面の観察によれば、盛り土や洪水によって地表面が上昇するごとに、この溝が少しずつ西にずれた位置に掘り直されて現在の地割りの位置に移動したことが明瞭に観察できる(第51図)。このことからも、この付近の溝が土地の境界線として意識され続けていたことがわかる。

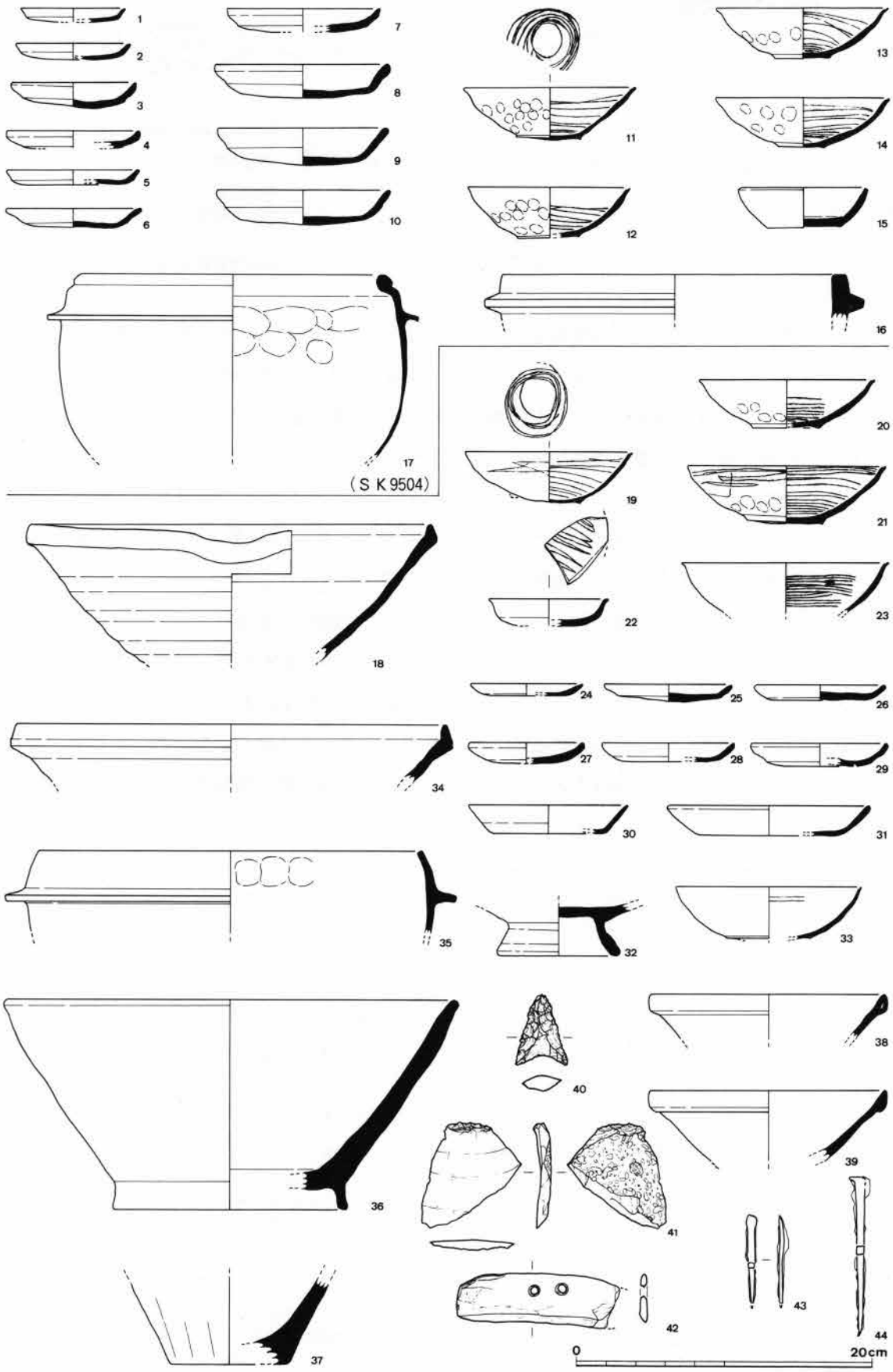
その他の遺構　５トレンチではＳＤ108よりも東側に柱穴や土坑などの遺構が多く検出されたのに対して、西側では東西方向の小溝が多く検出された。これらの小溝はＳＤ108より東には続かず、方向も東で南に振っており、時期も13世紀後半以降とみられる。

調査区南東部では柱穴が複雑に切り合って検出された。建物などを復原するには至らなかったが、遺構が密集して検出されたこの付近が屋敷地の中心に近いと思われる。遺構面の高さがＳＤ108から東側に向かって高くなっていることも、居住域にふさわしい条件である。検出された土坑には、円形のものと、不定形のものがみられ、前者からの出土遺物が少ないのに対して、後者からは多量の遺物が出土する傾向がみられるので、後者は廃棄土坑と判断される。これらの土坑



第51図　５トレンチ土層断面図(X=-136,428mライン)　1/50

1.盛り土
2.黒灰色砂
3.淡茶灰色細粒砂(灰白色粗粒砂含)
4.灰黄色粗粒砂
5.淡茶灰色細粒砂
6.灰白色砂
7.淡褐灰色細粒砂
8.灰青色細粒砂
9.淡灰色シルトと灰白色微粒砂の互層
10.淡褐灰色中粒砂
11.淡褐灰色細粒砂
12.淡褐灰色微粒砂
13.黄茶灰色細粒砂
14.淡褐灰色微粒砂
15.灰青色微粒砂
16.淡褐灰色微粒砂
17.淡灰青色シルト
18.淡緑灰色微粒砂
19.淡灰色礫混シルト
20.淡褐灰色シルト混粘土
21.黄褐色粘土



第52図　1トレンチ遺物実測図

1～17. S K9504　18. S K9502　19. S K9521　21. S K9513　23. S K9515　24･26～28･30. S K9519　37･40～42. S D9501

やピットの時期は12世紀後半が中心であるが、14世紀までのものがみられる。

（森島康雄）

4．出土遺物

出土遺物については、以下各トレンチについて遺構ごとに記述するが、木製品については、最後にまとめて報告する。

(1) 1トレンチ

①ＳＫ9504出土遺物（第52図）　1～7は土師器小皿、8～10は土師器大皿である。土師器大皿は、立ち上がり部分の内面が強い指押さえによって大きく屈曲する。11～14は大和型瓦器椀である。外面にはヘラミガキが施されず、内面は見込みから体部まで一連の圏線ミガキが施される。第Ⅲ段階Ｄ型式[注3]に相当する。15は白磁ⅢⅨ類である。16は石鍋である。17は土師器羽釜である。口縁端部を外側に折り返すもので、内外面ともナデ調整が施される。時期は13世紀後半である。

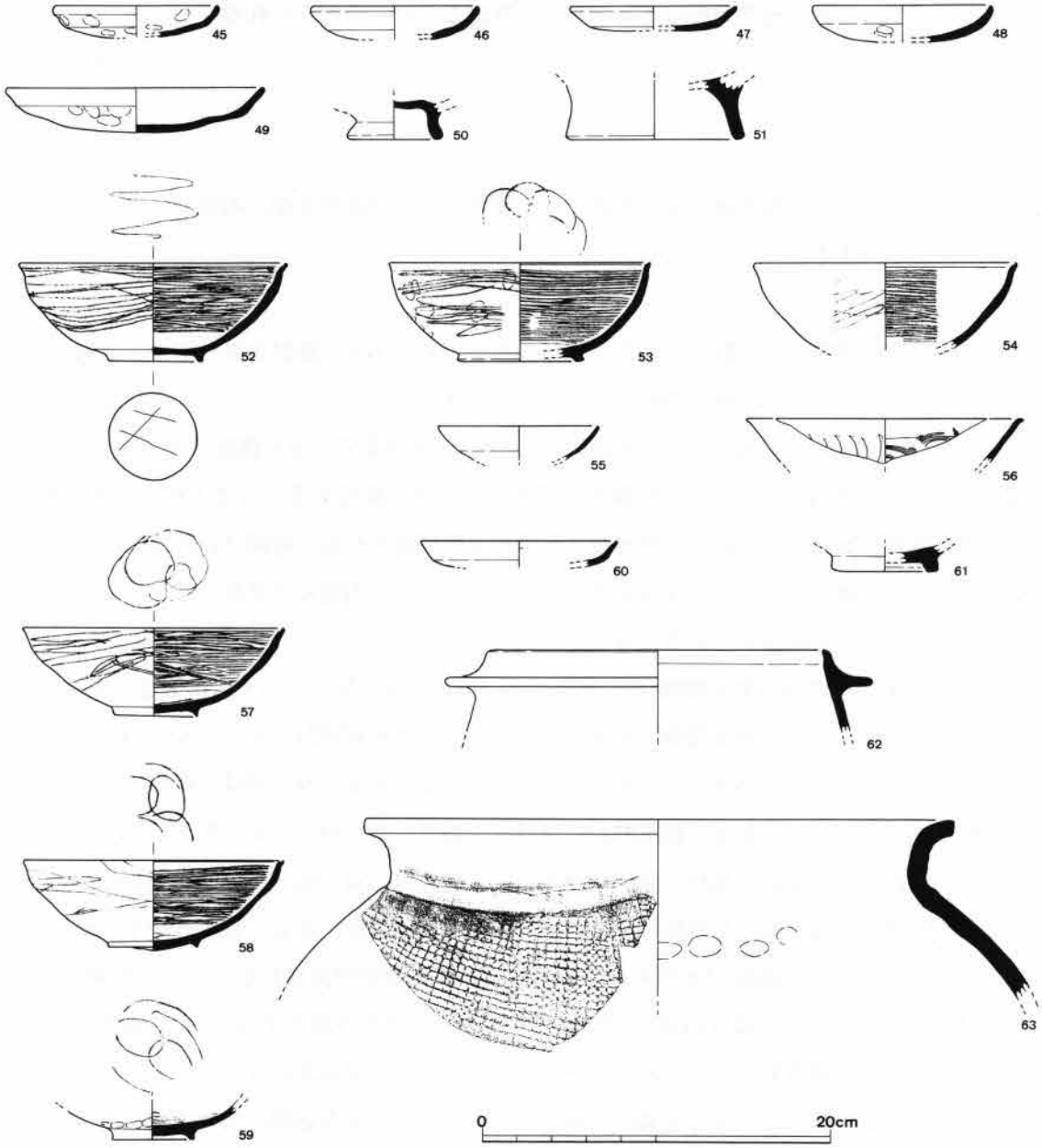
②ＳＫ9502出土遺物（第52図）　18は東播系須恵器鉢である。内面の下半部は使用によって滑らかになっている。13世紀後半のものと考えられる。

③1トレンチのその他の主な遺物（第52図）　19～23は瓦器である。19・20は第Ⅲ段階Ｄ型式、21は第Ⅲ段階Ｂ型式、23は第Ⅲ段階Ａ型式に相当する。19はＳＫ9521、21はＳＫ9513、23はＳＫ9515、20・22は包含層から出土した。24～29は土師器小皿である。24～26は口縁部に１段のヨコナデ調整を施すもの、27～29は口縁部外面に面取りが施されるものである。30・31は土師器大皿である。口縁部の立ち上がり部分に強い指押さえが施される。24・26～30はＳＫ9519から出土した。32は土師器台付皿、33は瓦器椀である。34は東播系須恵器鉢である。18よりやや口縁部が上方にのびている。35は土師器羽釜である。体部外面はナデ調整が施される。36は陶器鉢である。貼り付け高台で、口縁部には片口部分が一部残っている。体部外面の下方１／３の範囲には一部に回転ヘラケズリが施されている。内面の下半は使用によって滑らかになっている。37は弥生土器壺の底部である。40はサヌカイト製の石鏃である、刃部の一部を破損しているが、ほぼ完形である。41はサヌカイトの剥片である。１面は原礫面を残している。42は粘板岩製の石庖丁である。37・40～42はＳＤ9501から出土した。43・44は鉄釘である。

(2) 2トレンチ

①ＳＥ174出土遺物（第53図）　45～56は下層から出土した。45～48は土師器小皿である。45～47は口縁部が二段に屈曲するが、48は端部までゆるやかに内湾して丸く納める。49は土師器大皿である。50・51は土師器台付皿である。51は橙色系の色調を呈する。52～54は大和型瓦器椀である。内面には圏線ミガキが、外面には分割性のあるヘラミガキが施される。第Ⅱ段階Ａ型式に相当する。55・56は白磁である。椀Ⅴ類は別個体の破片（図版第37-Ａ）が出土している。時期は12世紀前葉である。

57～63は上層から出土した。57～59は大和型瓦器椀である。第Ⅱ段階Ｂ型式に相当する。60は瓦器小皿である。口縁部内面に圏線ミガキが施されている。61は白磁椀である。外面は露胎であ

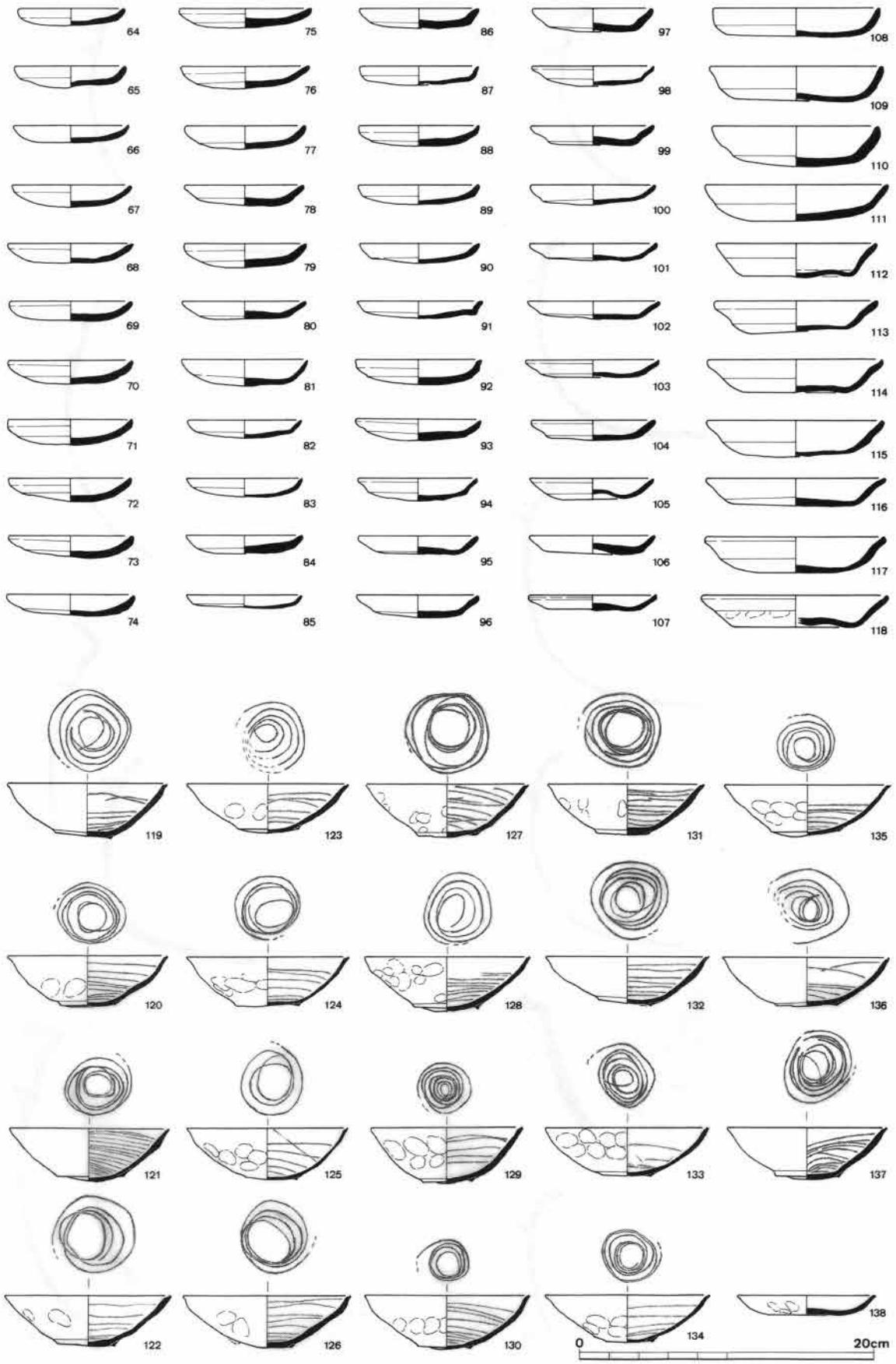


第53図　2トレンチ遺物実測図　ＳＥ174

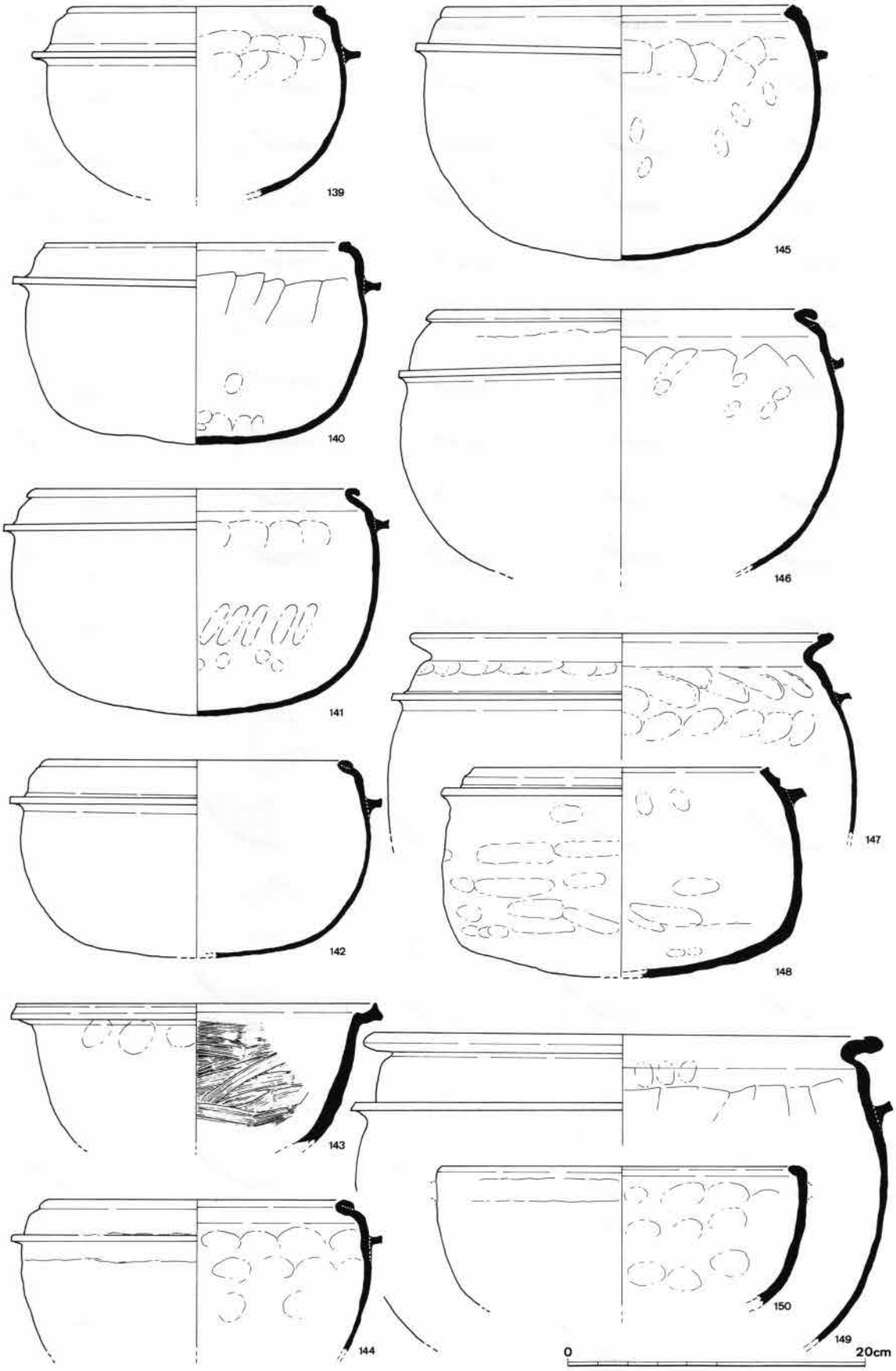
る。62は土師器羽釜である。短い口縁部を持ち、口縁部の内面はヨコナデによって凹んでいる。体部内外面はナデ調整である。胎土は石英粒を多く含み、粗い。63は亀山窯須恵器甕である。体部外面は格子タタキ、内面はナデ調整であるが、頸部付近には、ナデ以前にヘラケズリを施した痕跡が見られる。このほか、十瓶山窯須恵器甕の体部片(図版第37-B)も出土している。時期は12世紀中葉である。

(3) 4－3トレンチ

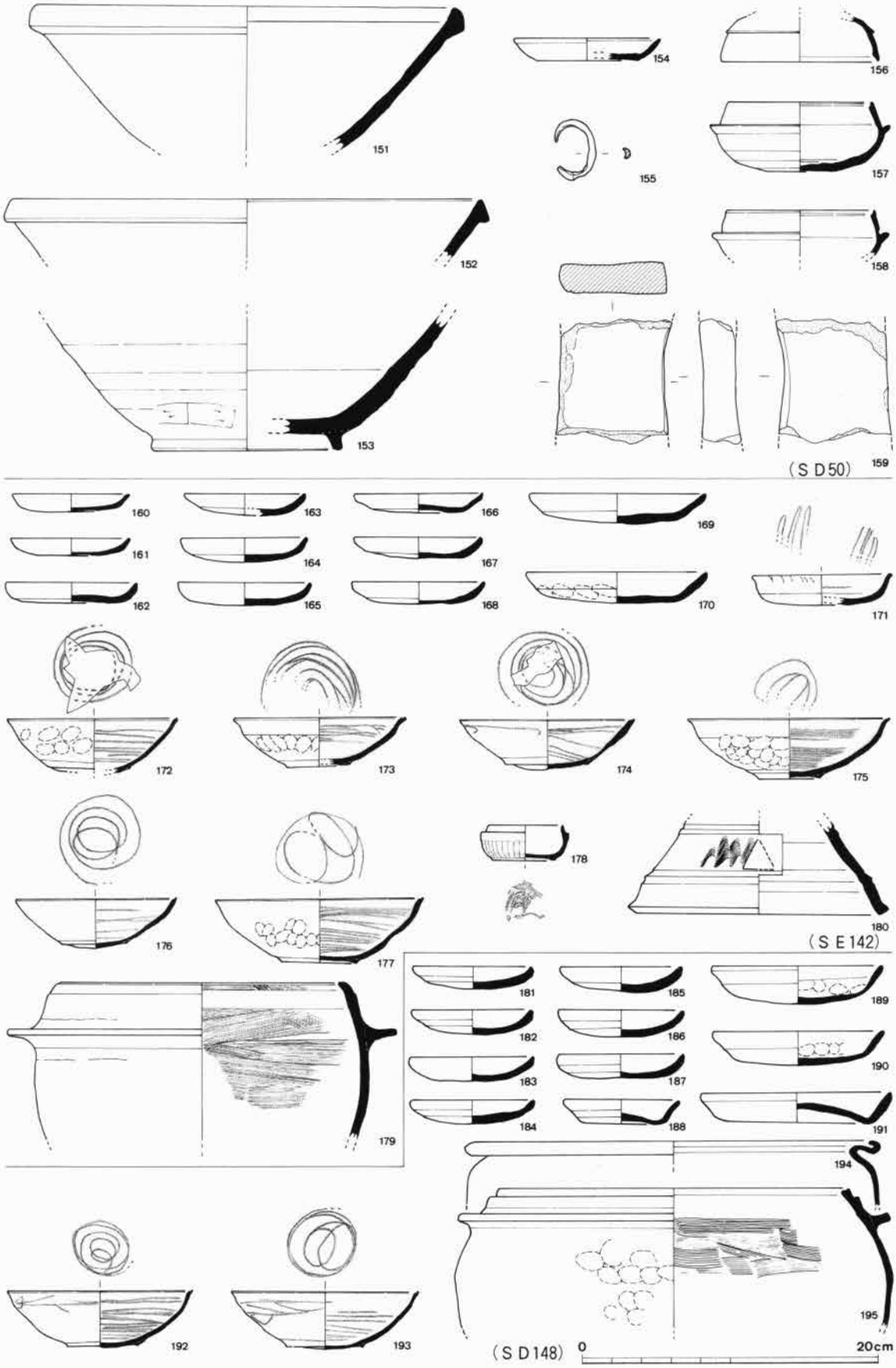
①ＳＤ50出土遺物(第54～56図)　64～118は土師器皿である。口縁端部外面が屈曲して面を持つもの(67・69～72・75・76・79・88・92・110ほか)、底部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がり、1回のヨコナデを施すもの(64～66・68・83・90・108ほか)、口縁部が立ち上がり部分



第54図　４－３トレンチ遺物実測図(1)　ＳＤ50



第55図　4－3トレンチ遺物実測図(2)　SD50



第56図　４－３トレンチ遺物実測図(3)　ＳＤ50・ＳＥ142・ＳＤ148

で折れ曲がるように強く屈曲するもの(82・86・91・106ほか)、口縁部の立ち上がり部分の内面に強い指押さえが施され、口縁内端部がわずかに凹むもの(68・80・94・96・111～118ほか)がある。119～134は大和型瓦器椀である。外面にはヘラミガキが施されず、内面には体部から見込み部まで一連の渦巻き状のヘラミガキが施される。第Ⅲ段階D型式に相当する。138は瓦器皿である。内面には6往復のジグザグ状の暗文が施される。139～142・144～150は土師器羽釜である。内湾する口縁部の端部を外側に折り返すもの(139～142・144～146)、外反する口縁部の端部を内側に折り返すもの(147・149)があるが、鍔の形状や調整などは共通している。148は、内傾する口縁部に段がつくもので、器壁が厚い。150は、口縁端部を内側に折り曲げるもので、外面の上端部付近には鍔が剥離した痕跡が認められる。143は瓦質土器鍋である。内面は細かいハケ調整が施される。139～150の鍋釜類には、煤や炭化物が厚く付着している。151～153は須恵器鉢である。151・152は東播系であるが、153は貼り付け高台を持つもので、産地不明である。154は白磁皿Ⅸ類である。155は不明鉄製品である。156～158は、古墳時代の須恵器蓋杯で、混入品である。159は砥石である。3面を砥石面として使用している。時期は13世紀後半である。

②**ＳＥ142出土遺物**(第56図)　160～170は土師器皿である。口縁端部外面が屈曲して面を持つもの(164・168ほか)、底部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がり、1回のヨコナデを施すもの(161・162・165ほか)、口縁部が立ち上がり部分で折れ曲がるように強く屈曲するもの(160)、口縁部の立ち上がり部分の内面に強い指押さえが施され、口縁内端部がわずかに凹むもの(166ほか)がある。171は瓦器皿である。172～177は大和型瓦器椀である。第Ⅲ段階B型式に相当するもの(175・177)と第Ⅲ段階D型式に相当するもの(172～174・176)がある。178は青白磁合子である。底部に墨書がみられるが、判読できない。179は瓦質土器羽釜である。内面には細かいハケ調整が施される。180は、古墳時代の須恵器器台である。

これらのうち、163・164・167～170は石組みの井戸枠内から出土したもの、他は掘形内から出土したものである。井戸枠内は完掘されていないので埋没年代は特定できないが、掘形から出土した遺物の下限は13世紀後半である。

③**ＳＤ148出土遺物**(第56図)　181～191は土師器皿である。口縁端部外面が屈曲して面を持つものが大半で、188のみが口縁部の立ち上がり部分の内面に強い指押さえが施され、口縁内端部がわずかに凹むものである。192・193は大和型瓦器椀である。第Ⅲ段階C型式に相当するが、他に、1型式新しいものも出土している。194は土師器羽釜、195は瓦質土器羽釜である。13世紀後半までの遺物が混在しているとみられる。

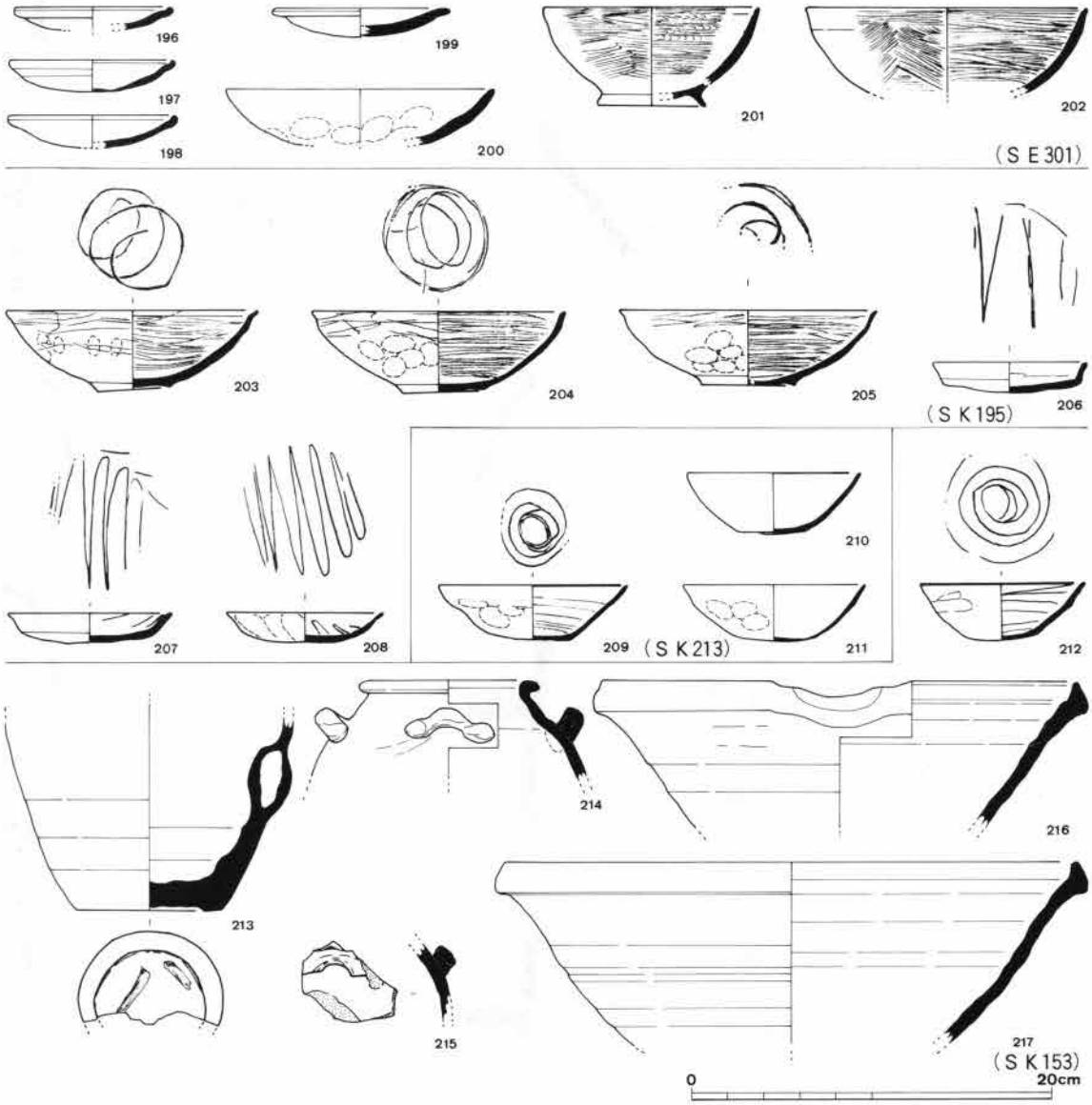
④**ＳＥ301出土遺物**(第57図)　196～200は土師器皿である。196～198は、「て」字状口縁の皿である。201・202は大和型瓦器椀である。内外面とも非常に密なヘラミガキが施され、見込み部にはジグザグ状の暗文が施される。第Ⅰ段階C型式に相当する。11世紀後半と考えられる。

⑤**ＳＫ195出土遺物**(第57図)　203～205は大和型瓦器椀である。外面の上位1/3程度には横方向のヘラミガキ、内面には粗いヘラミガキが施され、第Ⅲ段階B型式に相当する。206～208は瓦器皿である。内底面にはジグザグ状の暗文が施される。時期は13世紀前半である。

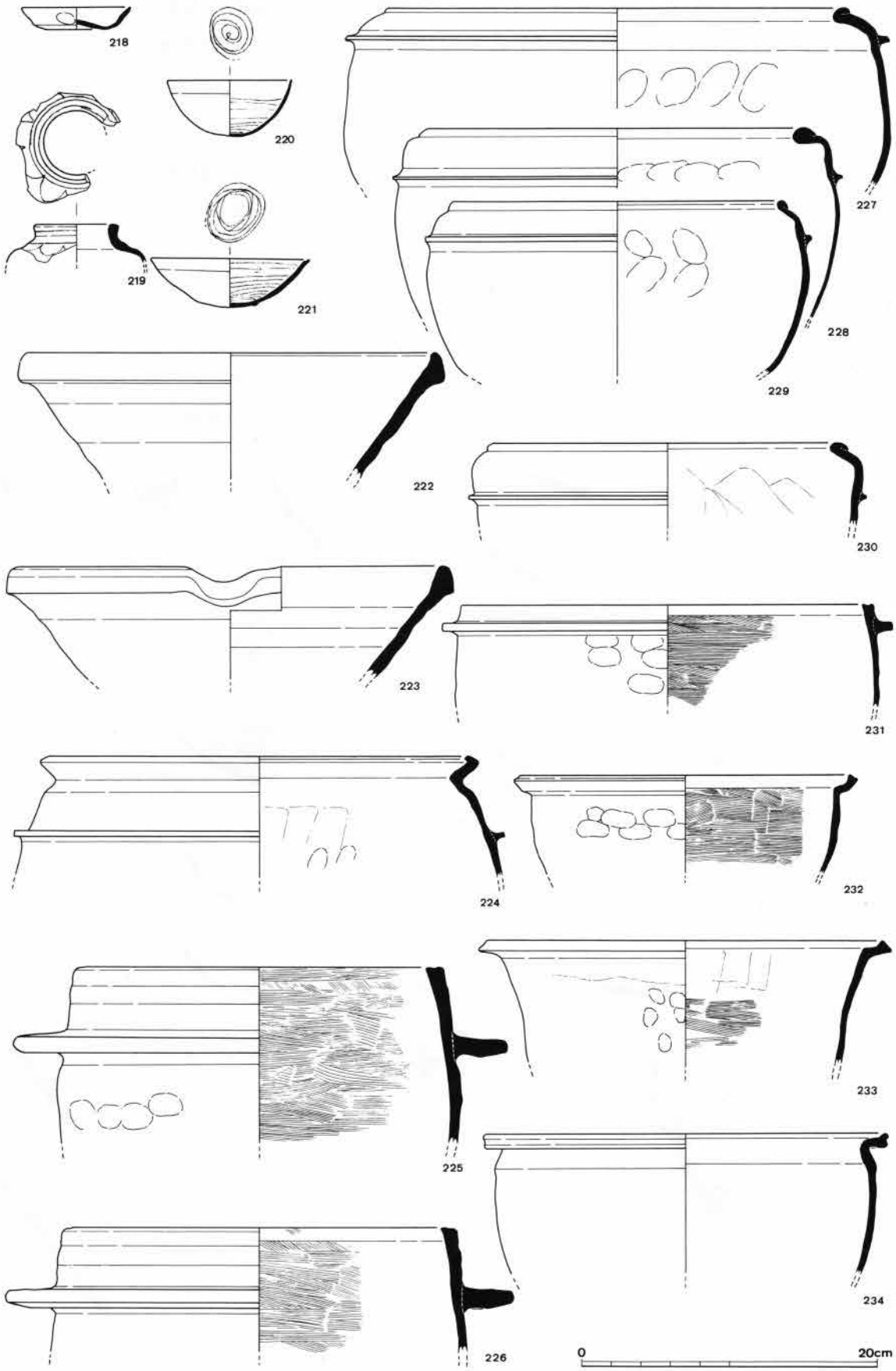
⑥**ＳＫ213出土遺物**(第57図)　210・211は大和型瓦器椀である。高台は非常に退化しており、211は高台が付けられていない。第Ⅲ段階Ｅ型式に相当する。時期は13世紀末頃と考えられる。

⑦**ＳＫ153出土遺物**(第57図)　212は大和型瓦器椀である。高台はなく、口縁端部の沈線もわずかに残る程度である。第Ⅳ段階Ｂ型式に相当する。213は古瀬戸壺である。削り出し輪高台で、薄い釉が掛けられている。底部には墨書がみられるが判読できない。214は褐釉陶器四耳壺、215は白磁四耳壺である。216・217は東播系須恵器鉢である。口縁端部が大きく上下に肥厚している。14世紀中葉と考えられる。

⑧**ＳＫ194出土遺物**(第58図)　218は土師器小皿である。口縁部の立ち上がり部分の内面に強い指押さえが施され、口縁内端部がわずかに凹んでいる。219は瓦器小壺である。肩部に花弁状の暗文が施される。220・221は大和型瓦器椀である。220は、口縁端部のごく一部に沈線が残っている。221は、一周しない退化した高台が付けられている。222・223は東播系須恵器鉢である。



第57図　４－３トレンチ遺物実測図(4)　ＳＥ301・ＳＫ195・ＳＫ213・ＳＫ153



第58図　4－3トレンチ遺物実測図(5)　ＳＫ194

224・227～230は土師器羽釜である。224は口縁端部を内側に折り曲げるもの、227～230は口縁端部を外側に折り曲げるものである。225・226・231は瓦質土器羽釜である。225・226は、直立する口縁部に段を持ち、231は短く直立する口縁部を持つ。前者の胎土は砂粒を多く含むが、後者の胎土は精良である。232・233は瓦質土器鍋である。232は受け口状の口縁部であるが、233は口縁部が退化している。233の焼成は土師質に近い。234は土師器鍋である。224の羽釜が退化して鍔が省略されたものである。遺物には、13世紀後半から14世紀中葉までの時期幅がみられる。

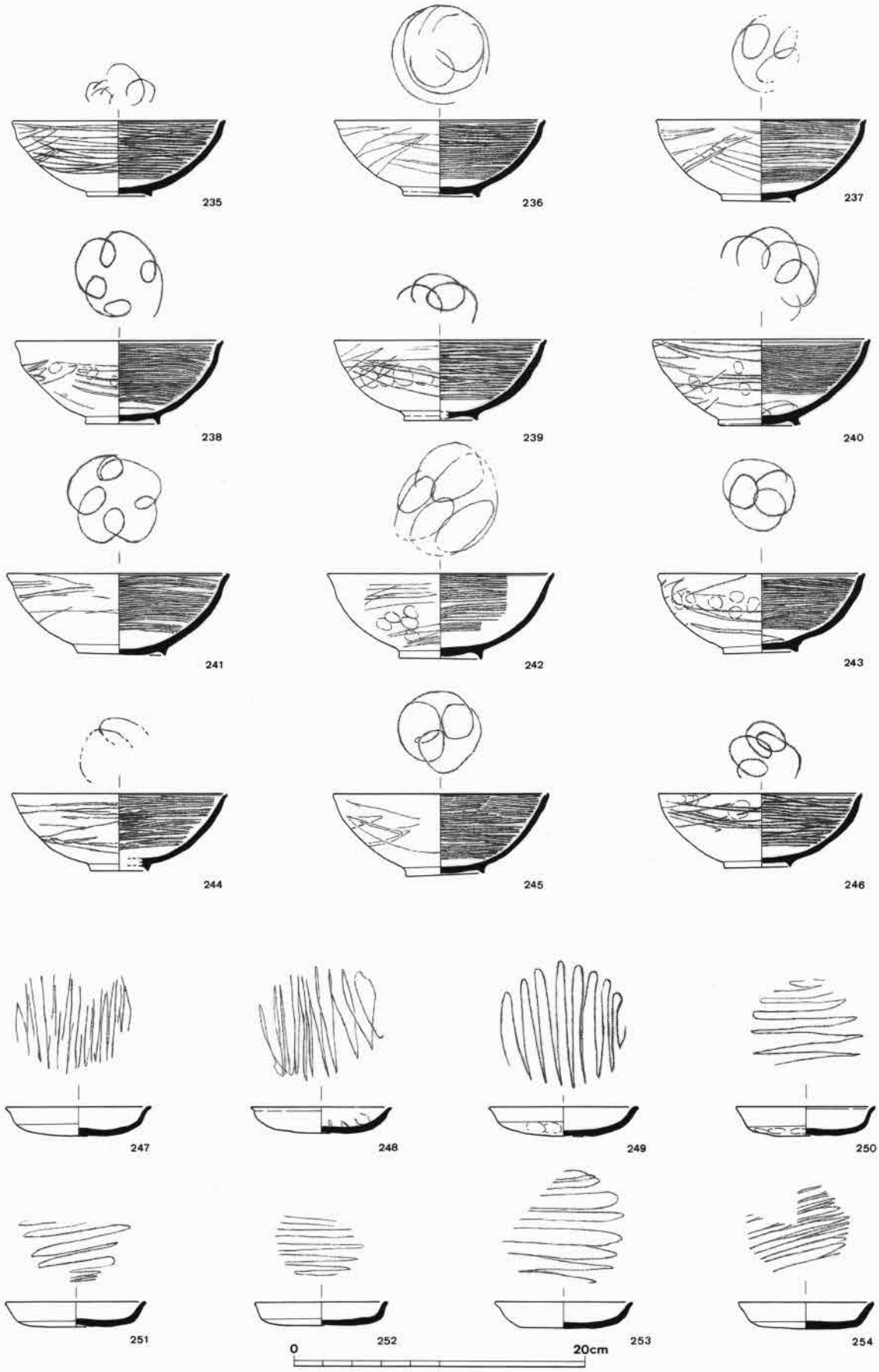
(4) 5トレンチ

①**ＳＫ118出土遺物**(第59～61図)　235～246は瓦器椀である。いずれも大和型瓦器椀で内面の圏線ミガキは密に施され、わずかに隙間がみられる程度である。外面は明瞭な３分割のヘラミガキが施されるものが主体であるが、分割性が不明瞭になったものもみられる。第Ⅱ段階Ｂ型式から第Ⅲ段階Ａ型式古相に相当する。247～254は瓦器皿である。内面はジグザグ状の暗文が施されている。255～259は土師器大皿である。口縁部が二段に屈曲するもの(255・256)、口縁部外端に面を持つもの(257)、口縁部が途中で屈曲しないもの(258・259)がみられる。260～275は土師器小皿である。口縁部が二段に屈曲するもの(260～266)と屈曲しないもの(267～275)がみられる。276は白磁椀Ⅵ類である。畳付きは、平滑に研磨されている。277～288は土師器羽釜である。胴部は内外面ともに板状の工具を使ったナデ調整が施されるが、全体に指掌の痕跡が目立つ。鍔から口縁部にかけてはヨコナデが施される。鍔部の径が30cmを越えるもの(277～283)と、27cm前後(284～288)の２法量に分かれ、前者は寸胴形、後者は球形に近い形態を持つ。289・290は須恵器鉢である。289は東播系である。290は痕跡的な高台を持ち、口縁端部は尖り気味に丸く納める。外面には回転ナデの痕跡が明瞭である。291・292は砥石である。時期は12世紀後半と考えることができる。

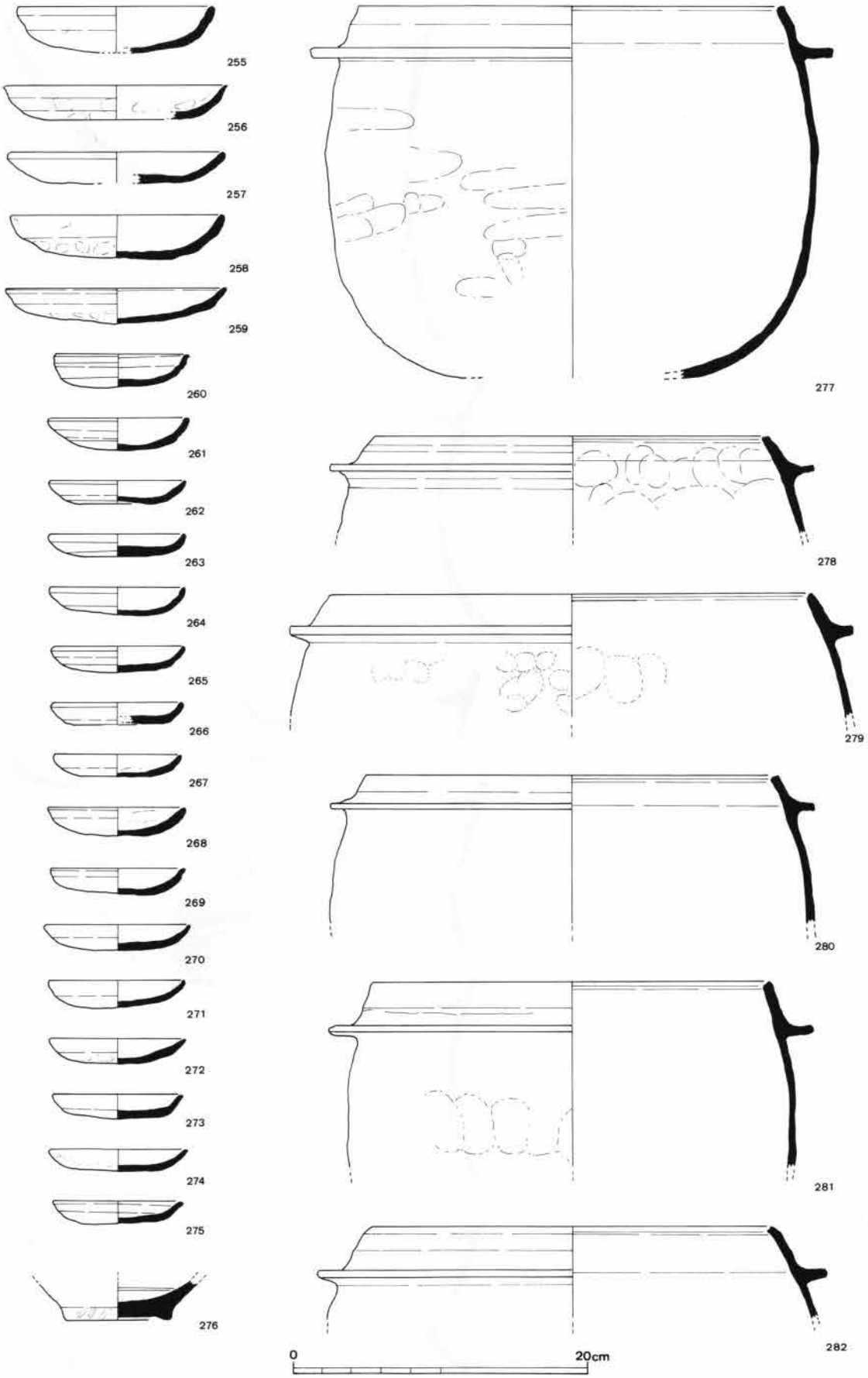
②**ＳＥ118出土遺物**(第61図)　293～295は土師器小皿である。いずれも退化した「て」字状口縁のタイプである。296は土師器大皿である。口縁部はヨコナデによってわずかに外反する。297は大和型瓦器椀である。見込み部にはジグザグ状の暗文が施されている。298は砥石である。３面が砥石面として使用されている。このほか、黒色土器Ｂ類椀(図版第40-Ｃ)や白磁椀Ｖ類(図版第40-Ｄ)の小破片が出土している。時期は11世紀末～12世紀初頭と考えられる。

③**ＳＫ137出土遺物**(第62図)　299～303は土師器小皿である。口縁部が二段に屈曲して上半が直立する。304～306は土師器大皿である。口縁部は一段のヨコナデが施されるもの(304)と、小皿と同様の形状のもの(305・306)がある。307～320は大和型瓦器椀である。外面のヘラミガキは３分割に施されるものから、分割性のないものまで見られる。内面の圏線ミガキも比較的密なものから間隔の大きなものまで見られ、型式的にはやや幅がある。321は瓦器小皿である。時期は12世紀後半と考えられる。

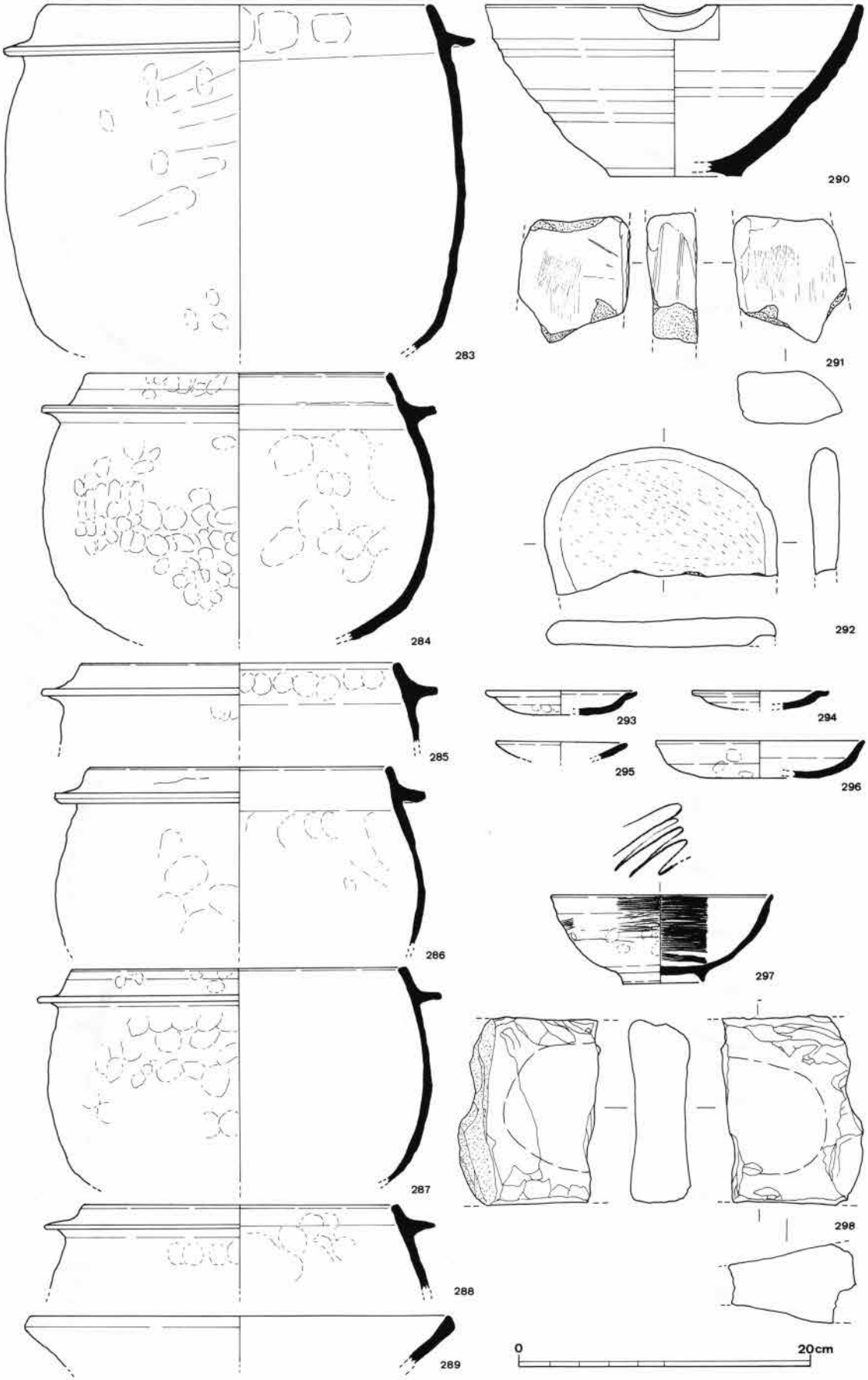
④**ＳＫ158出土遺物**(第63図)　322～324は土師器大皿である。口縁部が屈曲しないもの(322)と二段に屈曲するもの(323・324)がみられる。325・326は土師器小皿である。口縁部は二段に屈曲する。327は土師器高台付き皿である。手づくね成形である。328～330は大和型瓦器椀である。



第59図　5トレンチ遺物実測図(1)　ＳＫ118



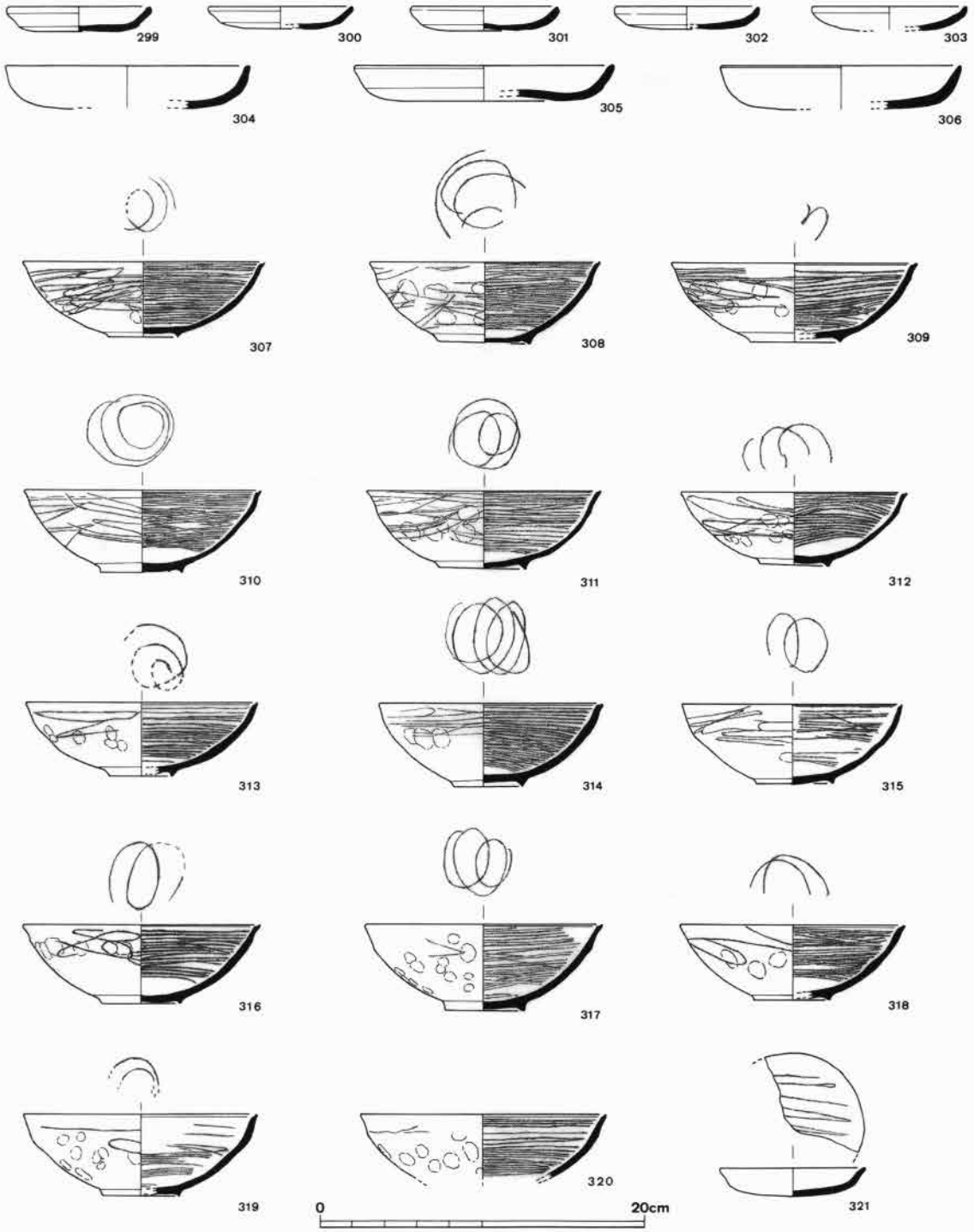
第60図　５トレンチ遺物実測図(2)　ＳＫ118



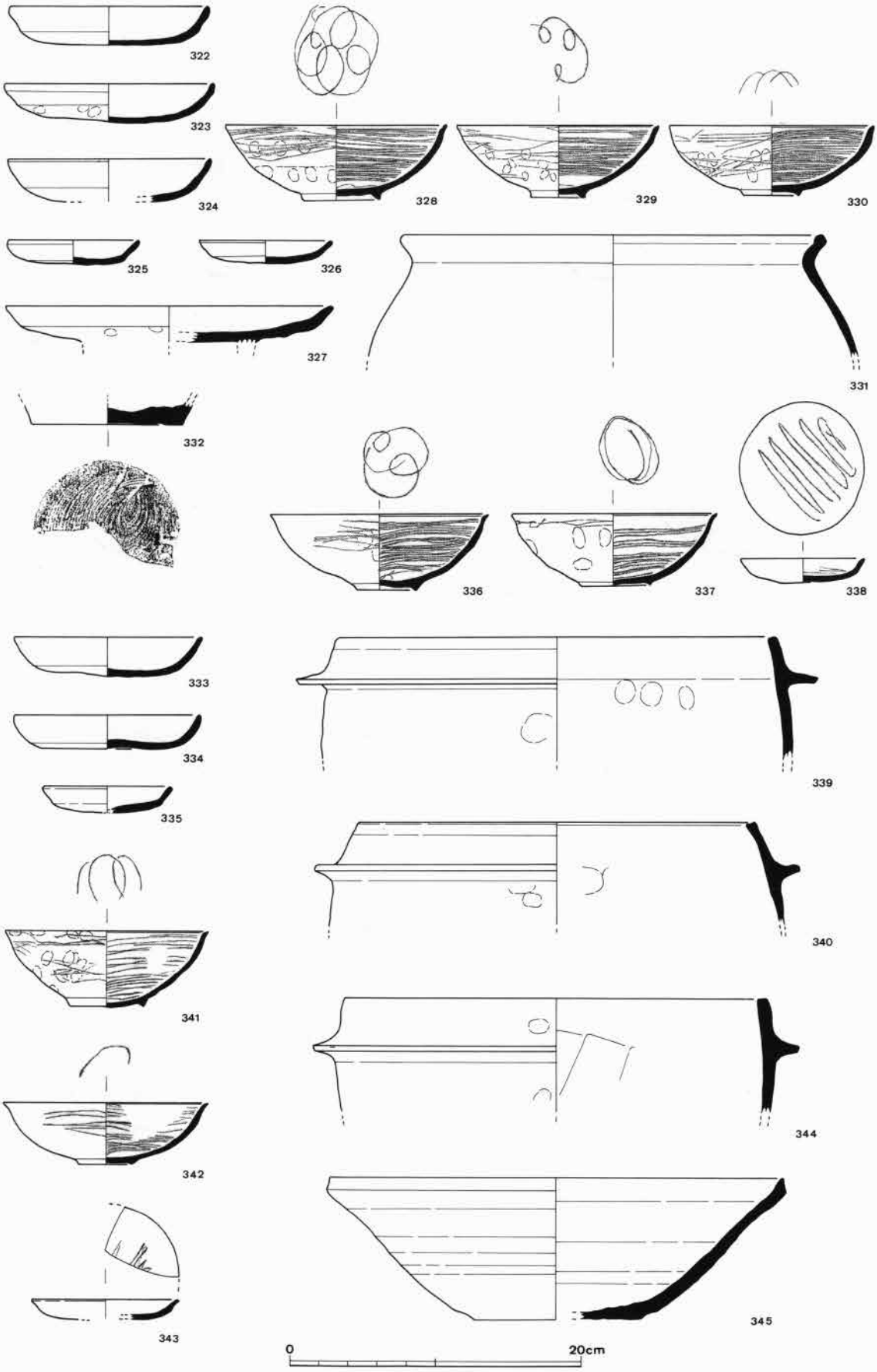
第61図　5トレンチ遺物実測図(3)　283～292. S K118　　293～298. S E118

第Ⅱ段階Ｂ型式に相当する。331は土師器羽釜である。口縁端部を内側に丸く折り返している。332は須恵器壺である。底部は回転糸切りで、特に調整を施さない。時期は12世紀中葉である。

⑤**ＳＫ139出土遺物**（第63図）　333・334は土師器大皿である。口縁部は屈曲せず、ゆるやかに内湾する。335は土師器小皿である。口縁部は二段に屈曲する。336・337は大和型瓦器椀である。第Ⅲ段階Ａ型式新相から第Ⅲ段階Ｂ型式に相当する。338は瓦器小皿である。339・340は土師器羽釜である。12世紀末～13世紀前葉の年代が与えられる。



第62図　５トレンチ遺物実測図(4)　ＳＫ137



第63図　5トレンチ遺物実測図(5)　322～332. SK158　333～340. SK139　341～345. SK143

⑥**ＳＫ143出土遺物**(第63図)　341・342は大和型瓦器椀である。内面の圏線ミガキは間隔が大きく開いている。第Ⅲ段階Ｂ型式に相当する。343は瓦器小皿である。344は土師器羽釜である。345は東播系須恵器鉢である。内面の下半部は磨滅が顕著である。このほか、褐釉陶器壺の小片(図版第41-Ｅ)が出土している。13世紀前葉の年代が与えられる。

⑦**ＳＫ61出土遺物**(第64図)　346～349は土師器皿である。348は口縁部の立ち上がり部分が強く屈曲する。350は大和型瓦器椀である。小破片ではあるが、第Ⅲ段階Ｅ形式に相当すると思われる。351～353は土師器羽釜である。351は口縁端部を外側に折り返すもの、352は口縁端部を内側に折り返すもの、353は口縁部を内側に曲げて丸く納めるもので、いずれも大和産である。13世紀末頃と考えられる。354は火打金である。

⑧**ＳＫ70出土遺物**(第64図)　355～361は土師器皿である。355・356は、口縁部が短く外上方にのびて尖り気味に終わり、357は口縁部外面に面取りを施す。358～361は、口縁部の立ち上がり部分が強く屈曲するものである。362～364は大和型瓦器椀である。362は、内面には粗い圏線ミガキ、外面には上半部にのみ粗いヘラミガキが施され、見込みには螺旋状の暗文が施されており、第Ⅲ段階Ｃ型式に相当する。363・364は、内面に渦巻き状の圏線ミガキが施され、口縁内端面にはかすかな沈線がめぐる。第Ⅲ段階Ｅ型式に相当する。365～369は土師器羽釜である。345～347は、口縁端部を外側に折り返す大和産である。370は須恵器甕である。口縁部まで叩き出しによって成形している。焼成は甘く、瓦質に近い。371は竜泉窯系青磁椀である。このほか、白磁皿Ⅸ類(図版第42-Ｆ)が出土している。357・362・367は、土坑南西部の円形に窪んだ部分から出土している。出土遺物にはやや時期幅があるが、13世紀後半～末頃と考えられる。

⑨**ＳＢ１出土遺物**(第65図)　372は大和型瓦器椀である。内面の圏線ミガキの間隔が開くものである。第Ⅲ段階Ｂ型式に相当し、13世紀前葉のものと考えられる。373は土師器羽釜である。口縁部内面はヘラ状の工具で３段になでられている。外面は指押さえの痕跡が著しい。

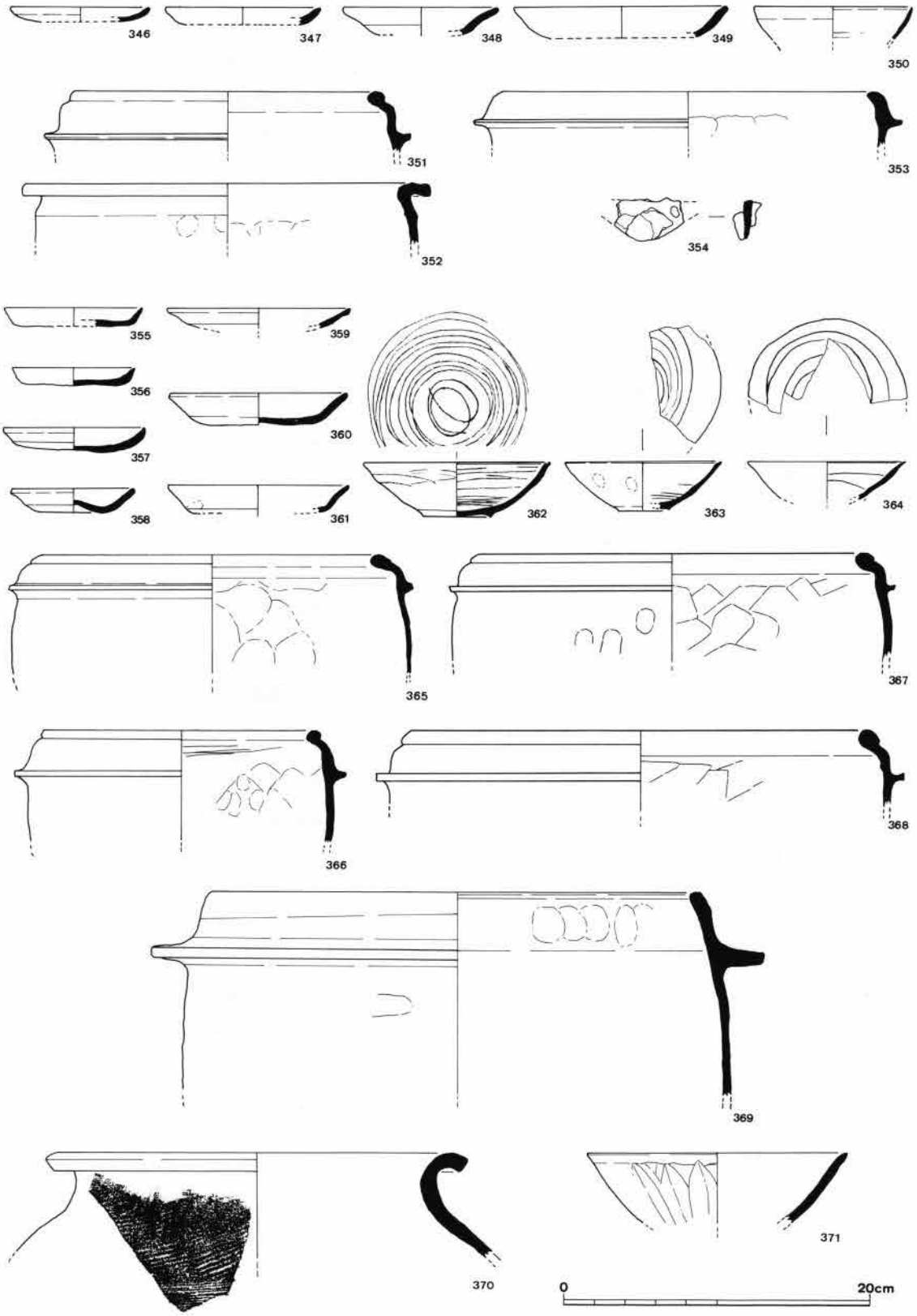
⑩**ＳＢ２出土遺物**(第65図)　374・375は土師器皿である。口縁端部付近が直立気味に屈曲する。376は大和型瓦器椀である。外面にヘラミガキが見られないが、第Ⅲ段階Ｂ型式に相当し、13世紀前葉のものと考えられる。

⑪**ＳＤ108出土遺物**(第66図)　377・378は大和型瓦器椀である。377は、内面にやや隙間の見られる圏線ミガキが施され、第Ⅲ段階Ａ型式古相に相当する。378は、外面にはヘラミガキは見られず、内面にまばらな圏線ミガキが施される。379は土師器皿である。口縁部外面を面取りしている。380・381は土師器羽釜である。380は、口縁端部を外側に折り返す。382・383は東播系須恵器鉢である。384は瓦質土器すり鉢である。内外面の口縁付近には櫛状工具による調整痕が見られる。

⑫**ＳＴ226出土遺物**(第67図)　385は竜泉窯系青磁椀である。畳付以下は露胎である。見込みには細かな傷が多数付いており、被葬者が生前に使用していたのものかと思われる。また、口縁の一部が欠けており、副葬時に打ちかかれた可能性がある。386は土師器皿である。調査時に破損してしまったが、副葬品と考えられる。　(森島康雄)

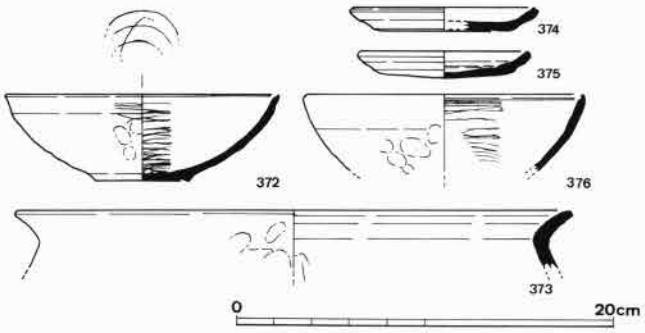
(5)木製品(第68図)

①4－3トレンチＳＥ142出土の木製品　387～390は、漆器で、食事具(おそらく皿)の破片資料である。いずれも素地の遺存状態は良好である。底部を残すものは、いずれも輪高台を挽き出

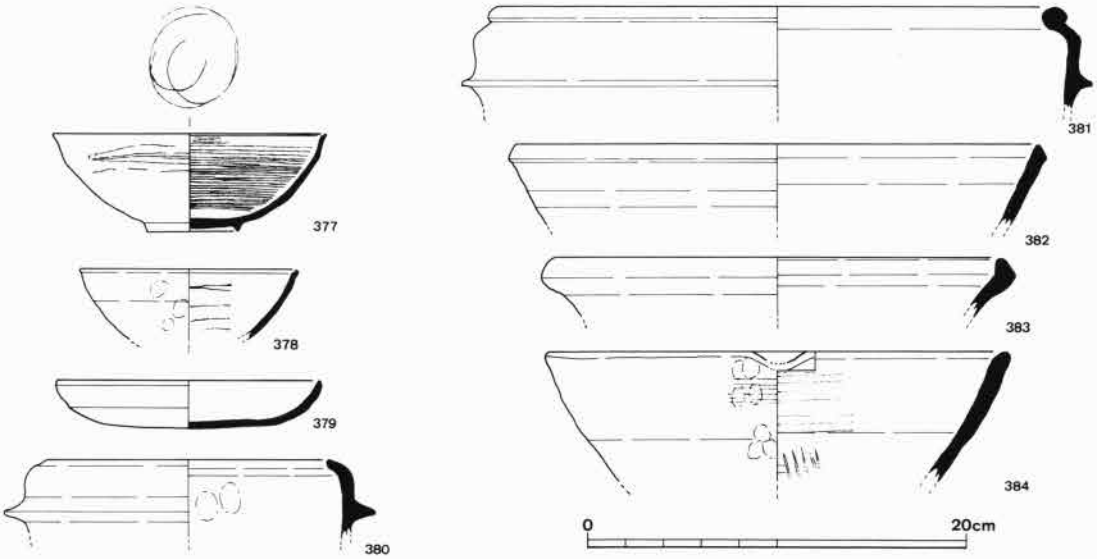


第64図　5トレンチ遺物実測図(6)　346～354. ＳＫ61　　355～371. ＳＫ70

す。器面の彩色は、内外とも黒色系の漆地で、体部内外面に亀甲花文(387)、見込み内面に草花文(390)を赤色漆を用いてスタンプ技法で加飾する。392は、台部と歯を一木で作る連歯下駄である。台部の平面形は小判形(全長22.4cm)で、台部と同じ幅の台形断面を呈する歯を削り出す。ただその歯は、

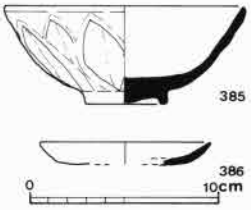


第65図　５トレンチ遺物実測図(7)
372・373. ＳＢ１　　374～376. ＳＢ２



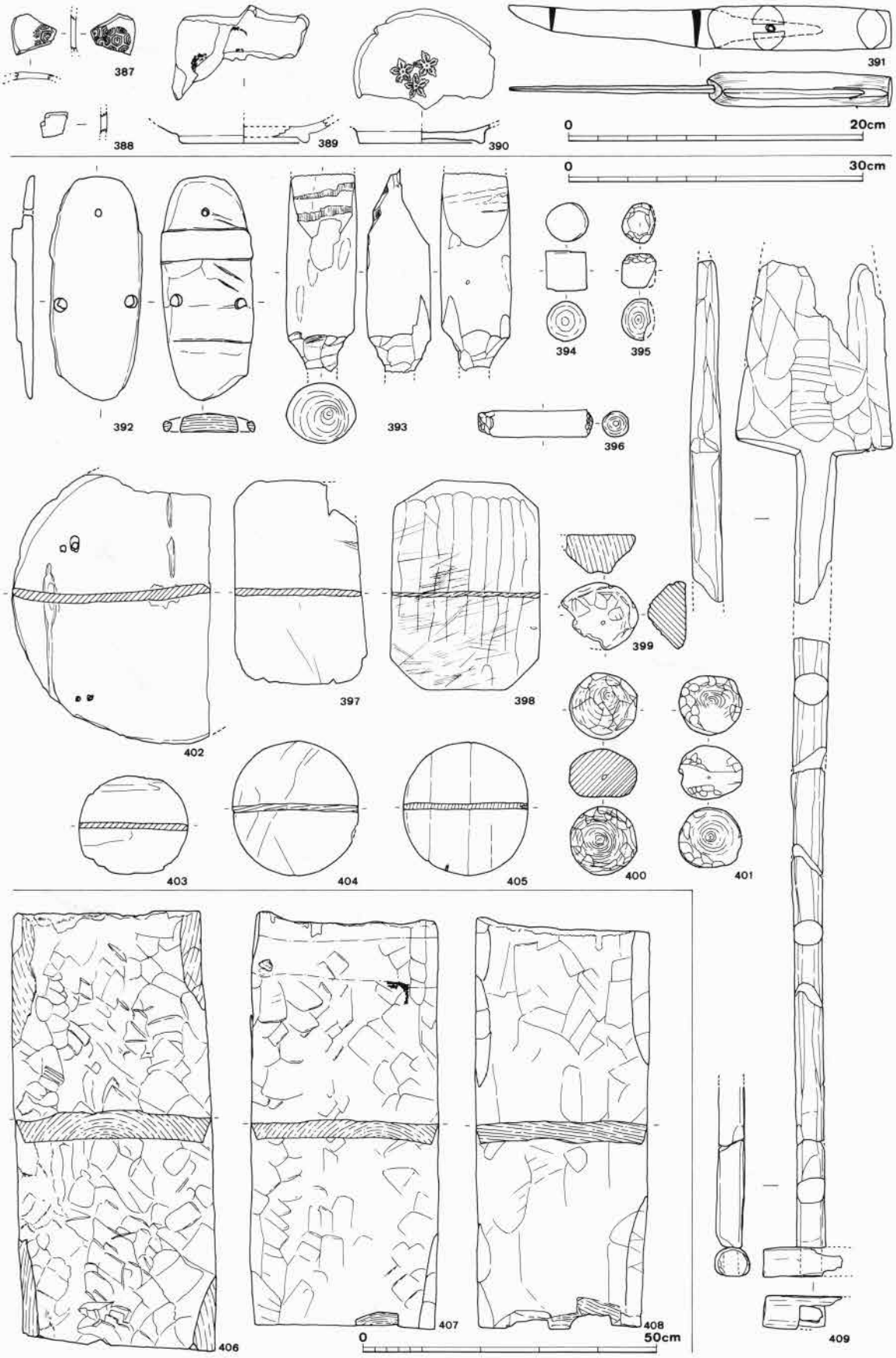
第66図　５トレンチ遺物実測図(8)　ＳＤ108

歩行による磨耗のため高さが著しく減少している。鼻緒を固定する壺孔は、前壺はほぼ中央に、後壺は両端に偏って穿孔される。393は、直径7.0cmの丸太材の両小口側を、一方は２面から、他方は多方向から斜めに軸方向に削り込んだ鑿頭状の木製品である。成形が乱雑で、用途・器種ともに不明の未製品である。394・395は、直径4.0cm前後・長さ3.5～4.0cmを測る円筒形、396は直径2.6cm・長さ11.6cmを測るやや長い円筒形を呈する用途不明木製品である。395・396は、両小口を斜め方向に細かく面取りしているが、394はそのような加工痕跡はない。397・398は、折敷の天板もしくは底板である。ともに柾目材の一枚板で、四隅をカットした角切折敷の部材である。398は、表裏面とも加工痕が残り、片面に線状痕が密に入る。周縁に桟を取り付けるための仕口はみられない。399～401は、木球である。直径6.0～7.0cmの短い円筒状の部材の両小口を斜め方向にノミで細かく面取りして楕円球状に仕上げている。399は、三角錐形を呈しているが、底面は平坦で、毬杖(ぎっちょう)の球として遊技中に割裂したものであろう。



第67図　５トレンチ遺物実測図(9)
ＳＴ226

②その他の遺構出土の木製品　391は、２トレンチＳＥ174下層から出土した木柄が装着された



第68図　木製品実測図

387～390･392～401. S E 142　391. S E 174　402･403. S K 9502　404. S K 194　405～408. S E 104　409. S K 9504

短刀である。刀身の全長は21.5cmを測る。刃部は、刀尖形で、背にわずかな内反りがある。刃線は使用時の変形であろうか中程にくびれがある。関は両関で、傾斜のゆるやかな斜角関状を呈する。茎は、茎尻に向かって徐々に幅を狭める。茎の中位に径５mmの目釘孔が１孔穿たれる。木柄は、断面が杏仁形を呈し、柄頭は圭形に整形する。402・403は、１トレンチの墓ＳＫ9502から出土した円盤状の木製品である。ともに遺存状態は悪いが、その規模から402(復原径20cm)は曲物、403(径7.5cm)は柄杓の底板とみられる。404・405は、ほぼ同形同大(直径12.7cm)の小形曲物の底板である。404は、図示面に線状痕がみられ、ほぼ全面に黒漆が塗布された形跡がある。404はＳＫ194、405はＳＥ104の水溜め内から出土した。406～408は、４－３トレンチのＳＥ104水溜め側に用いられた部材で、同様のものが７枚あるが、そのうち３点を図示した。平面形は、上下の幅がほとんど変わらない長方形を基本とするが、上辺は腐蝕してやや変形している。規模は、長軸70.0～76.0cm・短軸(幅)21.0～33.0cm・厚さ3.0cmを測る。横断面形は、ほとんど円弧を示さない直線的なラインを示すが、長側辺は同じ方向(図の裏側方向)に斜めに削り加工を施して円筒形に組めるように細工している。表面には手斧による粗い加工痕がある一定方向をもって顕著に残る。また、裏面側の四隅を斜めに削って板厚を減じたものが目立つ。中には、407・408のように下端に浅い方形の抉り込みをもつものがある。409は、１トレンチのＳＫ9504の深掘り部からばらばらの状態で出土した一木平鋤である。身部は、先端を欠損するが、その側辺は、両側から斜めに刃先状に削って「Ｕ」字形の鉄製鋤先の装着部とする。鋤身部の横断面は、木表側(図の裏側)は平坦面だが、木裏側は凸レンズ状に膨らむ。柄は、断面が多角形に近い円形で、おそらく直線状を呈するものとみられる。柄元は「Ｔ」字形を呈し、柄に対して直交する別材の円筒形の把手を枘組接合している。

(伊賀高弘)

５．まとめ

今回の調査では、調査対象範囲の大半に、黄灰色粘土の安定した遺構面が存在することが判明した。調査対象地の縁辺部で行われた立会調査の成果によれば、この遺構面は調査地の南東隅と北西隅付近では認められないことなどから、遺跡の立地する自然堤防は、北でやや東に振る方向にのびていると考えられる。

検出された遺構のうち最も時期のさかのぼるものは、11世紀のものである。11世紀から12世紀前半までの遺構は、４－３トレンチＳＥ301、４－１トレンチ下層の柱穴、２トレンチＳＥ174、５トレンチＳＥ118・285などがあるが、散在している。

12世紀後半になると、５トレンチを南北に貫くＳＤ108が掘削され、その東側に遺構が集中しはじめる。13世紀には、５トレンチのほか、１・２トレンチを貫いて100m以上にわたって続くと考えられる溝をはじめ、１トレンチでも多くの遺構が検出され、また、調査対象地北部の４－３トレンチでも遺構が集中する。12世紀後半から13世紀が、遺構・遺物ともに最も多い時期であり、この集落の最盛期と考えられる。これらの遺構も、14世紀中葉頃を最後に消滅し、この頃に

集落が廃絶したものと考えられる。

この後は耕作地となったようで、近世に入ると、国役堤が築かれたために逆に悪水が抜けなくなって洪水の被害を受けるようになったためか、砂の堆積が目立つようになる。５トレンチでは、12世紀後半に掘削されたＳＤ108を継承する地境い溝が、砂が堆積するたびに徐々に西に移動して行くようすが断面で確認された。これは、調査地周辺にみられる相楽郡条里残存遺構とされる方格地割りの形成過程を考えるうえで貴重な資料である。

出土遺物では、供膳具は、全時期を通じて瓦器椀をはじめとする大和の土器が大半を占めるが、煮炊具は13世紀後半ごろから大和産が主体を占めるようになる。特徴的な遺物としては、中国製の褐釉四耳壺や白磁四耳壺、亀山窯や十瓶山窯の須恵器甕などがある。これらは、木津川・淀川を通じた舟運によってもたらされたものと考えられ、この集落の性格を示す資料と考えられる。

（森島康雄）

注１　京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏のご教示による。

注２　注１に同じ。

注３　瓦器椀の型式と年代観は川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1983）、森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」（『大和の中世土器』Ⅱ　大和古中近研究会　1992）によった。

※調査に参加していただいた方がたは以下の通りである（五十音順、敬称略）

青木満里子・石井伸卓・五百磐顕一・井ノ口雄三・奥村茂輝・岸本貢一・木下町子・木本昌英・小松厚子・坂手華子・島田征二・新谷二三代・田中美恵子・辻　道子・中島恵美子・中村久登・西根正弘・林恵子・林　益美・古川良子・三浦公靖・室林由香・山口良太・山田三喜子・山本弥生・芳谷達也・芳谷與子・吉永清美

4．一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)発掘調査概要

1．はじめに

今回の調査は、一般地方道富野荘八幡線の道路建設に伴い、京都府土木建築部・京都府田辺土木事務所の依頼を受けて行った。本書には、この調査に関連する、西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡の3遺跡の調査概要を掲載する。発掘調査の対象となった富野荘八幡線(通称山手幹線)は、京都府南部の山城地域を縦断する木津八幡線のバイパス道路として計画されたもので、本路線に係わる調査は、当調査研究センターでは、八幡市域以外にも数か所で実施してきた。

宮ノ背遺跡は、平成3年度に大阪工業大学の造成工事に先だって八幡市教育委員会が試掘調査(第1次調査)を実施しており、土坑や溝状の遺構とともに弥生時代後期の土器が出土している。また、西ノ口・備前の両遺跡についても、分布調査によって弥生時代から古墳時代にかけての遺物散布地として周知されている。[注1]

初年度にあたる平成8(1997)年度の調査は、西ノ口遺跡と宮ノ背遺跡の2遺跡を対象に実施した。このうち、西ノ口遺跡では、まず範囲確認のための試掘調査を先行した。この結果、弥生時代の竪穴式住居跡などを検出したため、遺構の検出地点を中心に調査範囲を拡張した。なお、平成8年度の調査は、期間の都合で、出土遺物の整理と調査概報の作成を9年度に実施した。

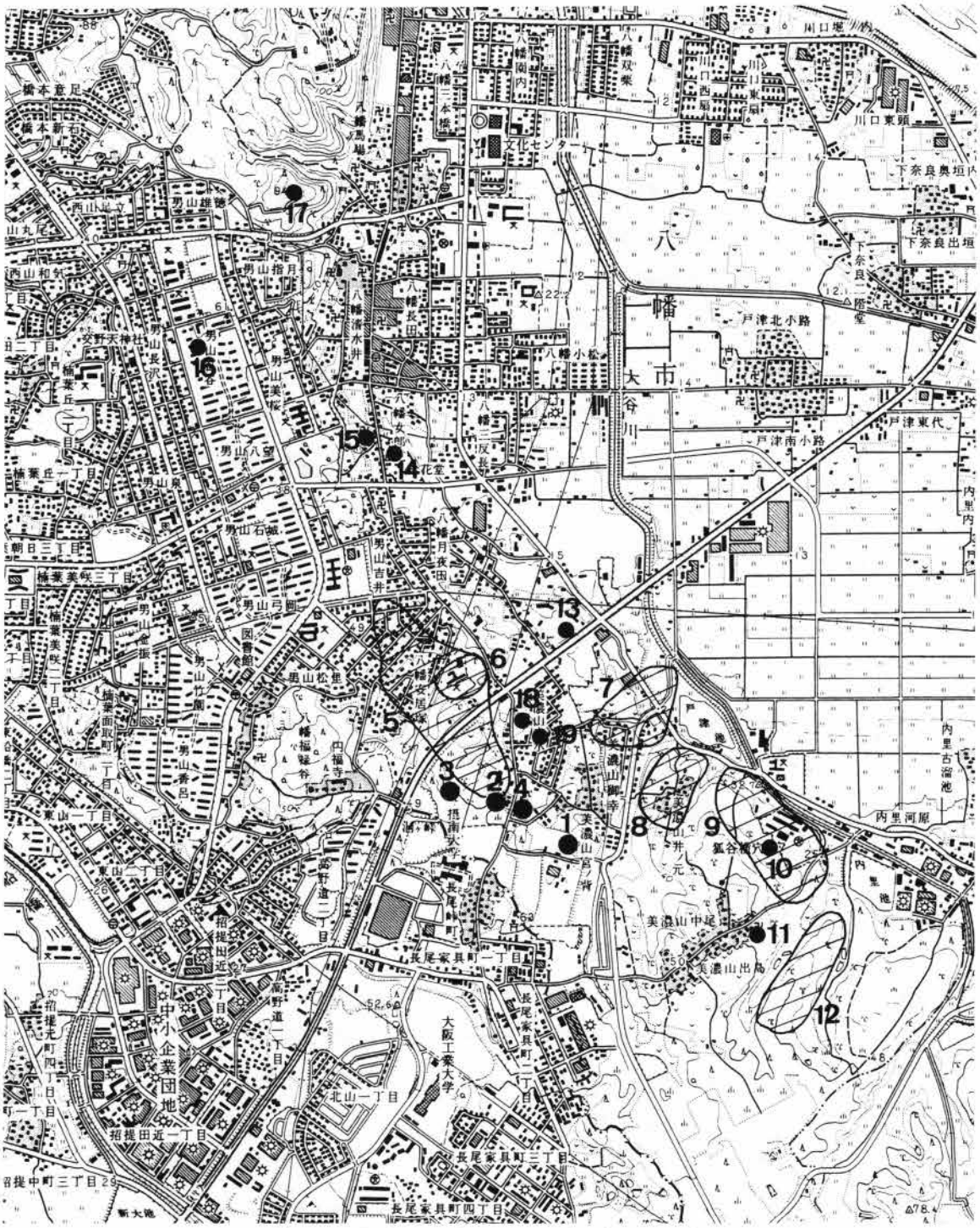
平成9(1998)年度は、宮ノ背遺跡の範囲で前年度に未着手であった大阪工業大学敷地内の範囲と、西ノ口遺跡内を走る府道長尾八幡線(長尾街道)から国道1号線枚方バイパスに至る予定路線区間を対象に調査を行った。後者の範囲内には、西ノ口と備前の二遺跡が含まれるが、対象区間が延長のため試掘調査を先行して行った。この試掘調査の結果、両遺跡ともに遺構・遺物が確認され、遺構の検出範囲を中心に本調査を実施した。

平成8年度の現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同調査員奈良康正が、平成9年度は、同調査第2課調査第1係長伊野近富・同調査員河野一隆が担当した。両年度にわたる各遺跡の調査期間・調査面積については、付表に示した(付表1)。本書の作成にあたっては、各年度の現地調査担当者が分担して執筆した。[注2]

付表1　調査一覧表

調査年次	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積
平成8年度	宮ノ背遺跡(第2次)	八幡市美濃山宮ノ背	1996.11.14～1997.2.27	約380㎡
	西ノ口遺跡	〃　〃　西ノ口	1996.10.15～1997.2.27	約580㎡
平成9年度	宮ノ背遺跡(第3次)	〃　〃　宮ノ背	1997.6.22～1997.10.9	約500㎡
	西ノ口遺跡(第2次)	〃　〃　西ノ口	1997.8.6～1997.10.9	約500㎡
	備前遺跡	〃　〃　備前	1997.8.6～1997.10.9	約450㎡

調査に係わる経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。また、調査期間中、八幡市教育委員会・京都府田辺土木事務所・摂南大学・地元区長・若宮八幡宮をはじめ、多くの方がたのご指導及びご協力をいただいた。ご厚意に対し、調査担当者一同、感謝したい。　（辻本和美）



第69図　調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

1. 宮ノ背遺跡　2. 西ノ口遺跡(平成9年度)　3. 備前遺跡　4. 西ノ口遺跡(平成8年度)
5. 南山古墳群　6. 南山遺跡　7. 幸水遺跡　8. 金右衛門垣内(井ノ元)遺跡
9. 狐谷遺跡　10. 狐谷横穴群　11. 美濃山王塚古墳　12. 美濃山廃寺下層遺跡
13. ヒル塚古墳　14. 東車塚古墳　15. 西車塚古墳　16. 八幡茶臼山古墳
17. 石不動古墳　18. 西二子塚古墳　19. 東二子塚古墳

2. 周辺の主要遺跡(第69図)

八幡市の西南、男山丘陵から南にのびる低平な美濃山丘陵は、ベッドタウンとしての宅地造成が著しく、鬱蒼たる竹林が広がる往時の景観は失われている。この地区には、拠点的な集落である金右衛門垣内(井ノ元)遺跡、南山遺跡や、美濃山王塚古墳・ヒル塚古墳などの弥生～古墳時代の多くの遺跡が知られている。このうち、発掘調査と関連する成果としては、南山遺跡(第1・2次調査)で火災住居跡が、幸水遺跡では弥生時代中期末と庄内期の方形周溝墓が検出されている。この、美濃山丘陵西側は大阪府枚方市に接しており、弥生時代遺跡の広がりも確認されることから、北河内の弥生時代集落と一連のものとみられよう。また、現在は国道1号線が、かつては旧山陽道や洞ヶ峠を越える東高野街道が通じ、北河内や淀川流域の交通の要衝でもある。

(河野一隆)

3. 平成8年度の調査

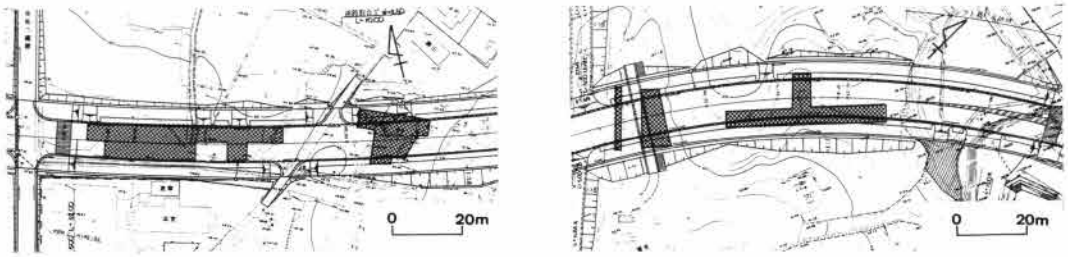
(1)西ノ口遺跡

①調査の概要

西ノ口遺跡は、平坦な丘陵地からなる美濃山丘陵のほぼ中央付近に位置する。宮ノ背遺跡とは、間に小さな開析谷を挟んで約250mほど離れ東西に対峙する。この谷は、現在、大阪経済大学の校地造成のために一部が埋め立てられ、大きく改変されている。調査地は、ほぼ平坦な地形を呈するが、仔細に見れば、南西から北東方向にかけてゆるやかに傾斜する。標高は45m前後を測る。周辺は、畑や竹林がひろがり、遺跡の中央を八幡市(旧山城国)から大阪府の枚方市(旧河内国)に抜ける府道八幡長尾線(長尾街道)が通じている。

今回の調査は、まず、路線範囲の内、前記の府道から東側に向かって、延長約120mの範囲を対象にトレンチ掘りによる試掘調査を実施した。試掘トレンチは、調査地内を走る里道を境にして東西に2か所設置した。東側を第1トレンチ、西側を第2トレンチと呼称する(第70・71図)。

この試掘調査によって第1トレンチからは、円形竪穴式住居跡の一角を、また、第2トレンチからは、土坑状の落ち込みや溝・ピットなどを検出した。このため、試掘調査に続き、これらの遺構の性格を明らかにするためにトレンチ範囲の拡張を行った。調査地の基本的な層序は、耕作土、暗茶褐色土層(遺物包含層)、橙赤褐色土層(遺構検出面)の順である。第2トレンチでは、現表土下に厚さ0.3～1.8mの盛り土層があり、その下に弥生時代中期後半から後期の土器が出土する包含層(黄褐色土層)が堆積する。土坑や溝などの遺構は、この包含層の下で検出した。第2ト



第70図　西ノ口遺跡(左)・宮ノ背遺跡(右)調査トレンチ配置図

レンチの遺構検出面は、西側の府道寄りが一番高く、東に行くに従って深く落ち込むが、おそらく第１トレンチとの間に谷状の地形が存在すると思われる。

②**検出遺構**（第72図）

竪穴式住居跡１　トレンチのほぼ中央で検出した。住居跡の東北及び東南側部分は、後世の削平で失われているが、中心部を含む約1/3ほどが残存する。復原直径は、約10.1ｍを測る。検出面から住居跡床面までの深さは、30cmほどが遺存する。床面で、周壁溝・主柱穴及び戸跡を検出した。周壁溝は、幅約20cmを測る。周壁溝の西辺からは、排水溝と思われる溝が西方へのびている。主柱穴は、床面遺存部分から６か所確認できたが、本来は、８本柱であったと考えられる。床面中央の炉跡は、約1.6ｍ×約1.2ｍの楕円形を呈し、幅約30cmの溝が外へのびる。炉跡の周辺や住居跡の西側部分にかけて、床面に炭の広がりが認められるが、焼失住居跡のような炭化材は出土していない。住居跡の所属時期は、弥生時代後期に比定される。

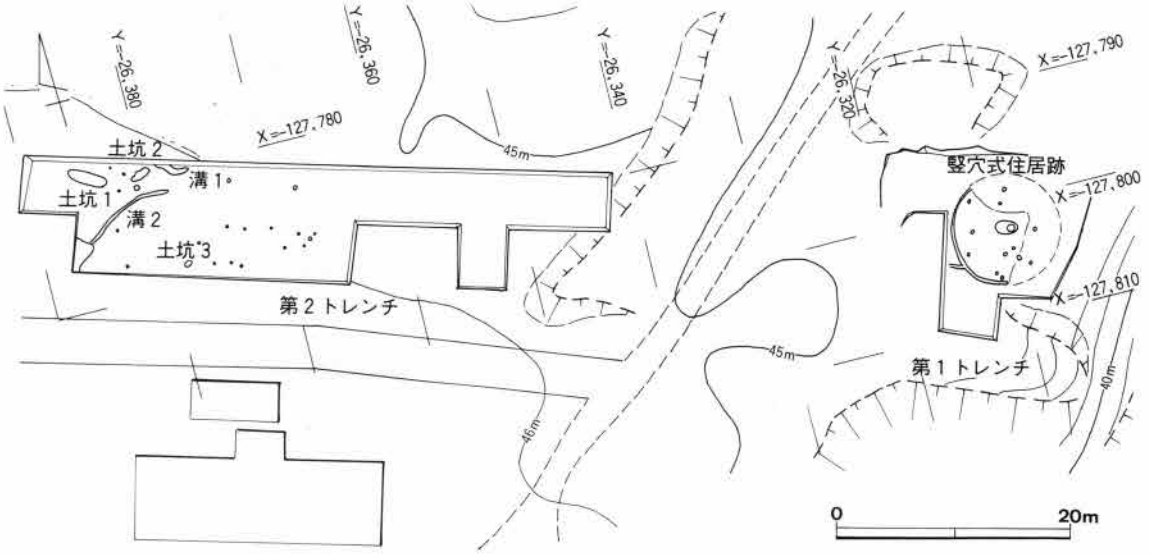
溝１　第２トレンチ西側の北壁際で検出。北西にやや湾曲し、そのまま調査地外へのびる。幅は、20～50cm・深さ約10cmを測る。弥生時代後期に属する。

溝２　同上トレンチ西端中央付近で検出した。南西から北西方向に蛇行しながら走り、南西端で土坑状に広がる。幅15～40cm・深さ10～20cmを測る。溝１と同じく、弥生時代後期に属する。

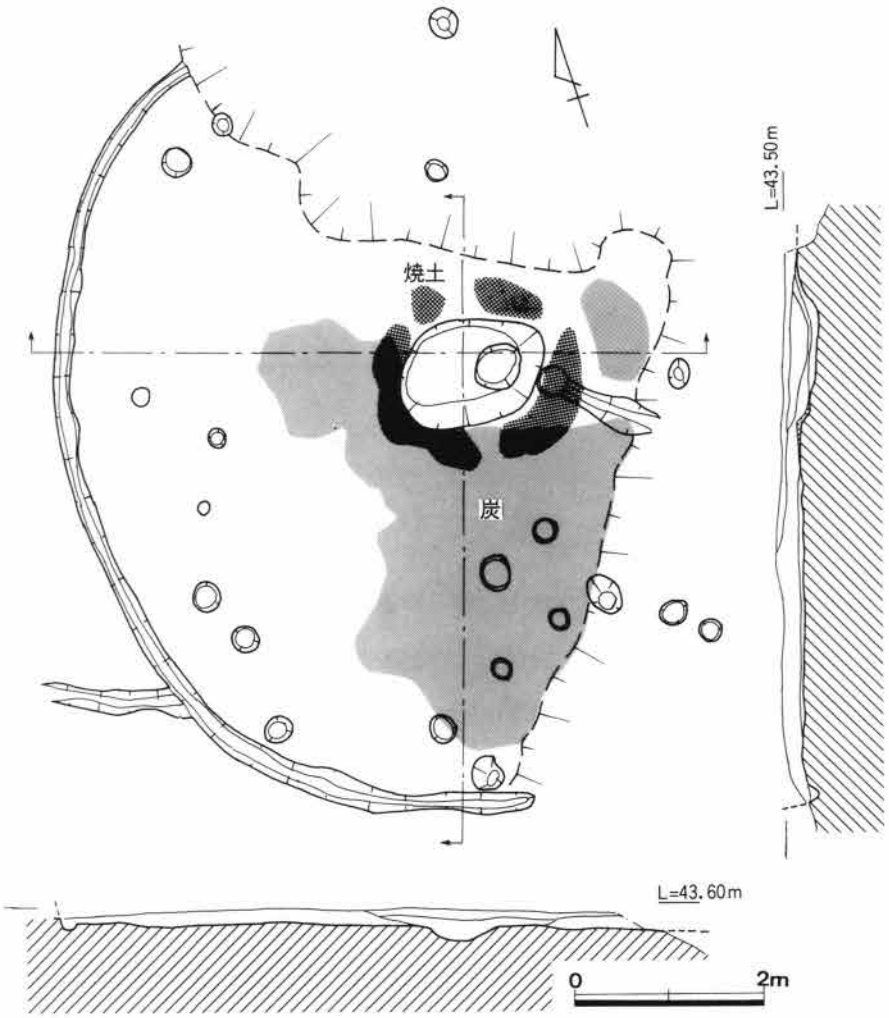
土坑１　同上トレンチの北西隅で検出した。平面形は、いびつな長楕円形を呈する。長軸3.7ｍ・短軸50～70cm・深さ約30cmを測る。弥生時代後期に属する。

土坑２　同じく西側北壁寄りで検出した不整形な平面形をもつ土坑。長軸約1.9ｍ・短軸50～70cm・深さ約30cmを測る。弥生時代後期に属する。

土坑３　同じく中央南壁際で検出した。平面形は、楕円形を呈する。長軸約１ｍ・短軸50cm・深さ約30cmを測る。弥生時代後期に属する。



第71図　西ノ口遺跡遺構配置図

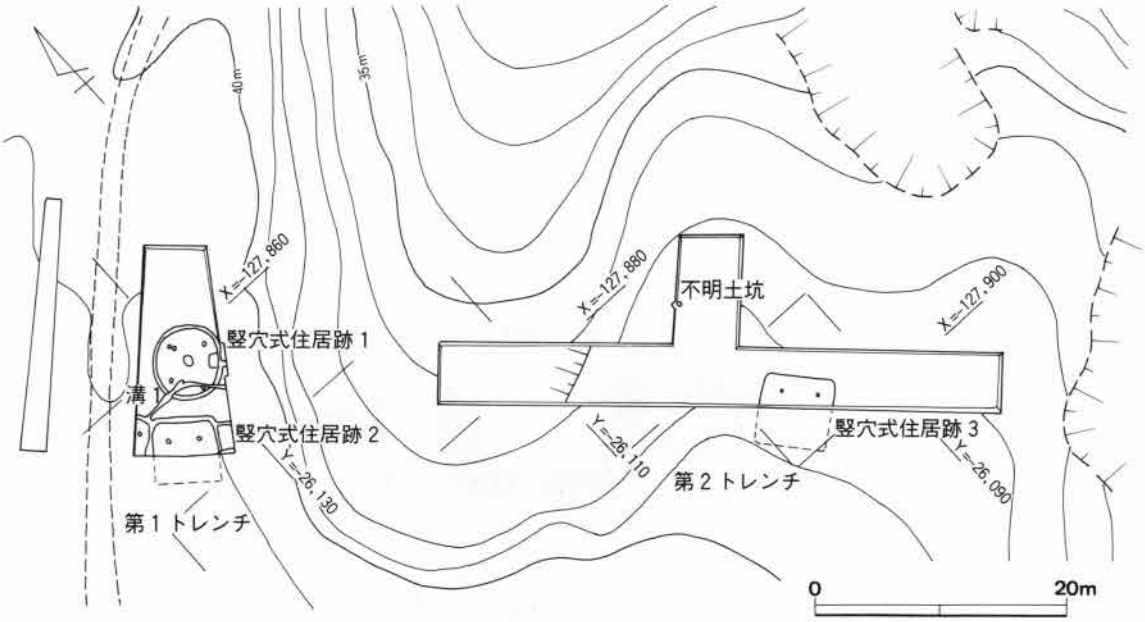


第72図　竪穴式住居跡１実測図

(2)宮ノ背遺跡(第２次調査)

①調査の概要

調査地は、南から北方向にのびる丘陵の先端部に位置し、現状は、若宮八幡宮の境内地及び杉の植林地として利用されている。丘陵の先端部は、標高約30～40mの等高線がめぐる小さな平坦地を形成しており、この平坦地からやや急な傾斜をもって丘陵斜面下へと続いている。丘陵裾部を走る道路面との比高差は、約５mを測る。この丘陵端部には、さらに北方向から小さな谷地形が入り込み、発掘調査は、この谷を挟んで東西の２つのトレンチを設けて実施した。西側に位置するトレンチを、第１トレンチ、東側を第２トレンチと呼称する。第１トレンチからは、円形ないし隅丸方形の竪穴式住居跡１基と方形竪穴式住居跡１基の、計２基の住居跡を検出した。また、この第１トレンチの西側に、神社の参道を挟んで、ほぼ平行に細長い試掘トレンチを開けたが、顕著な遺構は確認できなかった。第２トレンチは、丘陵先端部を縦断する形で設置した。調査の結果、谷地形の斜面部にあたるトレンチの北東側では、谷を埋める土砂の堆積状況が知られたのみで、遺構などは、確認できなかった。トレンチ南東側では、方形竪穴式住居跡１基と土坑１基



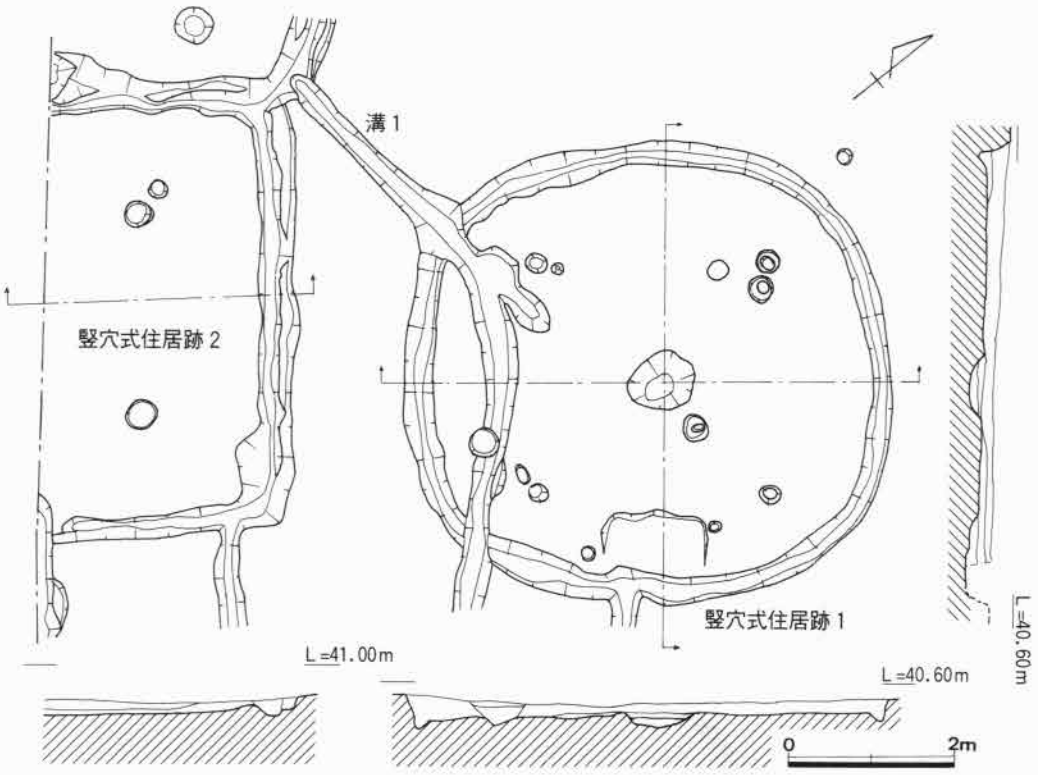
第73図　宮ノ背遺跡遺構配置図

を検出したが、全体に削平が著しく、これ以外には顕著な遺構は認められなかった。遺構は、表土である腐植土直下の黄褐色地山面から検出された(第70・73図)。

②**検出遺構**(第74図)

竪穴式住居跡１　直径約６ｍの円形を呈するが、主柱穴が結ぶ建物辺と対応する住居壁が、やや直線的に走り、長軸約5.9ｍ・短軸約5.5ｍの隅丸方形の平面プランに近い形態をとる。検出面から住居跡床面まで約30cmが残存する。住居壁に沿って周壁溝が全周する。溝の幅は20～30cm・深さ約10cmを測る。南東部では、周壁溝から、幅約30cm・深さ約40cmを測る溝が住居跡外にのびており、排水溝と考えられる。住居跡に伴う主柱穴は、４か所で確認されていた。柱径は平均約30cm、深さは約20cmで、各柱間は約2.8ｍを測る。柱が結ぶ各辺の方位は、南北軸に対し約45°の傾きをもつ。住居跡内の東側の壁際に約0.6ｍ×約1.2ｍの範囲に方形に掘りくぼめた部分があり、その両脇に直径15cmほどのピットが２か所穿たれていた。住居入口に伴う施設と考えられる。床面の中央には、約80cm×約70cmの範囲に炉跡の焦土面が広がる。後述する溝１が、住居跡の南側を横断する。住居跡の時期は、内部から出土した土器から弥生時代後期の中葉～後葉頃と考えられる。

竪穴式住居跡２　一辺約5.6ｍの方形を呈する。南側は調査地外になり、住居跡の北側約半分の範囲を確認した。住居跡の各辺は、東西南北の方位に対し45°ほどの振れをもつ。検出面から住居跡床面までの深さは、約20cmを測る。住居壁に沿って周壁溝がめぐるが南東端で一旦途切れ、全周していなかったと思われる。周壁溝の幅約30cm・深さ約20cmを測る。床面には、それぞれ住居壁から約1.5ｍ内側に入った位置に、２本の柱穴が遺存するが、調査地外のものを含め４本柱であったとみられる。柱の直径約30cm・深さ約18cmで、柱間は約2.3ｍを測る。住居跡の北側には、約20cmほど拡張を行った痕跡がみられる。炉跡は、今回の範囲内では確認されなかった。住居跡の北辺に重なって北西から南東方向の溝１がこの住居跡を切って走る。住居跡の時期は、竪



第74図　竪穴式住居跡1・2、溝1実測図

穴式住居跡1と同じく弥生時代後期と考えられるが、前者が先行する可能性が高い。

竪穴式住居跡3　第2トレンチの中央からやや東に寄ったところから検出した。上面が削平を受けており残存状態は悪い。一辺約5.8mの方形を呈するが、住居跡の約半分は調査地外にのびる。周壁溝は、西側面のみに遺存する。主柱穴は、住居跡床面の2か所で検出したが、本来は4本柱と思われる。

溝1　第1トレンチの北西部を東西に横断する形で検出した。溝の幅は約25cm、深さは45cmを測る。調査区内の東端で2本に分岐し、一つは、竪穴式住居跡2の周壁溝につながり、もう一つは、竪穴式住居跡1の南側を横切り調査地外へのびる。

この他、第2トレンチの拡張部分から焼け土を含む土坑を検出したが、時期や性格などは不明である。

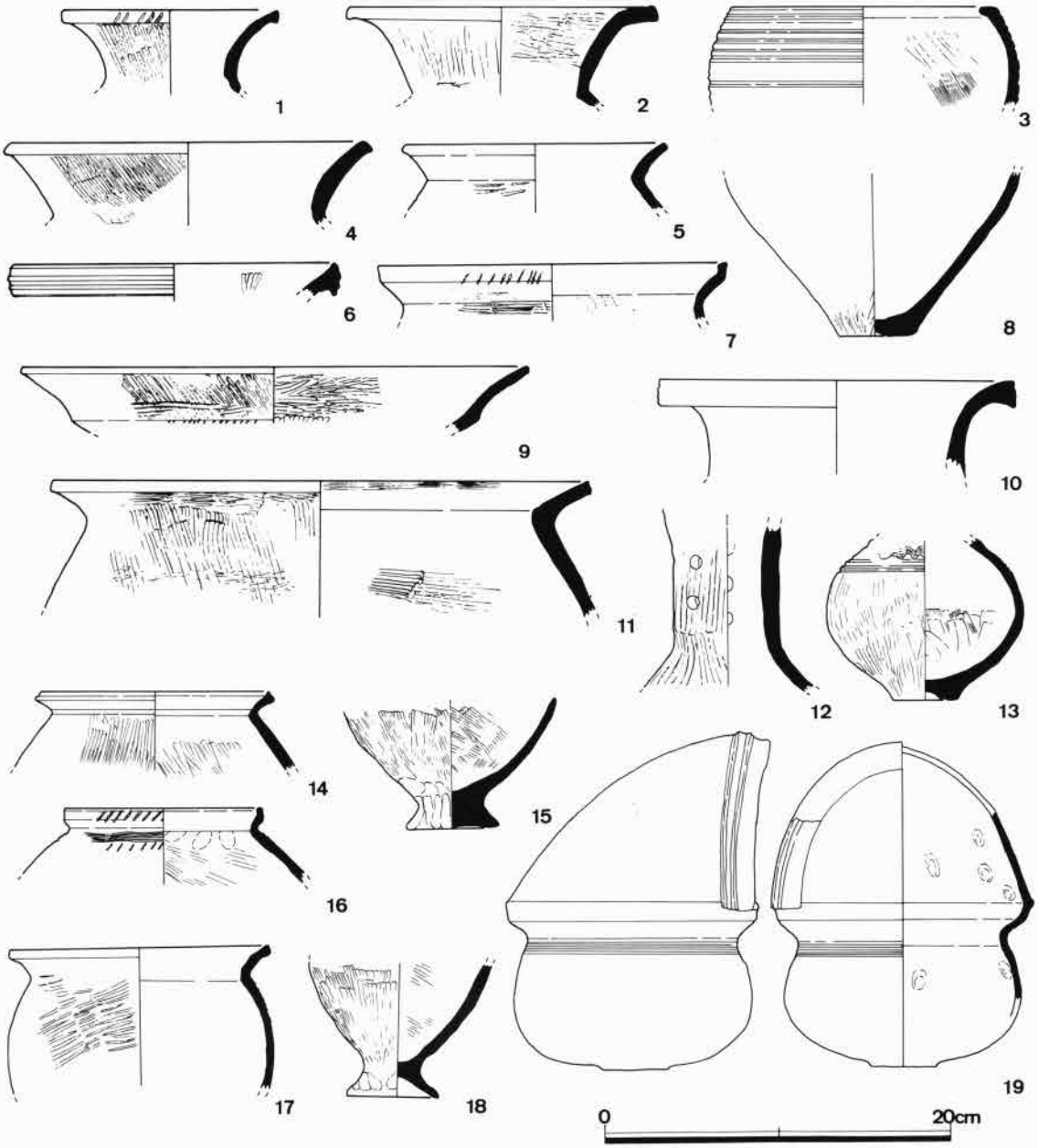
(3)出土遺物

①弥生土器(第75図)

西ノ口遺跡と宮ノ背遺跡を合わせて記述する。いずれも破片で全形がわかるものは少ない。

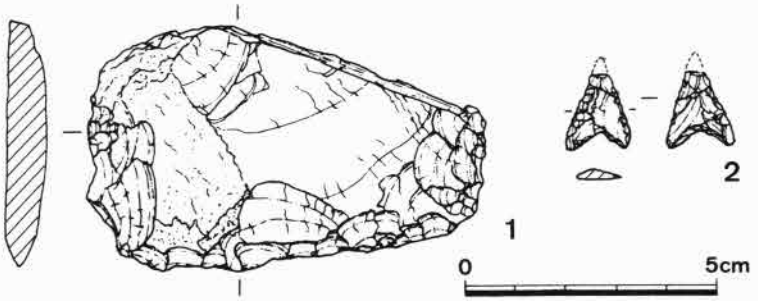
1・4・10は、体部から「く」の字形に外反する頸部をもつ壺の口縁部である。1は、口縁端部を上下に肥厚させ、端部の平坦面に棒状のキザミ目を施す。4は、頸部外面に細かなハケ目を施す。1の復原口径12.3cm、同じく4は18.4cm、10は18.6cmを測る。2も壺の口縁部で、体部の肩から「く」の字形に屈曲する頸部をもち、口縁部は、途中から端部に向かって水平ぎみにのびる。頸部外面は、縦方向、内面は、横方向のヘラ磨きを施す。色調は、淡黄褐色を呈する。復原

口径17.6cmを測る。３は、無頸壺の体部上半部。口縁端部を内側に折り返し、上面に平坦面をつくる。体部外面には、凹線をめぐらしている。胎土に雲母片を含み、淡褐色を呈する。復原口径15.1cmを測る。５は、単純「く」の字形の頸部をもつ甕で、体部外面に右上がりのタタキを施す。口縁部には、煤が付着する。復原口径15.1cmを測る。６は、壺または器台の口縁端部と思われる。口縁端部の上下に粘土を補充し幅のある面をつくり、そこに３条の凹線をめぐらす。内面は、ていねいなヘラ磨きを施す。復原口径18.4cmを測る。７は、「く」の字形に屈曲する頸部から、外反ぎみに短く立ち上がる、いわゆる近江系の受け口状の口縁部をもつ壺、あるいは、甕の可能性もある。口縁部外面に櫛描き列点文、体部外面に櫛描き直線文を施す。復原口径20.2cmを測る。８は、甕体部の下半で、やや突出ぎみの平底をもつ。体部にはタタキ目をもつが、磨滅が著しく不明瞭である。体部外面には煤が付着する。底部径は、4.7cmを測る。９は、高杯の杯部上半部



第75図　出土土器実測図

である。斜め上方に立ち上がる杯部から、口縁部は、外反ぎみに立ち上がり皿状を呈する。杯部と口縁部との屈曲部に、ヘラ状の工具でキザミ目を施す。杯部内外面ともにていねいなヘラ磨き調整を施す。復原口径34.5cmを測る。



第76図　石器実測図

11は、体部から強く屈曲する単純「く」の字形の頸部をもつ甕で、口縁端部に面をつくる。体部外面と内面にハケ目を施す。大型品で、復原口径は30.9cmを測る。12は、器台で、円筒形の脚柱状部から下方向に開く裾部をもつ。柱状部には、三方向から穿たれた径6㎜の透かし孔が縦列に並ぶ。脚部外面はていねいなヘラ磨きを施す。13は、球形の体部をもつ小型の壺で、体部の上半から肩部にかけて、櫛描きの波状文と直線文をめぐらす。底部は、突出ぎみの平底で中央部が凹む。体部内面は、ハケ目調整を施す。14・16は、「く」の字形に屈曲する頸部から直立ぎみに短く立ち上がる口縁部をもつ甕である。14の口縁端部は、つまみ上げぎみに終わり、口縁部の断面形は、やや外側に張り出した稜をつくる。体部外面は、粗いハケ目調整を施す。色調は、淡黄褐色を呈する。復原口径13.2cmを測る。16の口縁部は、受け口状を呈するが、先述した7より口縁部の立ち上がりは短い。口縁部外面に櫛描き列点文、体部外面に櫛描き直線文と櫛描き列点文を施す。いわゆる近江型の甕である。色調は淡黄褐色を呈する。復原口径11.4cmを測る。15・18は、台付き鉢で、台部から斜め上方に立ち上がる体部へと続く。15は、中実の突出した平底をもつ。18は、裾を外側に開く脚台をもつ。脚台部には、指頭圧痕を残す。体部は内外面ともハケ目調整を施す。17は、丸みを帯びた体部に単純「く」の字形の口縁部をもつ甕である。口縁部は外反し、端部は、丸くおさめる。体部外面には、右上がりのタタキを施す。外面には、煤が付着する。復原口径15cmを測る。19は、手焙り形土器で、部分破片から図上で復原した。鉢部は、体部から「く」の字形に屈曲する口縁部をもち、口縁端部は、受け口状を呈する。覆部は、鉢の口縁部からそのまま続くもので、口縁端部の外周にひさし状の貼り付け突帯をもつ。鉢部の頸部外面に櫛描きの直線文をめぐらす。

1・2・4～12・16・17は、西ノ口遺跡、3・13～15・18・19は、宮ノ背遺跡の出土である。このうち宮ノ背遺跡の13・15・18・19は、竪穴式住居跡1から出土した。

②**石器**(第76図)

1は、削器で粗く加工した剥片側辺に刃部をつくる。最大長2.1cm・幅2.2cm・厚さ0.6cmを測る。2は、凹基無茎式石鏃。先端を欠損する。残存長1.5cm・幅1.3cm・厚さ0.2cm。いずれも西ノ口遺跡包含層から出土した。サヌカイト製で縄文時代に属すると思われる。

(辻本和美・奈良康正)

4.　平成９年度の調査

(1)宮ノ背遺跡(第３次)

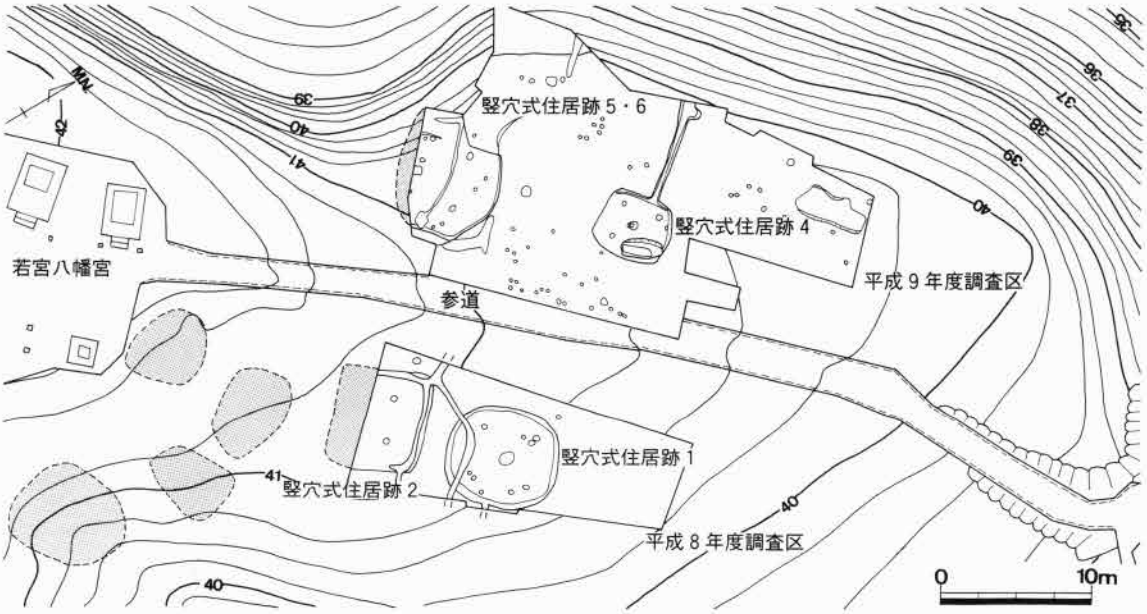
①遺構の概要(第77・78図)

若宮神社の参道を挟んで、昨年度の調査地に隣接する部分を調査した。宮ノ背遺跡は、低平な丘陵頂部の平坦面に設けられた竪穴式住居跡からなる集落で、集落を囲む施設は見つかっていない。この遺跡では、北東方向に張り出す、南北２本の舌状尾根上に竪穴式住居が築かれるが、北側尾根の方が大きく平坦面も大きい。また、検出された６基の竪穴式住居跡のうち、北側尾根には５基があり、こちらが集落の中心であったと思われる。ただ、発掘調査にかかる部分は、尾根の先端部であり、尾根の基部には竪穴式住居跡と推定される窪地も各所に認められる。さらに、神社境内で造成されたところには弥生土器も散布しており、摂南大学で造成された南西側丘陵頂部にも集落の広がりが予想される。

平成９年度の宮ノ背遺跡の発掘調査では、竪穴式住居跡３基、木棺墓１基とピット群を検出した。竪穴式住居跡４は焼却処分されたもので、竪穴式住居跡５・６は同一か所に重なっている。住居が築かれた時期は、竪穴式住居跡４・６が弥生時代後期後半、竪穴式住居跡５が庄内期である。木棺墓は、竪穴式住居跡４の下層に築かれているが、詳細な時期はわからない。

②検出遺構(第79～82図)

竪穴式住居跡４　長辺約9.6m・短辺約８mを測る隅丸長方形の竪穴式住居跡で、丘陵の尾根線に向かって長さ約13.5mの排水溝を有する。住居跡床面はほぼ平坦で、特別な造作を持たない。床面に残された土器、中でも原位置を留めるものは非常に少なかったが、東壁面に近い部分に、近江形の鉢と二重口縁壺の口縁部片、高杯、有孔鉢と片口の小型鉢という供膳器種を主体とする完形に近い土器５点が残されていた。これは正位で列状に配置されているため、住居廃絶時に置き去られた可能性のほかに、焼却処分時のマツリによって置かれた可能性もある。その根拠は、

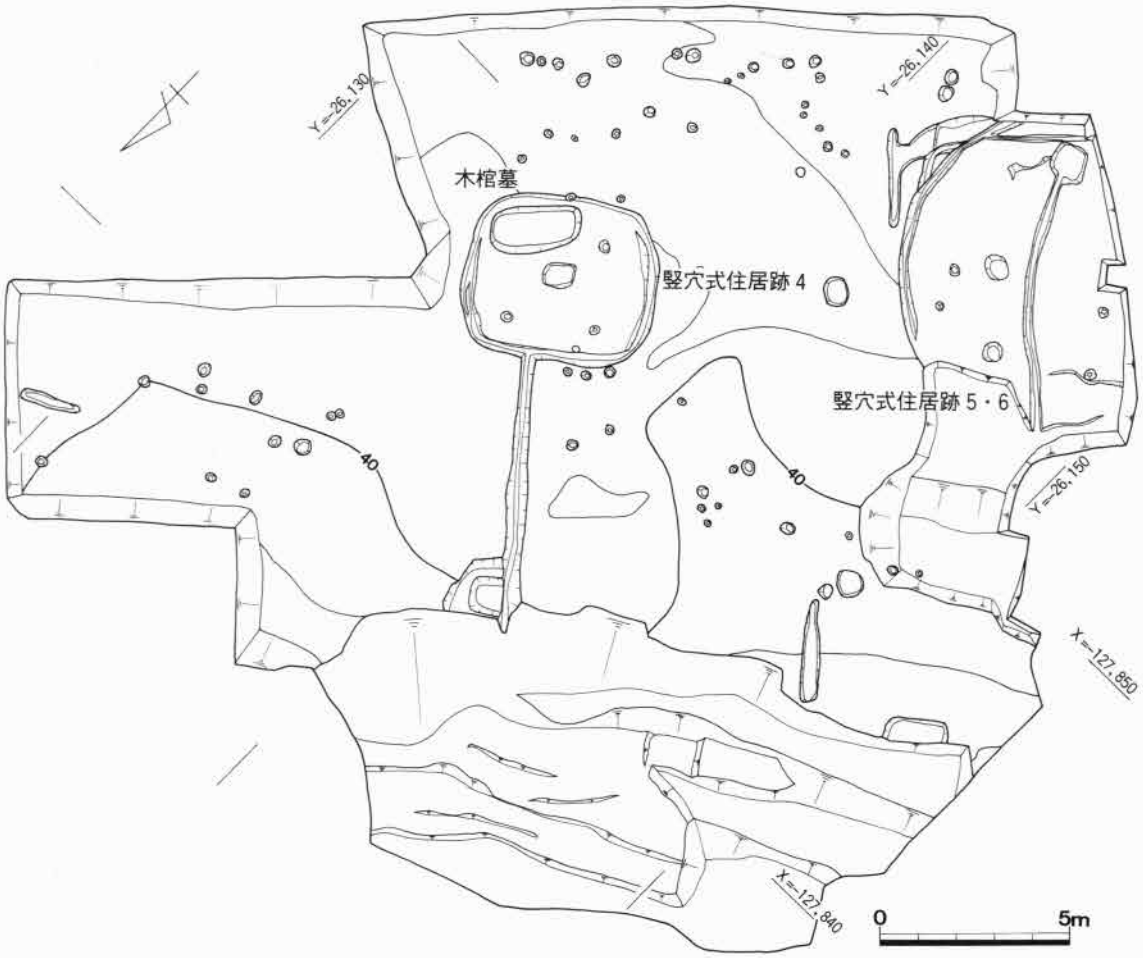


第77図　宮ノ背遺跡調査区設定図(1/500)　梨地は住居跡推定地

この住居跡からは甕などの煮沸器種がほとんど検出されなかったことである。また、二重口縁壺では胴部以下の破片が住居跡内から検出されず、かつ原位置を保っている点から、器台として使用されたのかもしれない。主柱穴は4本で、平均の深さ約0.6mを測る。この内、1本は主柱穴から柱材がのびた状態で検出され、柱が遺存した状態で火を受けたことが確認された。また、住居跡のほぼ中央部には床面を浅く窪めて築かれた地床炉があり、炉の上面に当たる炭化物層を凹面として検出した。なお、完掘時には、壁溝の底面レベルは床面よりも高かったので、住居跡の埋土セクションを検討すると、この住居は当初は4周に壁溝を持っていたが、後に内側に掘り直して建て替えられたと推測される。これに対応して、炉も上下2か所の焼土面を確認した。

住居跡の西側に取り付く排水溝は、幅約0.4mを測り、先端部には水溜めのように拡張された部分がある。深さは、住居跡に取り付く部分で約0.2m、先端部で約0.6mを測り、次第に深くなっており、水が抜けるような構造となっている。

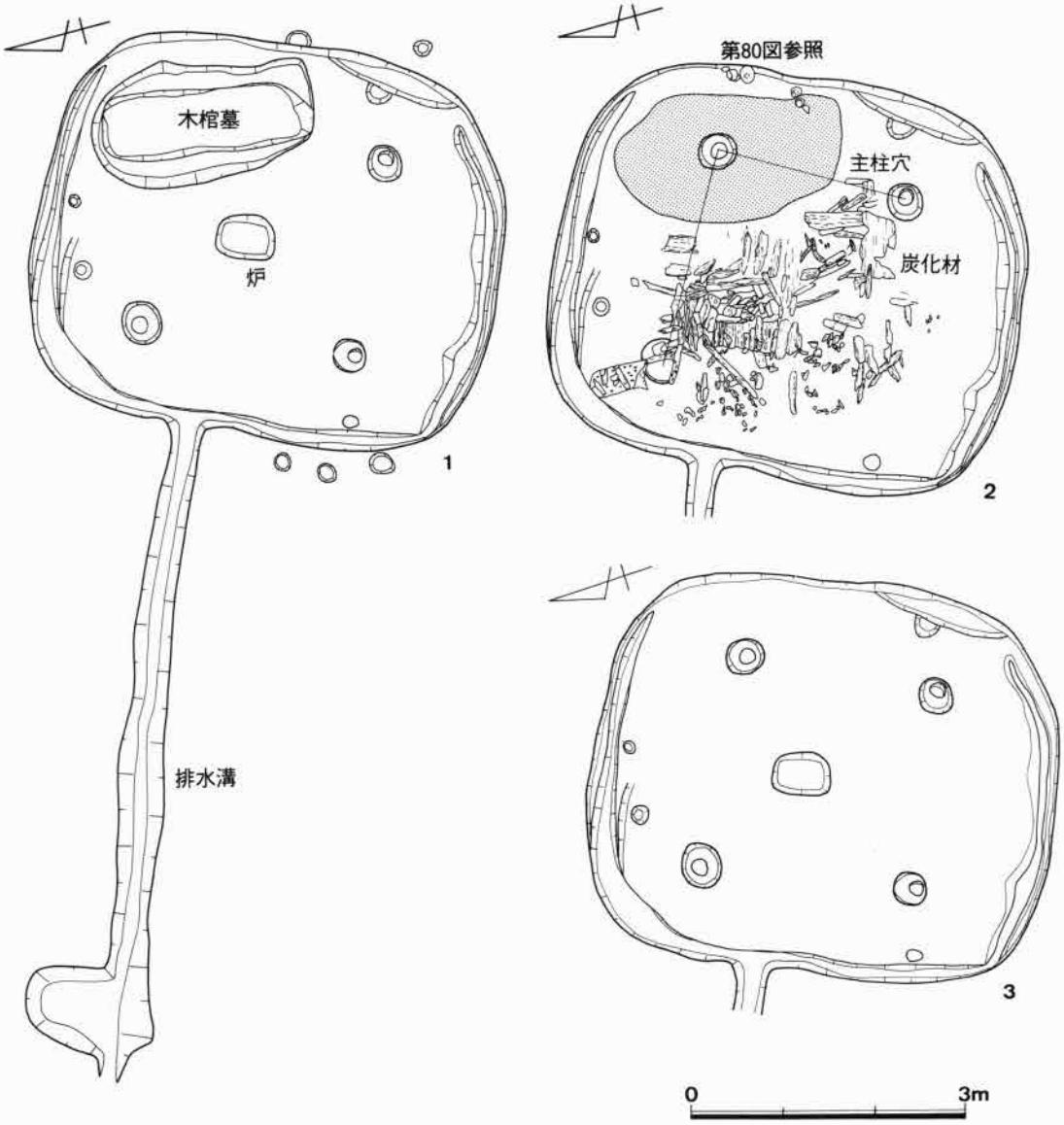
この住居跡を特徴付ける点は、住居の上部構造を構成する柱・板材が、住居跡掘形の上面で炭化材として出土したことである。炭化材は、板材とみられるものが上層にあり、それを除去すると垂木と思われる柱材が検出された。個々の柱材の遺存状況は良好で、柱材の盛り上がりさえも明瞭に認められる。なお、これらの住居構成材を株式会社パレオ・ラボに委託して、樹種同定し



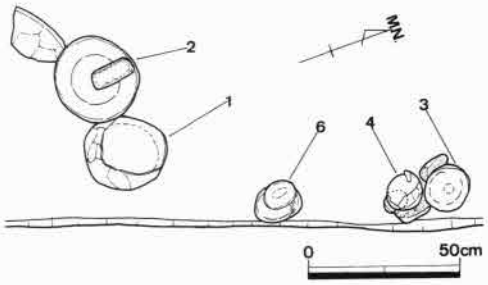
第78図　宮ノ背遺跡(平成9年度)遺構配置図(1/200)

たところ、柱材としてシイノキと、板材としてエゴノキが検出された。遺跡から出土した近畿以西の住居の柱材は、ヒノキなどの針葉樹が主体であるが、広葉樹としてカシ・シイ・クリなども多用されている。樹種同定の結果は、弥生時代の美濃山丘陵付近の植生は照葉樹が卓越しており、植生地点の異なるシイノキとエゴノキとを用途に応じて伐採・加工して利用したことを示している。

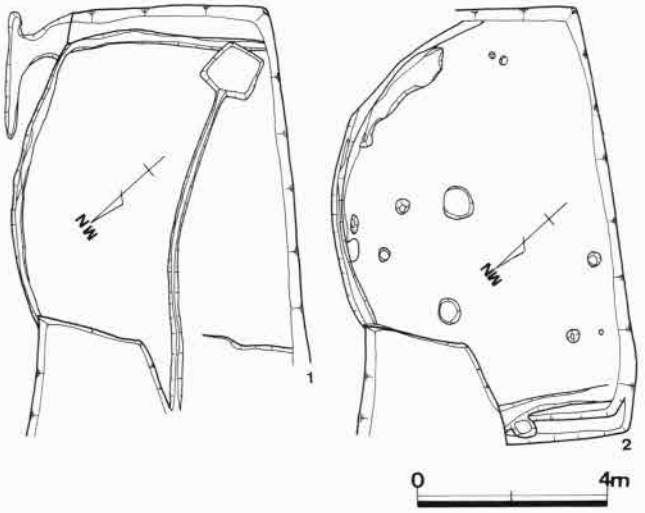
炭化材は、床面直上には少なく、床面から10cm程度の無遺物の流土層を介して浮いた部分にまとまっている。また、検出された炭化材は、4主柱穴に囲まれた部分で、住居跡短軸に平行するように遺存していた。一般に、火災によって焼亡した住居では、垂木材が放射状に検出されるので、この住居が火を受けた時点では、住居中央部に構成材を人為的に集められたと思われる。さらに、北東方向での炭化材の検出がなく、焼土塊や炭塊の検出が顕著であり、いわゆるよく焼けている。これらの観察結果から、この竪穴式住居跡4は、廃屋になった住居の建築部材を住居中



第79図　宮ノ背遺跡竪穴式住居跡4実測図(1/80)
1.完掘状況　　2.炭化材検出状況　　3.住居跡完掘状況



第80図　竪穴式住居跡４内土器出土状況
(1/25)　番号は第85図と対応



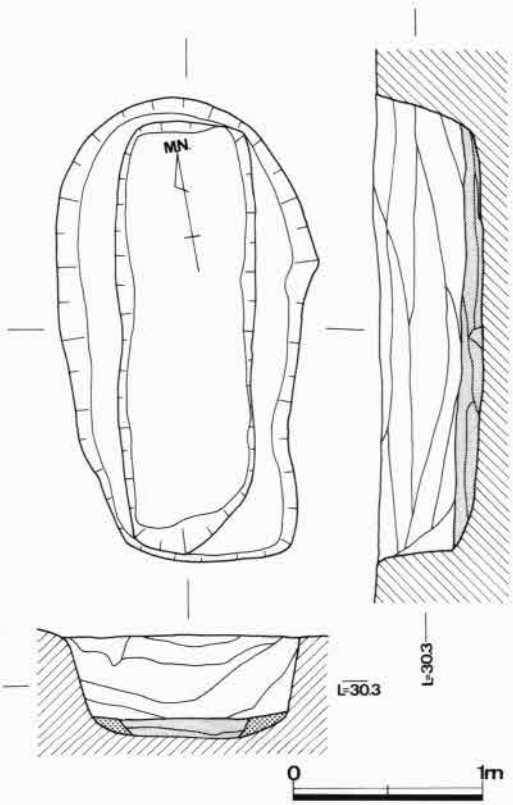
第81図　宮ノ背遺跡竪穴式住居跡５・６実測図(1/160)
1.竪穴式住居跡６　　2.竪穴式住居跡５

央に集積・整理し、その後に北東方面から火を放つことによって、住居を焼却したと判断される。なお、炭化材の上面からは緑色凝灰岩製管玉１点を検出したので、焼却処分時に、何らかのマツリが行われた可能性もある。

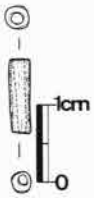
竪穴式住居跡５　調査区の西側で、全体の６割程度を検出した径約5.5mを測る円形住居跡で、削平や竪穴式住居跡６が上層に築かれたため、遺存状況はよくない。住居跡輪郭に沿って幅約0.2mの壁溝がめぐり、その溝中には焼土塊が落ち込んでいる。この点から、この住居跡は火災か焼却処分かは判断できないが、廃絶時に火を受けたと判断される。この住居跡床面ほぼ中央で、ごく少量の弥生土器片が出土したが、復原できるものはなく、住居に伴うものかは判断できない。

竪穴式住居跡６　竪穴式住居跡５の床面から20cm程度遊離した状況で検出された方形住居跡。この住居跡のプランは方形で、一辺約6.5mを測る。中央やや南よりに方形の土坑を穿つ。また、上層で排水溝を検出した。住居跡床面で、少量の土器のほかに、１点の鉄鏃を検出した。土器が示す時期は、弥生時代後期終末～庄内期にかかる。

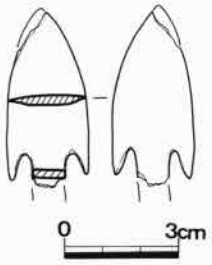
木棺墓　竪穴式住居跡４の下層に築かれた木棺墓で、長約2.4m・幅約1.5m・深さ約0.4mを測る隅丸長方形の土壙に、長さ約2.2m・幅約0.7m・深さ約0.2mの木棺が納めてある。木棺の小口部は、墓壙端まで掘り抜く型式で、底部が丸いカーブを描く箱形木棺である。人骨や副葬品は全く認められなかった。墓の主軸は南北に取っており、北頭位で埋葬されたものであろうか。この木棺墓を埋め戻した跡に竪穴式住居跡４が築かれ、



第82図　竪穴式住居跡４下層木棺墓実測図(1/40)
濃い梨地は裏込め、淡い梨地は木棺



第83図　管玉実測図（1/1）



第84図　鉄鏃実測図（1/2）

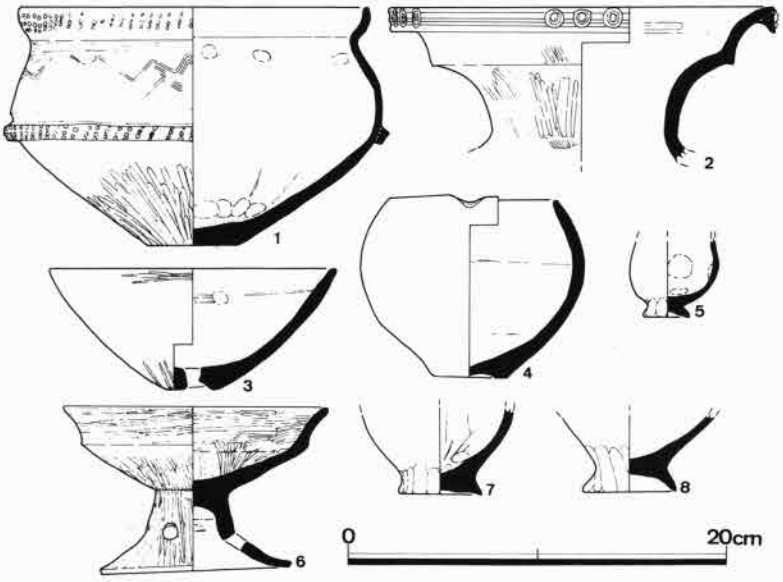
その床面や住居焼却時の炭化材が墓壙上面を覆っている。さらには、住居跡の主柱穴の１つが、墓壙埋土を切り込んで造られており、あたかも木棺墓の存在が意識されずに、竪穴式住居跡４が築かれたようである。時期を決定する遺物は認められなかったが、平成８年度の宮ノ背遺跡の調査では、弥生時代中期末の土器が出土しており、近接する幸水遺跡では同時期の方形周溝墓が検出されているので、この地域一帯が墓域として利用された時期に築かれた木棺墓である可能性がある。

③**出土遺物**（第83～85図）

管玉　竪穴式住居跡４の炭化材検出上面から、１点の管玉を検出した。軟質の緑色凝灰岩を用いており、玉の長軸方向に褐色の筋状の斑を有する。長0.9cm・径0.2cmで、穿孔のうち、大形の径は1.5mmを測る。片面穿孔である。出土地点周囲の土を洗浄したが、玉は検出されなかった。

鉄鏃　竪穴式住居跡６の埋土中から、１点の平根系鏃を検出した。長14.5cm・幅2.0cmで、茎は幅0.8cmを測るが大部分を欠損している。腸抉は浅く、刃部の側縁は直線的で外側に開かない。断面形は平造で、端部は刃を造り出している。

土器　１～８は竪穴式住居跡４の床面で出土した土器群で、１～４・６は住居跡東端の壁面立ち上がり部分に一括で置かれていた器種である。５・７・８は一括ではないが、住居跡埋土から出土した。１は、近江型の鉢である。算盤玉状に強く張る胴部中央に突帯をめぐらせ、その部分と受け口状口縁部とに櫛歯による刺突文を有する。頸部直下に、櫛描きの直線文と波状文とを施し、胴部下半はミガキで仕上げる。２は、二重口縁壺である。端部は拡張して文様帯とし、３条の凹線の上から３個１組の円形浮文を４か所に貼り付ける。３は、有孔鉢である。半円球の体部の底部付近は、焼成前に外側からヘラで抉り取られ、外面はミガキ、内面はハケで調整する。４は、片口の小型鉢である。内湾する無頸壺形の器形で、口唇部の一端を軽く外側に突出させる。６は、円形の３方の透かしを持つ小型の高杯である。全体にていねいなミガキを施す。５は、ミニチュアの台付鉢と見なされるが、明確な器形は不明である。７・８は、鉢と考えられ、突出する底部に指頭による調整をもつ。



第85図　宮ノ背遺跡竪穴式住居跡４出土土器実測図（1/4）

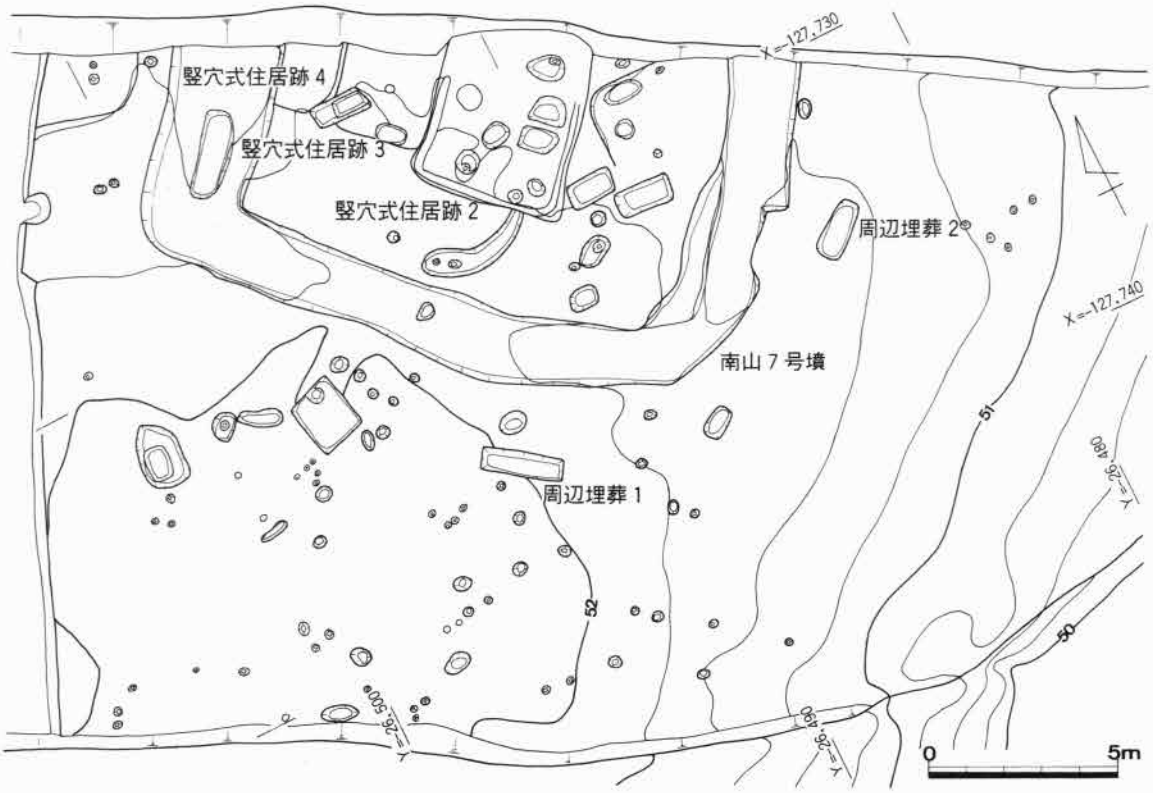
(2)**西ノ口遺跡**(第２次)

①**遺構の概要**(第86図)

昨年度の調査地から長尾街道を挟んで対面する丘陵頂部の平坦地が対象となった。着手当初、この地点は竹林造成によって著しく削平されており、遺構が遺存しているかどうかがわからなかった。このため、平坦地を最初に試掘して、古墳(南山７号墳)周溝の存在を確認し、面的調査へと切り替えた。調査区内では、削平された方墳１基と、それに先行する３基の住居跡を検出した。方墳は周溝部分のみであり、墳丘・主体部とも完全に削平されていた。古墳の名称は、６基から構成される南山古墳群中に存在することから、八幡市教育委員会と協議した上で、新規に南山７号墳と名付けることにした。一方、住居跡は、いずれも古墳周溝に囲まれた部分で検出したもので、うすく遺存した古墳の盛り土によって削平から免れたと思われる。

②**南山７号墳**(第87図)

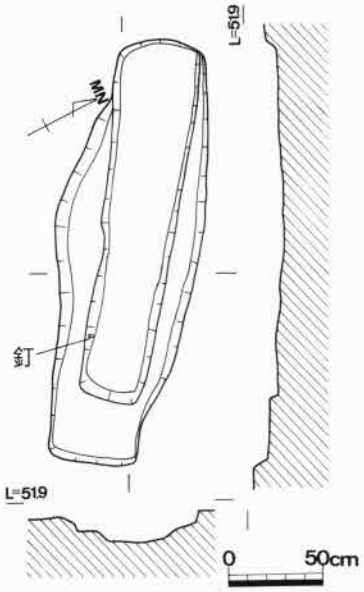
墳丘と遺物出土状況　外周の一辺が約15.5mを測る、方墳の南半が調査区にかかっており、面的調査を行った。遺存した墳丘は、西辺約4.4m・東辺約８m・南辺約12.4mである。発掘前にも全く封土は認められず、この地点は、いったん、水平に削平された後、客土によって平坦面へとならされたことがわかった。周溝の深さは、約0.3mであり、淡褐色の腐植土層で埋積していた。堆水した証拠はなく、古墳の範囲を区画するものである。周溝内埋土から土器の出土はほとんどなかったが、南側周溝の北寄りの部分の底面に接して、２点の土器が検出された。それは、須恵器直口壺と高杯で、近接していたが、高杯脚部、須恵器壺の一部はなかったので、据え置かれたものではなかったと思われる。



第86図　西ノ口遺跡遺構配置図(1/200)

第87図　南山７号墳遺構全体図及び周溝内土層堆積図(1/80)

周辺埋葬　周溝南辺と東辺には、それぞれ1基ずつの周辺埋葬がある。いずれも、地山を掘り込んだ土壙墓と思われるが、削平のために、わずかな立ち上がりしか認められなかった。南辺のものは、墓壙長約2.2m・幅約0.7mを測り、その中に長約1.9m・幅約0.4mの箱形木棺を納めたものである。木棺の西側には2段となる形態が遺存しているが、東側は削平のため明らかではない。木棺の南側長辺の東端近くで釘1点を検出した。これは、先端を棺の内側に向けていたが、床面から若干、遊離した状況であった。

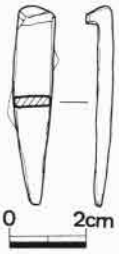


第88図　南山7号墳周辺埋葬1実測図(1/40)

③検出遺構

竪穴式住居跡　古墳周溝に囲まれた部分から、4基の竪穴式住居跡を検出した。いずれも方形プランであるが、中央に遺存する竪穴式住居跡2以外は、良好な状況ではない。竪穴式住居跡2は、中央部にの床面に粘土によって構築された炉を持つ住居跡で、北側は調査地外に当たるため、全形は不明である。壁面に沿って幅約0.2mの壁溝がめぐるが、主柱穴は明確ではない。この住居跡の床面直上から、甕の底部片と思われる土器破片が出土した。これは、尖底に近い形態で、器壁も非常に薄い点から庄内式土器の可能性がある。ただし、極めて小片であり、図示するには至らなかった。竪穴式住居跡3～5は、さらに遺存状況が良好ではなく、出土遺物も全く認められなかった。

なお、これら古墳及び竪穴式住居跡以外に、調査区内では用途不明のピット、土坑を検出している。この2時期以外に、後述するように遺構には伴わないが、旧石器が検出されており、岩宿(旧石器)時代に帰属するものかもしれない。



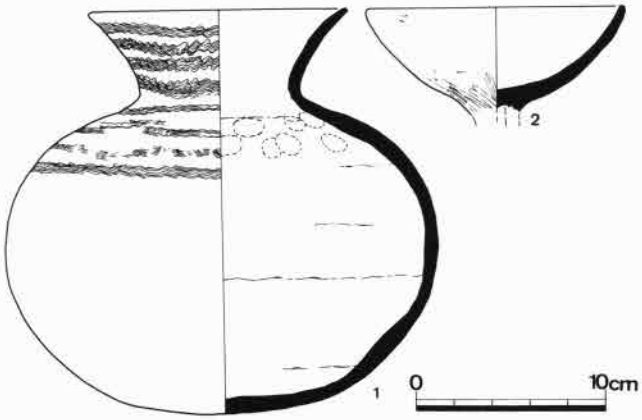
第89図　鉄釘実測図(1/2)

④出土遺物

1)南山7号墳の出土遺物(第89・90図)

第89図は、周辺埋葬1から出土した釘である。頭部は方形の平板状を呈するが、木質は観察されない。古墳時代の釘と比較すると、極めて小型であり、木棺重量を支えられるかも疑わしいが、一種の木棺を緊結するための釘状鉄製品と判断したい。

第90図に示したものは、南山7号墳周溝底部から出土した土器である。1は、須恵器直口壺で、口縁部に4条の不整形な櫛描き波状文、肩部にも4条



第90図　南山7号墳出土土器実測図(1/4)

の櫛描き波状文を持つ。肩部内面には指頭によって調整し、胴部下半の内面にはかすかに接合痕を認める。2は高杯で、椀形の高杯の杯部片であるが、先述のように、逆位で出土したため脚部は全く回収できなかった。器壁は、風化のため遺存はよくないが、口縁部上半に削りによる調整痕、口頸部にミガキによる仕上げ調整を認めることができる。

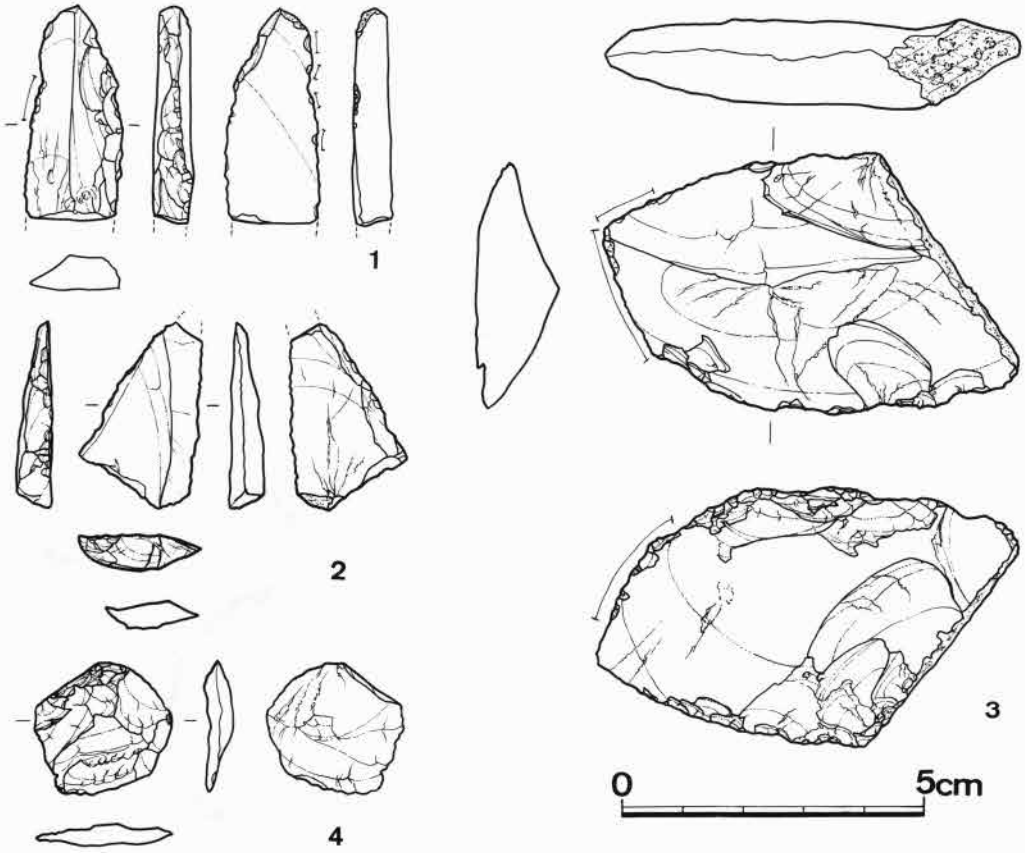
（河野一隆）

2)**岩宿時代**(旧石器時代)

西ノ口遺跡周辺では、岩宿(旧石器)時代遺物の採取が知られていたが、今回の調査でもその関連遺物が検出された。いずれも、遺構に伴うものではないが、以下に示したものである。

西ノ口遺跡から出土した石器・剥片類は、サヌカイト製で、合計4点と少ない。器種は、ナイフ形石器1点、翼状剥片1点、その他の剥片2点である(第91図)。

1のナイフ形石器は、翼状剥片を素材とする。下半部を欠損して、残存長3.5cm・幅2.1cm・厚さ0.6cm・重さ4.8gを測る。先端部右上に打面調整の剥離面を残しているが、側縁部のブランティング加工は入念に施されている。特徴的な点は、背面の左半部に残る刃部(底面)の剥離方向が腹面の剥離方向と一致せず、腹面の横方向の剥離に対し、ほぼ直角の縦方向になっていることである。これは、翼状剥片の腹面と刃部(底面)の剥離方向が一致する翼状剥片石核の一般的な打面部からではなく、これにほぼ直交する辺を調整して打面部とし、そこから本素材を剥離したこと



第91図　石器実測図(実線は使用痕を示す)
1・3.竪穴式住居跡2埋土　　2・4.南山7号墳周溝埋土

によるものである。刃部には使用によるものか、刃こぼれ状の二次的な剥離痕跡をとどめている。

2は、翼状剥片と考えるが、典型例からは外れている。翼状剥片石核から剥離する際に、素材が折れてしまうアクシデントが生じ、その折れ面を打面部として調整し、最終的に縦長に剥離されたものである。腹面部下端に明瞭な打点をとどめていることから、打面調整部を一側縁と下辺部(基部)の二辺に持つことになった。これがナイフ形石器に仕上げられるとすれば、この二辺にプランティング加工が施される可能性を持つ。法量は長さ3.1cm・幅2cm・厚さ0.6cm・重さ3.5gを測る。

3は、縦長傾向に剥離された剥片であるが、背面側に底面を持つ盤状剥片を素材としている。表裏の縁辺部に二次的な加工及び使用痕をとどめる。削器的な使用が考えられる。

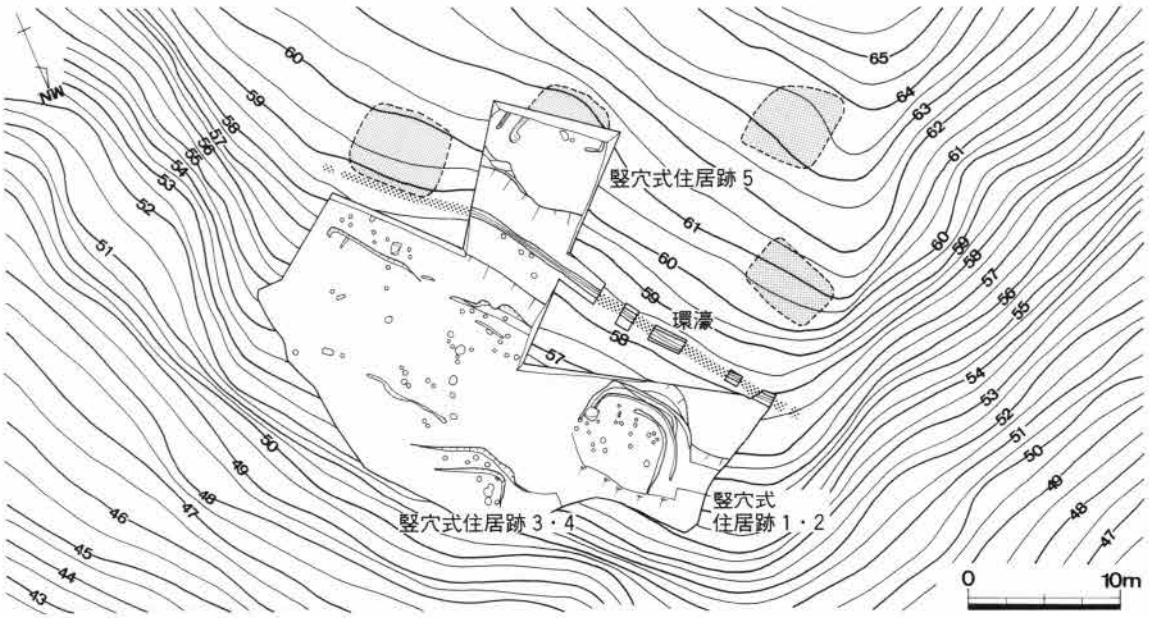
4は、主に打面方向からの剥離面が切り合う調整剥片である。瀬戸内技法として、盤状剥片を翼状剥片石核に転じる際の調整剥離により生じた可能性はあるが、確固たる決め手を欠く。3・4については、時期を確定する要素は少ない。また、岩宿(旧石器)時代のナイフ形石器・翼状剥片は、典型的瀬戸内技法によるものではないが、大きな流れの中に位置づけられる資料である。

(黒坪一樹)

(3)備前遺跡

①遺構の分布(第92・93図)

今まで遺物散布地として周知されていたが、今回の調査で遺構が分布していることがわかった。調査地は、洞ヶ峠に臨む丘陵であり、標高約60mを測る急な斜面地に立地する。この遺跡は、宮ノ背・西ノ口遺跡とは異なり、斜面を断面「L」字形に削って築かれたテラス状住居跡と、丘陵中腹を囲む環濠から構成されている。発掘調査は、面積的には限定されたものであったが、5基の住居跡を確認した。これら以外に、斜面には3基の住居跡と推定される窪地が認められた。な



第92図　備前遺跡調査区設定図(1/500)

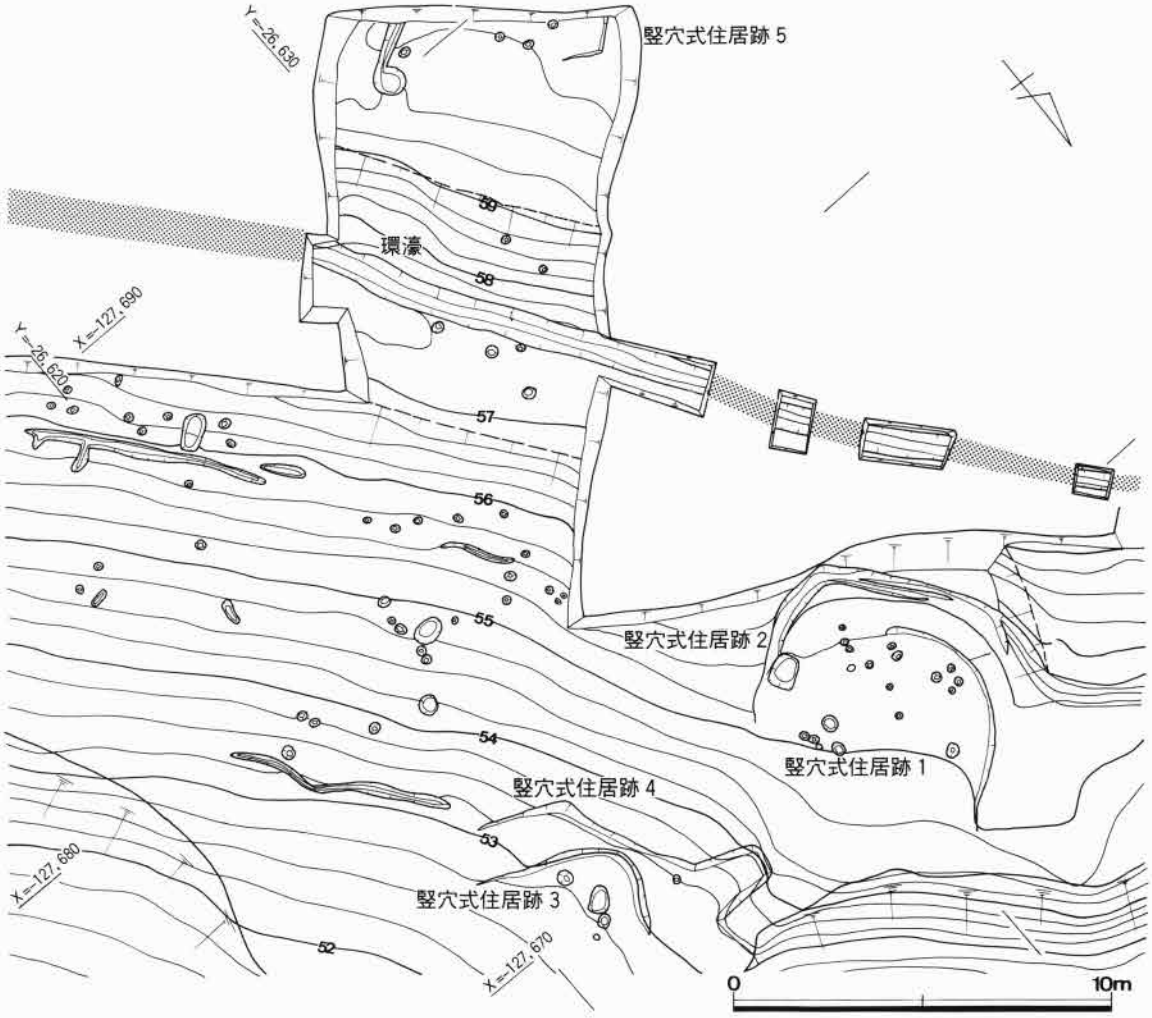
お、丘陵頂部には、若干の平坦面があったが、竹林による造成が著しく、遺構は残っていないと判断される。また、丘陵中腹は、削り出しによって急峻な斜面を造り、その前面に丘陵を囲む環濠と犬走り状の平坦地を造っている。これは、住居群を防御するための施設であると想定される。この溝中からは完形率の高い多量の土器群が廃棄されており、中でも調査地内では２か所の土器溜まりを検出した。これは、一部には後期初頭の土器もあるが、主体は後期中頃である。住居跡は、テラス状住居跡であるが、方形と楕円形のものがあり、いずれも建て替えられている。

調査区は、３段にわたる段状地形から構成され、最下段に竪穴式住居跡１～４、中段に環濠ＳＤ01、上段には竪穴式住居跡５が築かれている。低地の環濠集落の環濠は、断面「Ｖ」字形を呈するものが一般的であるが、この遺跡では、急峻に削り出した斜面を溝の丘陵上位側の壁面として利用し、もう一方は低い盛り土や柵列などの人為的な防御施設を設ける構造となっている。

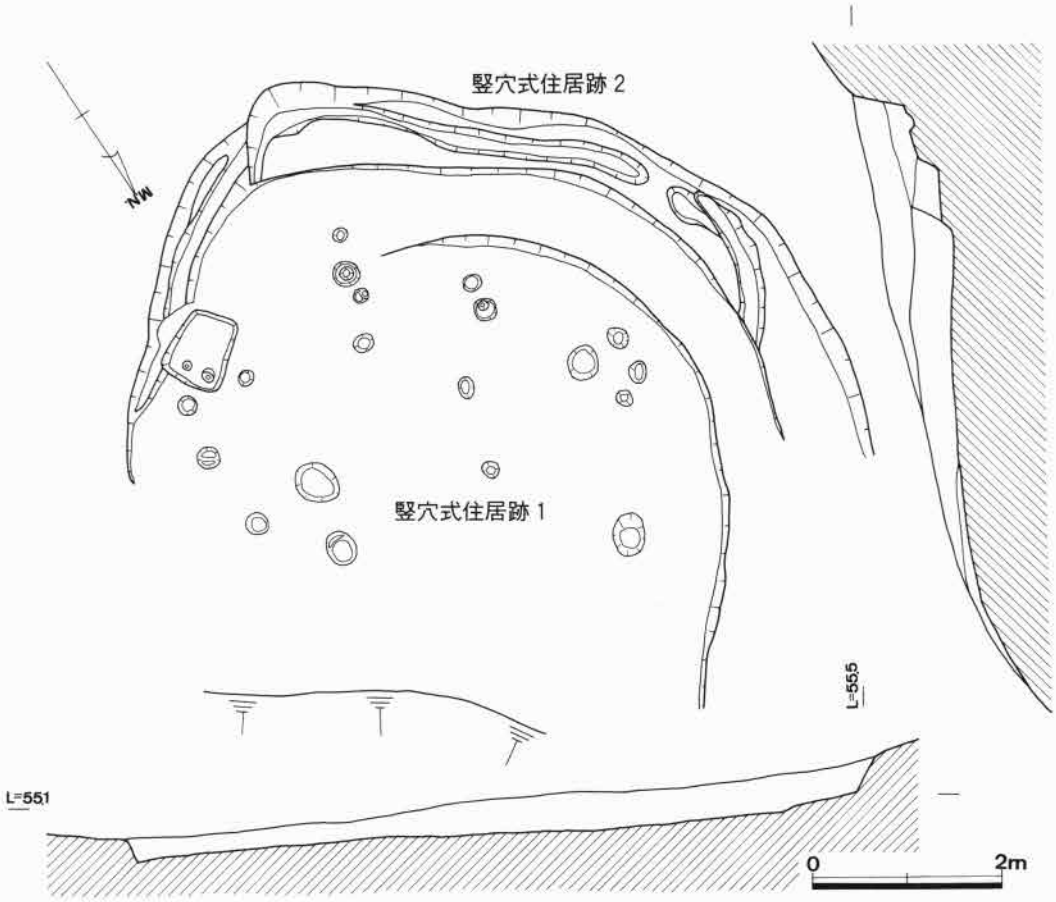
②検出遺構

1)竪穴式住居跡(第94～96図)

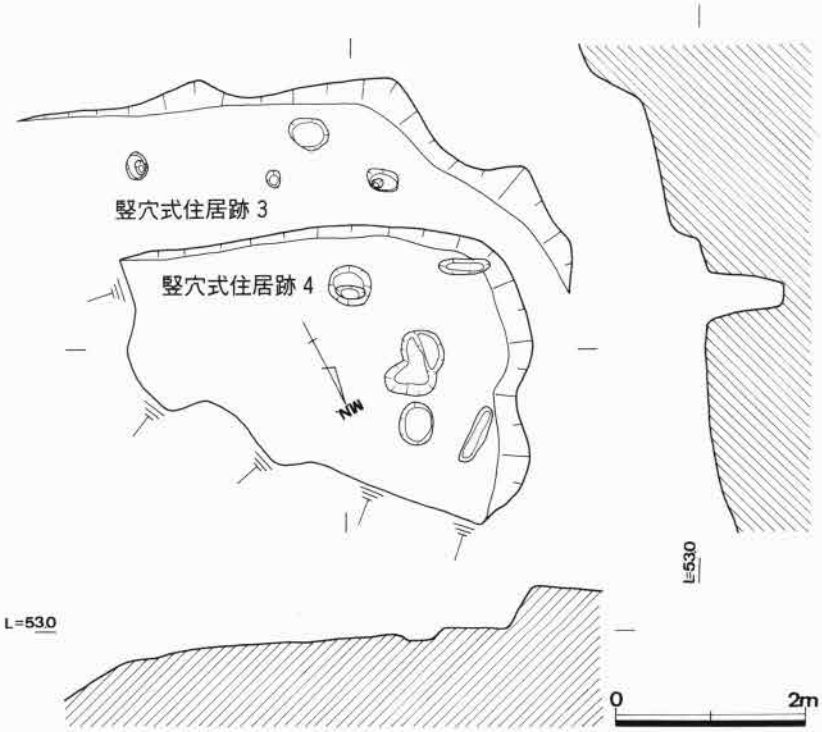
竪穴式住居跡１・２　丘陵最下段テラスの同一か所に重複したもので、壁溝を持つ竪穴式住居跡２の廃絶後、壁溝を持たない竪穴式住居跡１によって切られている。竪穴式住居跡１は、斜面



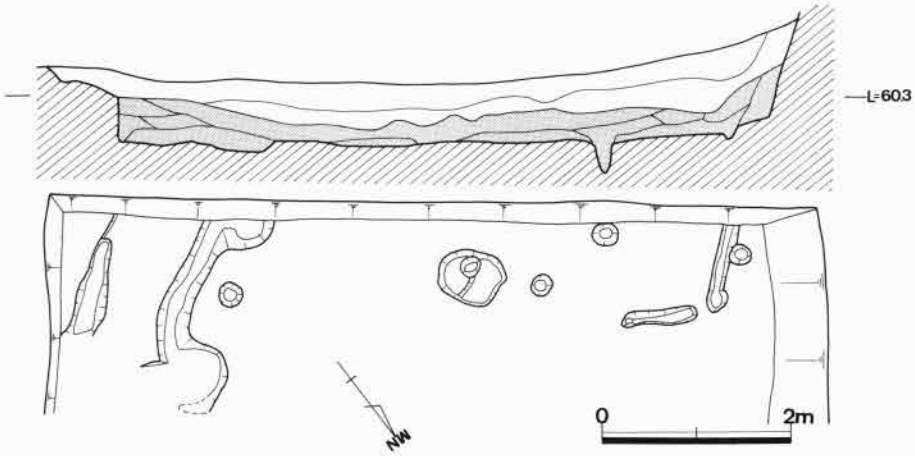
第93図　備前遺跡遺構配置図(1/200)



第94図　竪穴式住居跡 1 ・ 2 実測図(1/80)



第95図　竪穴式住居跡 3 ・ 4 実測図(1/80)



第96図　竪穴式住居跡５平面図・断面図(1/80)　断面はトレンチ壁のもの

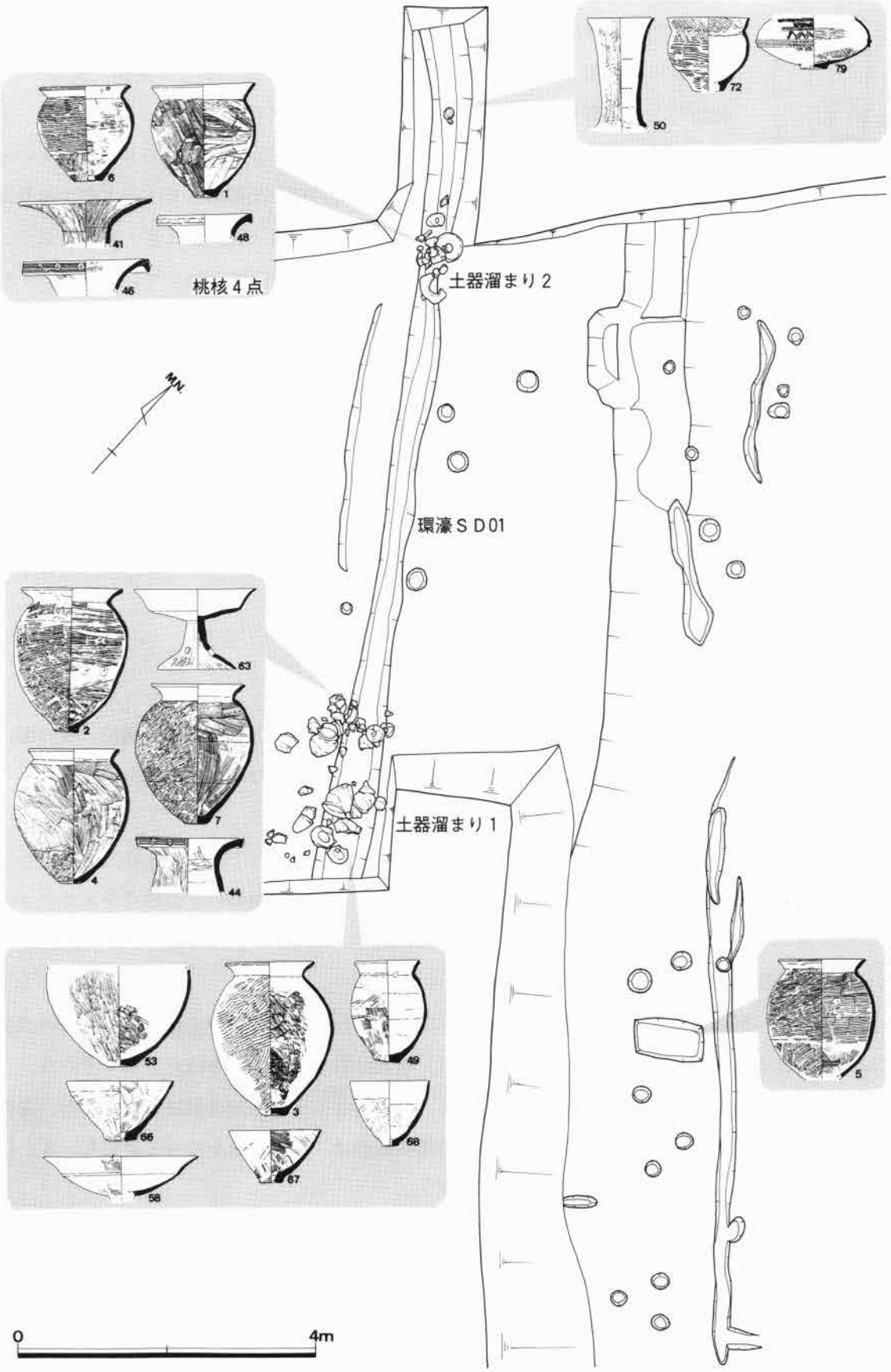
上方側に小さな段状のテラス面がめぐるが、東側で消えている。このテラスのほぼ中央部の床面直上で鉈を検出した。また、床面に若干の土器の散乱が認められたが、現位置を留めるものはなく、復原・図示できるような破片は少ない。主柱穴は明確ではないが、床面に掘り込まれたピットの１つには、無頸壺形の鉢69が据え置かれている。一種の地鎮的な用途を持つ遺構ではないかと推定される。斜面下位側は、盛り土によって床面を拡張しているが、流出のために詳細はわからない。

竪穴式住居跡３・４　竪穴式住居跡１・２よりも方形を志向した、平面形が「コ」字形のテラス状住居跡である。斜面下位側に当たる北東部分の床面は流出のため、全形がうかがえない。下位側に位置する竪穴式住居跡４が竪穴式住居跡３を切って築かれている。主柱穴ははっきりしない。この埋土中からは多くの土器が検出されたが、風化のために器表が荒れており、図示できるほどの個体は認められない。なお、特筆される遺物としては、竪穴式住居跡４の床面、竪穴式住居跡３のコーナー部付近で、石戈基部が検出された。

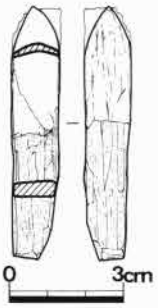
竪穴式住居跡５　調査区内の最上段テラス部分で検出したが、南半部が調査区外へと出るために全形がうかがえない。だが、北半部の床面に壁の立ち上がりが認められないこと、壁溝と思われる溝が直角に屈曲することをもって、方形プランの住居跡ではなかったかと想定される。床面に残された土器量は、極めて少なく、住居跡に伴うかははっきりとしない。この住居跡は、調査区壁面に住居跡断面がかかっているため、掘り込み面からの詳細な状況が観察できた。この住居跡は、表土直下から切り込まれており、中央部は住居跡が完全に埋没せずに淡い窪地となっていた。住居跡埋土(第96図の梨地の部分)は、焼土・炭化材の分布が認められる。

③環濠ＳＤ01における土器出土状況(第97図)

備前遺跡で出土した土器の大半は丘陵中腹を囲む環濠ＳＤ01から検出された。先述のように、これは丘陵上位側を急峻に削り出し、丘陵下位側に小規模な盛り土を伴う防御のための施設を造り出した、いわば断面が逆「へ」字形を呈する環濠である。環濠の前面には、犬走り状の平坦面を造り出し、そこにはピットが掘られている。おそらく、柵列を伴う、一種の防御施設があったと判断される。この溝埋土は、下層が茶褐色、上層が灰褐色に大きく二分できる。茶褐色土壌に



第97図　備前遺跡環濠(土器溜まり１・２付近)検出状況図(1/80)



第98図　鉈
実測図
(1/2)

は、小炭塊をも含んでいる。土器群は、茶褐色土壌の中から、床面から若干遊離した状態で検出された。この土器群は、完形率が比較的高く、しかもまとまりを持って投棄されたような状況を呈することから、集落の廃絶に当たって、使用した土器群を環濠へ投棄したものと考えられる。

土器群の出土したところは、東と西の大きく２か所に大別でき、東のものを土器溜まり１、西のものを土器溜まり２と呼び、土器溜まり１の方が土器量が多い。土器溜まり１からは、甕４点、広口壺１点、有孔鉢３点、高杯２点が比較的大型の破片として検出され、その他は小片として集積していた。この土器溜まりでは、下層ほど鉢類などの小型器種が多い特徴が認められたが、それは埋没時の偶然性に基づくと見るのが妥当であろう。一方、土器溜まり２は、倒位で置かれた広口壺２点の周囲に土器が散乱した状況で、それらを除去すると桃核４点が検出された。環濠ＳＤ01で、桃核の検出された地点はここのみであるから、この地点では、土器を投棄した際に何らかのマツリがあった可能性も考えられる。

その他、環濠ＳＤ01で注目されるべき遺物が出土している。石剣破片が竪穴式住居跡１・２のほぼ上方に設けたサブトレンチ部分から出土し、それにほぼ近接して土錘１点(第102図81)が出土している。

④出土遺物

1)鉈(第98図)

長さ6.4cm・幅1.2cmを測り、刃部は淡い裏すきを持つ小型の鉈である。刃部と柄部の境の関ははっきりしない。表面の下方、裏面に木質痕跡が認められる。柄部は断面長方形を呈する。

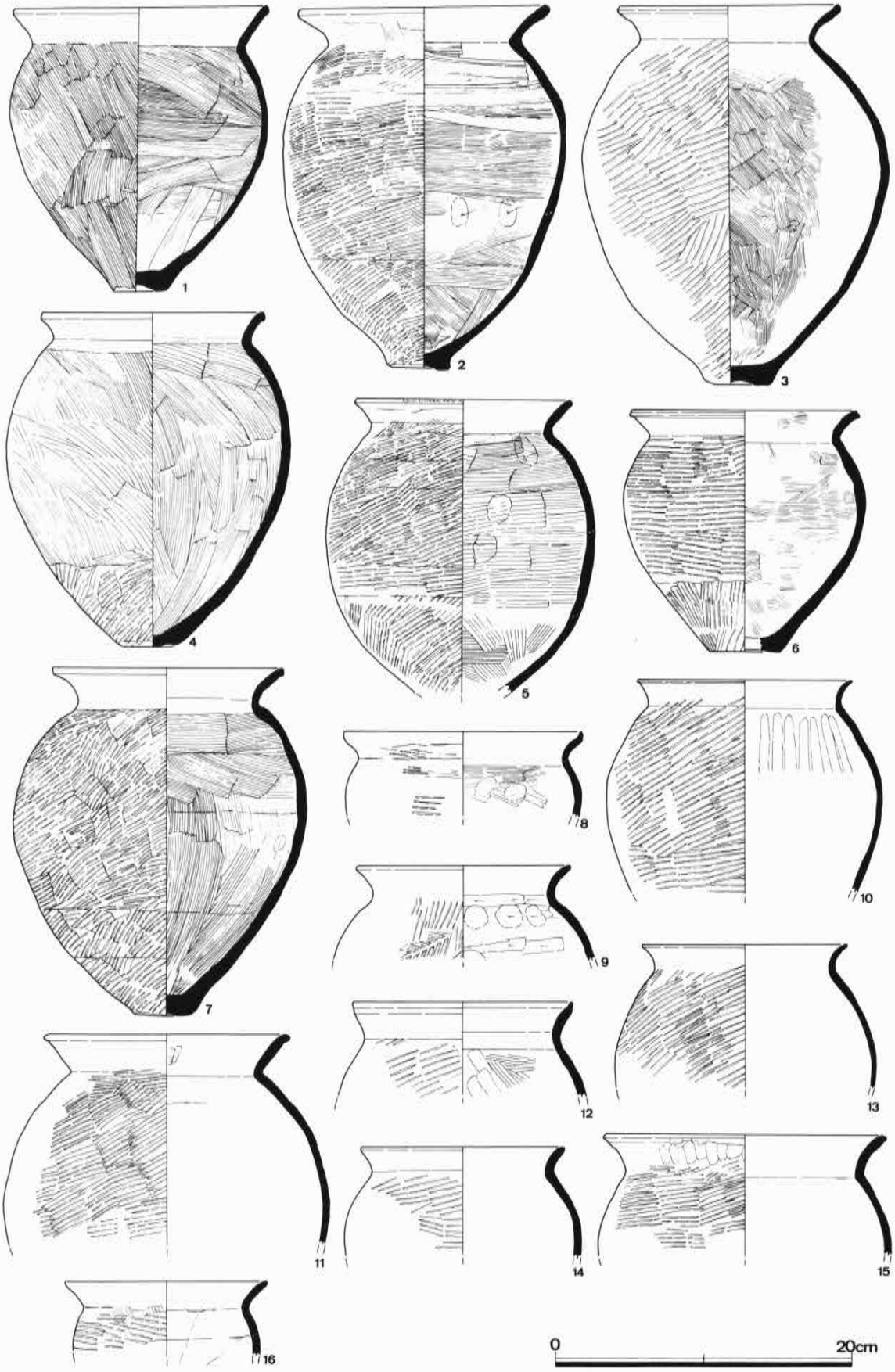
2)弥生土器

第99～102図は、備前遺跡出土の弥生土器であるが、69を除くすべては環濠ＳＤ01から出土した。これらは、一括投棄された土器群と見なしうるもので、短い時間幅の土器様式を示すと考えられる。総じて、胎土は、明黄褐色または茶褐色の色調で、在地産の土器と思われ、生駒西麓をはじめとする他地域産の土器の搬入は認められない。

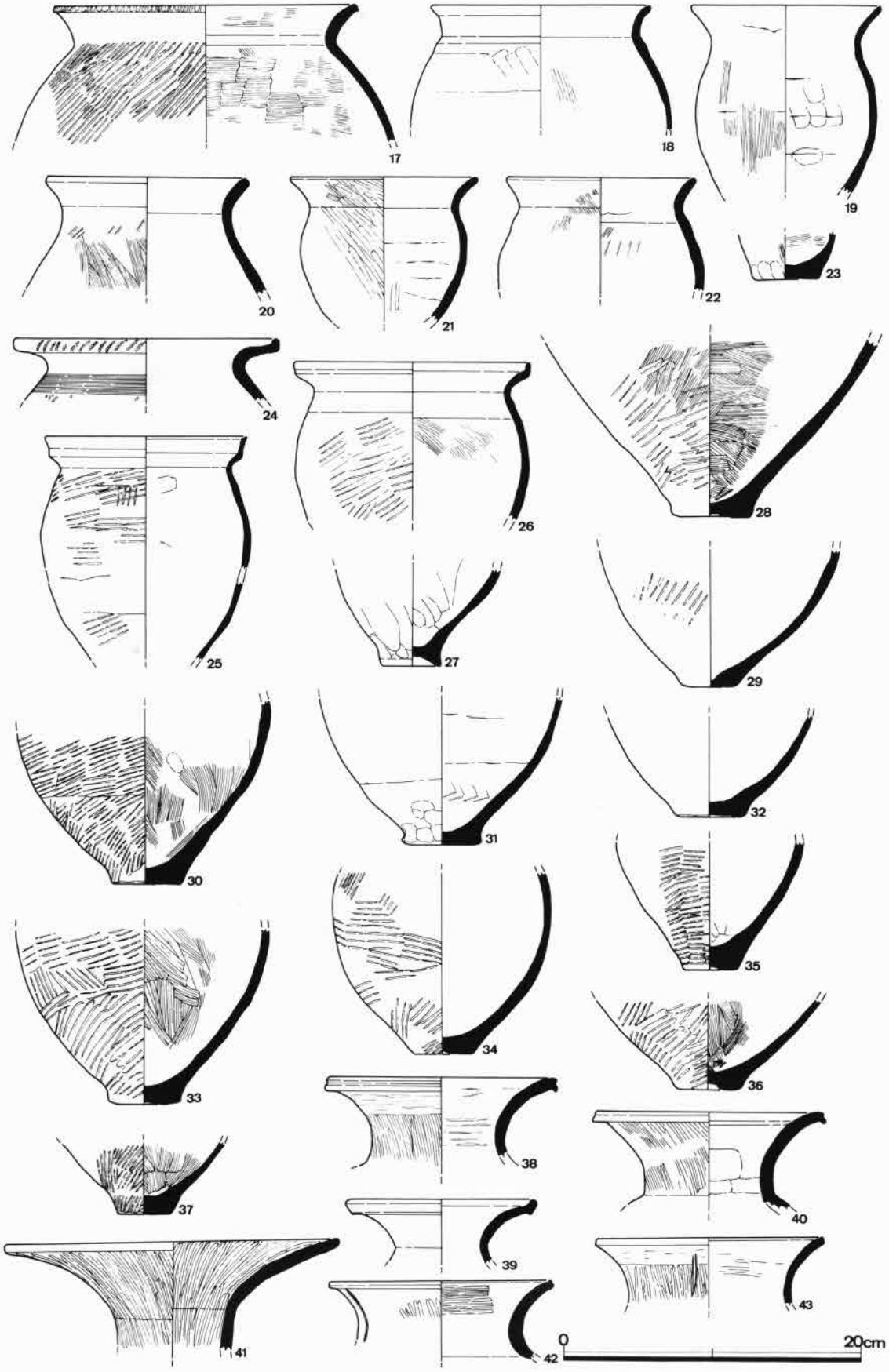
甕(１～37)　胴部最大径がほぼ中位にくる、外反「く」の字口縁の甕が主体をなす。外面調整にはタタキによるものとハケによるものとがあり、前者は右上がり、後者は左上がりである。この相違は、施文姿勢に基づいている。タタキ甕は、そのほとんどが分割成形による。また、遺存する底部のすべてが底部円盤充填による。口縁端部の形態は、大半が面を持って終わり、８と12はつまみ上げている。５と17は端部に刻み目を施す。

なお、９は矢羽根状タタキが見られる。

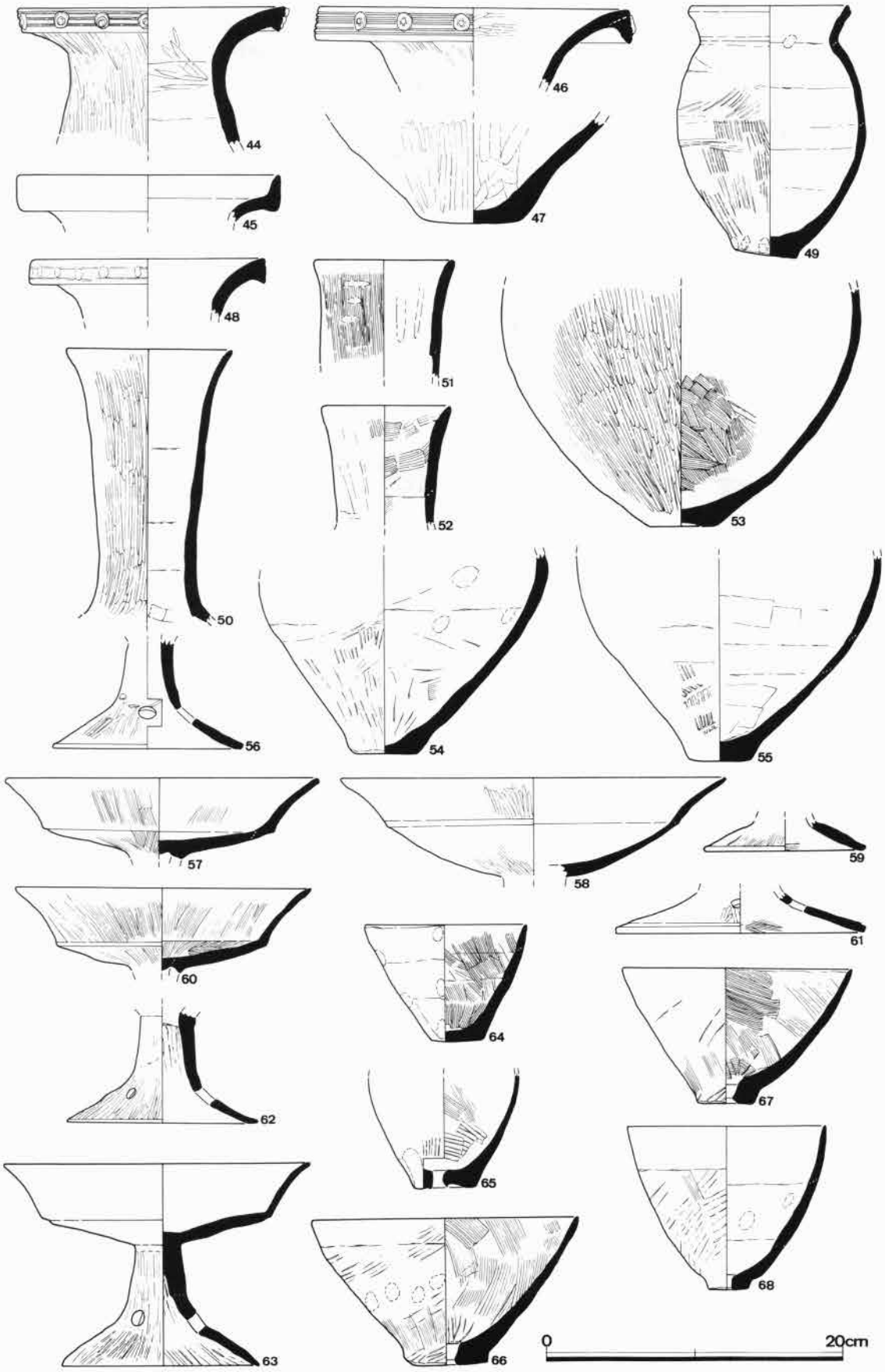
24～26は、他地域系の土器である。24は、刺突列点文を施した受け口状の口縁と、頸部下の直線文から近江の特徴を有している。また、25・26は、「５」の字口縁を意識するような立ち上がりを有する口縁部で、丹波地域以北の土器の影響がうかがえる。しかし、いずれも胎土は在地産のもので、搬入土器とは言えない。



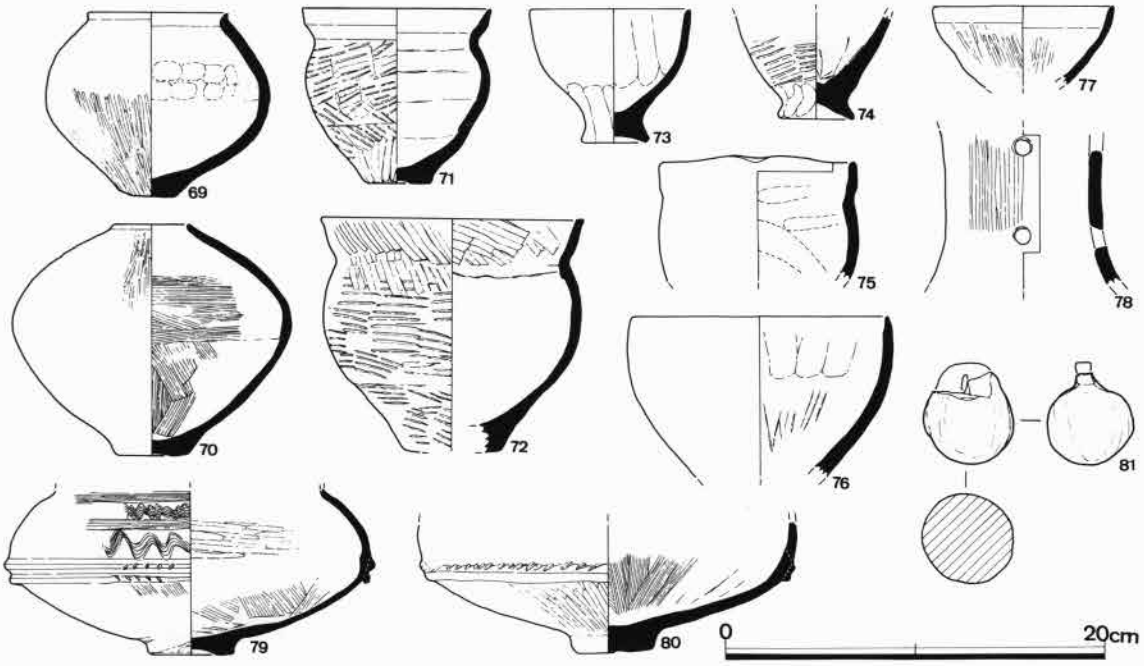
第99図　備前遺跡出土土器実測図(1)　1/4



第100図　備前遺跡出土土器実測図(2)　1/4



第101図　備前遺跡出土土器実測図(3)　1/4



第102図　備前遺跡出土土器実測図(4)　1/4

甕底部破片(27～37)　最大径のやや下方で割れたものが多い。図中で、タタキを明示していないものは、風化磨滅したものである。

広口壺(38～46・48)　口縁部が大きく外反する壺である。38は端部に1条の凹線、40と42はそれが退化したものである。44・46は、文様帯として拡張した口縁端部に円形浮文を持っており、器台の可能性もあるが、筒状部の立ち上がりが弱い点からみて、広口壺に当てた。45・48は、文様帯が風化した広口壺と考えられる。

短頸壺(49)　1点のみであり、外面はハケ調整、口縁端部はとがって終わる。赤褐色の色調で、砂粒の多い胎土である。

長頸壺(50～52)　50は灰褐色、51・52は赤褐色の胎土を持つ。前者はていねいなミガキ、後者はハケによって調整されている。また、後者では内傾接合による痕跡が明確に観察できる。

なお、53～55は、大型の壺の底部と見なされる破片である。53はミガキ調整、54と55はタタキの後、ていねいになで消している。なお、55は矢羽根状タタキである。

高杯(56～63)　すべて、口縁部が大きく外反しており、ミガキまたはハケによって調整される。成形は円盤充填による。透かしは円形で3方に開けている。

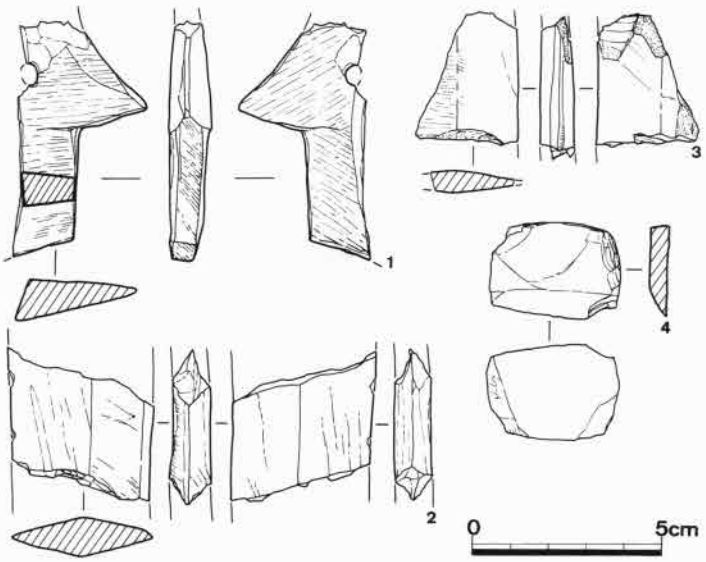
鉢(64～77)　外面タタキ、内面ハケ調整で、ちょうど分割成形された甕の下半部の形態に近いもの(64～68)と、算盤形の体部で頸の立ち上がりが弱いもの(69・70)、ミニチュアの甕形土器ともいうべきもの(71・72)、脚を持つもの(73・74)、片口のもの(75)など、多様な形態に分かれる。65～68は、有孔鉢で、焼成前に両側から穿孔されている。無頸壺形の69・70は、ミガキ調整された精製品である。

器台(78)　筒形器台が2点あるが、1点を図化した。ミガキによって調整され、対向方向に円形透かしを持つ。

手捏ね形土器(79・80)　いずれも覆部を欠失して形状が不明であるが、扁球形の体部に突帯をめぐらせている。79は、肩部に直線文と波状文を施し、突帯の両側に刻み目を持つ。80は、ていねいなミガキによって調整されている。

3)土錘(第102図81)

中実で球形の体部に、半円形で平板な吊り手を付けた形状の土錘である。通常、魚網用の土錘とは著しく異なるため、編み物の錘などに使用されたのかもしれない。



第103図　備前遺跡出土石製品実測図(1/2)

4)武器形石製品(第103図)

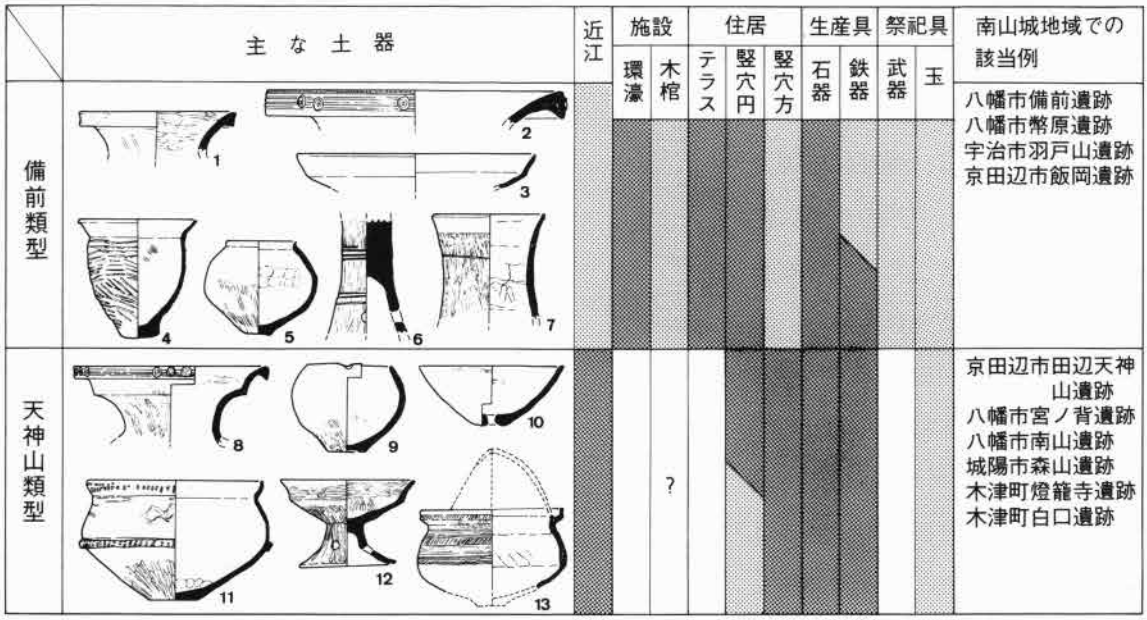
今回の調査で検出された遺物のうち、特筆されるものに石剣と石戈がある。石戈は、1は基部の内から胡にかけての半身が遺存したもので、胡に円孔を穿っている。遺存長6.2cm・遺存幅3.4cm・内の厚さ0.9cmを測る。両面はていねいに研磨され、穿孔も両面からである。2～4は、石剣の身部中央付近の小片で、断面菱形にていねいに研磨された一面が遺存している。2は、剣身幅3.6cm・遺存長3.0cm・厚さ1.1cmを測る。刺突した際に、平行に亀裂が生じて折れたらしい。3は、鎬部分の破片であるが、2と比較して、小型の石剣に復原される。4は、剣身部分の小片で、剣のどの部分に相当するかは明らかではない。ただし、側縁部は調整されて、一種の刃潰しが施されており、削器のような用途を持つ工具へと転用された可能性がある。また、石材はいずれも同一で、灰褐色で節理の明瞭な粘版岩と判断される。

5.　ま と め

宮ノ背遺跡と備前遺跡の調査成果に基づいて、今まで知られている南山城地域の高地性集落を類型的に整理しておきたい(第104図)。

備前類型　八幡市備前遺跡を標識とする。眺望の優れた丘陵斜面部に占地する高地性集落で、丘陵を囲む環濠を有する。建物は、斜面を「L」字形にカットした方形テラス状住居が主体である。築造時期は中期末～後期初頭であるが、後期後半にも集落の再居住が認められるものもある。遺物は全般に少なく、鉄器の普及も顕著でないが、祭祀関連遺物が見られることが特徴である。また、居住域に近接して墓域が設けられるものもある。この類型に該当するものに、八幡市幣原遺跡、宇治市羽戸山遺跡がある。また、今年度に当調査研究センターによって試掘調査が実施された木津町城山遺跡もこの類型に属する。

(田辺)天神山類型　京田辺市田辺天神山遺跡標識とする。広い平坦面を持つ丘陵頂部に占地す



第104図　南山城地域における高地性集落の二者

る高地性集落で、環濠は有さない。建物は、円形あるいは方形の竪穴式住居で排水溝を持つものもある。初現は中期末～後期初頭であるが、盛行期は後期中頃～後半である。遺物は多く、鉄器の出土も珍しくはない。この類型に該当するものに、八幡市宮ノ背遺跡がある。

この２類型は中期末～後期初頭の高地性集落でほぼ同時期に顕在化するが、備前類型は後期中頃に登場する高地性集落では見られない。備前類型は環濠を持ち、墓域が居住域と近接することからも、中期の拠点集落の構成要素が指摘でき、後期になって拠点性を喪失した中期までの弥生時代集落が丘陵上に築かれたあり方を示している。南山城地域では、全体をうかがう資料はないが、この典型例は大阪府高槻市古曽部・芝谷遺跡である。もっとも、北近畿に目を転じると、京都府峰山町扇谷遺跡・弥栄町奈具岡遺跡など、前期以来、環濠やテラス状住居を丘陵上に築く弥生集落が知られており、備前類型は南山城地域で検出された北近畿型の弥生時代集落とみなすこともできよう。但し、残念なことに、南山城地域では中期の拠点的な集落の実態が明確ではなく、中期から後期への動態の解明には、現在の資料からでは限界がある。

一方、天神山類型は中期的要素が払拭された高地性集落で、後期になっての地域社会の再編成に伴って出現するものである。この類型では鉄器検出例が多く、実用利器としての鉄器が小規模集団にまで浸透したことを裏付ける。さらに注意される点は、天神山類型が盛行する後期中頃～後半は、南山城地域の弥生時代の社会における一つの画期とみなされることである。この時期に、土器様式では二重口縁壺・手捏ね形土器が加わり、細頸壺が器種として明確化し、近江系土器の影響が色濃くなってくる。また、住居プランも円形から方形へと変遷し、生産用具では鉄器の比重が高くなってくる。さらに、備前類型の高地性集落でも、後期後半に再居住がみられ、その後、集落が一時に廃絶したような状況を呈する遺跡も多い。焼失住居あるいは焼却処分住居が増加するのもこの時期以後のことである。これらの証拠は、後期中頃～後半が「倭国大乱」という単な

る戦闘行為のみの結果ではなく、より深層からの社会的変容が進行中であったことを物語っている。その契機が何かは想像の域を出ないが、南山城地域の高地性集落では、中期末～後期初頭よりも後期中頃～後半をより大きな画期として重視すべきであるといえよう。

(河野一隆)

注1　『大阪工業大学構内遺跡発掘調査概報』(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第11集　八幡市教育委員会)　1992

注2　本概報よりも先に、現地説明会資料ならびに「南山城の高地性集落」(『京都府埋蔵文化財情報』第66号)誌上に、発掘調査の成果の一部を公表した。本概報では、平成8年度調査分との混同を避けるため、遺構番号などを通しにした。このため、先の報告では宮ノ背遺跡の1～3号住居跡としたものを、本概報では竪穴式住居跡4～6へ、さらに西ノ口遺跡の1～3号住居跡を竪穴式住居跡2～5へ、備前遺跡の1～5号住居跡を竪穴式住居跡1～5へ変更する。

付表2　備前遺跡出土土器観察表

挿図番号	番号	出土遺構	器種	口径(cm)	器高(cm)	色調	焼成	調整		備考
								内面	外面	
第99図	1	土器溜まり2	甕	17.1	19.2	淡黄褐色	良	ハケ	ハケ	
第99図	2	土器溜まり1	甕	16.6	24.4	淡褐色	良	ハケ	タタキ	
第99図	3	土器溜まり1	甕	15.1	25.5	黄褐色	良	ハケ	タタキ	
第99図	4	土器溜まり1	甕	15.0	22.6	茶褐色	良	ハケ	ハケ	
第99図	5	SD01埋土	甕	14.4	19.8	暗褐色	良	ハケ	タタキ	刻み目
第99図	6	土器溜まり2	甕	15.0	14.4	黄褐色	良	ハケ	タタキ	
第99図	7	土器溜まり1	甕	15.6	22.7	茶褐色	良	ハケ	タタキ	
第99図	8	土器溜まり2	甕	16.3	5.6	赤褐色	良	ハケ	タタキ	
第99図	9	土器溜まり1	甕	14.3	6.4	茶褐色	良	ケズリ	タタキ	矢羽根形
第99図	10	土器溜まり1	甕	7.6	14.2	淡褐色	やや軟	ナデ	タタキ	
第99図	11	SD01埋土	甕	16.0	14.2	暗茶褐色	良		タタキ	
第99図	12	土器溜まり1	甕	15.0	6.3	淡褐色	良	ハケ	タタキ	
第99図	13	SD01埋土	甕	14.0	9.5	淡褐色	やや軟		タタキ	
第99図	14	土器溜まり2	甕	13.6	7.2	淡茶褐色	良	ナデ	タタキ	
第99図	15	土器溜まり1	甕	18.7	8.2	明茶褐色	良	ナデ	タタキ	
第99図	16	SD01埋土	甕	13.6	5.2	黄褐色	良		タタキ	
第100図	17	土器溜まり2	甕	20.4	9.2	茶褐色	良	ハケ	タタキ	刻み目
第100図	18	SD01埋土	甕	14.6	8.4	茶褐色	やや軟	ハケ	ナデ	
第100図	19	土器溜まり1	甕	12.7	12.7	淡茶褐色	軟		ハケ	
第100図	20	サブトレ	甕	13.3	7.7	明褐色	良		ハケ	
第100図	21	SD01	甕	12.8	9.7	灰褐色	良	ナデ	ミガキ	
第100図	22	サブトレ	甕	12.5	7.5	黄褐色	良	ハケ	ハケ	
第100図	23	土器溜まり2	甕底部	4.0	2.1	淡茶褐色	良	ケズリ		
第100図	24	土器溜まり1	甕	17.5	4.2	黄褐色	良		ナデ	近江系
第100図	25	SD01埋土	甕	13.5	15.0	暗褐色	良	ケズリ	タタキ	北近畿系
第100図	26	土器溜まり1	甕	16.0	10.5	赤褐色	良	ハケ	タタキ	外来系
第100図	27	土器溜まり2	甕底部	4.2	6.7	黄褐色	良	ナデ	ナデ	
第100図	28	サブトレ	甕底部	5.5	11.8	明黄褐色	良	ハケ	タタキ	
第100図	29	SD01埋土	甕底部	4.0	14.2	黄褐色	良	ナデ	タタキ	
第100図	30	土器溜まり1	甕底部	5.0	11.8	赤褐色	良	ハケ	タタキ	
第100図	31	SD01埋土	甕底部	5.4	9.8	茶褐色	やや軟	ハケ	ナデ	
第100図	32	SD01埋土	甕底部	4.8	6.7	赤褐色	良			

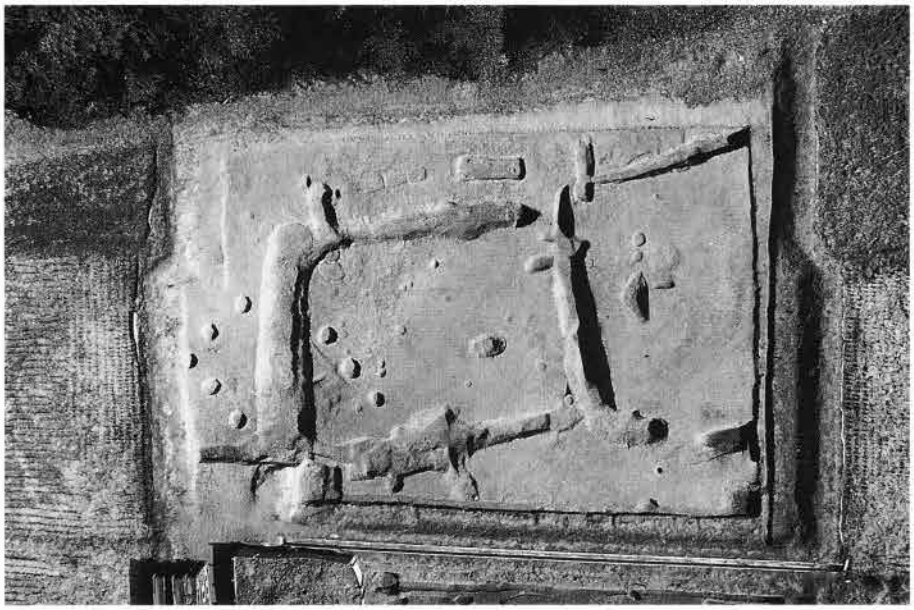
第100図	33	ＳＤ01埋土	甕底部	5.2	11.8	黄褐色	良	ハケ	タタキ	
第100図	34	ＳＤ01埋土	甕底部	4.0	12.0	茶褐色	良	ナデ	タタキ	
第100図	35	ＳＤ01埋土	甕底部	4.0	8.5	黄褐色	良	底ハケ	タタキ	
第100図	36	土器溜まり１	甕底部	4.8	6.1	淡褐色	良	ハケ	タタキ	
第100図	37	土器溜まり１	甕底部	3.6	4.6	茶褐色	良	ハケ	タタキ	
第100図	38	ＳＤ01埋土	広口壺	15.4	6.2	茶褐色	良	ハケ	ハケ	
第100図	39	土器溜まり１	広口壺	12.4	4.4	淡灰色	良		ナデ	
第100図	40	ＳＤ01埋土	広口壺	15.2	6.4	黄褐色	良		ハケ	
第100図	41	土器溜まり２	広口壺	15.8	6.1	茶褐色	良	ケズリ	ハケ	
第100図	42	土器溜まり１	広口壺	14.9	5.5	淡橙褐色	良	ハケ	ミガキ	直線文有り
第100図	43	ＳＤ01埋土	広口壺	15.4	4.8	茶褐色	良	ハケ	ミガキ	直線文有り
第101図	44	土器溜まり１	広口壺	17.6	3.3	淡褐色	良			
第101図	45	土器溜まり２	広口壺	15.4	3.5	淡褐色	良			
第101図	46	土器溜まり２	広口壺	20.3	5.2	淡茶褐色	良	ミガキ	ミガキ	
第101図	47	土器溜まり２	壺底部	7.0	7.2	明黄褐色	良	ナデ	ミガキ	
第101図	48	土器溜まり２	広口壺	16.2	4.1	黄褐色	やや軟			円形浮文
第101図	49	土器溜まり１	短頸壺	10.6	16.8	明赤褐色	良		ハケ	
第101図	50	土器溜まり２	長頸壺	11.1	18.4	淡黄褐色	良	ミガキ	ナデ	
第101図	51	土器溜まり１	長頸壺	9.4	8.1	赤褐色	良	ハケ	ハケ	
第101図	52	土器溜まり１	長頸壺	8.6	7.7	赤褐色	良	ハケ	ミガキ	
第101図	53	土器溜まり１	壺底部	4.5	15.9	赤褐色	良	ハケ	ミガキ	
第101図	54	ＳＤ01埋土	壺底部	4.6	13.0	黄褐色	良	ハケ	ハケ	
第101図	55	土器溜まり１	壺底部	4.2	13.8	明茶褐色	良		タタキ	矢羽根形
第101図	56	土器溜まり１	高杯	12.6	7.0	淡褐色	良	ミガキ		
第101図	57	土器溜まり１	高杯	20.9	5.5	赤褐色	良	ミガキ	ミガキ	
第101図	58	土器溜まり１	高杯	26.0	6.8	茶褐色	やや軟	ミガキ		
第101図	59	サブトレ	高杯	17.1	2.2	赤褐色	良	ハケ	ハケ	
第101図	60	土器溜まり１	高杯	20.5	5.4	赤褐色	良	ミガキ	ミガキ	
第101図	61	土器溜まり１	高杯	16.6	2.6	茶褐色	やや軟	ミガキ	ミガキ	
第101図	62	ＳＤ01埋土	高杯	12.8	7.0	茶褐色	やや軟		ミガキ	
第101図	63	土器溜まり１	高杯	20.8	13.6	赤褐色	軟	ミガキ	ミガキ	
第101図	64	土器溜まり１	鉢	11.0	7.4	茶褐色	良	ハケ		
第101図	65	ＳＤ01埋土	有孔鉢	4.2	7.5	茶褐色	良	ハケ	ナデ	
第101図	66	土器溜まり１	有孔鉢	18.2	10.0	茶褐色	良	ハケ	ハケ	
第101図	67	土器溜まり１	有孔鉢	15.8	9.0	茶褐色	良	ハケ	ハケ	
第101図	68	土器溜まり１	有孔鉢	13.6	10.8	黄褐色	良		ハケ	
第102図	69	１号住ピット	鉢	7.4	9.8	淡茶褐色	良		ミガキ	
第102図	70	ＳＤ01埋土	鉢	3.9	12.2	黄褐色	軟	ハケ	ミガキ	
第102図	71	土器溜まり１	鉢	13.8	12.3	茶褐色	良	ハケ	タタキ	
第102図	72	土器溜まり２	鉢	15.2	16.2	淡黒褐色	良	ハケ	タタキ	
第102図	73	ＳＤ01埋土	鉢	8.4	7.2	淡褐色	良		ナデ	脚付き
第102図	74	ＳＤ01埋土	鉢	4.1	5.5	茶褐色	良	ハケ	タタキ	脚付き
第102図	75	土器溜まり１	鉢	10.0	6.3	暗灰褐色	良			
第102図	76	サブトレ	鉢	13.5	8.5	茶褐色	良	ハケ	ナデ	
第102図	77	ＳＤ01埋土	鉢	9.6	4.2	赤褐色	良	ハケ	ハケ	
第102図	78	ＳＤ01埋土	器台	8.3	8.1	黄褐色	良	ナデ	ミガキ	
第102図	79	土器溜まり２	手焙り	5.6	8.6	茶褐色	やや軟	ミガキ	ハケ	
第102図	80	ＳＤ01埋土	手焙り	20.2	7.3	黄褐色	良	ハケ	ミガキ	

図　　版

図版第１　余部遺跡第２次

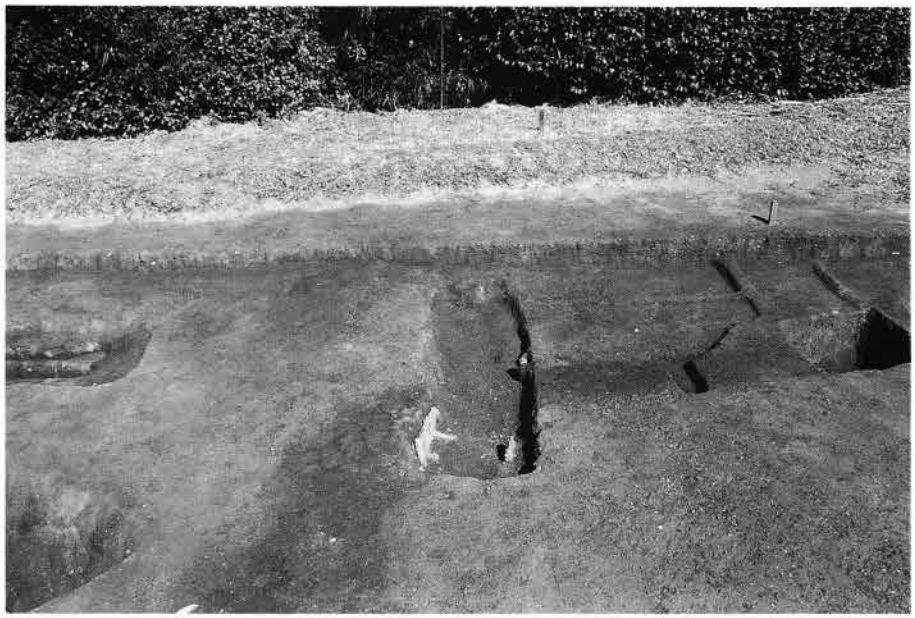
(1)調査地遠景
（南西から）

(2)調査前全景
（北西から）



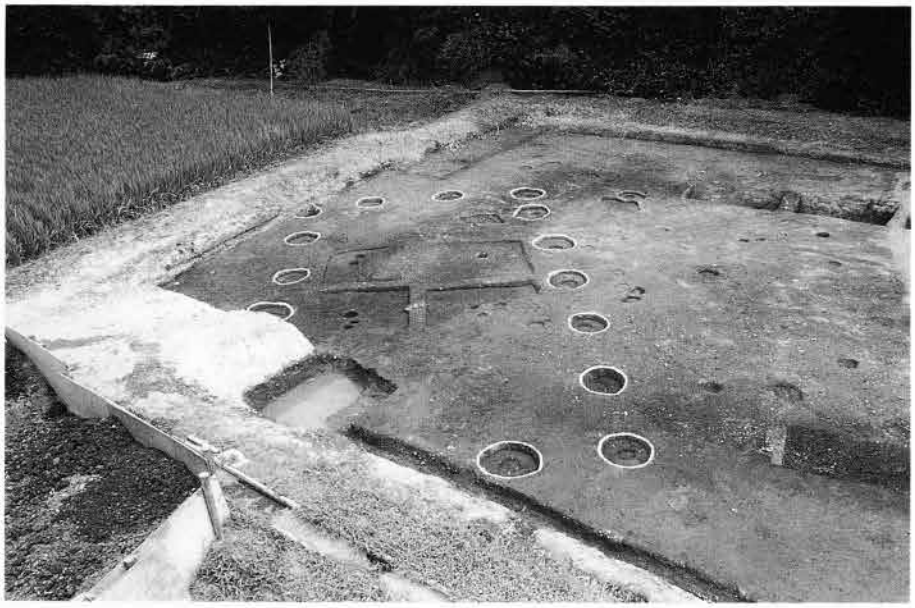
(3)第１トレンチ全景
（真上から）

図版第２　余部遺跡第２次



(1)第１トレンチ
主体部105全景
（西から）

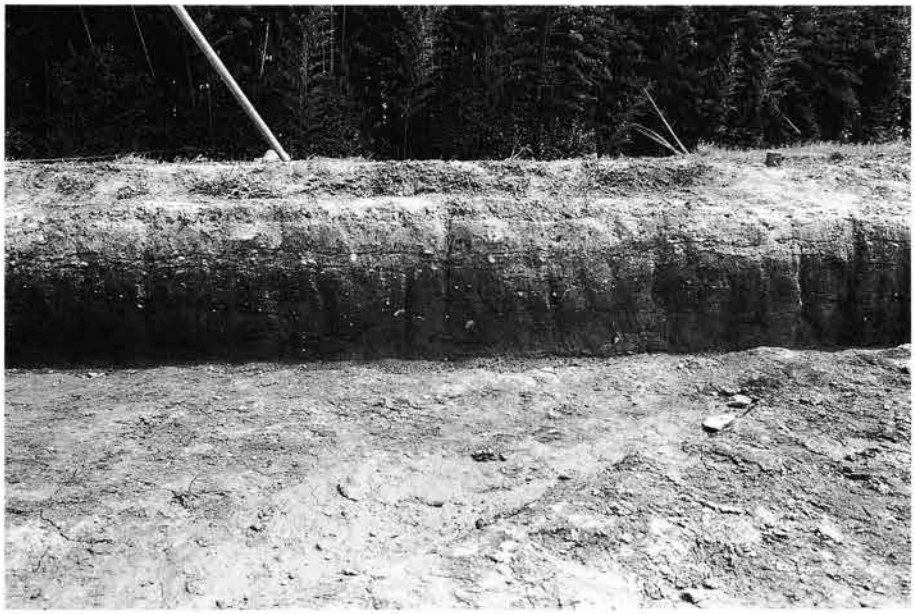
(2)第１トレンチ
主体部105
遺物出土状況
（南から）



(3)第１トレンチ
掘立柱建物跡114
検出状況
（南西から）

図版第３　余部遺跡第２次

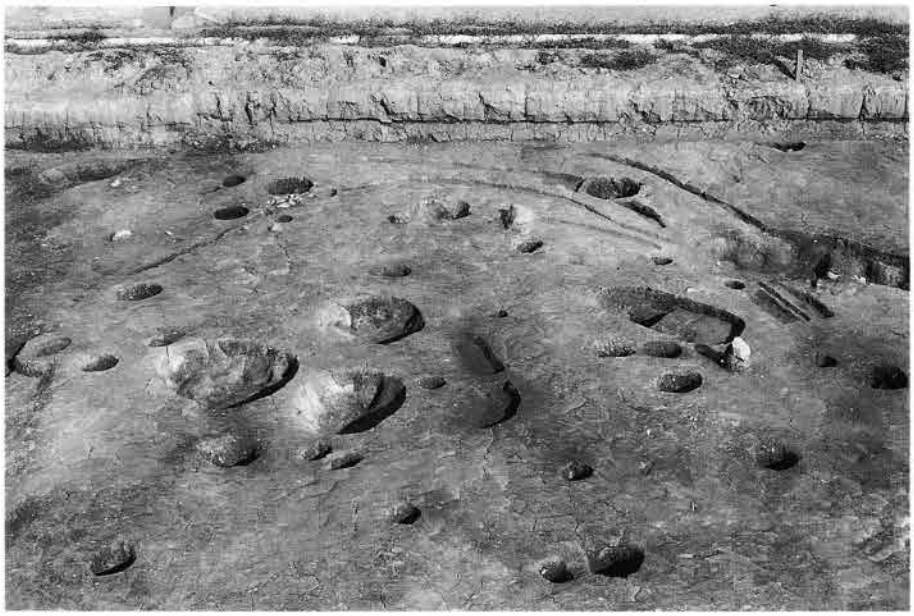
(1)第２トレンチ全景
（真上から）



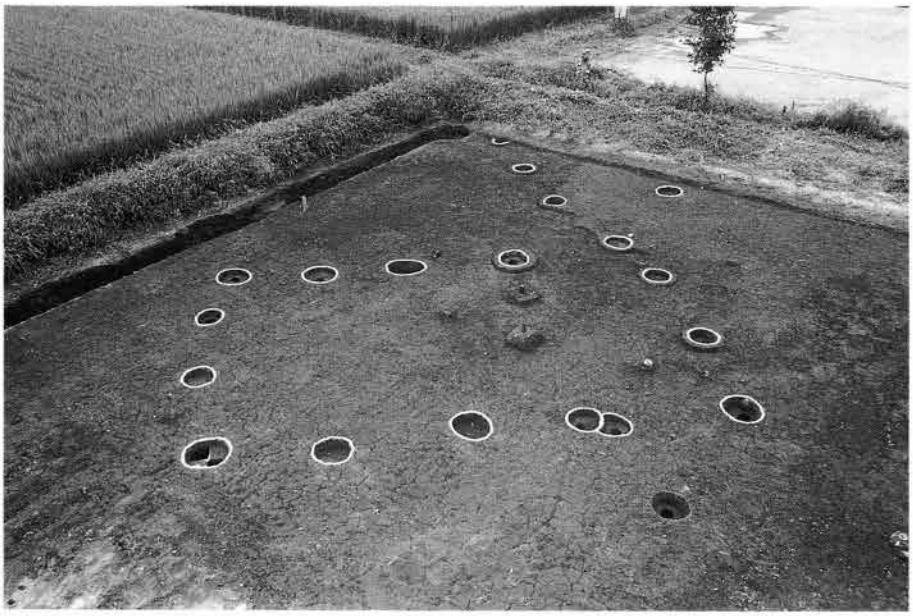
(2)第２トレンチ
東壁土層断面
（西から）

(3)第２トレンチ
竪穴式住居跡216
完掘状況
（西から）

図版第４　余部遺跡第２次



(1)第２トレンチ
竪穴式住居跡216
東側床面検出状況
（西から）



(2)第２トレンチ
掘立柱建物跡204
検出状況
（北東から）

(3)第２トレンチ
溝217
完掘状況
（西から）

図版第５　余部遺跡第２次

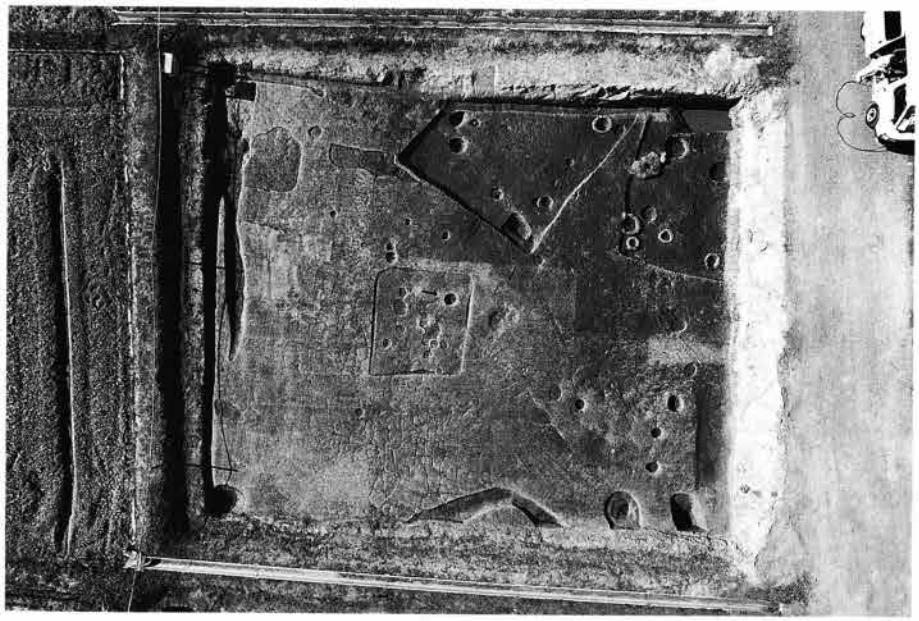
(1)第３トレンチ全景
（真上から）

(2)第３トレンチ
西側遺構完掘状況
（東から）

(3)第３トレンチ
方形周溝墓310
全景
（北東から）

図版第６　余部遺跡第２次

(1)第３トレンチ
掘立柱建物跡305～308
完掘状況
（西から）



(2)第４トレンチ全景
（真上から）

(3)第４トレンチ
竪穴式住居跡403～405
完掘状況
（西から）

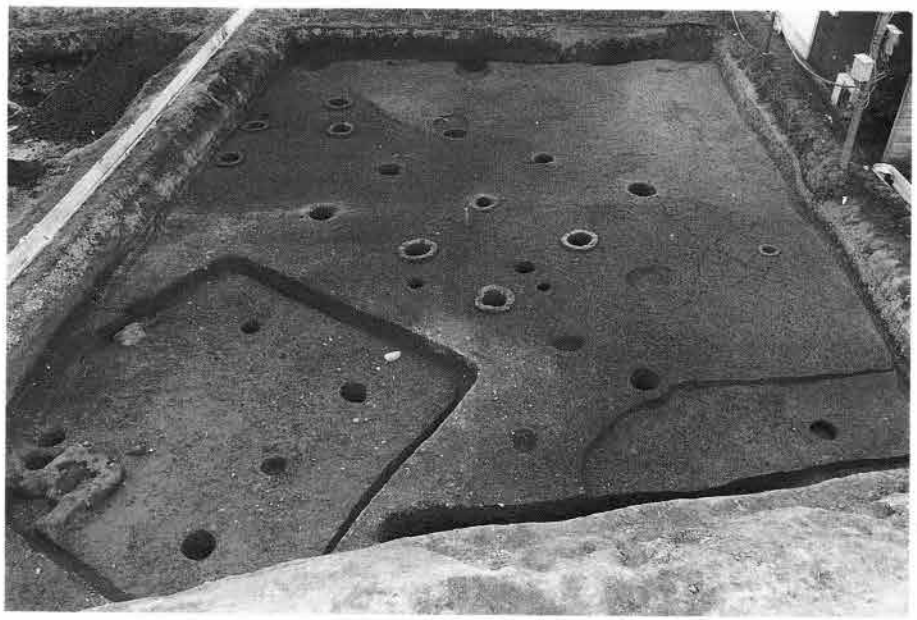
図版第７　余部遺跡第２次

(1)第５トレンチ全景
（真上から）

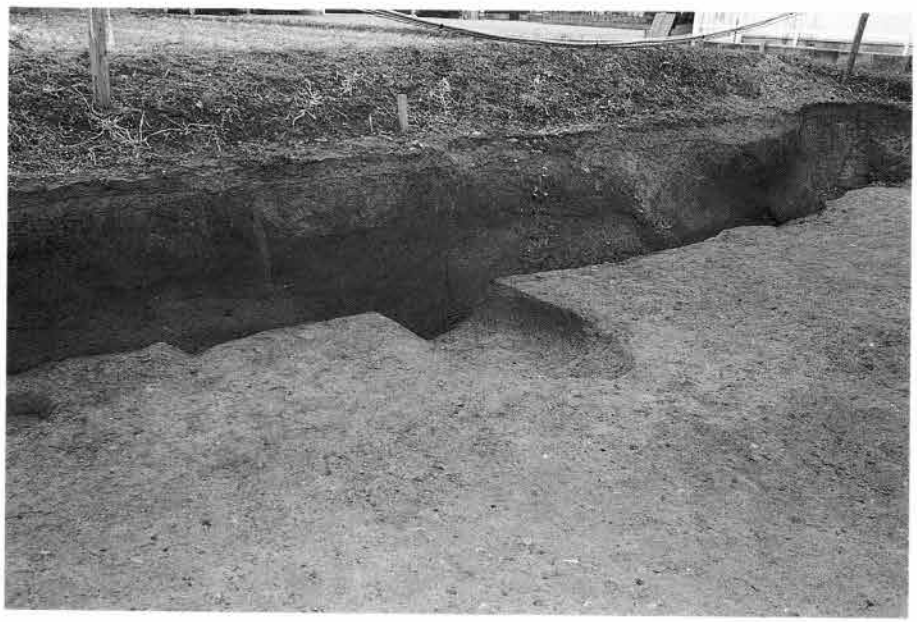
(2)第５トレンチ
方形周溝墓504
完掘状況
（北西から）

(3)第５トレンチ
竪穴式住居跡501
全景
（南東から）

図版第８　余部遺跡第２次



(1)第６トレンチ全景
（北から）

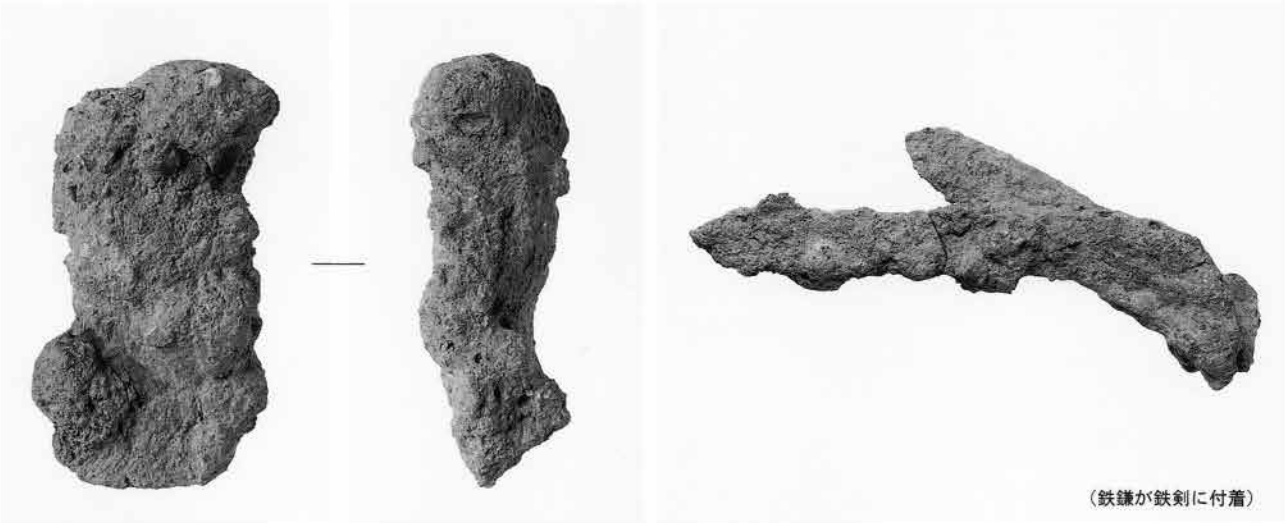


(2)第６トレンチ
南壁土層断面
（北東から）

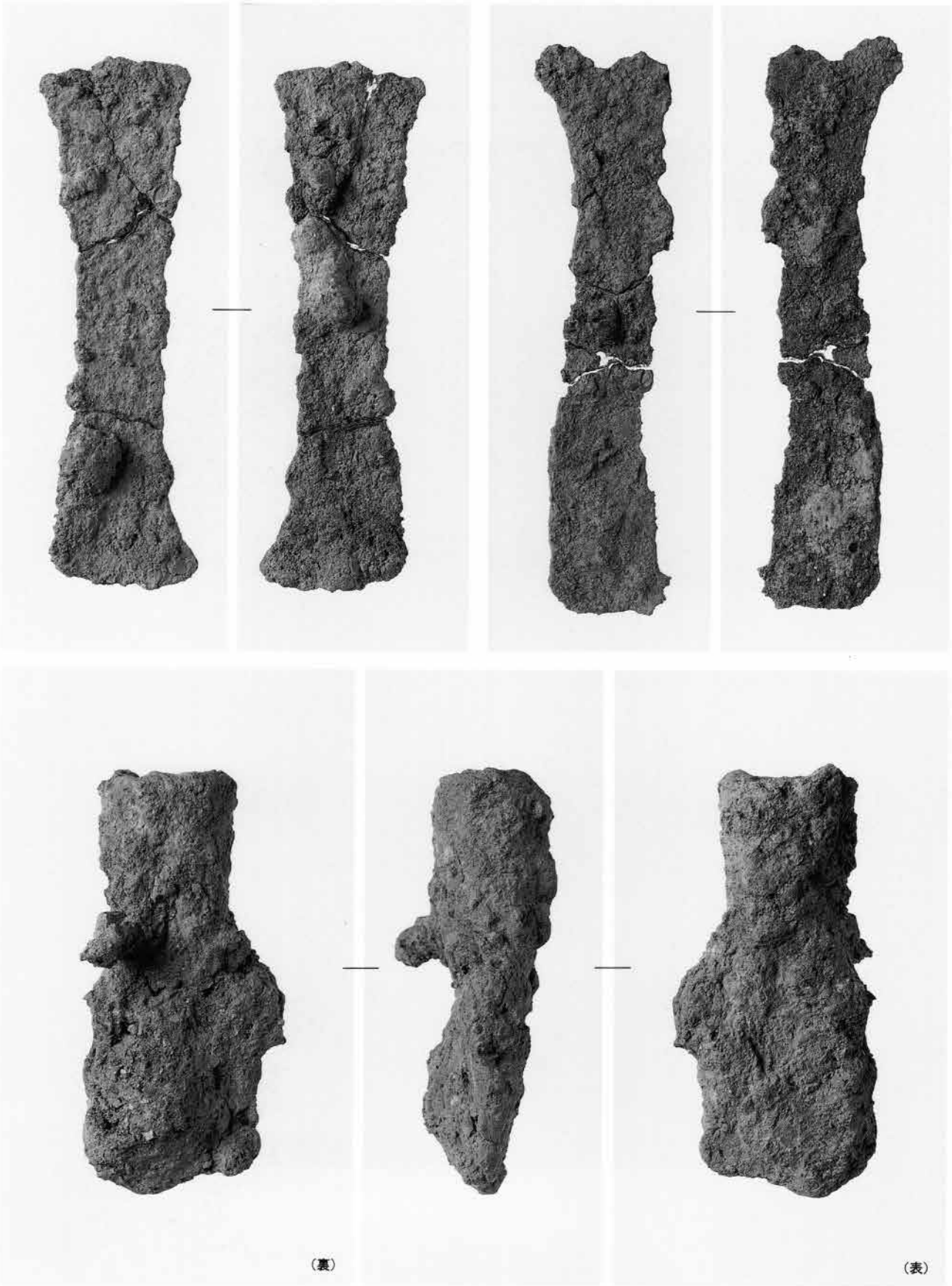
(3)第６トレンチ
竪穴式住居跡601
全景
（南西から）

図版第９　余部遺跡第２次

(1)出土遺物　土器



(2)出土遺物　鉄器(1)　主体部105出土



出土遺物　鉄器(2)　主体部105出土

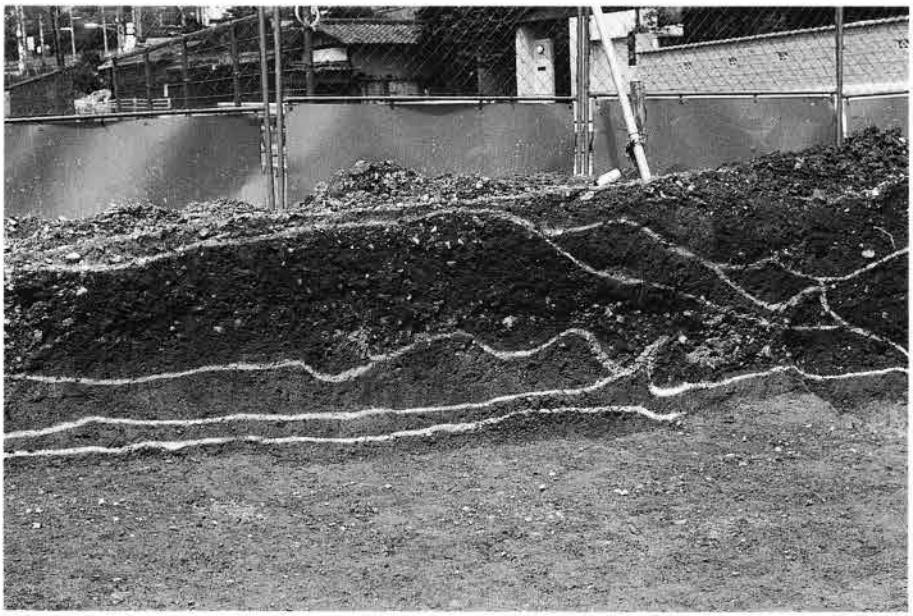
図版第11　中海道遺跡第46次

(1)第１トレンチ調査前（東から）

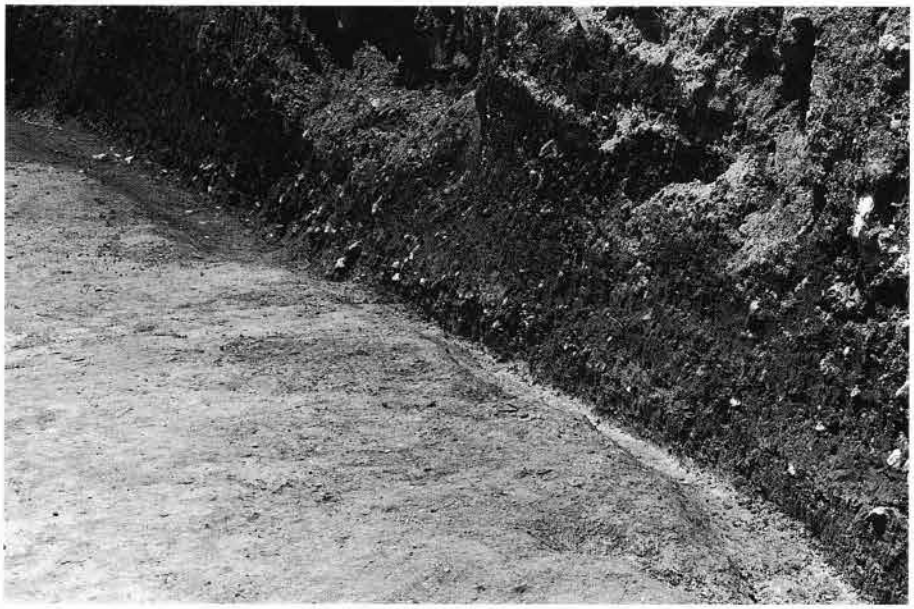
(2)第１トレンチ完掘状況

図版第12　中海道遺跡第46次

(1)第１トレンチ重機掘削状況



(2)第１トレンチ西壁土層断面



(3)ＳＤ101完掘状況

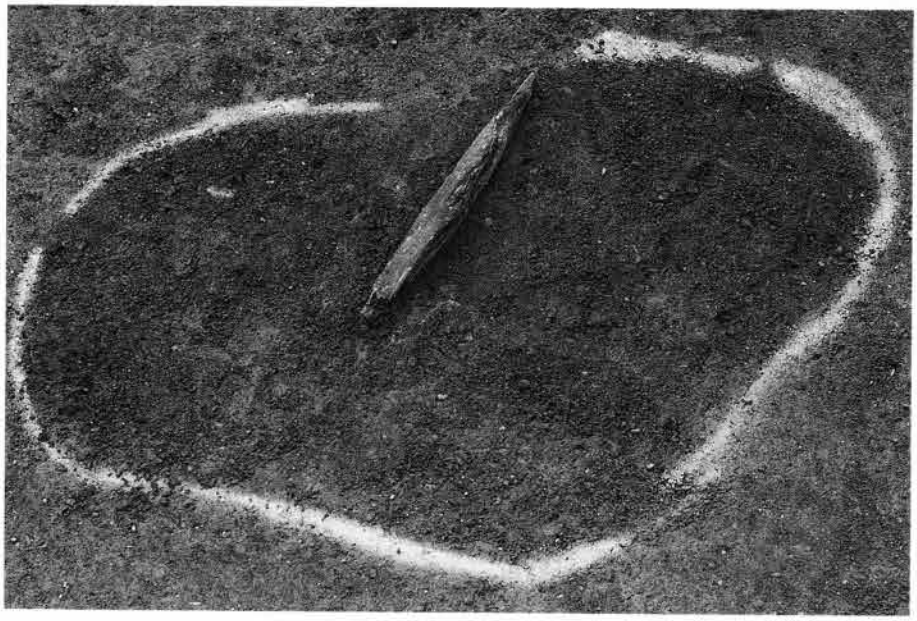
図版第13　中海道遺跡第46次

(1)第２トレンチ調査前（西から）

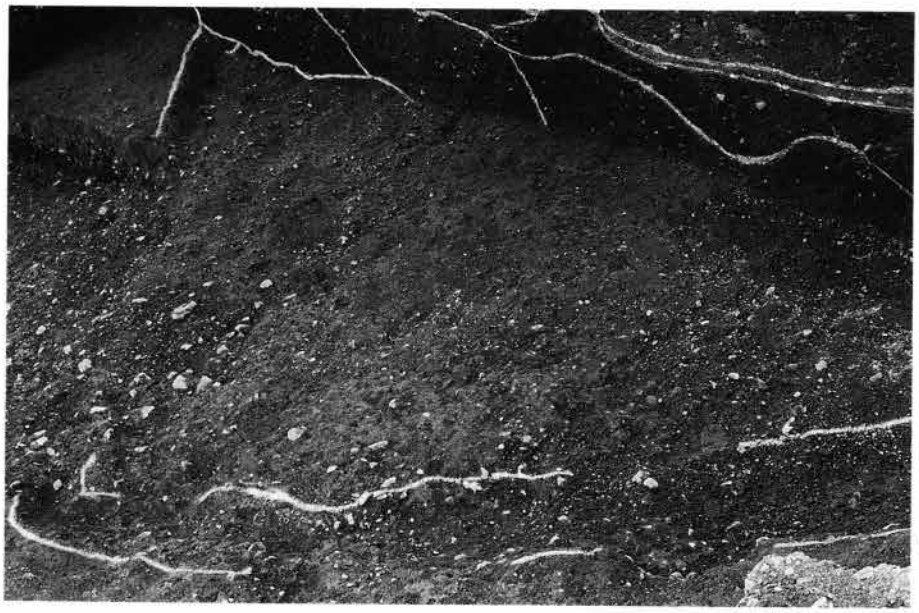
(2)第２トレンチ完掘状況

図版第14　中海道遺跡第46次

(1)第２トレンチ調査風景

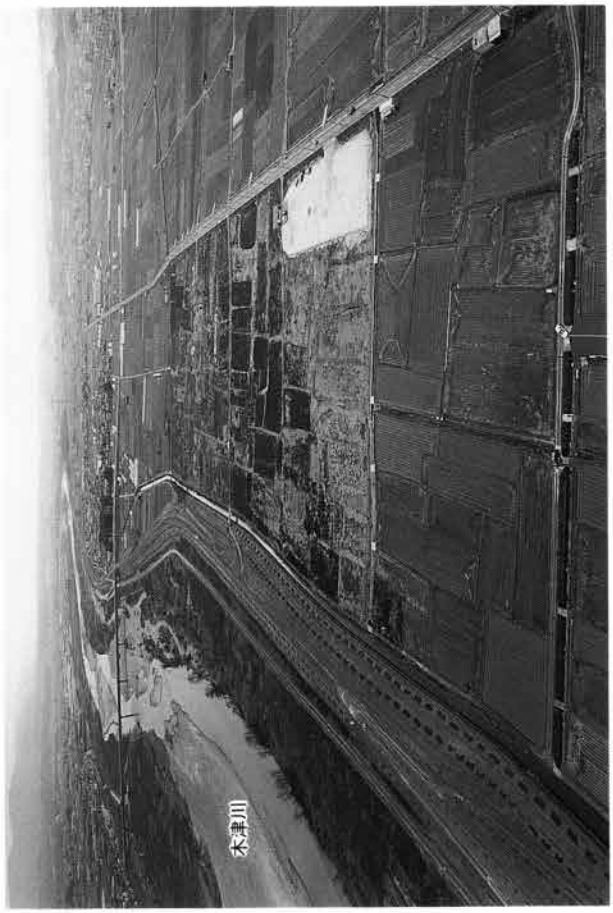


(2)ＳＫ210検出状況

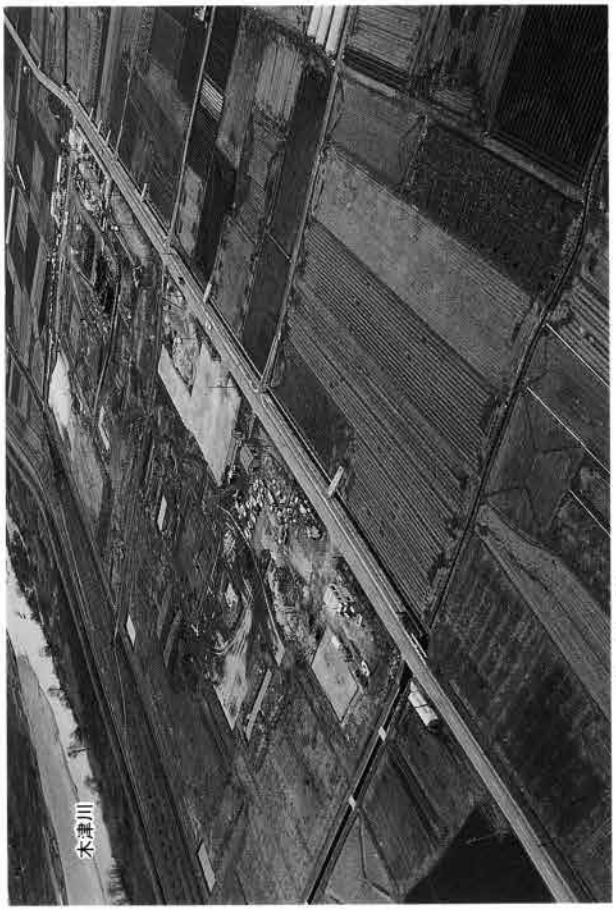


(3)ＳＨ213完掘状況

図版第15　椋ノ木遺跡



(1)調査地遠景１（北から）



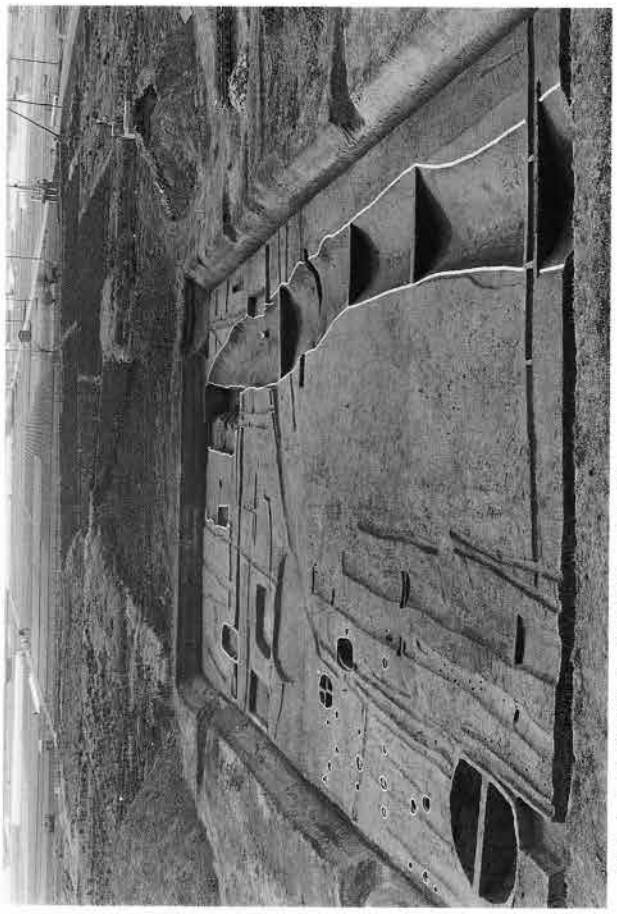
(2)調査地遠景２（北西から）

(3)調査地遠景３（南から）

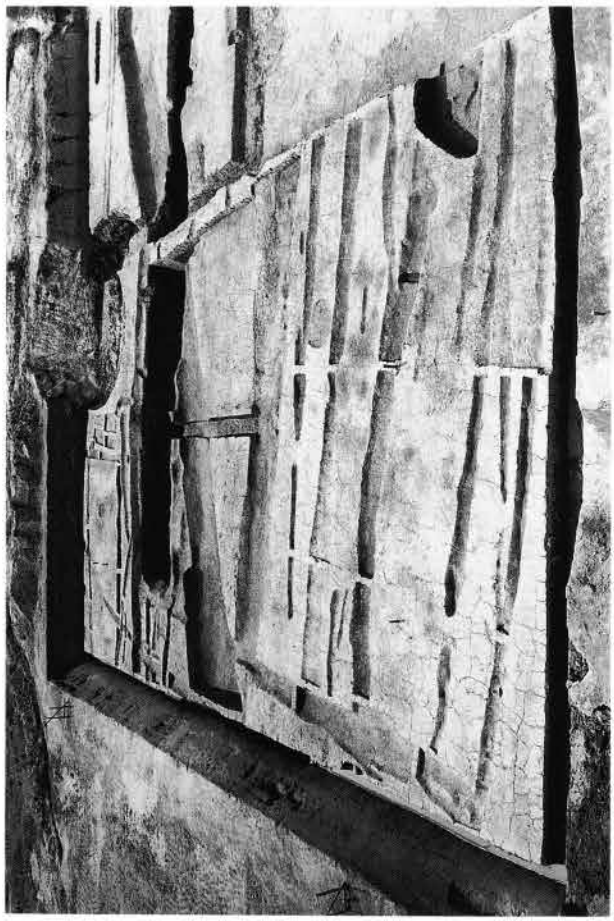
(4)調査地遠景４（西から）

図版第16　椋ノ木遺跡

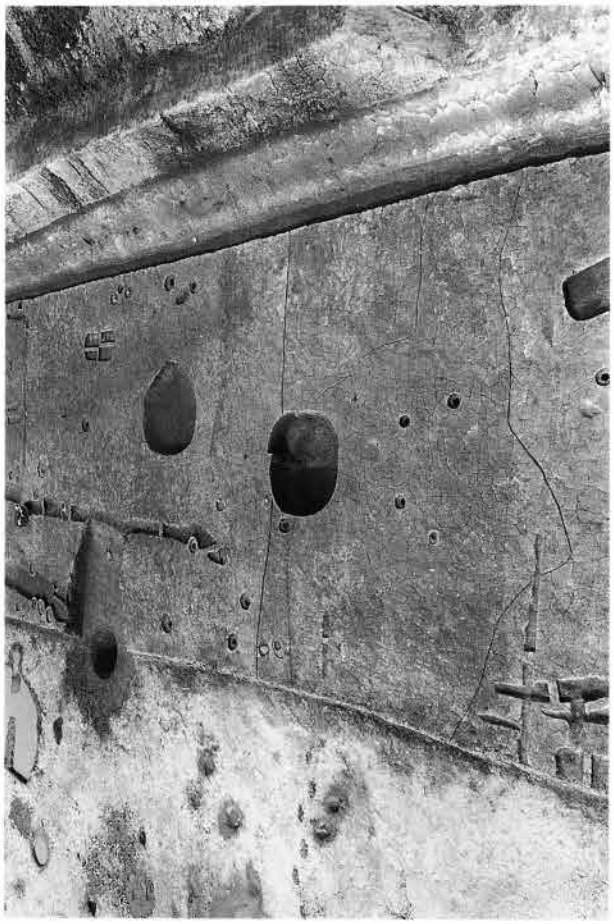
(1) 1 トレンチ全景 1（拡張前、南から）



(2) 1 トレンチ全景 2（拡張前、北から）



(3) 1 トレンチ南拡張区全景（東から）

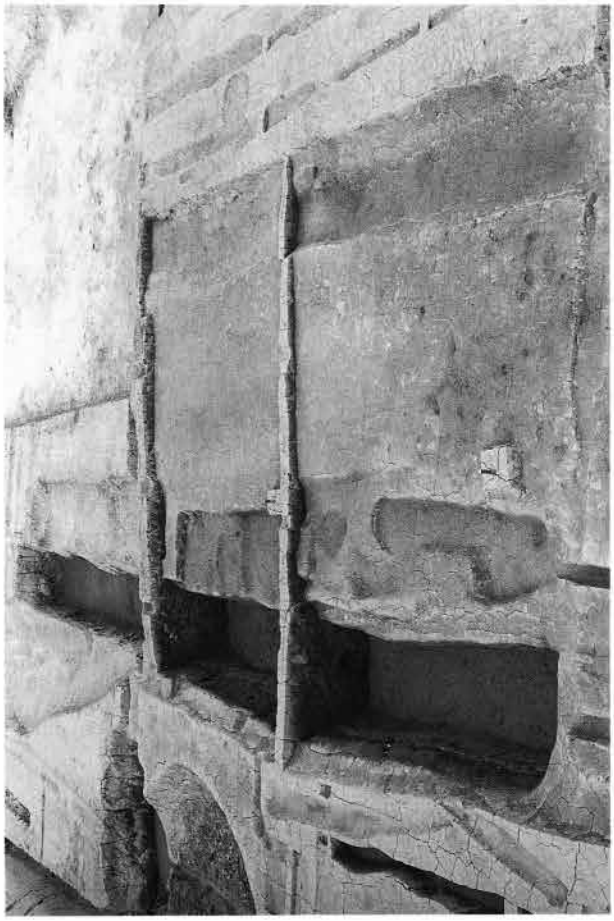


(4) 1 トレンチ東拡張区全景（南から）

図版第17　椋ノ木遺跡

(1) 1トレンチＳＤ9501・ＳＫ9504・ＳＫ9515検出状況（南から）

(2) 1トレンチＳＤ9501検出状況（ＳＫ9504と重複する部分、南から）



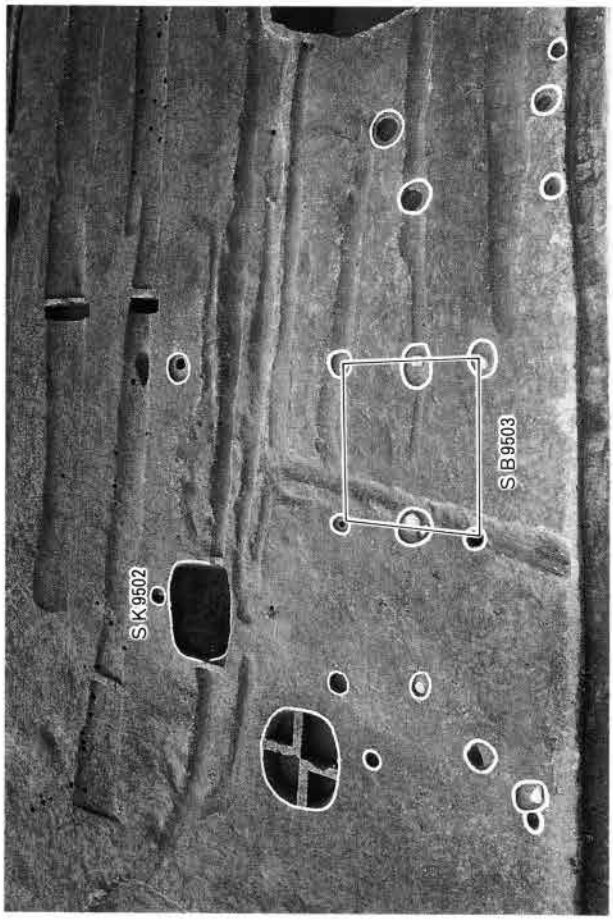
(3) 1トレンチＳＫ9504全景（ＳＤ9501掘削前、南から）

(4) 1トレンチＳＫ9501遺物・石出土状況（北から）

図版第18　椋ノ木遺跡

(1) 1トレンチＳＫ9502全景（東から）

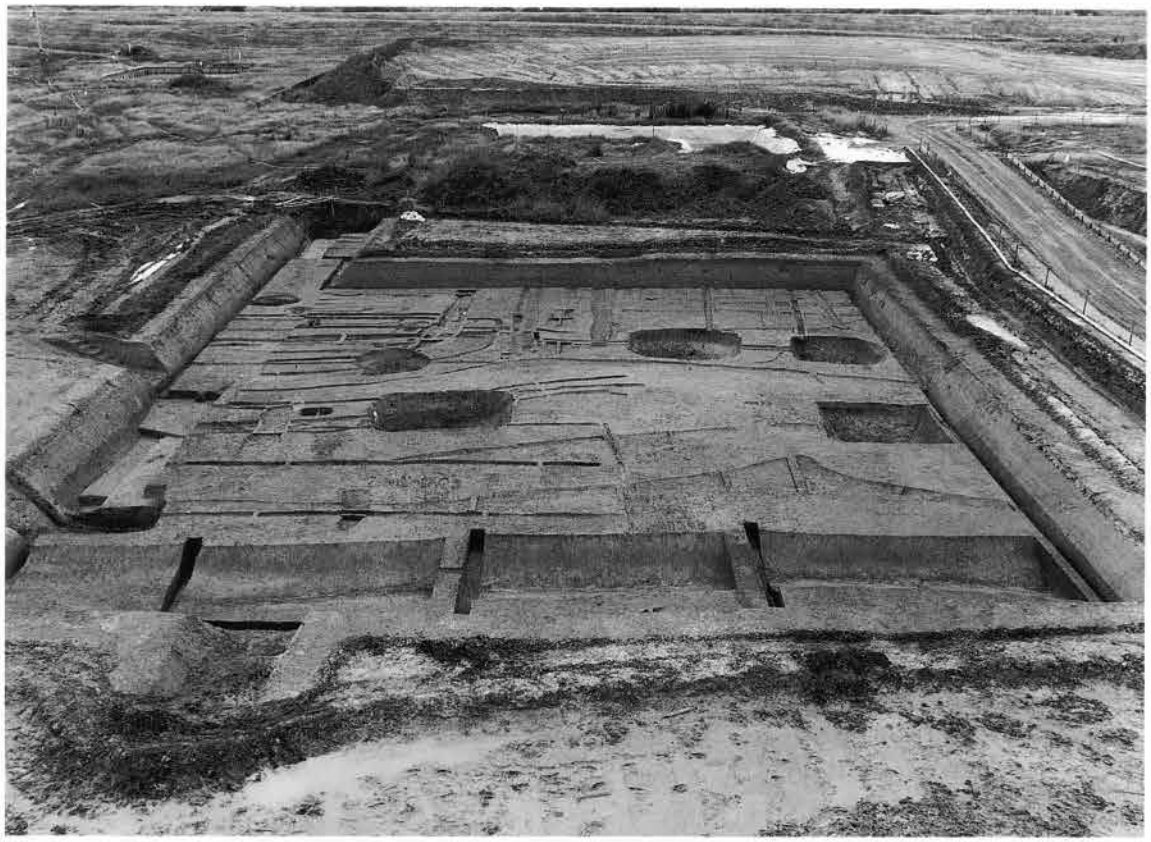
(2) 1トレンチＳＫ9502遺物出土状況（南から）



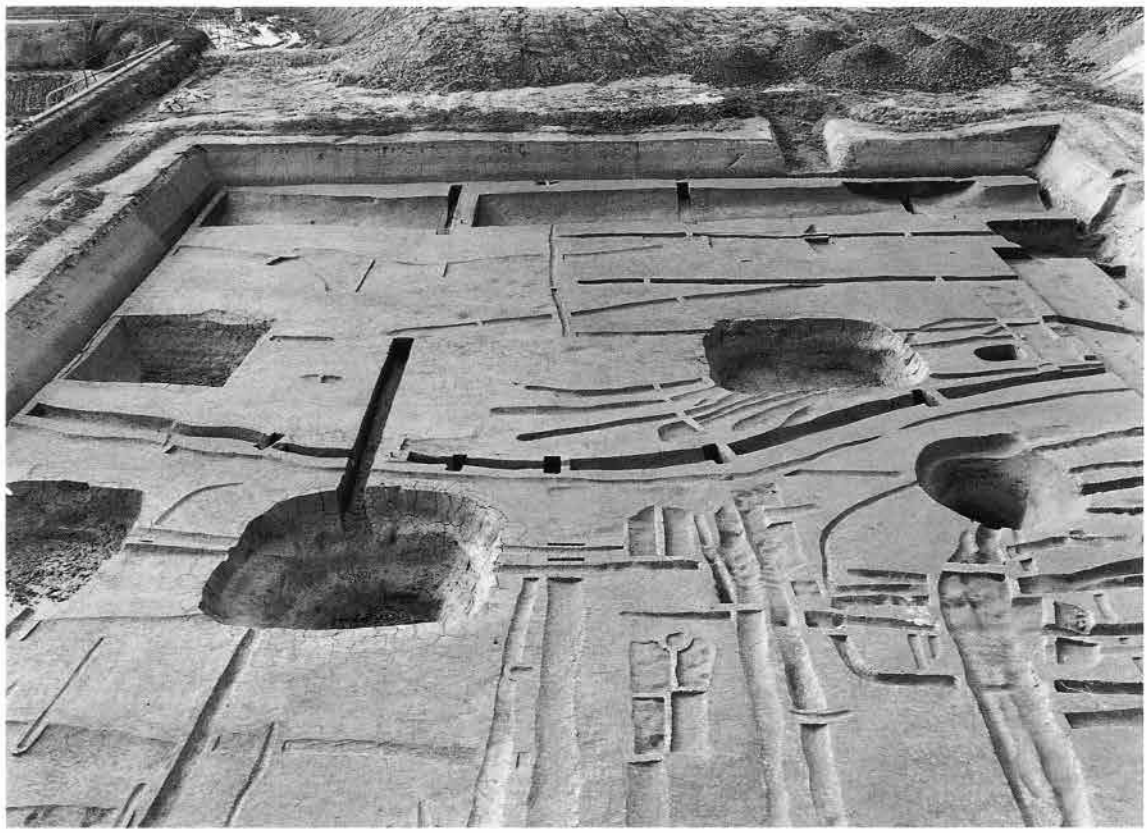
(3) 1トレンチＳＫ9502・ＳＢ9503周辺遺構検出状況（東から）

(4) 1トレンチ最下層遺構検出状況（北から）

図版第19　椋ノ木遺跡



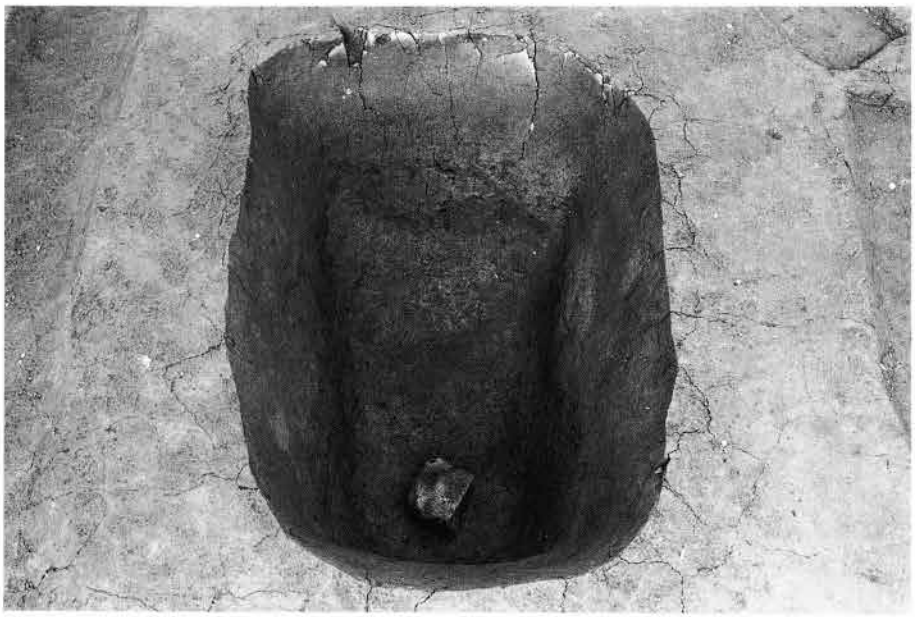
(1) 2 トレンチ全景（西から）



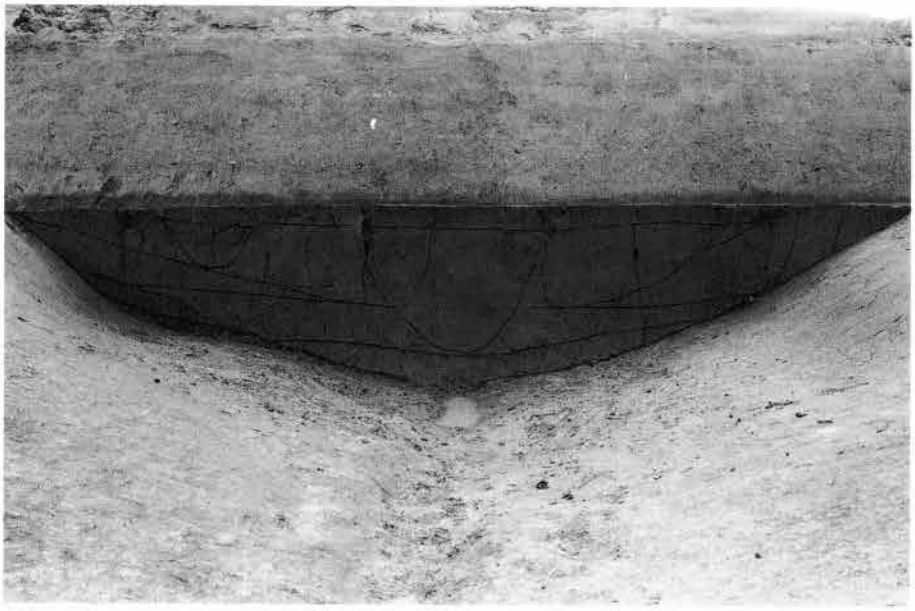
(2) 2 トレンチ全景（東から）

図版第20　椋ノ木遺跡

(1) 2トレンチＳＥ174全景
（南から）



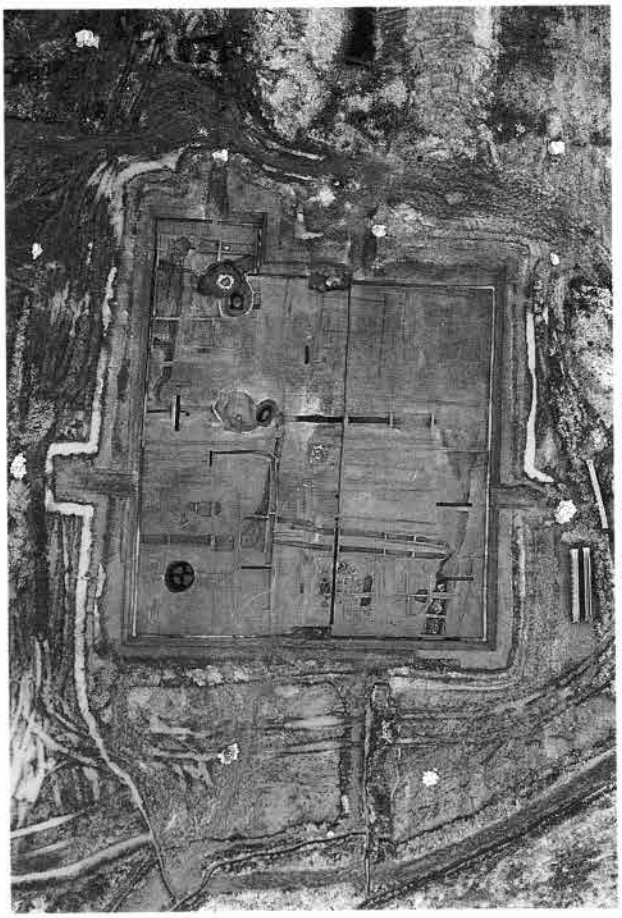
(2) 2トレンチＳＫ171全景
（南から）



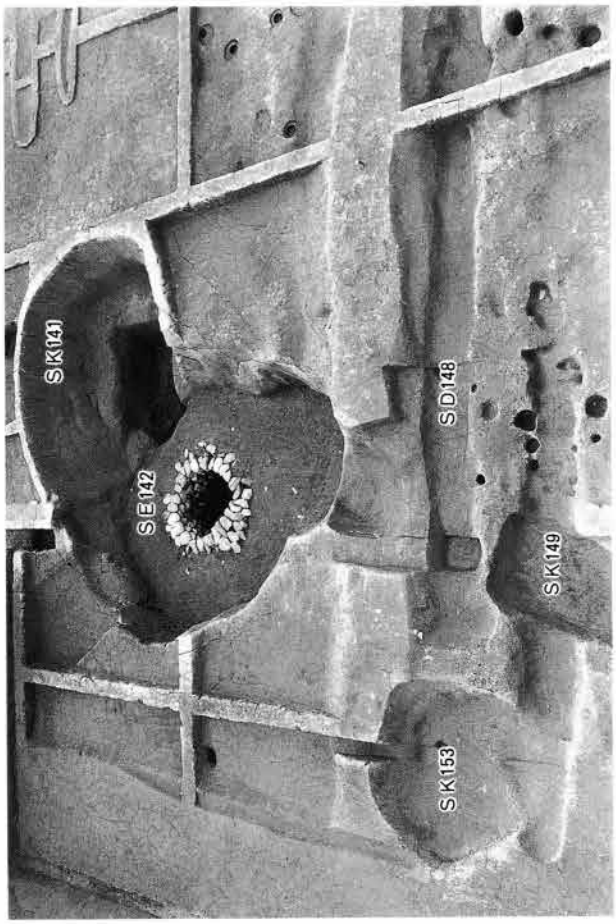
(3) 2トレンチＳＤ173断面
（北から）

図版第21　椋ノ木遺跡

(1)4－3トレンチ全景1（東から）



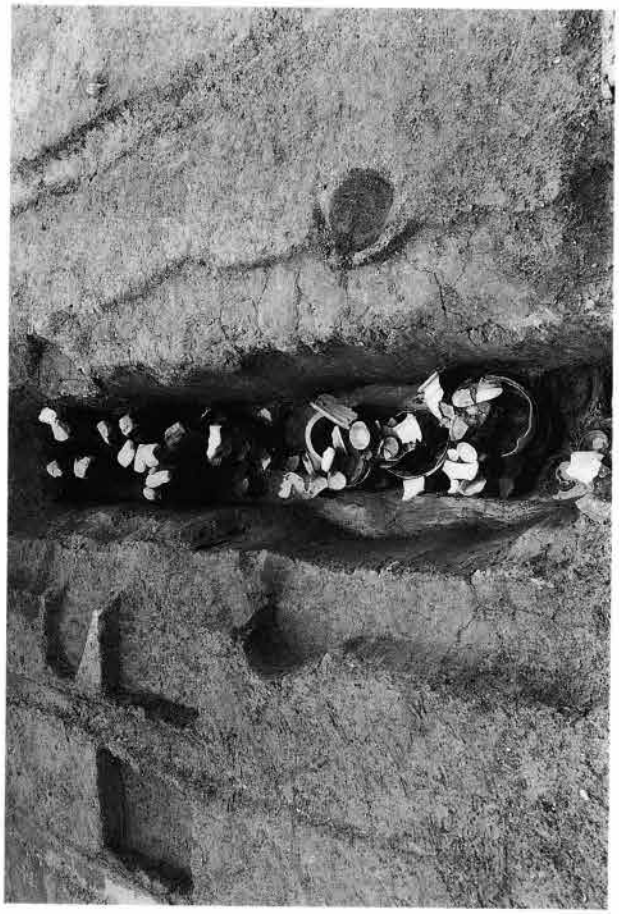
(2)4－3トレンチ全景2（垂直写真、上が北）



(3)4－3トレンチSE142周辺遺構検出状況（北から）

(4)4－3トレンチSE142井戸側検出状況（手前側を断ち割った状態、西から）

図版第22　椋ノ木遺跡



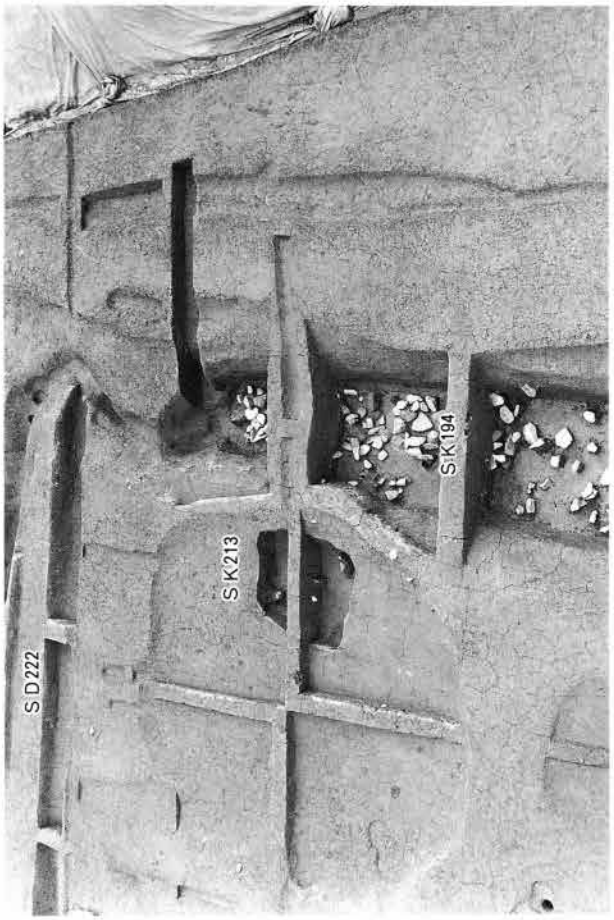
(1)4－3トレンチSD50遺物出土状況1（南から）

(2)4－3トレンチSD50遺物出土状況2（最下層と横断面、南から）

(3)4－3トレンチSD50遺物出土状況3（東から）

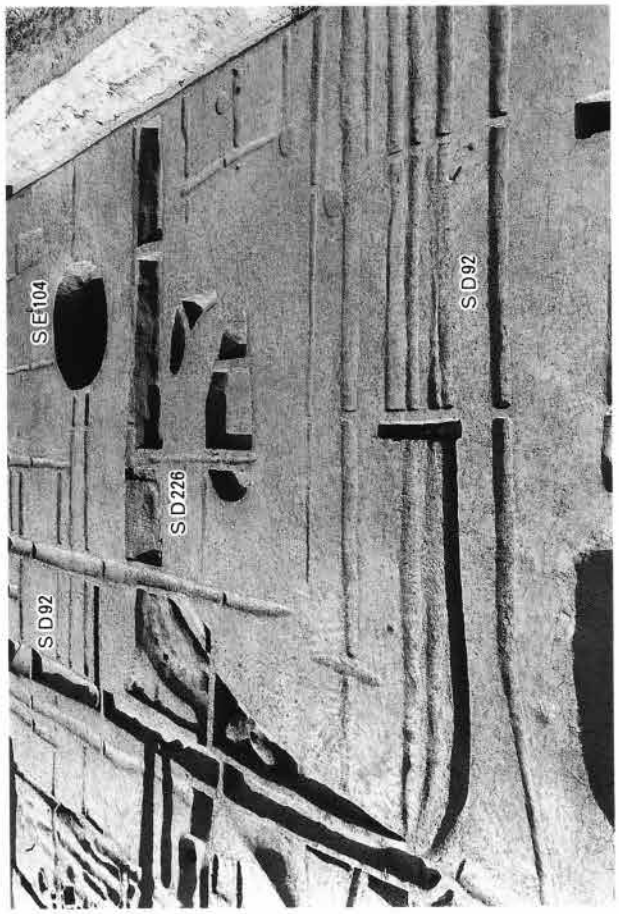
(4)4－3トレンチSD50遺物出土状況4（西から）

図版第23　椋ノ木遺跡



(3) 4 － 3 トレンチ SK194検出状況（西から）

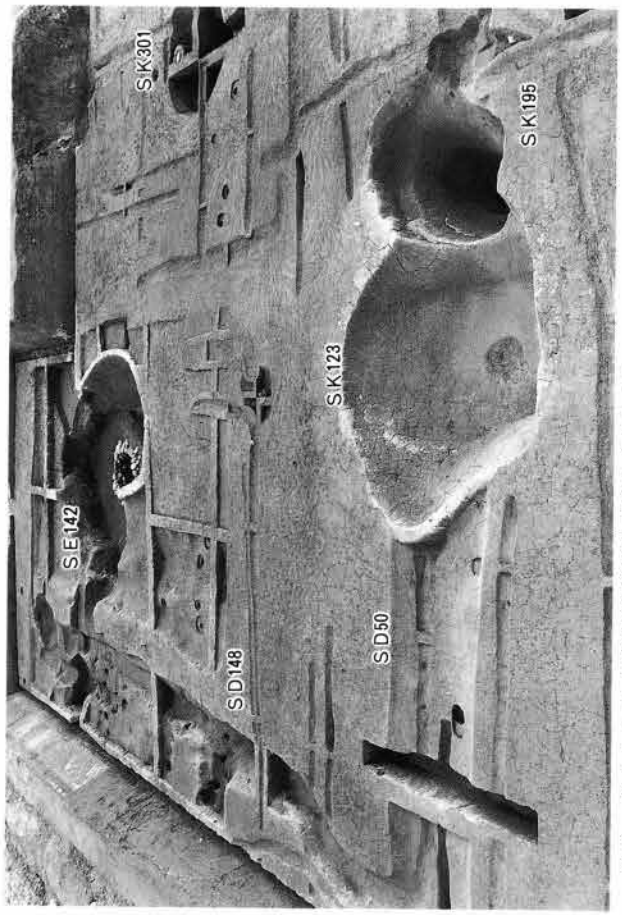
(4) 4 － 3 トレンチ SK213検出状況（西から）



(1) 4 － 3 トレンチ北西部遺構検出状況（東から）

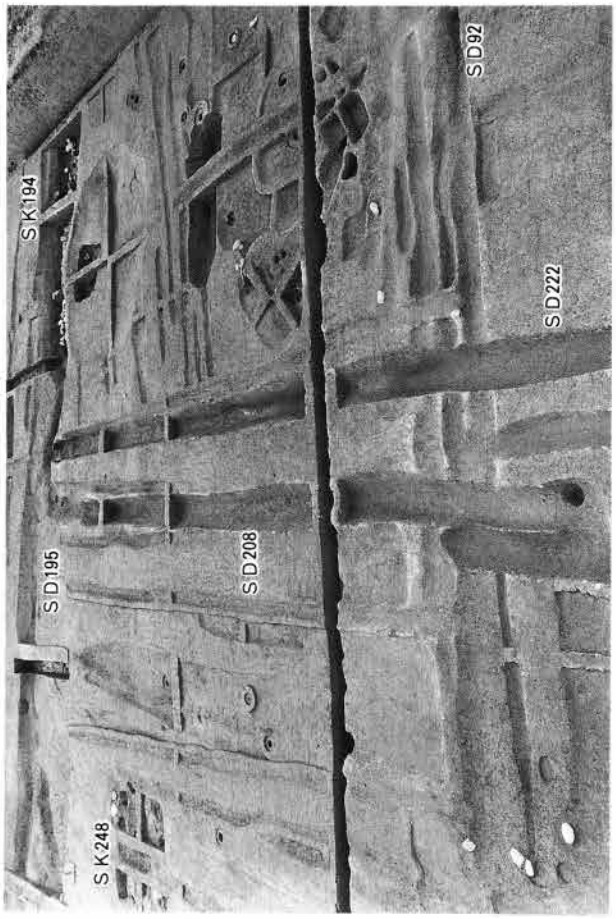
(2) 4 － 3 トレンチ SE104検出状況（北から）

図版第24　椋ノ木遺跡



(1) 4 － 3 トレンチ北東部遺構検出状況（西から）

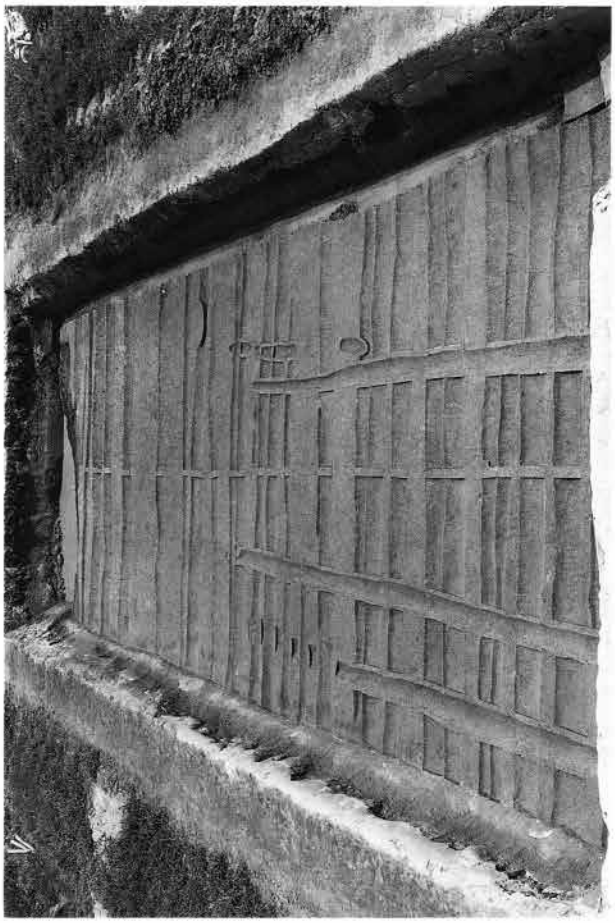
(2) 4 － 3 トレンチＳＤ148遺物・石出土状況（北から）



(3) 4 － 3 トレンチ南西部遺構検出状況（北から）

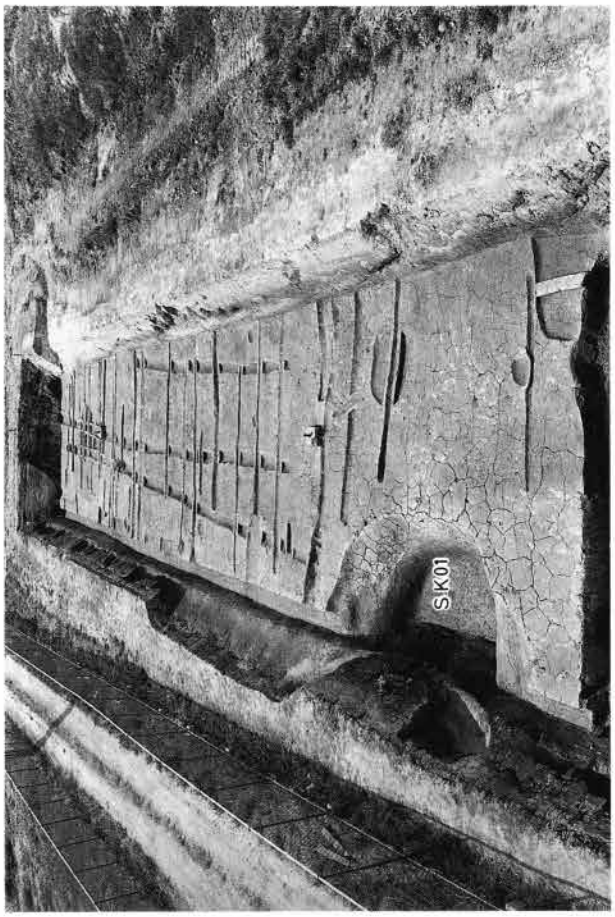
(4) 4 － 4 トレンチ全景（北から）

図版第25　椋ノ木遺跡

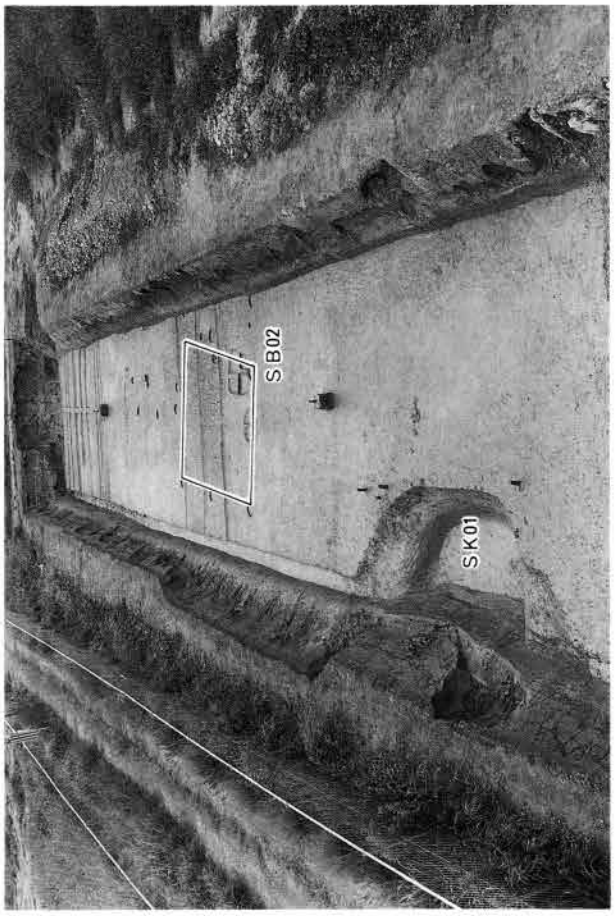


(3)4－2トレンチ全景（西から）

(4)4－5トレンチ全景（東から）



(1)4－1トレンチ上層検出面全景（東から）

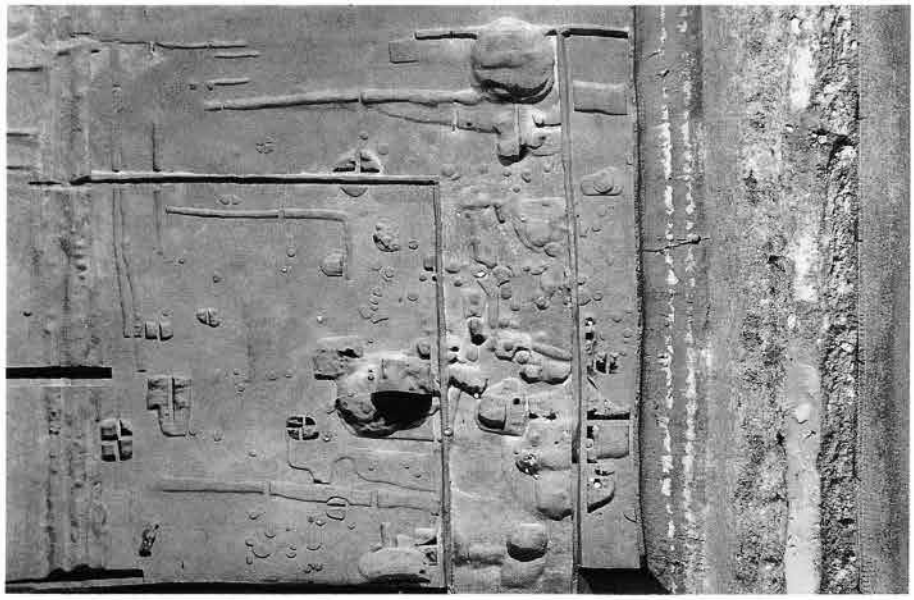


(2)4－1トレンチ下層検出面全景（東から）

図版第26　椋ノ木遺跡

(1) 5 トレンチ全景
（上が北）

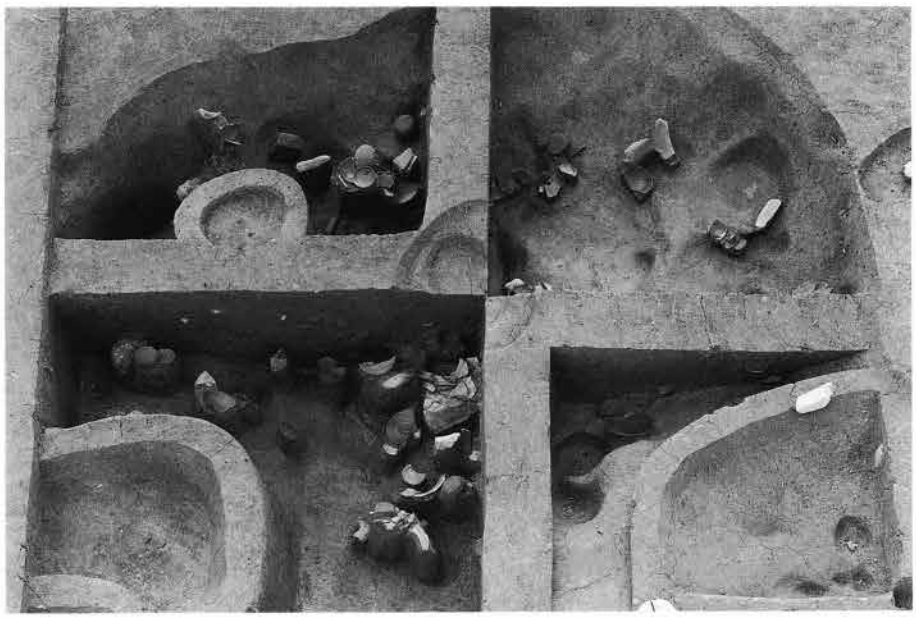
(2) 5 トレンチ全景
（北から）



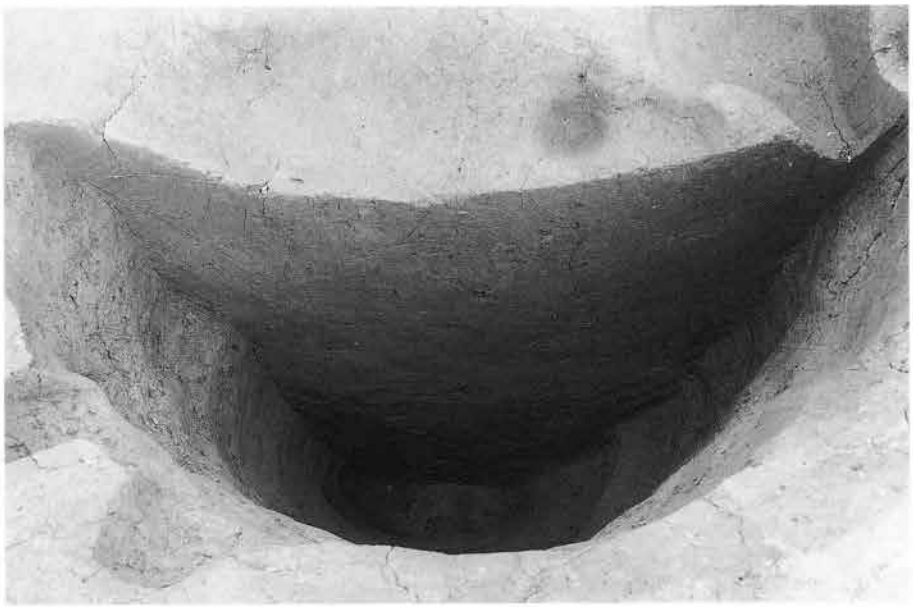
(3) 5 トレンチ南東部
（上が北）

図版第27　椋ノ木遺跡

(1) 5 トレンチＳＥ285断面
（南から）



(2) 5 トレンチＳＫ118全景
（北から）

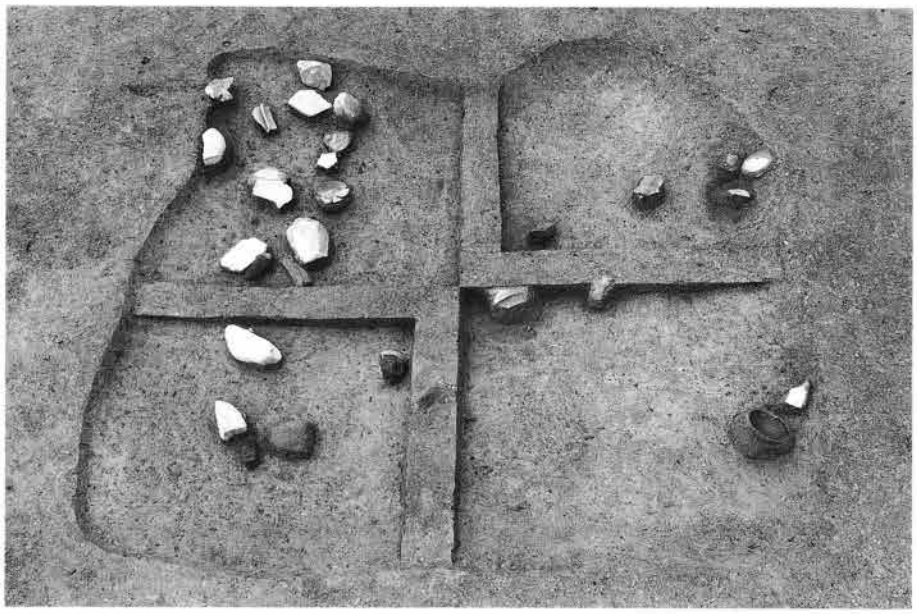


(3) 5 トレンチＳＥ118断面
（南から）

図版第28　椋ノ木遺跡

(1) 5 トレンチ S K137全景
（西から）

(2) 5 トレンチ S K158全景
（東から）



(3) 5 トレンチ S K139全景
（南から）

図版第29　椋ノ木遺跡

(1) 5 トレンチＳＫ143全景
（北から）

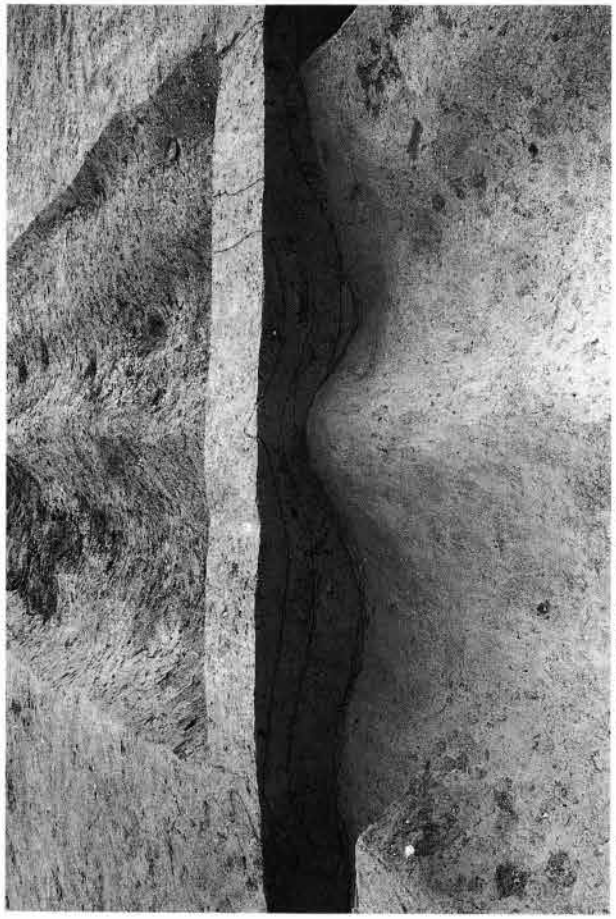
(2) 5 トレンチＳＫ70南西部
（東から）

(3) 5 トレンチＳＴ226全景
（南から）

図版第30　椋ノ木遺跡

(1)5トレンチＳＢ１ピット断面（南から）

(2)5トレンチＳＢ２ピット断面（南から）



(3)5トレンチＳＤ108断面（北から）

(4)5トレンチＳＤ108遺物出土状況（南から）

8

9

14

15

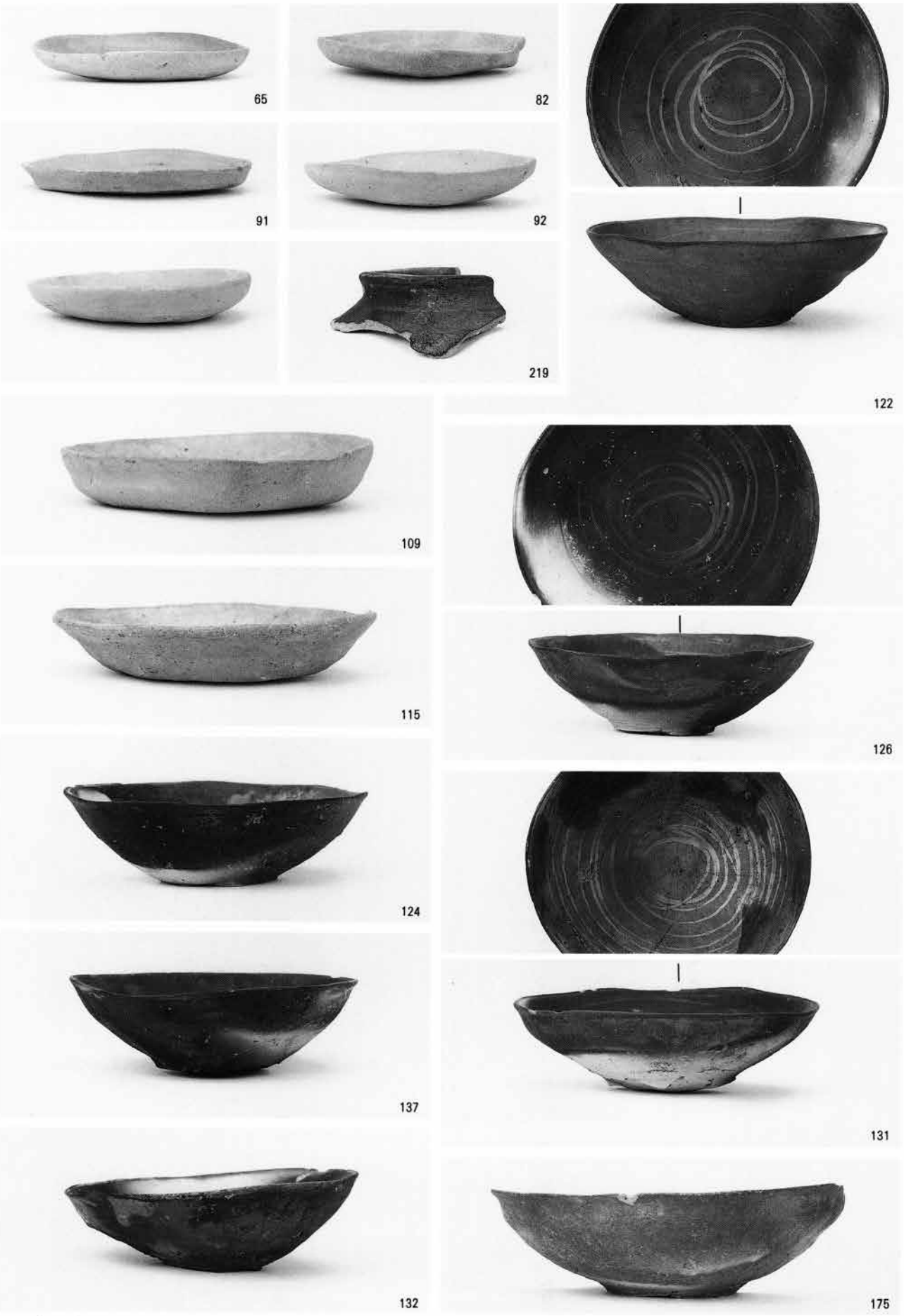
20

18

52

出土遺物１　１トレンチ・２トレンチ出土土器

図版第32　椋ノ木遺跡



出土遺物２　４－３トレンチ出土土器１

140

149

141

142

148

145

215

214

212

161

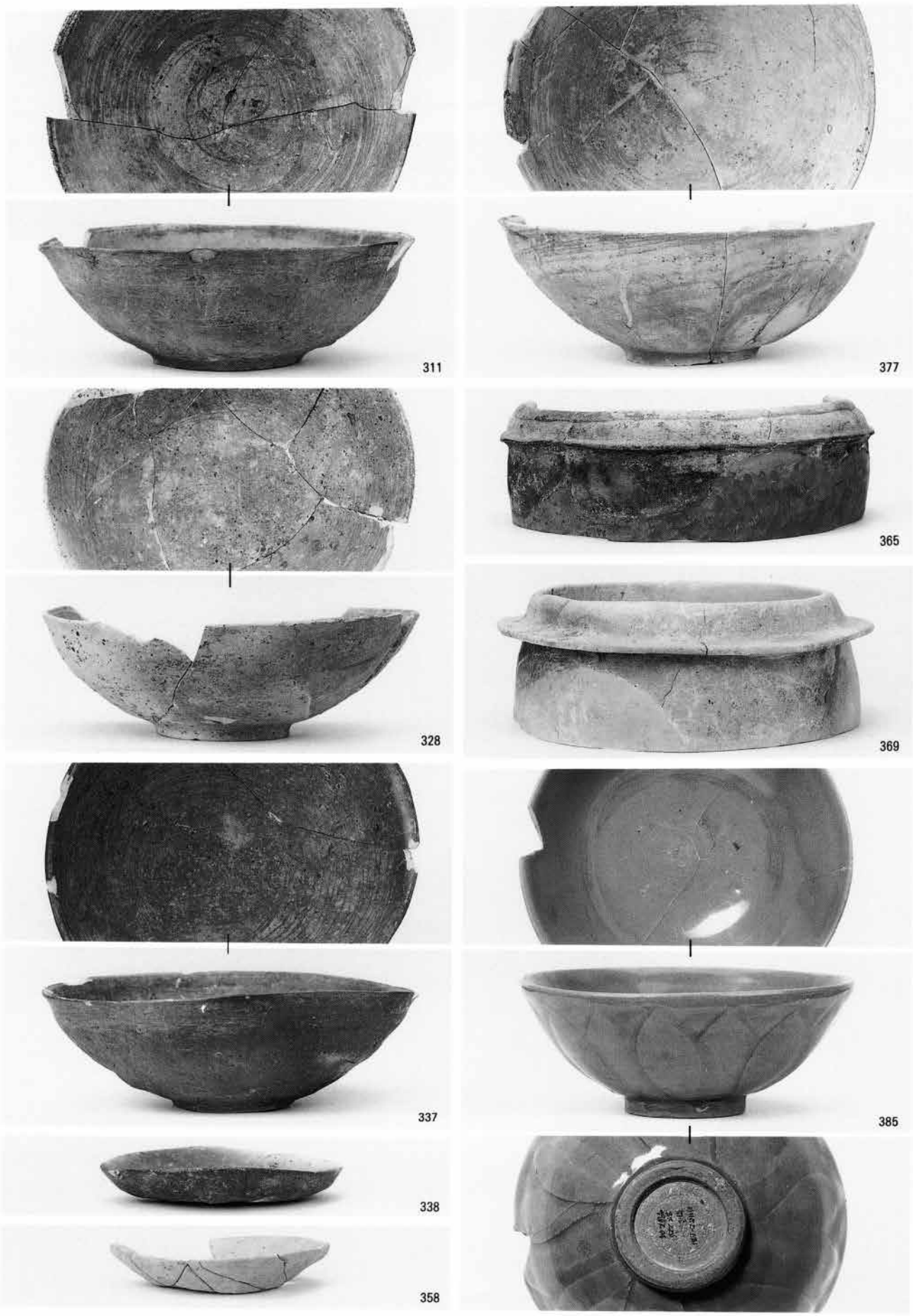
165

出土遺物３　４－３トレンチ出土土器２

図版第34　椋ノ木遺跡

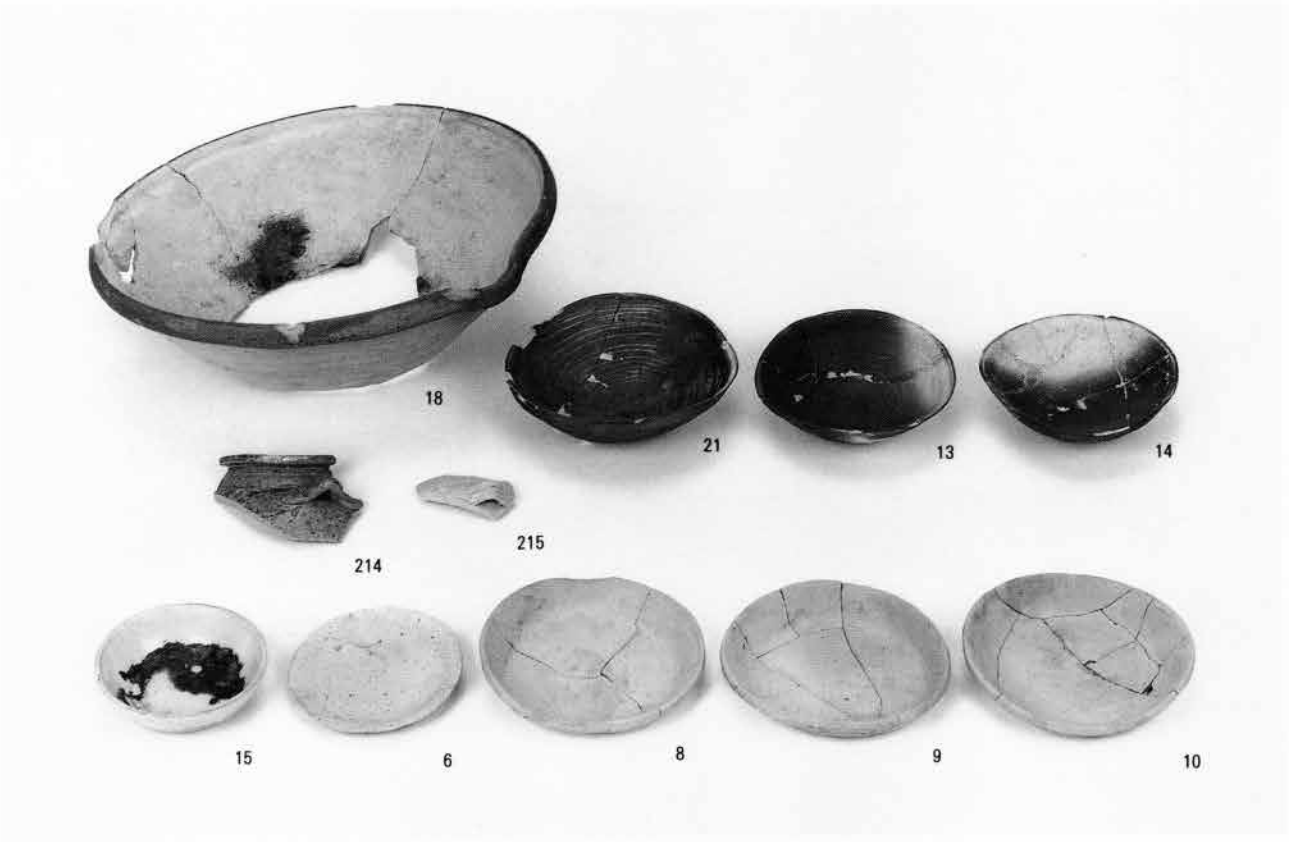
出土遺物４　４－３トレンチ出土土器３

出土遺物５　５トレンチ出土土器１

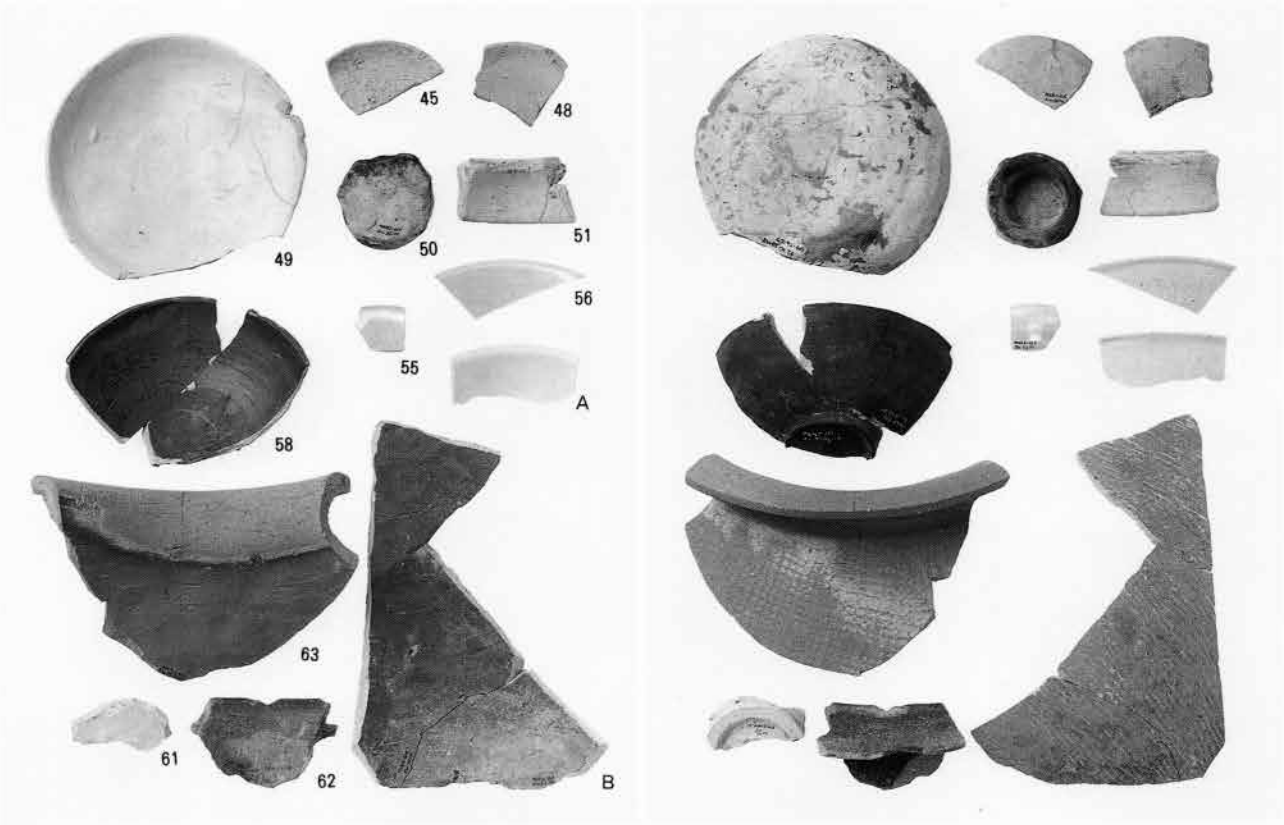


出土遺物6　5トレンチ出土土器2

図版第37　椋ノ木遺跡

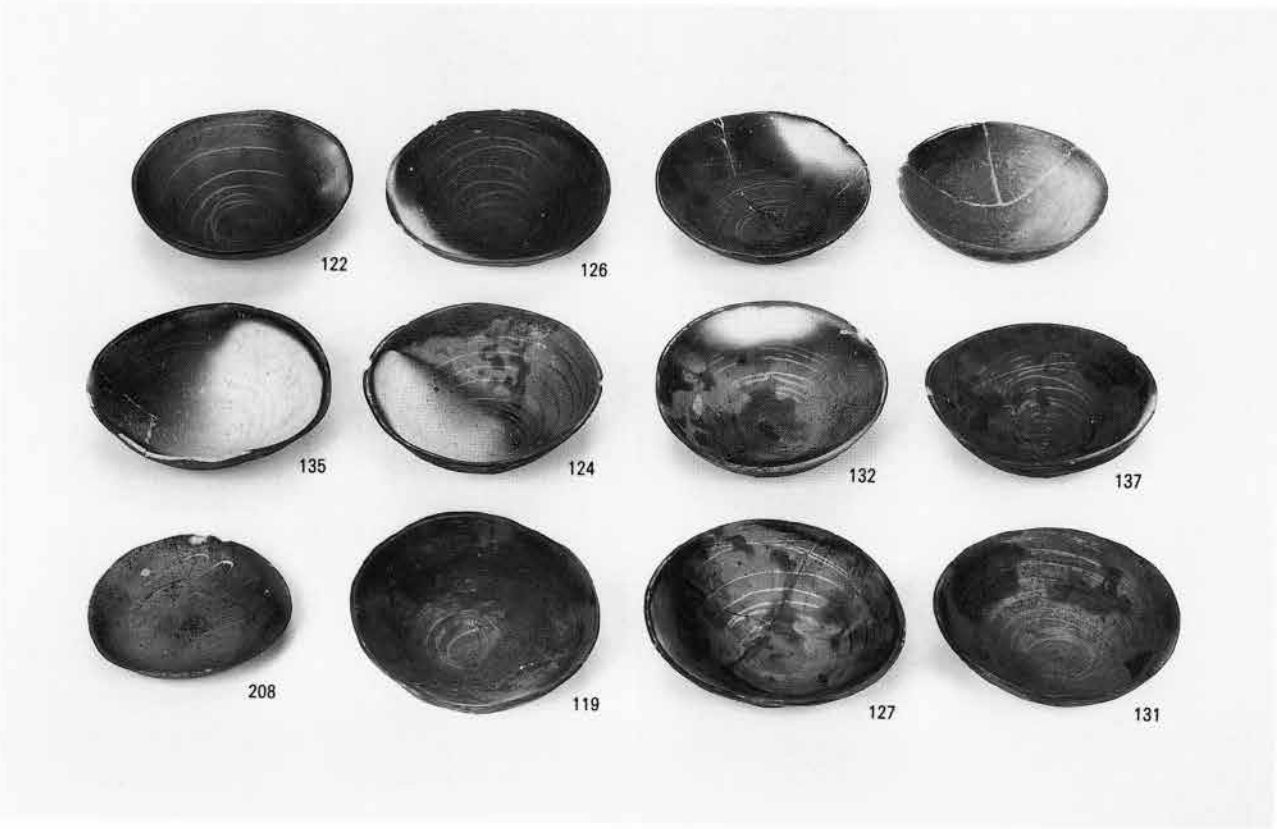


(1) 1 トレンチ出土遺物



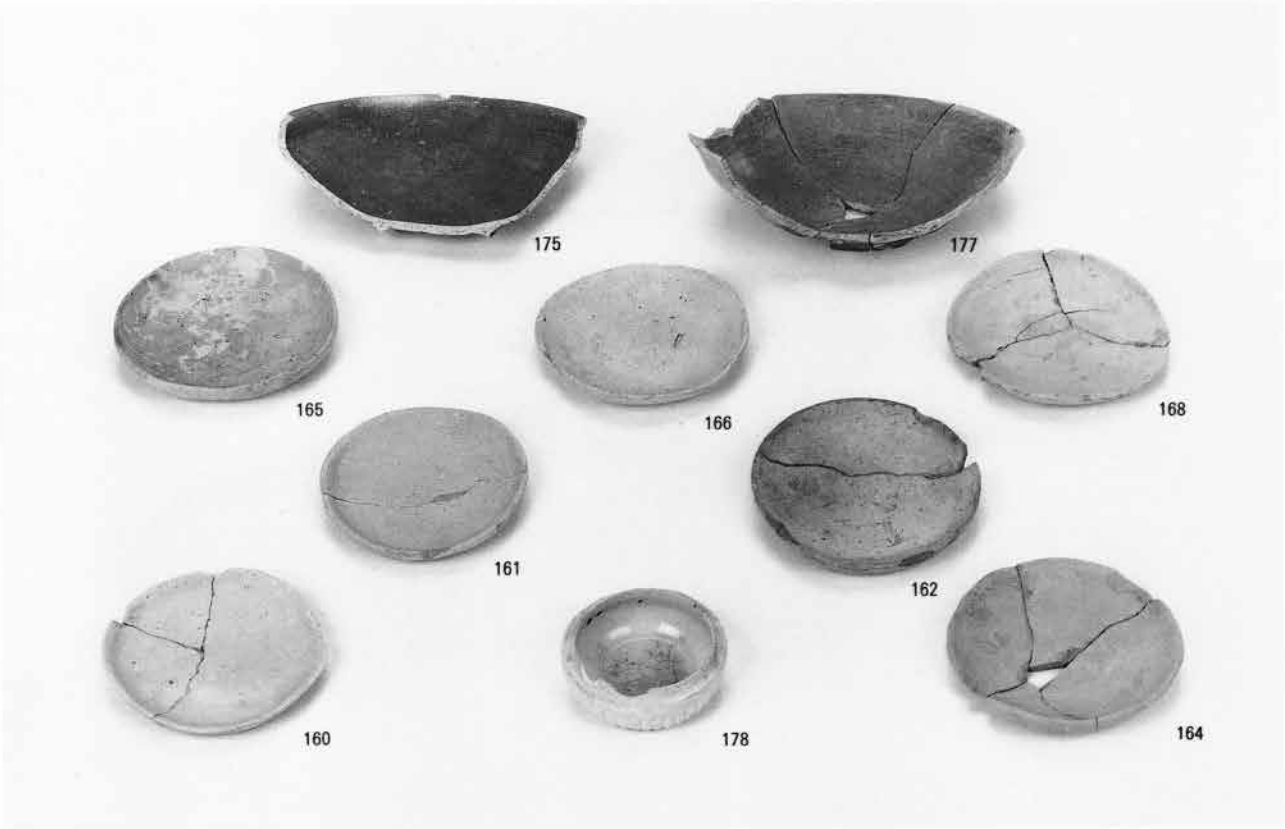
(2) 2 トレンチＳＥ174出土遺物

(1) 4 － 3 トレンチＳＤ50出土遺物（土師器皿）

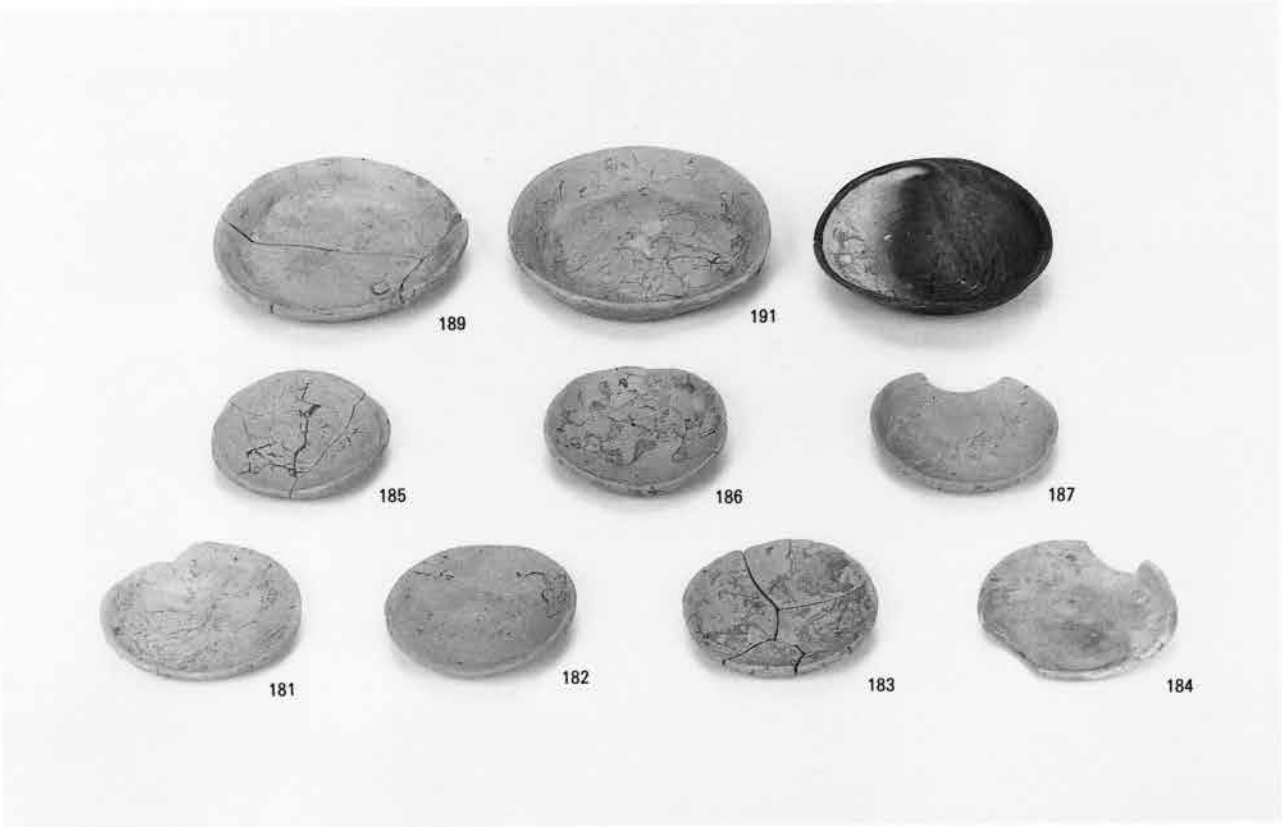


(2) 4 － 3 トレンチＳＤ50出土遺物（瓦器椀）　208のみＳＫ195出土

図版第39　椋ノ木遺跡

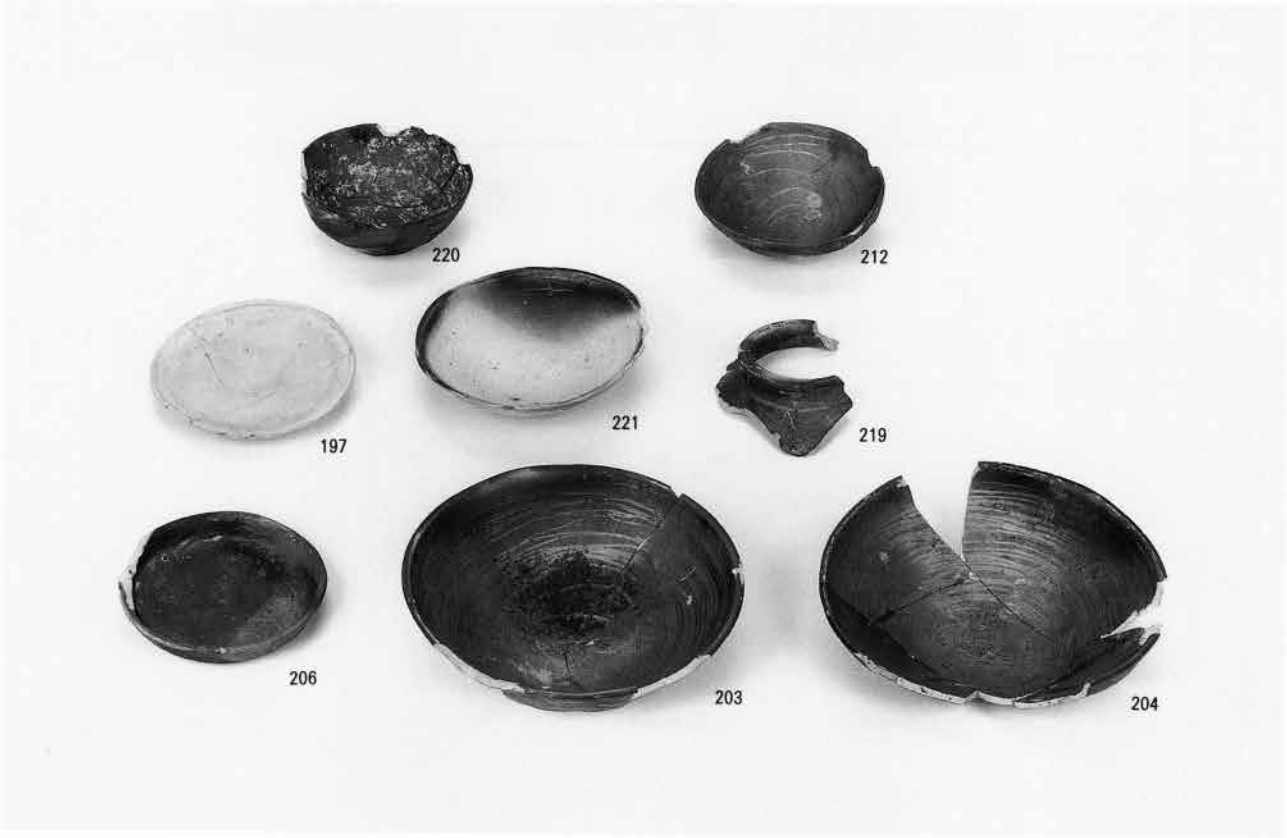


(1) 4 － 3 トレンチＳＥ142出土遺物

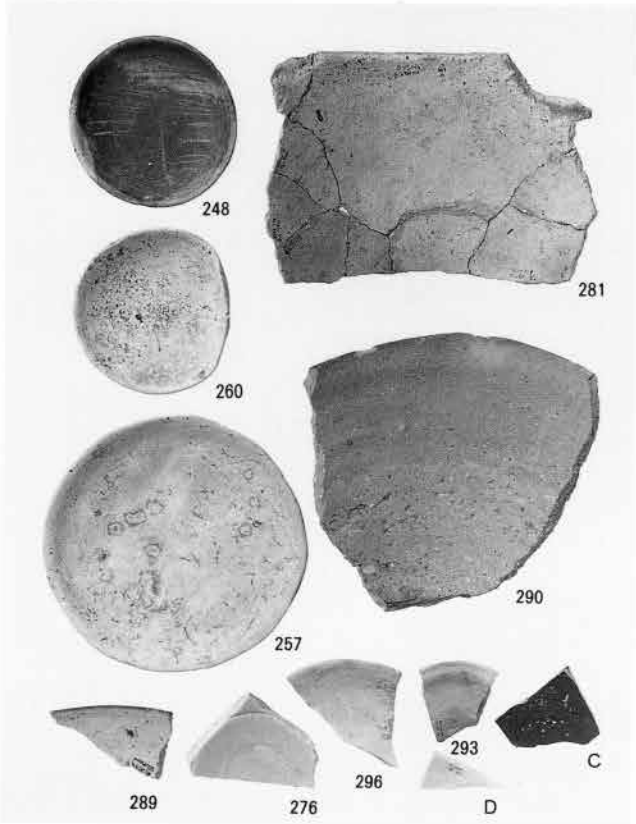


(2) 4 － 3 トレンチＳＤ148出土遺物

図版第40　椋ノ木遺跡

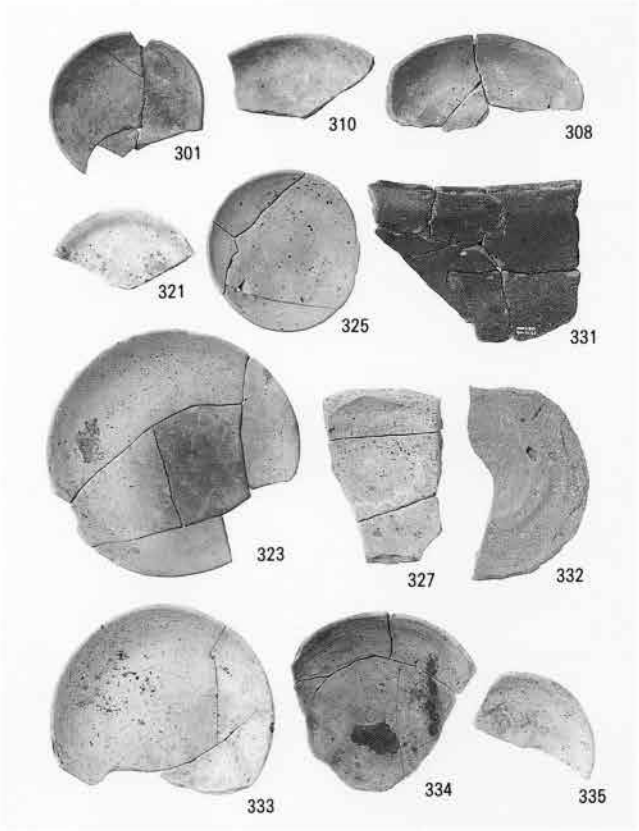


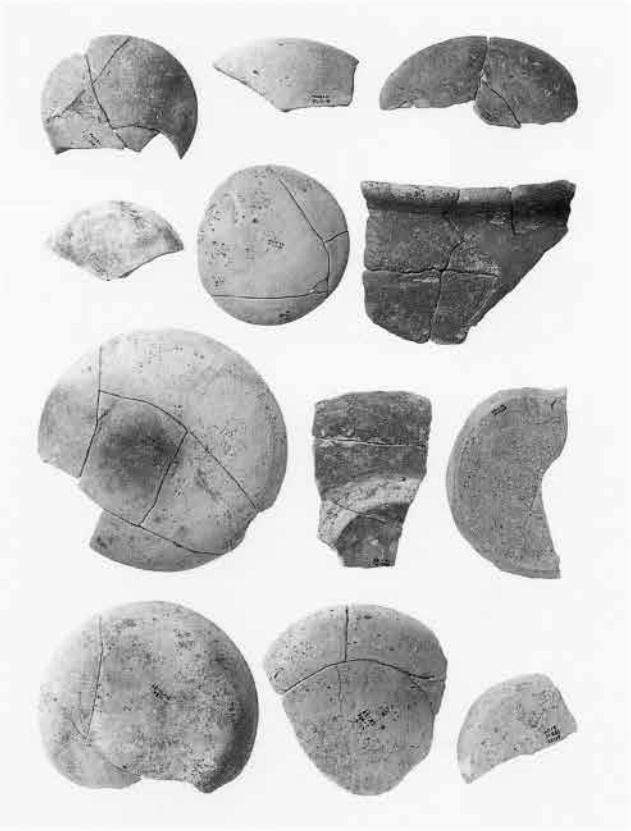
(1) 4 － 3 トレンチＳＫ194・ＳＫ195・ＳＫ153・ＳＥ301出土遺物



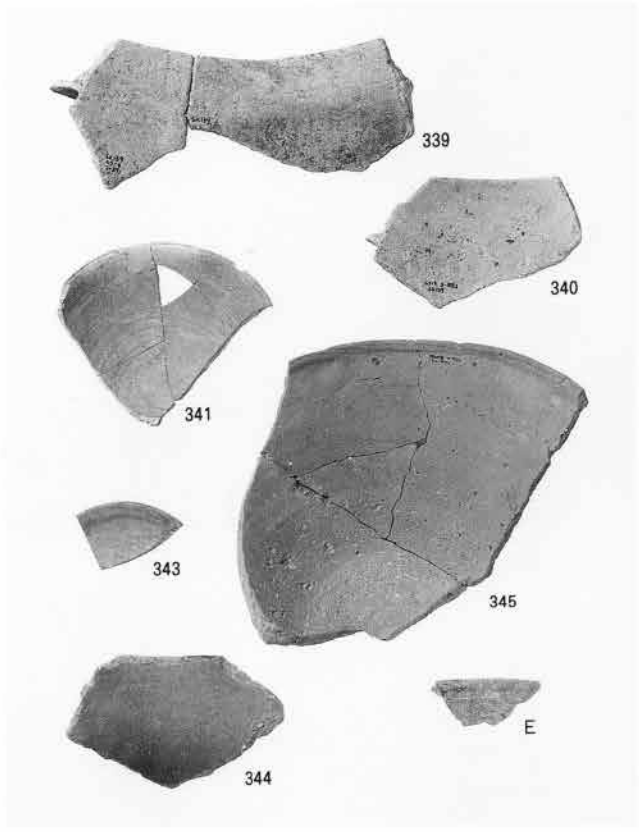
(2) 5 トレンチＳＫ118出土遺物

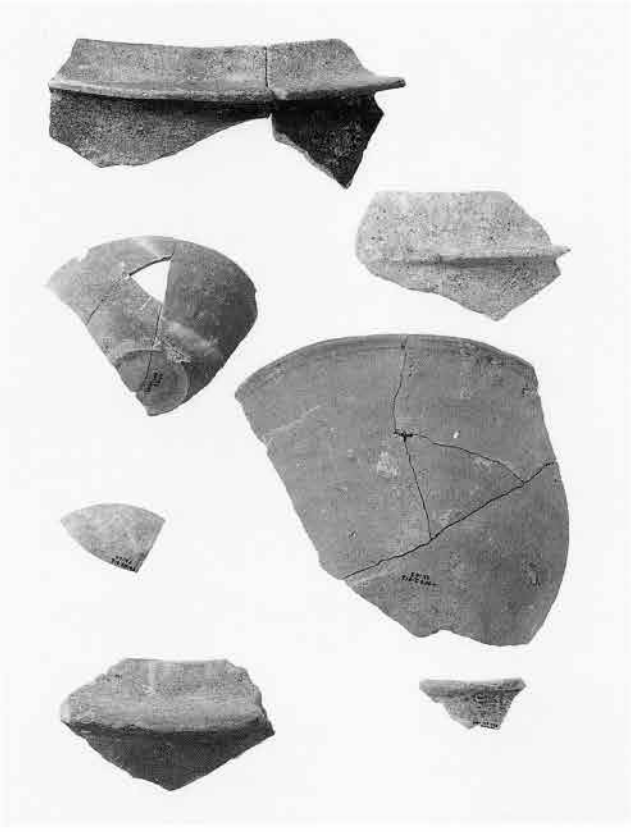
図版第41　椋ノ木遺跡





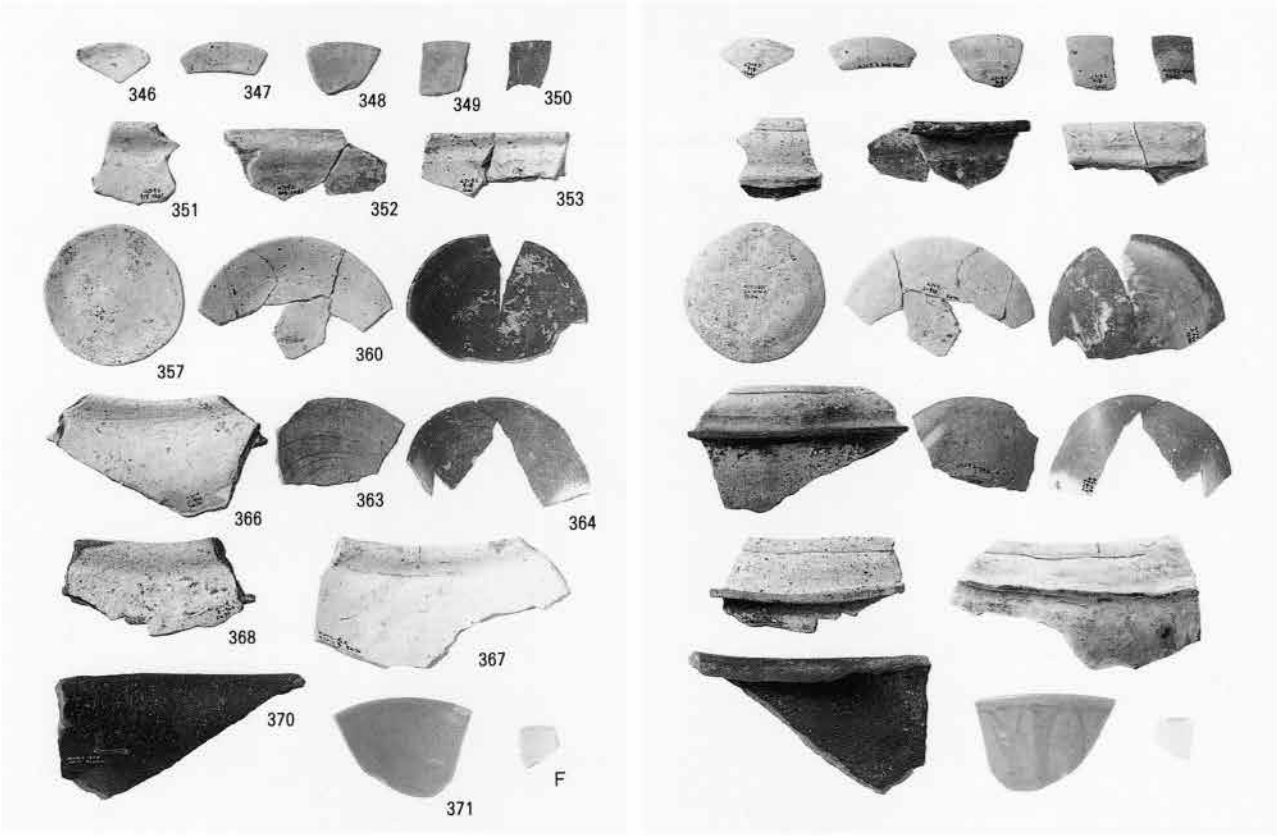
(1) 5 トレンチＳＫ137・ＳＫ158・ＳＫ139出土遺物



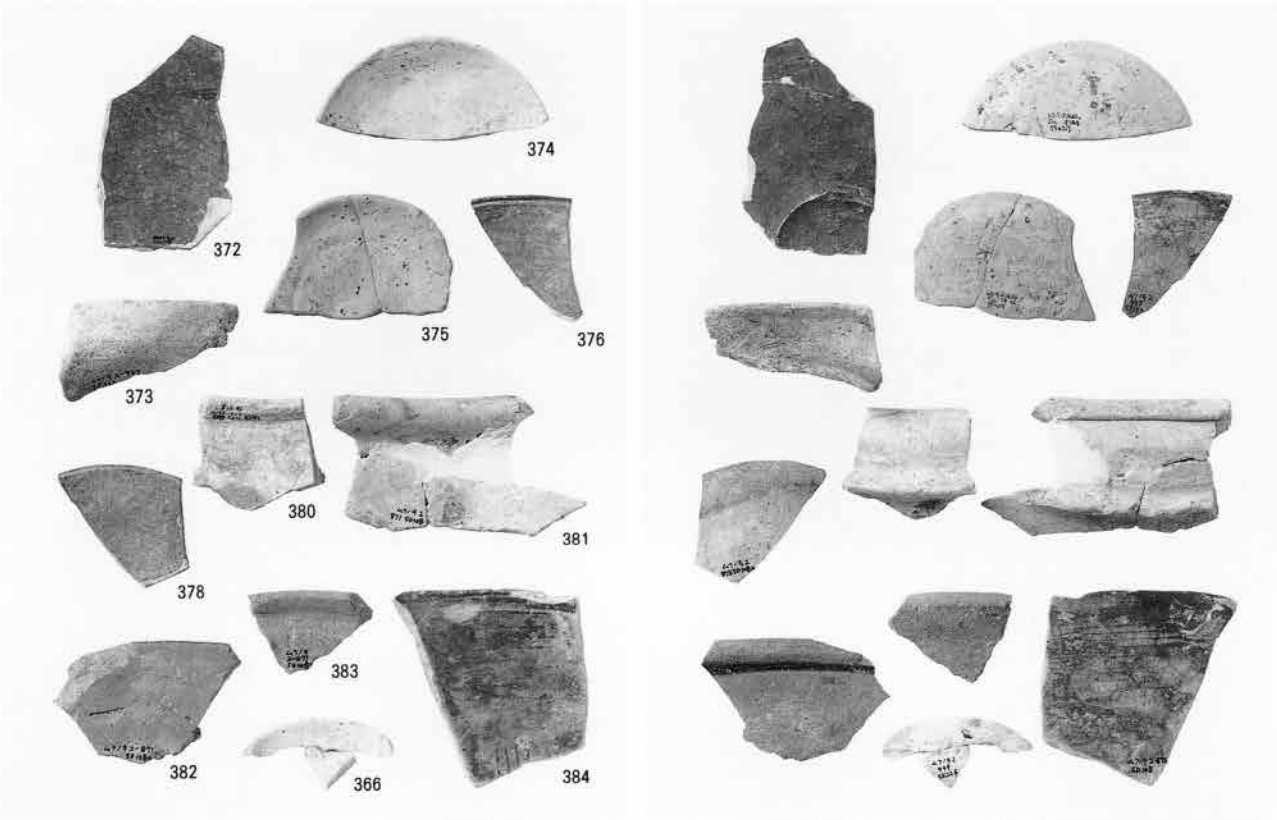


(2) 5 トレンチＳＫ139・ＳＫ143出土遺物

図版第42　椋ノ木遺跡

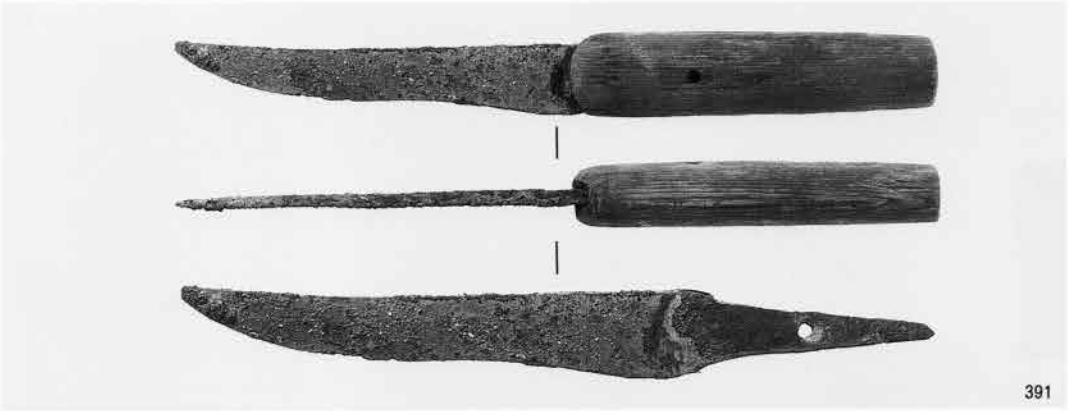


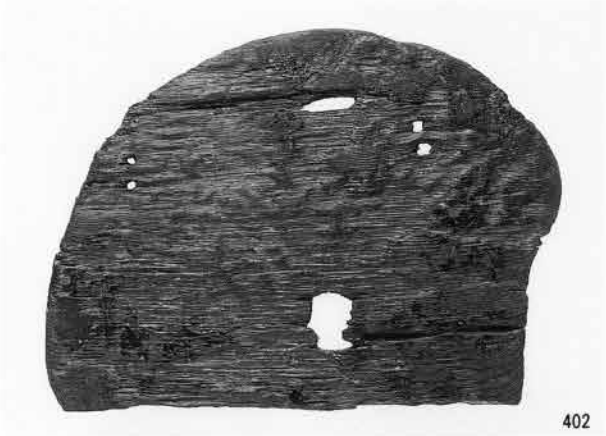
(1) 5 トレンチＳＫ61・ＳＫ70出土遺物



(2) 5 トレンチＳＢ１・ＳＢ２・ＳＤ108・ＳＴ226出土遺物

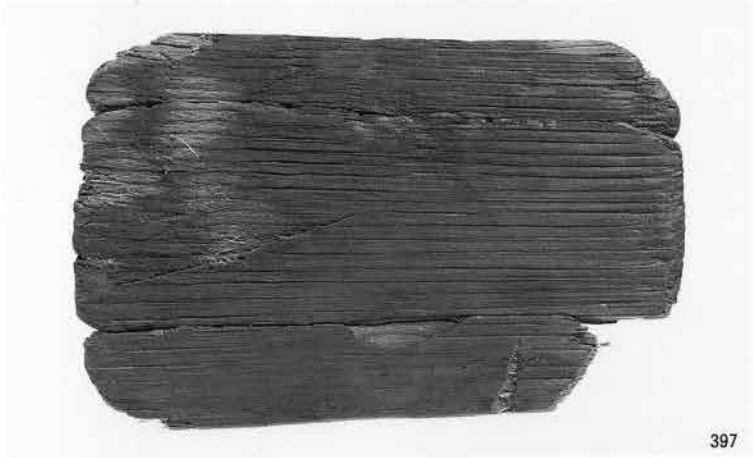
図版第43　椋ノ木遺跡


391


402

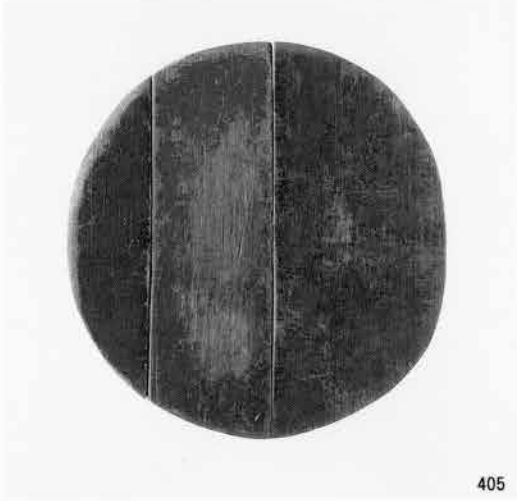
400

409

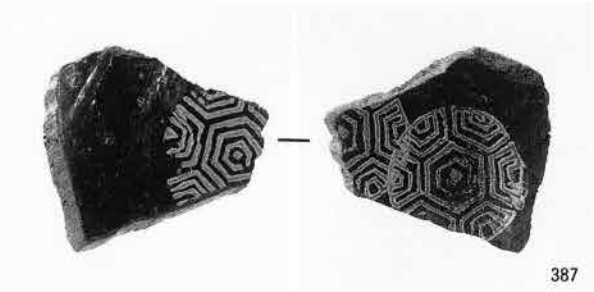

397

404

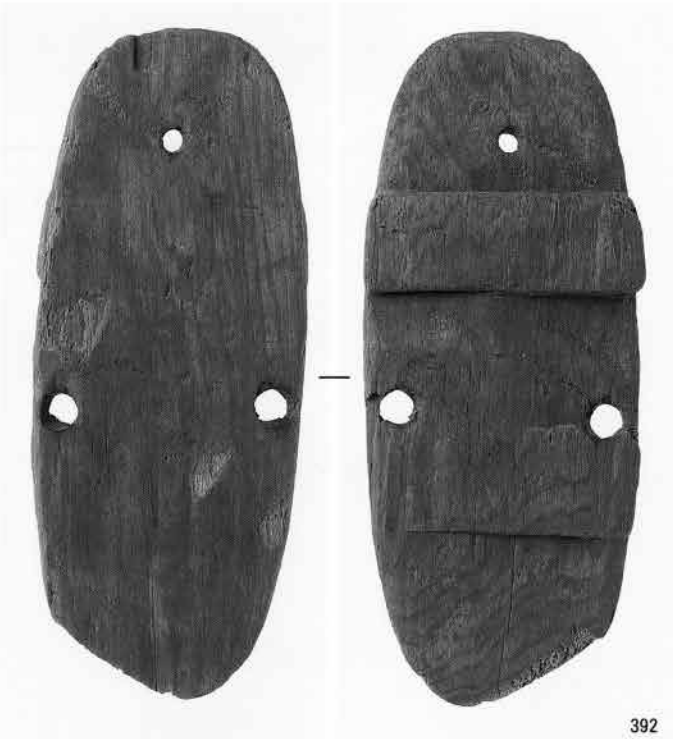
398

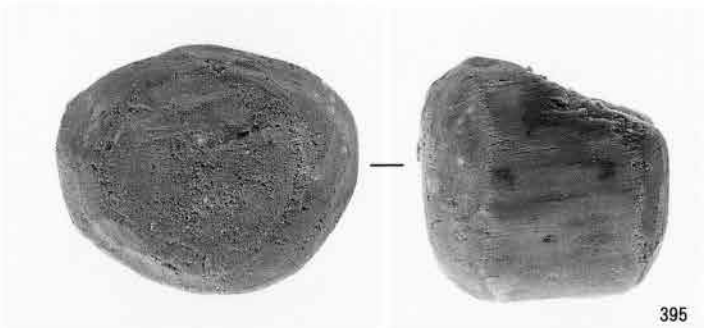

405

木製品(1)


387

390


392


395

406

407

408

木製品(2)

図版第45　西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡（第２次）

(1)平成８年度調査地全景（西から）

(2)平成８年度西ノ口遺跡全景（東から）

図版第46　西ノ口遺跡

(1)第１トレンチ全景（南から）

(2)竪穴式住居跡（南西から）

図版第47　西ノ口遺跡

(1)竪穴式住居跡（南東から）

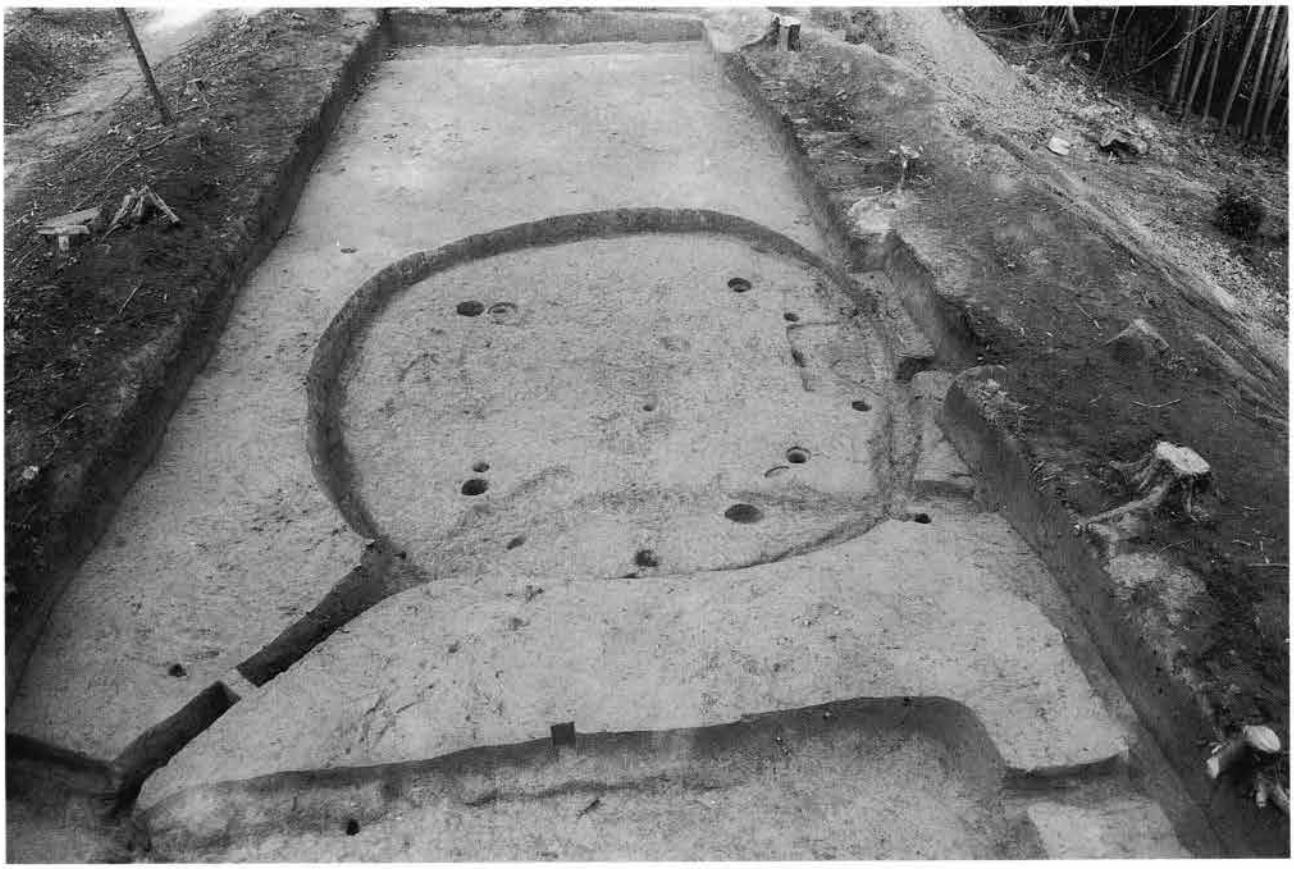
(2)竪穴式住居跡（西から）

図版第48　宮ノ背遺跡（第２次）

(1)平成８年度調査地全景（東から）

(2)第１トレンチ全景（南西から）

図版第49　宮ノ背遺跡（第２次）



(1)第１トレンチ（南西から）

(2)竪穴式住居跡１（南西から）

図版第50　宮ノ背遺跡（第２次）

(1)竪穴式住居跡２（北東から）

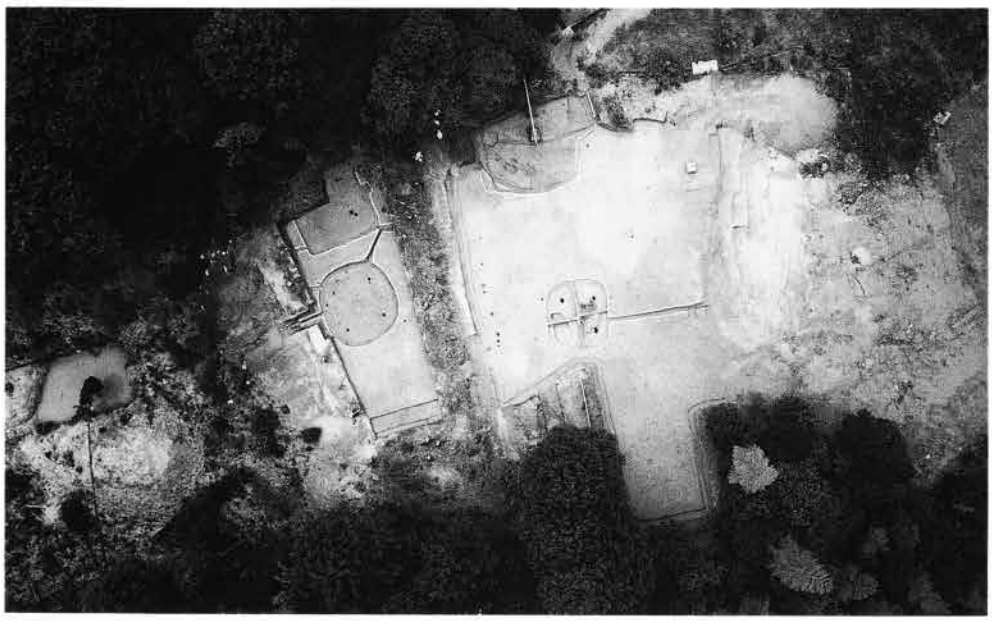
(2)竪穴式住居跡２（南西から）

図版第51　宮ノ背遺跡（第２次）

(1)第２トレンチ（北西から）

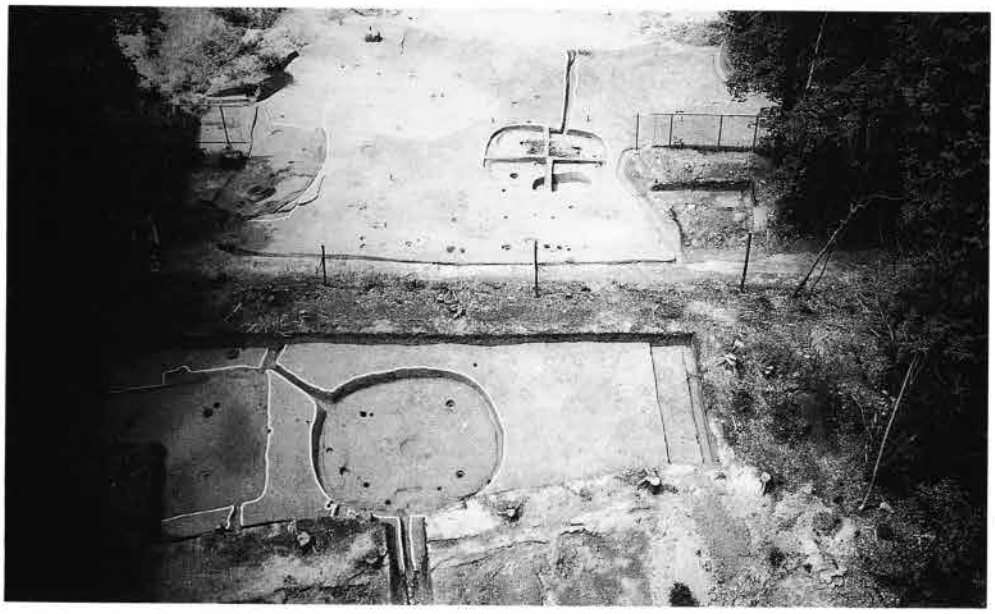
(2)竪穴式住居跡３（北東から）

図版第52　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡



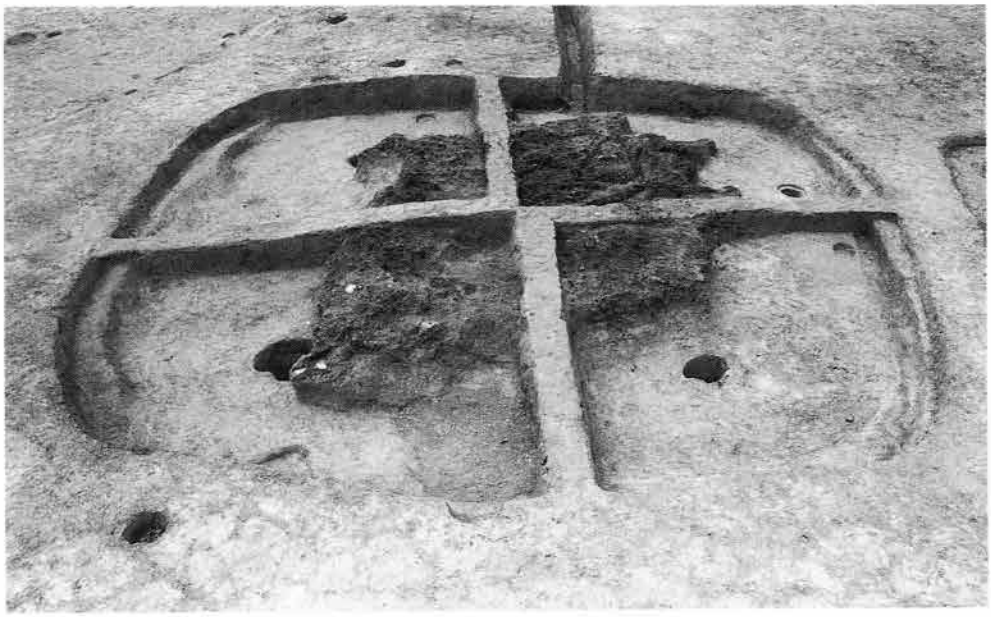
(1)宮ノ背遺跡全景(1)
（垂直方向、下が北）

(2)宮ノ背遺跡全景(2)
（北から）



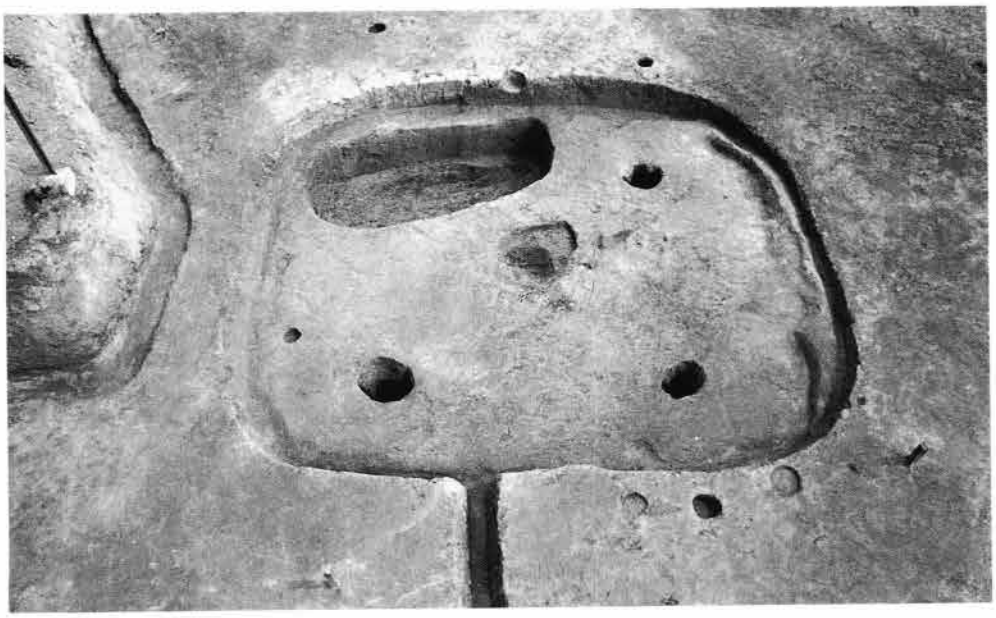
(3)宮ノ背遺跡全景(3)
（南から）

図版第53　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡



(1)竪穴式住居跡４検出状況
（南東から）

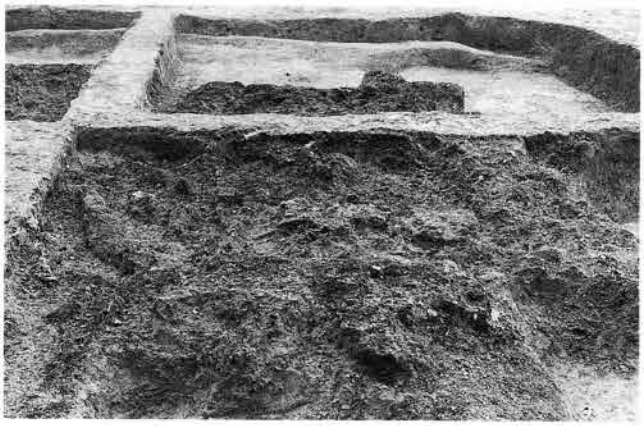
(2)竪穴式住居跡４炭化材
検出状況
（南東から）



(3)竪穴式住居跡４完掘状況
（北西から）

図版第54　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡

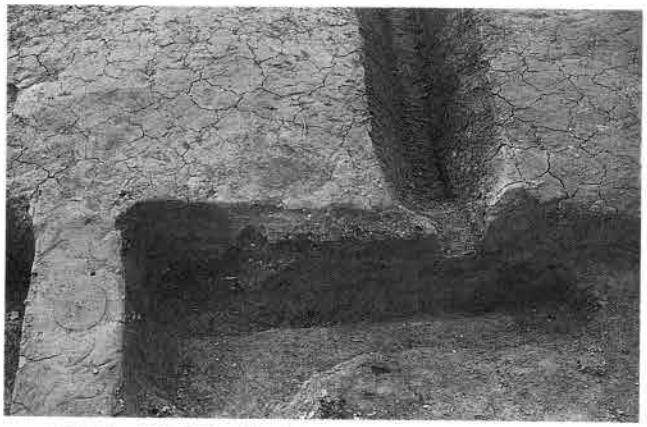
(1)竪穴式住居跡４内土器出土状況（南東から）



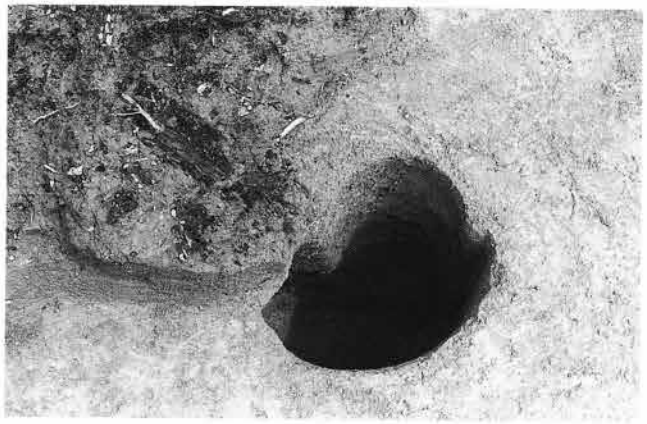
(2)竪穴式住居跡４内炭化材検出状況（北東から）

(3)竪穴式住居跡４内管玉検出状況（東から）

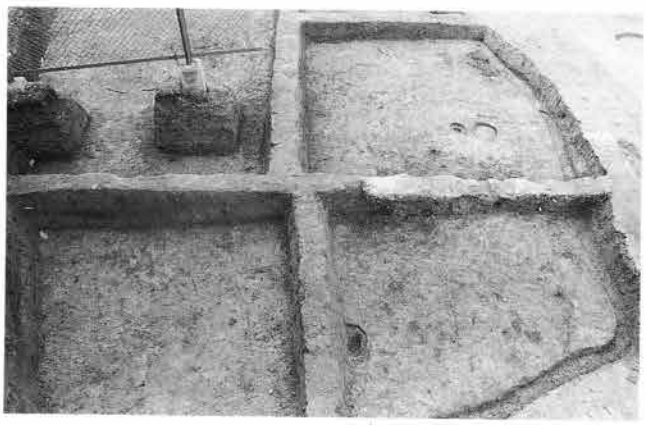
(4)竪穴式住居跡６内鉄鏃検出状況（西から）



(5)竪穴式住居跡４排水溝取り付き状況（東から）



(6)竪穴式住居跡４主柱材検出状況（南西から）



(7)竪穴式住居跡６検出状況（南東から）

(8)竪穴式住居跡６内土器出土状況（南西から）

図版第55　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡

(1)竪穴式住居跡４下層木棺墓完掘状況（南から）

(2)木棺墓完掘状況（北から）

(3)木棺検出状況(1)（北から）

(4)木棺検出状況(2)（西から）

(5)木棺検出状況(3)（東から）

図版第56　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡

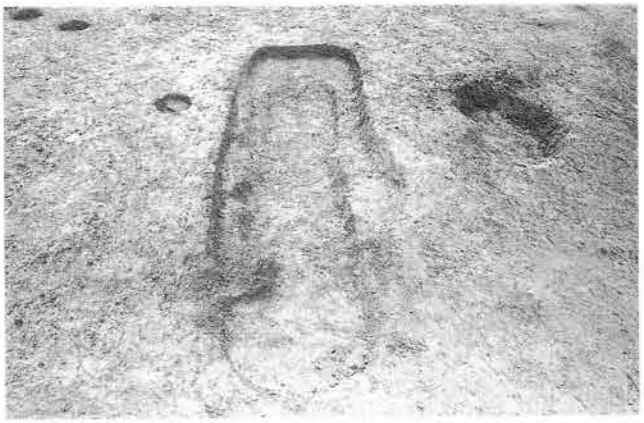
(1)西ノ口遺跡全景(1)
（南東から）

(2)西ノ口遺跡全景(2)
（垂直方向、 左上が北）

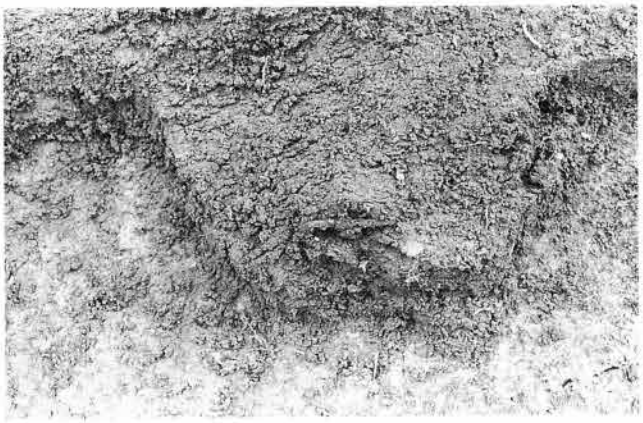
(3)西ノ口遺跡全景(3)
（北西から）

図版第57　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡

(1)南山７号墳全景（南西から）



(2)南山７号墳周辺埋葬１検出状況（北西から）



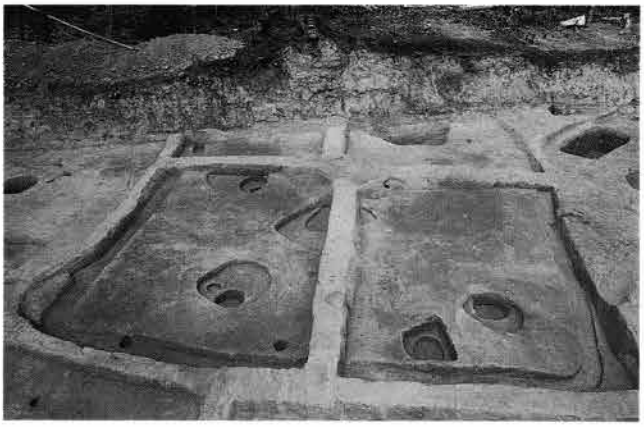
(3)周辺埋葬１棺内釘出土状況（東から）

(4)周溝内須恵器出土状況（西から）

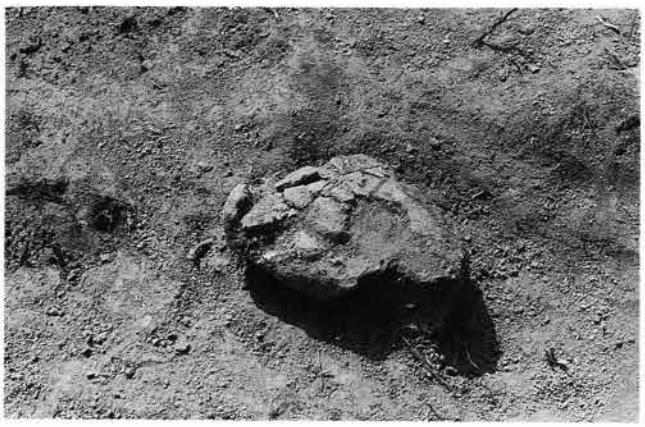
(5)周溝内高杯出土状況（西から）

図版第58　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡

(1)西ノ口遺跡竪穴式住居跡２検出状況（北から）



(2)西ノ口遺跡竪穴式住居跡２検出状況（南から）



(3)竪穴式住居跡２内土器出土状況（南東から）

(4)竪穴式住居跡２内炉跡検出状況（北から）

(5)西ノ口遺跡竪穴式住居跡２完掘状況（西から）

(6)西ノ口遺跡調査風景（南西から）

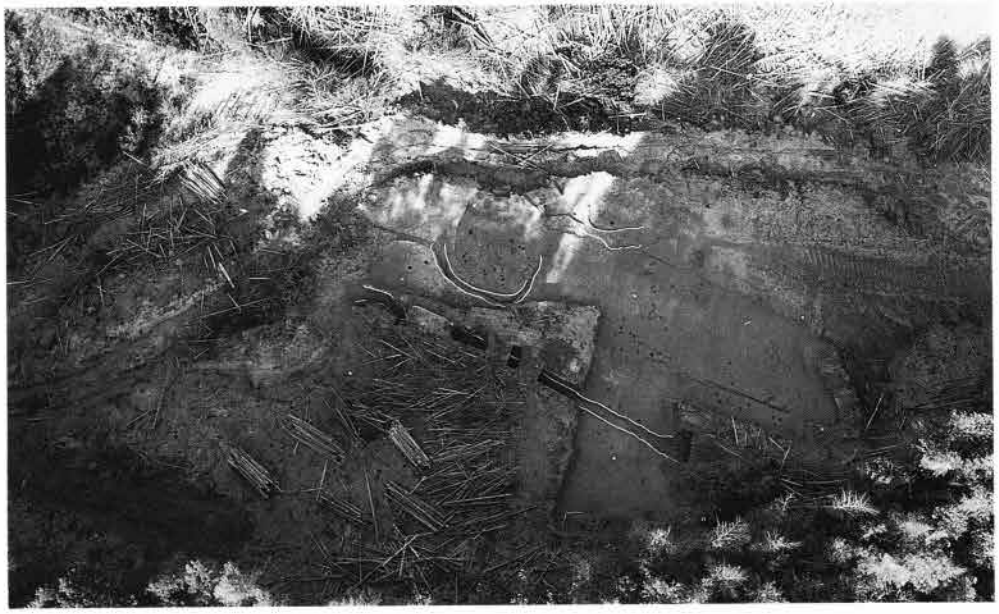
(7)西ノ口遺跡完掘状況(1)（西半分）

(8)西ノ口遺跡完掘状況(2)（東半分）

図版第59　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡

(1)備前遺跡全景(1)
（上が南西）

(2)備前遺跡全景(2)
（上が南西）



(3)備前遺跡全景(3)
（上が北）

図版第60　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡

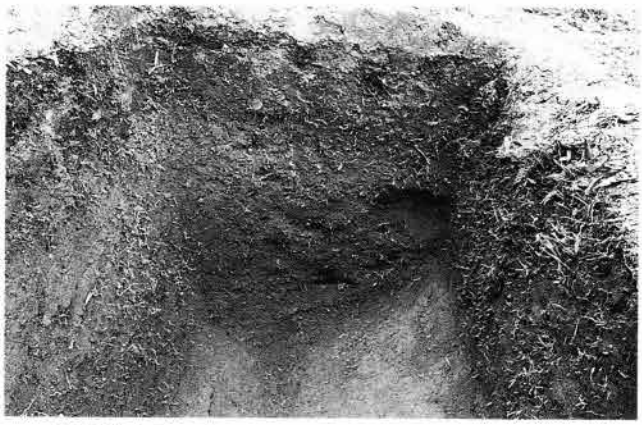
(1)備前遺跡竪穴式住居跡１・２全景（西から）

(2)備前遺跡竪穴式住居跡１・２全景（北から）

(3)備前遺跡竪穴式住居跡３・４全景（西から）

(4)竪穴式住居跡１床面土器据え付けピット（北から）

(5)竪穴式住居跡４内石戈出土状況（北から）



(6)備前遺跡環濠内土層堆積状況（南東から）

(7)環濠内土器出土状況（南東から）

(8)備前遺跡調査風景（西から）

図版第61　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡

(1)環濠内土器溜まり２検出状況（北から）

(2)土器溜まり２検出状況（北東から）

(3)環濠内土器溜まり１検出状況（北東から）

(4)土器溜まり１内土器出土状況(1)（北西から）

(5)土器溜まり１内土器出土状況(2)（北西から）

(6)土器溜まり１内土器出土状況(3)（北から）

(7)土器溜まり１内土器出土状況(4)（北西から）

(8)現地説明会風景（北から）

99－2

99－1

99－4

102－71

101－63

101－60

102－79

備前遺跡出土土器(1)　番号は挿図と対応

102－80

101－66

101－49

101－68

101－64

102－73

101－67

備前遺跡出土土器(2)　番号は挿図と対応

図版第64　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡

85－1

85－3

85－4

90－2

85－6

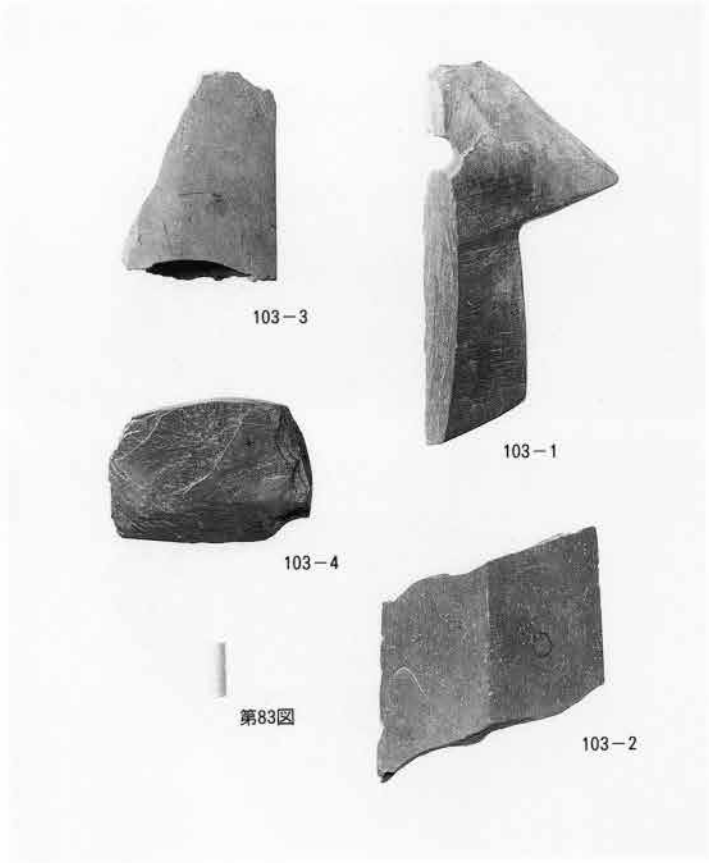
90－1

85－2

100－41

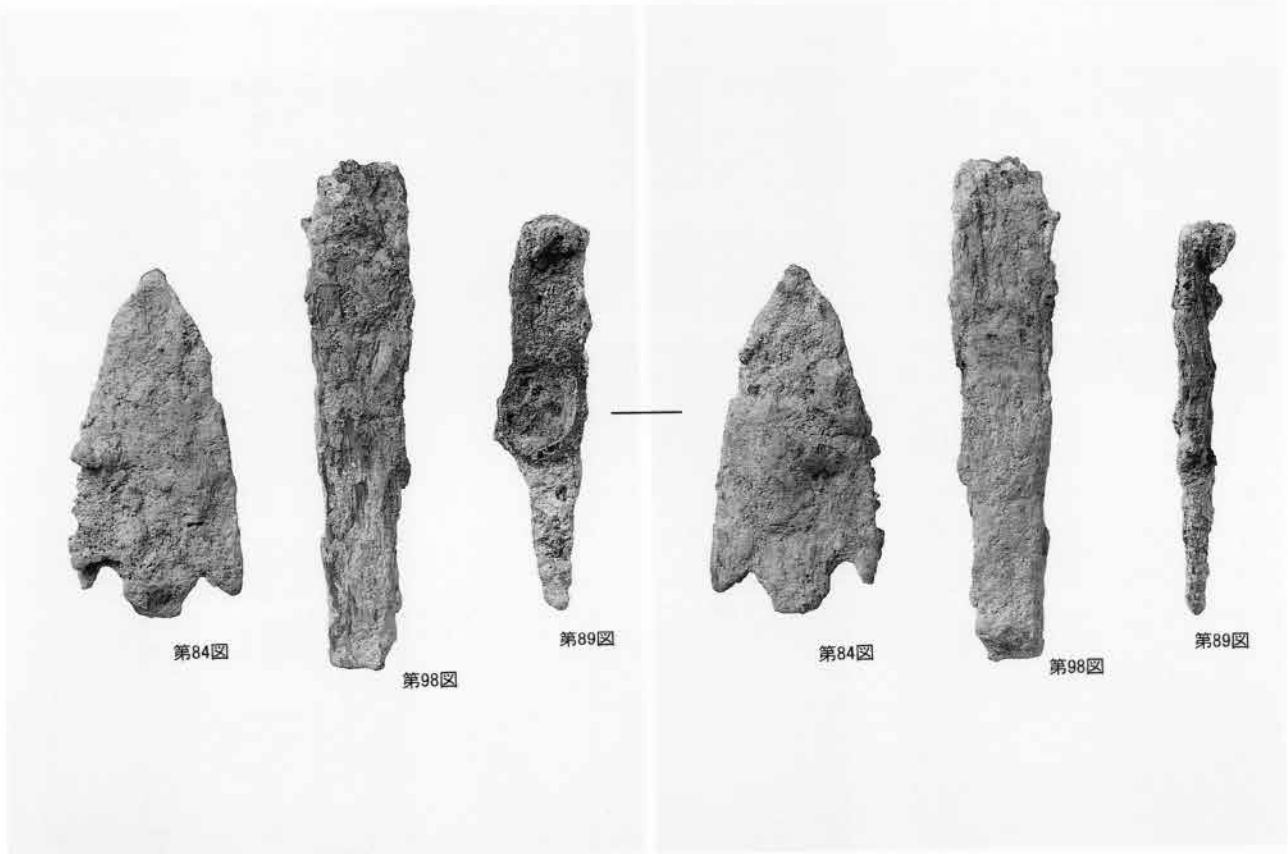
宮ノ背・西ノ口・備前遺跡出土土器（番号は挿図と対応）

図版第65　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡



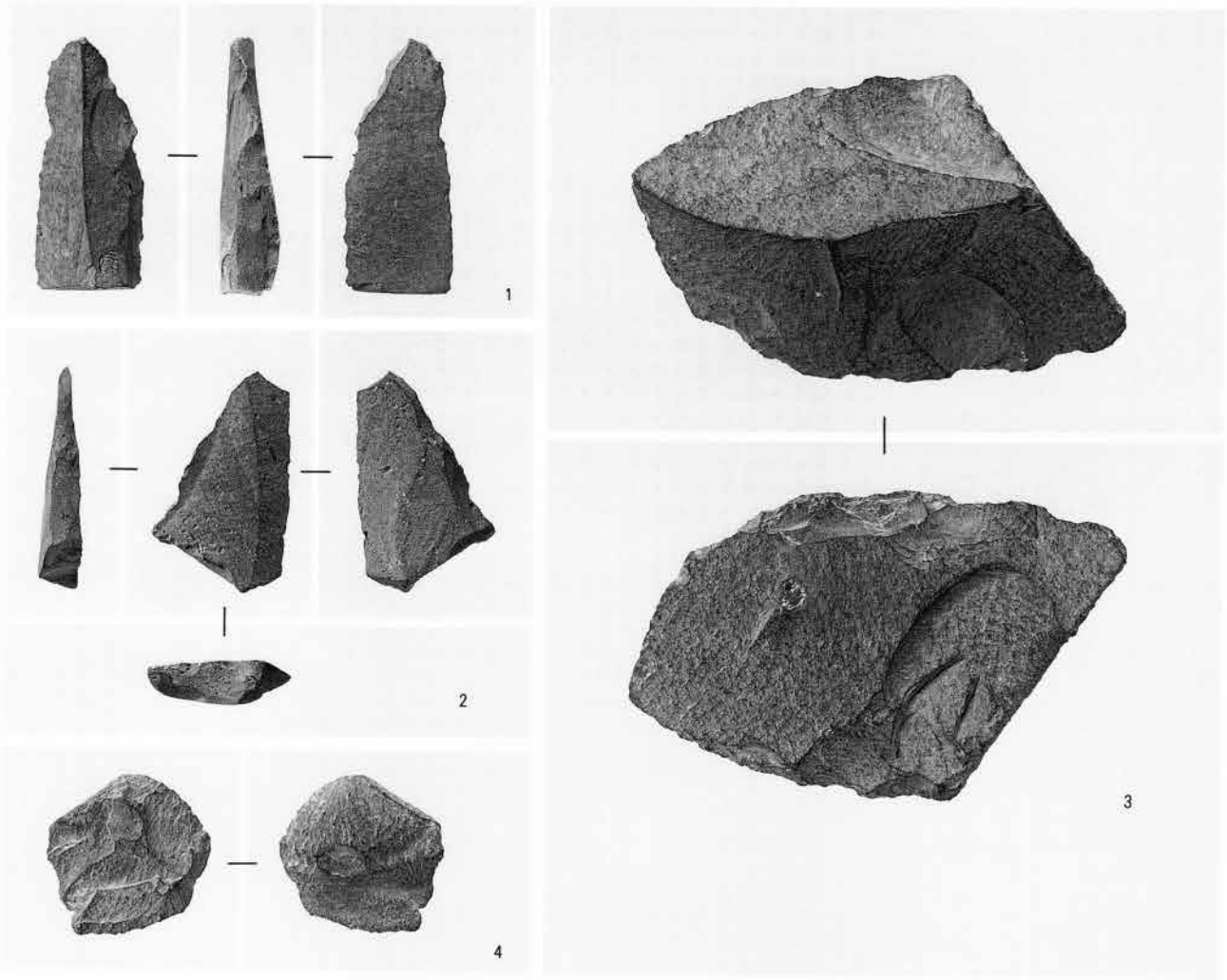
(1)宮ノ背・備前遺跡出土石製品（番号は挿図と対応）

(2)備前遺跡土器溜まり２出土桃核

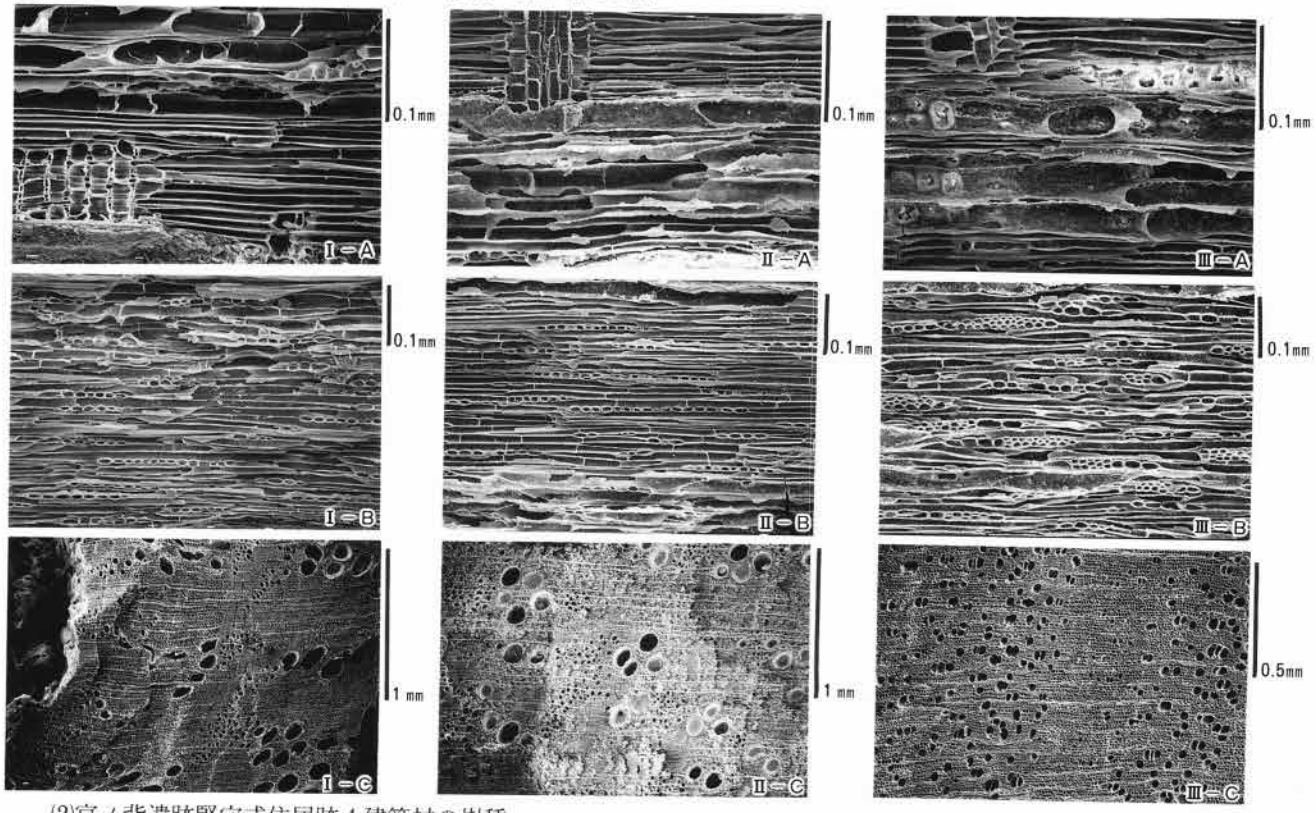


(3)宮ノ背・西ノ口・備前遺跡出土鉄製品（番号は挿図と対応）

図版第66　宮ノ背遺跡（第３次）・西ノ口遺跡（第２次）・備前遺跡



(1)出土石器（ナイフ形石器ほか）　番号は第91図と対応



(2)宮ノ背遺跡竪穴式住居跡４建築材の樹種
（Ⅰ・Ⅱ．シイノキ　　Ⅲ．エゴノキ　　A．放射断面　　B．接線断面　　C．横断面）

報告書抄録

ふりがな	
書　名	
副書名	
巻　次	
シリーズ名	京都府遺跡調査概報
シリーズ番号	第81冊
編著者名	野々口陽子・竹下士郎・森島康雄・伊賀高弘・辻本和美・河野一隆・奈良康正
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　Phone　075(933)3877
発行年月日	西暦　1998　年　3　月　26　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
あまるべいせきだい2じ 余部遺跡第2次	かめおかしあまるべちょうしんどう 亀岡市余部町新堂	206	62	35° 1′ 9″	135° 34′ 2″	19970609 ～ 19980213	2,250	道路建設
なかかいどういせきだい46じ 中海道遺跡第46次	むこうしもずめちょうなかかいどう 向日市物集女町中海道	208	3	34° 57′ 39″	135° 41′ 48″	19970512 ～ 19970710	300	道路拡幅
むくのきいせき 椋ノ木遺跡	そうらくぐんせいかちょうおおあざしもこまこあざむくのき・やなぎがいと・かみのき・わきた 相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木・柳垣外・神ノ木・脇田	366	46	34° 46′ 16″	135° 48′ 8″	19951121 ～ 19960227 19960528 ～ 19970227	1,200 4,700	下水道処理施設建設
みやのせいせき 宮ノ背遺跡	やわたしみのやまみやのせ 八幡市美濃山宮ノ背	210	—	34° 50′ 45″	135° 42′ 55″	19961114 ～ 19971009	880	道路建設
にしのくちいせき 西ノ口遺跡	やわたしみのやまにしのくち 八幡市美濃山西ノ口	210	—	34° 50′ 44″	135° 42′ 35″	19961015 ～ 19971009	1,080	道路建設
びぜんいせき 備前遺跡	やわたしみのやまびぜん 八幡市美濃山備前	210	—	34° 50′ 50″	135° 42′ 30″	19970806 ～ 19971009	450	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
余部遺跡第２次	生産	弥生	竪穴住居・方形周溝墓	玉未製品・石器・弥生土器	
	古墳	古墳	古墳・土坑	鉄器・土師器・須恵器	
	集落	鎌倉	掘立柱建物・溝	瓦器	
中海道遺跡第46次	集落	弥生 平安 鎌倉	竪穴住居 土坑	弥生土器 土師器・須恵器 緑釉陶器・灰釉陶器	
椋ノ木遺跡	集落	平安	井戸・土坑	瓦器・土師器・中国陶磁器	
		鎌倉	掘立柱建物・土坑・溝・土壙墓	瓦器・土師器・中国陶磁器	
宮ノ背遺跡	集落	弥生	竪穴住居	弥生土器・鉄製品・石製品	
西ノ口遺跡		旧石器		旧石器	
	集落	弥生	竪穴住居	弥生土器	
	古墳	古墳	古墳	須恵器・土師器・鉄製品	
備前遺跡	集落	弥生	竪穴住居	弥生土器・石製品・鉄製品	

京都府遺跡調査概報 第81冊

平成10年３月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone (075)933-3877 (代)

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)